

第9回
芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査
調査報告書

2015年3月
公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

目次

はじめに

- I. 芸能実演家・スタッフの実態調査の意義と目的 1
- II. 第9回調査の設計と、実演家・スタッフからみた概観 2

第1部 芸能実演家編

- I. 調査集計結果の概観 14
- II. 調査設計・調査回答者について 21
- III. 分析結果詳細
 - (1) 経済状況・景況感について
 - B-2 (a) 昨年1年間に行った活動 27
 - B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動にたずさわった人】 28
 - B-3 仕事の機会について2～3年前との比較【ベース：各活動にたずさわった人】 33
 - B-4 昨年1年間に行った芸能活動以外の仕事 (MA) 38
 - B-7 (a) 昨年1年間の個人収入 39
 - B-7 (b) 自らが負担した必要経費の割合 43
 - B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 44
 - B-9 昨年1年間の収入形式 47
 - C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA) 50
 - E-7 万一の場合や老後に対しての備え (MA) 52
 - (2) 仕事環境について
 - 傷害 (ケガ) の状況
 - C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (傷害 (ケガ)) 54
 - C-4 (a) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) の発生場所 56
 - C-4 (b) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) 治療費等の負担状況 (MA) 57
 - C-4 (c) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) に対する治療費以外の補償状況 (MA) 57
 - 病気・症状の状況
 - C-3 (b) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (病気・症状) 58
 - C-5 (a) 仕事が原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況 (MA) 60
 - C-5 (b) 仕事が原因と考えられる病気・病状の治療費以外の補償状況 (MA) 60
 - (3) 仕事や生活に対する考え方
 - D-1 (a) 仕事に対する考え方について 61
 - D-1 (b) 働く目的 66
 - (4) より良い活動を続けていくために
 - C-1 仕事上の問題点 (MA) 67
 - D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3LA) 69
 - D-3 安心して活動していくための必要条件 (3LA) 70
 - (5) 地域別集計
 - B-1 (b) もっとも関係が深い所属している集団・流派・組織 71
 - B-2 (a) 昨年1年間に行った行動 72
 - B-5 (a) 教える (指導・教授) 仕事の状況 (MA)【ベース：指導者・教授】 72
 - B-7 (a) 昨年1年間の個人収入 73
 - C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA) 74
 - C-1 仕事上の問題点 (MA) 75
 - C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (傷害 (ケガ)) 76
 - C-3 (b) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (病気・症状) 76
 - D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3LA) 77
 - D-1 (a) 仕事に対する考え方 77
 - D-1 (b) 働く目的 77
 - D-3 安心して活動していくための必要条件 (3LA) 80

第2部 スタッフ編

Ⅰ. 調査集計結果の概観	82
Ⅱ. 調査設計・調査回答者について	87
Ⅲ. 分析結果詳細	
(1) 経済状況・景況感について	
B-1 (a) 昨年1年間に行った仕事 (MA)	91
B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数【ベース：各仕事にたずさわった人】	92
B-1 (c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数【ベース：各仕事にたずさわった人】	95
B-2 仕事の機会について2～3年前との比較【ベース：各仕事にたずさわった人】	98
B-7 昨年1年間に行った舞台・映画等通常たずさわっている仕事以外の仕事 (MA)	101
B-3 (a) 昨年1年間の個人収入	102
B-3 (b) 自らが負担した必要経費の割合	105
B-4 昨年1年間の活動別収入の割合	106
C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)	109
E-7 万一の場合や老後に対する備え (MA)	110
(2) 労働環境について	
B-5 (a) 雇用形態	111
B-5 (b) 契約形態で最も多いもの	112
B-5 (c) 昨年1年間で仕事が入らずスケジュールが空いた日数	112
B-8 (a) 公共交通機関での帰宅が難しい深夜作業の程度	113
B-8 (b) 当日急に深夜作業が発生した時の対応【ベース：当時急な深夜作業が発生した人】	114
傷害 (ケガ) の状況	
C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (傷害 (ケガ))	115
C-4 (a) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) 発生場所	116
C-4 (b) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) 治療費等の負担状況 (MA)	117
C-4 (c) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) に対する治療費以外の補償状況 (MA)	117
病気・症状の状況	
C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (病気・症状)	118
C-5 (a) 仕事が原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況 (MA)	119
C-5 (b) 仕事が原因と考えられる病気・病状の治療費以外の補償状況 (MA)	119
(3) 仕事や生活に対する考え方	
D-1 (a) 仕事に対する考え方について	120
D-1 (b) 働く目的	125
B-9 仕事に関して当てはまること	126
(4) より良い活動を続けていくために	
C-1 仕事上の問題点 (MA)	127
D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3LA)	128
D-3 安心して活動していくための必要条件 (3LA)	129
巻末資料 調査票・集計結果	
調査票 【芸能実演家編】	132
調査票 【スタッフ編】	146

はじめに

I. 芸能実演家・スタッフの実態調査の意義と目的

わが国の芸能文化を創り上げている芸能人の生活実態とその意識を、私たち自身がまず正しく知り、その在るがままの姿と、そのなかにあるいろいろな問題点を社会へ伝達することが、私たちの責任であると考えた

『芸能人の生活と意識—芸能人実態調査報告書—』（1974年）より

演劇、音楽、舞踊、演芸、スタッフ等の専門団体で構成される芸団協では、1974年から5年ごとに実演家の活動と生活についての実態調査を実施してきました。今から40年前の先達は、なぜ実態調査に取り組んだかの理由を上記のように述べています。芸能人という、一見華やかで羨望的になることもありますが、時として俗っぽさも感じさせ、蔑視の対象にもなり、誤解や歪められた受けとり方が生じやすいという現状を問題視したからでした。

それ以降、実態調査は、芸能実演家に対する唯一の大規模調査として、主として芸団協の正会員団体に所属する個人を対象に5年ごとに実施され、これまで、国や地方公共団体が芸術振興策を策定する際に参照されたり、芸術系大学で学生に将来のキャリアを考えさせるための参考文献として用いられたりしてきました。

第7回の2004年からは、実演家とスタッフの設問用紙を分けて調査を実施するようになり、報告書タイトルも『芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査』となりました。これは、2001年に定款改正があり、芸団協正会員団体に舞台音響、照明など、舞台技術にかかる協会やモデルエージェンシーや音楽制作の協会

組織が加わり、芸能実演家という枠組みを拡大して調査対象を捉える必要性が出てきたことに端を発します。それまでも制作者やスタッフが一部調査対象に含まれていましたが、スタッフについては、芸団協傘下だけでなく映画テレビに関わる映像スタッフについても調査対象を広げ、独立した調査として分析するようになりました。

さらに第7回調査では、初めてアニメーターを対象とした調査にも取り組みました。これは、2001年に文化芸術振興基本法、2003年に知的財産基本法、そして2004年にはコンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律が施行され、文化芸術をとりまく諸制度が変わろうとしている中で、わが国のコンテンツ産業の中で重要な位置を占めるアニメーション産業を支えるアニメーターの実態が掴めていないことから現状把握を試みたものです。その後、日本アニメーター・演出協会の発足により、より広範囲のアニメーターを対象とした調査体制が整い、今回は同協会と協力関係を構築して調査に取り組んでいます（アニメーション制作者実態調査については別冊参照のこと）。

第9回の実態調査に取り組む際に、冒頭の40年前の先達の問いに

立ち返ってみました。IT技術の目覚ましい進歩とデジタル機器の急速な普及に伴い、人々のライフスタイルや芸能のあり方が様々な変化に見舞われていることを考えると、「芸能人」の在るがままの姿も多様化し、従来の調査手法では描きだしきれないのではないかという思いも強くありました。実際、個人を対象とした調査だけでなく、芸能を担うさまざまな組織の状況や人々の文化享受の傾向、文化産業の動向などもあわせて見ていかなければ、今日の芸能人の姿は明確な輪郭をもった実像とはなりにくいでしょう。

それでもなお、実演家やスタッフ等がどのような活動に従事しているのか、どのような意識で仕事に取り組んでいるのか、その基本的な問いへの回答が、「5年に1度、数字で把握できる」ことの意味は大きく、今日の我が国の芸能文化の状況を伝える一調査として欠かすことはできないものと考えています。

本報告書は、まずは芸能実演家・スタッフの活動状況や生活実態を概観することを主眼としてまとめています。多くのページで5年前の第8回調査結果を参考として示しています。厳密にいうと、調査対象について後に詳述するとおり、前回調査と異なる抽出方法を用いた部門があり

ますし、設問によっては選択肢に一部変更を加えているものがあり、単純比較が適当でない部分が含まれますが、参考値として示しました。

芸能実演家の活動は、舞台等への出演、映画・放送・メディアの仕事、教える仕事（教授業）の3つに大別され、芸能の分野によって、個人によって、この3つの活動の割合は異なっています。我が国には多様な芸能があり、それぞれの芸能の成立基盤や発展の歴史が異なるからです。

これまでの8回の調査結果から、およそのジャンル別傾向は掴めており、本報告書でも多くの分析を8つの分野の内訳で示しています。第9回も、その傾向が大きく変わることはありませんでしたが、より詳細な分類による分析、より深い考察を重ねるには至っていません。

各分野の芸能実演家はもとより、芸能にかかわる様々な主体が、それぞれの立場から本調査の結果を読み込み、深化させ、それぞれの課題解

決に向けて活用していった欲しいと願っています。そして様々な視点から重層的に考察され、検討されることによって、芸能振興の諸方策を講ずるための参考資料として幅広く活用されることを願ってやみません。

II. 第9回調査の設計と、 実演家・スタッフからみた概観

本調査は、調査の集計分析作業は調査の専門家に依頼していますが、芸能実演家部門とスタッフ部門それぞれにプロジェクト委員会を設置して、様々な分野の現場にいる実演家やスタッフの目からみて、調査票の設問の設計や、まとめ方について検討を加えつつ進めてきました。実演家やスタッフの実感に照らし合わせてみて、説得力のある調査結果になっているのかどうかを大切にしたいからです。

第9回実態調査の設問票は、基本的には5年前の第8回を土台としており、実演家、スタッフそれぞれに向けた設問と、実演家とスタッフに共通で回答してもらう共通設問から構成されています。回答者の負担感を考慮し、設問はできるだけ少なくしたいと思う一方で、5年に1度は

確かめたいという思いも根強く、微減にとどまっています。ただし、実演家・スタッフ共通である「D. 仕事や生活に対する意識について」の設問は大きく減りました。今回の調査は、2011年の東日本大震災後初めての調査であり、震災の影響を問うことも検討しました。しかし、仕事の増減、意識の変化は集約できても、それらの因果関係をどう考えているかということまで短い選択肢を通して集約することには限界があるという結論に達し、諸環境の変化の中で検討していこうという方針をとりました。

回答は無記名返送ですが、今回、初めて居住する都道府県を問う設問を追加しました。これによって、一部、地域別分析を行っています。初

めて芸団協が実態調査を行った際に、関東と関西では別々に調査しました(1974,1975年)。しかし回答の傾向が異なるのではないかという予想に反して、ほぼ同様の結果が得られたため、以後の調査では地域を区別せず実施してきたのですが、ここに来て、地方公共団体の文化行政の違いや地域経済の違いなどが、実演家の仕事に影響しているのではないかという疑問の声があがりました。地域別分析は本報告書では一部にとどまっていますが、今後さらなる詳細分析が期待されます。

調査結果の詳細に入る前に、プロジェクト委員の目からみた結果の印象について、次に掲げました。芸能の現場に立つ人々の実感に照らし合わせて、読み解いていただければ幸いです。

実演家部門

邦楽について

吉住 小三郎
(一般社団法人長唄協会)

初めに邦楽ジャンルの回答者の構成について、女性の割合が67.3%、また年齢は大きく分けて60歳以上が63.6%、50歳以上では81.2%となり、女性が多く年齢層が高いというこの傾向は前回調査とほぼ同じですが、全ジャンルの回答結果（女性46.6%、50歳以上53.7%）と比較する顕著であり、一般的にイメージされる邦楽実演家の現況を概ね表している様に思われます。

続いて活動の内容では、昨年1年間に行った活動で「舞台等への出演及びそのための稽古」「教える仕事」「技能を維持するための研鑽」の順で回答数が多くなりましたが、実際にそれぞれに費やした日数を重ねてみると「芸能以外の仕事」が最

も多く、次いで「研鑽やトレーニング」「教える仕事」となり、回答の多かった「舞台等への出演」は50日程度で5番目となっています。

また収入面では年収が「100万円未満」の回答が27.3%と最多で「300万円未満」まででおよそ半数を占めます。収入に占める割合で最も多かったのは「教える仕事」で33.9%ですが、一方では芸能活動以外の収入が47.4%となり、実演家本来の仕事で十分な収入が得られていない状況が見て取れます。

日数や収入で回答の多かった「教える仕事」について詳しく見ると、91.5%の人が「自分で教室を主宰」と回答し一見活況に見えますが、教えている生徒数では「10人以下」

との回答が60%を占めるという結果に留まります。また前回調査に比べてカルチャーセンターは減少となりましたが「小、中学校での指導」が大きく増加し、義務教育現場での指導の需要が増えていることが窺えます。

なお、やや意外な結果として収入の形式を聞く設問で「月給や年俸などの収入」が48.2%となりましたが詳細にみると回答にはかなりばらつきや偏在が見られ、この数字は平均値ととらえて実際の収入額の回答と併せて見れば、実演家の多くがある程度の安定した収入環境にあるわけではないと見ておくべきかと思われます。

邦舞について

花柳 源九郎
(公益社団法人日本舞踊協会)

5年に一度となる今回の実態調査で、特に日本舞踊の現状を顕著に現したのは、年齢層の項目です。

今回、30代以下が1割に満たず、かえって60代以上が7割近くを占める結果となり、前回の調査より、一気に10歳近く平均年齢が上がり、若年層の日本舞踊離れが浮き彫りとなりました。一方、日本舞踊は実演家とし

て生涯現役である事が、一つの大きな特徴であり、また伝統芸能ならではの魅力で、事実、第一線の日本舞踊家には60代70代以上が多く、その層の厚さが大きな力ともいえます。

前回より5年を経た今現在の日本舞踊界の年齢層を、改めて様々な視点から捉え、そこから見える現状と問題点を炙り出す事が、これからの

日本舞踊にとって大きな命題になると思います。

また、他の項目では、『個人負担となっている仕事上の必要経費』の中にある『ソルマチケットの売れ残り』が特に日本舞踊は高くなっています。これは、他の伝統芸能系も同じように高く、世間の伝統芸能へのニーズの弱さの現れであり、特に日本舞踊

の場合は、長年この『ノルマチケット』のシステムと向き合ってきています。その実状も含め、この項目と結果は、なかなか実演家同士であっても、表立って見えてこない内実として、優れた実態資料なのではないかと思われます。

次に、教える仕事に関する項目の中では、今回、学校（特に大学・大学院）への教授の比率が、かなり増加しま

した。この事は、自国文化に対する、日本の教育の在り方が少しずつ変化してきたのではないかと思われ、オリンピックを控える今、自国の文化に改めて目を向けている良い傾向としてのトピックかと思います。

今回の調査では、個々の状況、意識などには、あまり大きな変化は見られませんでした。日本舞踊全体の様相、また日本舞踊を取り巻く環境

が徐々に変わりつつある事を、結果として見てとることができました。さらには、この実態調査により実演家の実状を広く知っていただき、その環境改善に繋がること、また実演家にとっても、これからの社会との在り方を考えて行く上で、非常に有益な資料となると思います。

洋楽について

澤 恵理子
(公益社団法人日本演奏連盟)

日本演奏連盟は専らクラシック音楽の演奏家を会員とする団体で、この実態調査では「洋楽」のジャンルに入ります。一口に「洋楽」といってもポピュラー音楽とクラシック音楽では活動の場や背景が異なる面もあり一概には言えないと思います。ここではそれを踏まえた上で感想を述べさせていただきます。

興味深いのは「昨年1年間に行った芸能活動以外の仕事」という設問で、「芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない」という回答が、洋楽については67.9%と他のジャンル（例えば現代演劇48%）に比べて高い数値を示していることです。クラシック音楽についていえば、演奏する場はその形態を問わなければ近年かなり増加しているのではないかという実感を持っています。音楽大学の学生等も大小問わず様々な場でかなりの演奏経験を積んでいます。

クラシック音楽の演奏家は楽器さえあれば個人単位で動くことができ、照明も音響機器も特別のしつらえのステージも必要としないことから、様々な場面で需要を生んでいるのではないかということが推測されます。そのため芸能活動関連以外の仕事をしないという割合が高く、他の芸能ジャンルに比べて音楽に専念できているという状況が浮かび上がっていると考えます。

また芸能実演家の「昨年1年間の個人収入」をみると、300万円未満が全体の5割程度という中において、ジャンル別では洋楽33.7%で、邦楽60.9%、邦舞56.4%、現代演劇63.5%という数字と比べて、この所得層は少ないと言えます。前述したように洋楽に従事している人は活動の場がそれなりにあり、しかも収入として音楽に直接的に関連した収入が全体の収入の9割近くを占め、入ってく

る仕事は総じて自分のやりたい“本業”の仕事であり、その仕事が生の中からは評価され、自分自身もその仕事にプライドを持ち、できる限り続けたいと思っている人が洋楽に従事している人では8割近くを占めているという事実がこの調査によって浮かび、まさに演奏家自身が音楽による恩恵を受けているということを改めて実感しました。

もう1点、実演家が有する著作権隣接権についての認識では、「知っている」が37.6%に対し、「わからない」30.6%、「知らない」25.8%となり、あわせて55.8%、つまり半数以上が著作権隣接権についての認識が不足していることがはっきりと示されています。演奏家にとって重要な権利である著作権隣接権について、当連盟としてもさらに啓蒙活動を広げる必要性を強く認識しました。

洋楽について

高島 基明
(日本音楽家ユニオン)

それぞれの仕事に費やした日数を問う設問B-2への回答について。回答者の約9割がコンサート、ライブ、ショーなどでの演奏の仕事をし、そのうちのさらに約9割がそのための稽古をしていることが見てとれます。公演の日数とそのための合わせ（稽古）の日数についてはオーケストラや、ショーのバンドの場合はそのプログラムに合わせて必ず合わせ（稽古）がありますので、そのプログラムでの公演数などを考慮すると公演数より少なくなることが予想できます。1公演のために数回合わせることもあるでしょう。概ね公演に際し合わせの時間を取っていることが読みとれます。

教える仕事については教える仕事は回答者の約8割で平均日数が105.2日。前回調査に比べ携わる人の割合は上がりましたが、平均日数は減っています。教える対象が若年層では減ってきているでしょう。一方ではシニア層を対象にしたものが増える可能性があると思われます。

技能を維持するための研鑽、トレーニングなどの項目は、回答者の約64%で、平均日数が217.1日。仕事以外でのこうしたトレーニングの重要性を裏付ける結果が表れている

と思われます。

芸能に関するその他の活動の項目、芸能以外の仕事の項目については、オーケストラの団員からの回答を考慮してみましょう。オーケストラでは古くからあるところでは団員は雇用契約であることが多いので芸能以外の仕事が必要で無い層は一定数存在します。そして、著作権や著作隣接権などの権利拡大も音楽分野が先になって行われてきたことから収入の面で寄与する部分があると思われます。

また、教える仕事についても、音大や専門学校、民間音楽教室や文化センター、個人教室などお金を払って音楽を教えてもらうということが広く認知され、定着しています。他ジャンルと比べると恵まれているとも言えますが、それでも芸能以外の仕事をしなくては立ち行かない層がこれだけ存在するということになります。B-4で「芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない」という設問での洋楽での回答は67.9%となっており、他のジャンルに比べて高いことがわかります。

B-3、仕事の増減についての設問では、映画・放送・メディアへの出演、演奏の項目が目立って低いで

す。CDなどへの録音もここに含まれるでしょうが、放送メディアの影響が大きいかと思います。新規製作コンテンツでの演奏出演機会が減っていると思います。「ハイレゾ」や「4K」、「8K」対応の新コンテンツ作成の機会が今後増えることを期待したいです。

教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）の項目が高いです。オーケストラなどは助成公演が避けて通れません（純粹に入場料だけでペイするのが困難）。この助成の要件の変化に従って、ワークショップやアウトリーチの機会が増えていることも影響しているのかもしれませんが。

その他、生きがい、将来への備えの項目に関しても

- ・オーケストラ団員として雇用されている／フリーでその都度収入を得る
- ・主に依頼されて演奏（アンサンブル、伴奏）に行く／主にソリスト演奏でアンサンブル、伴奏奏者を依頼している

といった、対極の回答の傾向が含まれていることを考慮すれば、概ね実態を表している結果ではないかと感じました。

現代演劇・メディアについて

高瀬 将嗣
(日本俳優連合)

私の属する分野は映画やテレビ、Vシネマを主たる範囲とする「マスコミ系実演家」です。実態調査では「現代演劇・メディア」という範疇に属し、さらに言えばアクション・スタントが主な活動ですが、取り巻く環境は一般的な俳優とほぼ一緒です。

その上で映像業界を振り返ってみれば、年を追うごとに深刻な状況になってきているのは否めません。

この調査ではその背景がしっかり数字に表わされていて、実に興味深く思いました。「昨年1年間に費やした活動日数」では、映像やライブへの出演を合計しても、「芸能活動以外の仕事の日数」を下回っています。実演家として本来の仕事以外で生計を立てざるを得ないのは、実に無念なことではないでしょうか。

新設された選択肢の「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」に費やした日数は、現代演劇

でも100日を超え、とくに我々アクション関係の実演家にとってトレーニングは必須の自己投資といえるでしょう。しかし、当然レッスン料や稽古場代もかかるわけで、収入と支出のバランスに頭を痛めるところです。

さて、その「昨年1年間の個人収入」ですが、現代演劇サンプルの6割強が年収300万円に届いていないことに、ある意味予想通りで落胆しました。

そして「自らが負担した必要経費の割合」で最も多かったのが「控除対象の必要経費はない」の22.6%、さらに「仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況」では「自分で負担した」の81.1%という割合を見て少々驚きました。これは個人事業主として確定申告をしなかったり、仕事中のケガや病気などの労災申請を行っていないというこ

とが推測できます。ただでさえ零細な実演家なのに、還付金や治療費補填の申請をしていないのはもったいなく感じました。

今後、劇的に実演家を取り巻く状況が改善されることは、残念ながら「ない」でしょう。

であれば、いかにして文化芸術活動である「芸能実演」を成立させるかについては、他国のように国家的支援を仰がなければ困難かもしれません。

繰り返しになりますが、今回のアンケートで6割の現代演劇の実演家が新卒のサラリーマンの年収に及ばず、福利厚生も満足に受けられない現状を示されもどかしく思いました。アンケートにもあるようにこの仕事が好きで、プライドを持って続けて行きたい実演家の環境をより良くするために、地道な尽力をしたいと改めて痛感した次第です。

洋舞について

高木 俊徳
(公益社団法人日本バレエ協会)

前回5年前の第8回実態調査ではアンケートの問い項目に入っていなかった「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど個人負担必要経費」の調査結果が、高数値を示したのは芸能実演家の実態を如実に表しています。そして「仕事に対する

考え方」についての問いについては、これも、自分の仕事に対して誇りを持ち、今の仕事を出来るだけ続けたいという思いが強く、殆ど70%台の数値を示しています。これらの実態は、仕事の原因と考えられる病気等の治療費を、全ジャンル

トータルで、約90%は自己負担という数値にも反映されてきます。

表現の場、練習の場が少ないにも関わらず、舞踊の世界が成り立っているのは、もっぱら、教える事でもって収入を得て、チケット代の負担をしてまで、創造、表現の場を自

ら確保して、各々並々ならぬ意欲と誇りをもって自己の力を向上させているのです。

賃金という目に見える形での対価を充分得られない実演家の働きは、需要がないわけだから、趣味としての働きと見做され、文化の一端を担っているという評価はなかなか得られないのが実状です。評価を頂くまでは、努力不足と決めつけられ

るでしょう。特に「洋舞」の場合は、この呼称の字が表現しているように、輸入文化として存在しています。しかし、伝統的な日本独自の文化も、調査結果では殆どの項目で同じような数値をみせています。驚きです。やはり、文化そのものに対する日本の国の捉え方が示されているのでしょうか。支援金額の高低ではなく、もちろん、あって当然でしよ

うが、表現の場での対価が問題なのではないでしょうか。要するに文化そのものに対する認識と価値観です。

堂々巡りになりますが、自分の仕事に対して誇りをもって、目を未来に向け続けることが、常に求められるようです。

演芸について

桂 歌春

(公益社団法人落語芸術協会)

サンプルは演芸部門において、年齢層はバランス良く回答が得られていると思います。この業界も女性の進出に目覚ましいところがありますが、男女比も7割強が男性という現状に合った数字です。活動の内訳も舞台、寄席出演など実演がほかの部門の方々より圧倒的に多いのが特徴だと思います。前回比でも若干増が見られます。また、教える仕事も増えています。その反面、稽古の時間が少ないように思えますが、場数を

踏むのが一番の稽古という風潮があります。そこで、寄席をはじめとして発表の場が増えることを期待しているのがD-1(a)仕事の量の不満に表れているようです。この設問でも演芸は突出しているようです。この仕事を続けたいのも演芸部門が高い数字です。仕事に対する誇りもありますが、潰しの利かない仕事とも言えます。また、働く目的もお金のためが高く、社会の一員として…が一番低いのも特徴的です。

C-1についても、仕事が継続的でない、交渉力がないというのもこの部門の特徴で、ほとんどの会員が個人事業主として活動をしているためだと思われます。

D-3の発表の機会が増えることを熱望していることが81.6ポイントという数字に如実に表れています。このことが、今回の実態調査で一番得られたものと思います。

演芸について

林家 染二

(公益社団法人上方落語協会)

実態調査で、今回、地域別集計が実現して、関西在住で仕事をしている立場から、大変興味深い結果が出ていました。近畿地方の回答者は、「邦楽」・「伝統演劇」や「演芸」、

関東地方は「現代演劇」のジャンルの割合が高く、また1年間の活動において、関東地方は映画・放送・メディア出演、演奏が多い。これはマスコミの仕事が近畿地方で少なく、

関東地方に一極集中して発信していることによる実勢が、顕著に表れていると結果だと思います。しかしながら、収入や仕事に費やす日数など、実感からは、もっと違いが出る

のではないかと予想していたのですが、それほど大きな格差があるとまでは言えないということでした。でも、個人負担となっている必要経費の中身も違いますし、地域性の違いが数字の中に表れているように思います。

技術・技能を向上させる必要条件としては、地域によって傾向が違ふことや、安心して仕事ができるようになるために必要だと思うことについて、関東地方と近畿地方を比べ

ただけでも違いがありました。大阪には公立文化施設が少ないので、「公共劇場等が文化拠点として充実すること」を望む声が、関東地方より多かったのですが、「国や自治体等による公的支援」については、関東地方より必要と考えている人の割合が少ないという結果でした。これは、上方文化を創造し、発展と伝承を自助努力の中で遂げて来た実演家としての気質が、現在の地域文化行政からの危機感もあり、より特徴的と

なっていると分析できます。

今回の集計で、各地域における芸能実演家の実情と文化的背景や伝承及び向上・育成の必要条件が、明確となりました。芸能実演家が、各地域における状況を認識し、各団体内においても相互に意見交換をして取り組み、全体と共に地域性という面からも、個人の負担や技能・技術向上条件確保の効率化や支援体制を構築して行く上での指針となる調査結果だと考えます。

スタッフ部門

映像・メディア系について

小川 洋一
(日本映画撮影監督協会)

今回の第9回実態調査、過去5年間の業界における大きな事件として、2012年 アメリカ コダック社の経営破綻（現在、破産法保護下から脱却）と、2013年に富士フィルムが撮影用・上映用映画フィルムの販売を終了したことが挙げられます。老舗世界2大フィルムメーカーもデジタル化の波には逆らえませんでした。

デジタル化になってから目まぐるしい技術の変遷に、今回の新設問の中で「新しい機材や技術の導入によって戸惑うことがある」は、「そう思う/まあそう思う」の割合がトータルで58.7%。

加入している傷害保険などの給付があった」と合わせ、今回は80%と前回の2倍近くになっています。

「新しい機材や技術の導入に対応するための研修の機会には十分にある」は、「そう思わない/あまりそう思わない」がトータルで65.9%でした。

過去、映画の技術はフィルム制作の中で伝承されてきましたが、目まぐるしく変わるデジタルの新技术導入に戸惑いを隠せない現実をこの結果から垣間見ることができます。

そして、「昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害（ケガ）に対する治療費等の負担状況」は、「自分で負担した」と「自分が

加入している傷害保険などの給付があった」と合わせ、今回は80%と前回の2倍近くになっています。

社員であろうがフリーであろうが労働条件は同じであり、本来ならば労災保険の適用が当然の事です。厚生労働省・都道府県労働局・労働基準監督署は、契約の形式にかかわらず就労の実態が「労働者」に当たると判断された場合には、労災保険が適用されるとしています。

1974年以来、5年ごとに実施されている実態調査の貴重な結果を踏まえ、各分野等での資料として一助になることを願って止みません。

映像・メディア系について

酒匂 正弘

(日本映画テレビ照明協会)

第9回調査の平均年齢は55.1歳。最も多い年齢層は「50～59歳」(27.1%)である。

第8回調査結果と比べると平均年齢は3.2歳上がっており。「60～64歳」「65歳以上」の割合が高くなっている。

委員会が回を重ね詳細な分析結果が判明して行く中で、前回の5年前と比較して回答者の平均年齢が上がっているということに強い関心を持ちました。映像系その他の(DVD、アニメ、CM等)分野では20歳～49歳までの割合は単純計算でも32.6%減。これは若年層が忙しかったから無回答だったのか。反面、定年前後の該当者にアンケート調査票

が回った結果なのか。これは、多少自分の経験からの推測に過ぎませんが述べてみたいと思います。

近年のCM制作に関しては、大手は別として制作予算には大きな開きがあるようです。そのため、当然低予算でも請け負わざるを得ない業者も多く、正常なギャラは払えないので以前から懇意にしていたリタイア組に声を掛けてスタッフ編成を進めているのではないのでしょうか。先にも述べたようにあくまでも推測にすぎませんが、昨年1年間にたずさわった日数は減少しています(「劇場用映画」で平均日数が増えているが、「テレビ」「CM」では減っている)。このことから、推測するこ

とが出来ると思います。

しかし、これは結論の急ぎすぎでしょう。前回に比べて、CM、DVDを例にとっても30代、40代の年齢層の減少は、現在、関係機関紙で公表されている作品数や稼働状況からしても不自然なので、若年層は仕事が多忙だったので無回答にならざるを得なかった。

ようするに、若手は多忙だったのでリタイア組が代弁した。乱暴な結論でしょうか？

これから活躍するであろう若手の仕事環境がよくなっていくように、願ってやまないのですが。

ライブ系について

西山 英樹

(公益社団法人日本照明家協会)

5年に一度、9回目の調査に係わらせていただき、改めて、40年の長きにわたって地道な調査を重ねてこられた先人の慧眼、努力に敬意を表します。

サンプル数が僅か300余りの調査の分析が、如何ほどの説得力を持つか、当初は些か疑問でしたが、分析結果の表・グラフを比較検討・俯瞰すると実によく整合しているのが

分かります。特に、現在の仕事に自分の能力が活用出来ていると、自分の仕事にプライドを持ち、この先も、その仕事を続けていきたいと考えながら、芸能の将来、自分の仕事の将来に必ずしも明るい未来を見通せないでいるスタッフの実像が透けて見え、身に詰まされます。

過半数のスタッフが、新しい機材や技術の導入に戸惑い、対応する

研修等の機会に恵まれずにいる分析結果を見ると、職能団体としての使命や責任に思いを馳せます。スタッフが団体に加盟して、同業の他者にまで思いを及ぼし手を携えて全体で向上しようという思いに至るには、それなりの経験・経過を要し、公益団体の年齢構成が、高齢者に傾斜するのは、ある意味仕方ないことかもしれません。

ライブ系について

船引 悦雄
(日本舞台監督協会)

以下は、あくまで私個人の私見です。

アンケートの集計上では、基本的に、この5年間で数字は大きく変化がないということ、相変わらず舞台の現場は男性社会ではあり、徐々にではあるが、女性の進出が伺えるということ、現場での高齢化が進んでいるということ、ジャンル別の仕事の量については大きな変化がないこと、時代の風潮か、舞台ではミュージカルが若干増えていること、個人所得にしても、総じて1公演の舞台予算が漸減傾向のなかで、その影響が反映し、右肩上がりにはなっていないこと、回答者の多くが個人事業主のような状況で、舞台スタッフの多くが必要経費を自己負担しており、社会保障に関しては全く個人の自己責任の状態であり、公的な保障の外に置かれている状況です。

これらの数字は、現状の一面を

反映したものです。私としては、今回は、より広範囲な調査の実施をお願いしたい。今回の調査の対象となった各協会でも若手スタッフの多くが未加入であり、他の業種、大道具、衣裳、床山とかその他の舞台スタッフは調査の対象外に置かれました。調査対象を拡げ、より多くの舞台スタッフの現状を把握しない限り、今後の展望を見通すことは不可能だと考えます。彼らは多くが日傭い状態で舞台の仕事に参加しています。その生活基盤は非常に脆弱なものであり、ひとたび病気、怪我等で仕事が途絶えると、忽ち路頭に迷わねばならない者も多く居ます。将来を考えると、やむなく、舞台の世界から足を洗う者も数多く居ます。

彼らの生活基盤をより確かなものにする方向性を舞台芸術に携わる者全ての問題として模索していただきたい。

彼らの中には、舞台芸術はもっと公の機関から補助されるべきだと考えている者から、公権力に頼ることを潔しとしない気質の者も居ますが、舞台の現場に定着し、仕事を続けていくためには、何らかの方法で彼らが将来の見通しを持つことが出来なければなりません。病気、事故等に保障が確保され、安心して仕事に邁進でき、誰でも気兼ねなくスキルアップ出来る場が、公的機関、劇団、劇場、各協会等から提供されることにより、価値観の転換を生むことが可能になり、今後解決していかなければならない問題に積極的に立ち向かっていく態度も醸成されるようになると思います。

そのためには、公的機関なり、各協会、劇団、劇場、全ての制作主体が舞台スタッフを巻き込む形で、将来の方向性を提示する責務を負っていると考えます。

ライブ系について

渡邊 邦男
(一般社団法人日本舞台音響家協会)

スタッフ編で3回目の実態調査がまとまりました。この間の世相の急激な変化や諸分野の技術革新で、舞台スタッフを取り巻く環境も大きく変わりました。一個の舞台音響家として、3.11を跨いだ5年間の実感を交えながら、ライブ系スタッフに

についての雑感を書き留めます。

男女構成比では、女性の進出が目立ってきました。「演劇・ミュージカル」や「ライブ系その他」と、「コンサート」では仕事の内容に違いがありますが、今では音響チームの中に必ずと言っていい程女性スタッフ

が入っています。また、近年のインターンシップ制度で舞台スタッフ実習に参加している学生も、ほとんどが女性ですし、芸術・技術スタッフコースがある専門学校や大学では5～6年前から男女構成比が逆転しています。近い将来、職場での逆転も

十分に考えられますが、出産・育児休暇・再就職など、仕事と育児の両立が難しい職種でもあり、社会全体で解決しなければいけない重い課題です。

スタッフの平均年齢は5年前の調査と比べ上がっていますが、これは調査対象の抽出母体となった各団体の会員構成が高齢化しているためと推察できます。今の舞台音響のスタッフには、操作から創作まで、様々な資質が求められています。協会では公開講座や研修会を開催して人材育成に努めています。しかし、「参加する若い世代の音響家や学生は増えているのですが、それが新入会員につながらない」という状況が続いています。魅力ある協会にするためにまずは内部改革！ということで、会員を受動的体質から脱皮させるために、専門部会の活性化に取り組んでいます。

経済状況・景況感の設問では、「昨年1年間に行った仕事の本数」B-1(b)などで「演劇・ミュージカルの本数や携わった日数が増えた」という集計結果が出ています。これは、新しい制作会社の参入などで、多様化するニーズと共に公演形態が

変化。様々な企画を実現するため、各公演の期間を短くし本数を増やす傾向が表れています。「昨年1年間の個人収入」B-3(a)では、調査内容に個人レベルでの過去との比較がないため不明ですが、業界の活性化を図るためにも、もう少し高収入になることを期待します。年代別で見ると、ここでも若い世代のサンプル数が極端に不足していることが気になります。

労働環境のうち雇用形態では、ライブ系の「会社を経営」が1/4以上を占め、正社員を加えると2/3を超えています。これが契約形態にも表れていますが、私が受け止めている実感とはズレがあります。深夜作業は、劇場などでの就業時間が徹底されたこともあり減少していますが、発生した深夜作業や傷害には適正な手当や補償を実現させなければなりません。また、安全作業という観点からも、関係各所に理解と協力を求め、更に少なくしていく働きかけが必要です。

私たちスタッフの仕事は、個々に様々な要素が絡んできますが、自信とプライドを持っていなければできない仕事です。社会人・職業人と

してのスキルアップや生涯にわたるキャリア形成を協会で支援していかなければいけないと痛感しています。

ライブ系の半数が「‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っていない。」と答えています。私も、趣味や娯楽の多様化、インターネットや放送メディアなどの影響で、‘なま’の芸能に接する機会が少なくなっていると感じています。この機会の減少は、学校教育にも原因があると思います。

創り手と観客が同じ時空を共有して完成し、それを体感できるのが‘なま’の魅力です。スタッフも、より良い舞台を創るための努力は惜しみません。新しい種を植え育てるためにも、創る！聴く！見る！感じる！というライブの楽しみをそれぞれの分野で精一杯伝えることが、実演家やスタッフの明るい未来につながると確信しています。どう変化していくのか？ 5年後の実態調査が楽しみになるよう、各専門団体が手を携えてひたむきな努力を続けていくことを願います。

実演家部門・スタッフ部門を通して

福島 明夫

(公益社団法人日本芸能実演家団体協議会)

1974年から5年に1度行われている芸能実演家の活動と生活実態調査。それは私たち実演芸術に関わる人々の暮らしぶりを露わにするものですが、それはとりもなおさず、この国、社会が芸能実演家にどのような環境を作り出しているのかということを示すものです。

文化芸術振興基本法が成立し、文化予算の大幅増額を求めるシンポジウムが開かれた時に、ある実演家は、この国が環境を整備しないのなら私たちは海外で仕事するという選択をするだけと言い切りました。そして事実、多くの実演家は海外に拠点を置いて、全世界を相手にした活動を展開しています。昨今わが国の魅力発信が重点施策とされ、日本文化を積極的に押し出すことが強調されていますが、求められるのは優れた芸術家、実演家がこの国に集まれる環境を整備することではないでしょうか。また諸外国の例を見るまでもなく、そういった優れた芸術家、実演家の活動に触れることは新たな創造を生む基盤となります。実際、今活躍している人々の多くはそういった先達の優れた舞台や映像に触れることで、この道を選択したのです。問題はこの四十年間で、芸能実演を育む社会的な環境が変わって

いないだけでなく、むしろ悪化している傾向が読みとれることです。そのことはこの国の芸術文化創造の未来に暗い影を投げかけるものではないでしょうか。今、2020年東京オリンピックパラリンピック開催に向けた文化プログラムの実施、そのための文化予算措置が言われていますが、これからの五年間にその舵取りを大きく変えることが出来るかどうか、その分水嶺に立たされているのです。以下、報告書の内容に即していくつか記します。

この調査の対象となった人々の53.8%が芸能実演活動以外の仕事をしていません。この調査対象となった方々の平均年齢が54歳、40歳未満が19.4%で、一定経験を持った人々であることから、このような数字になったのではないかと推察されます。そしてその活動実態としては、殆どのジャンルで今回設問が新設された「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」が100日から200日で突出しており、次いで「出演の稽古」「出演」の順序になっています。出演日数が稽古日数を上回るのは、伝統演劇、演芸の二ジャンルのみです。またこの2～3年前との比較(B-3)では、殆どのジャンルで「舞台への出演」「映画・放

送・メディアへの出演・演奏」が減っているという回答が寄せられています。ここから読みとれるのは、一定経験を持った実演家の出演・演奏回数がそもそも多くないに加えて、この2～3年でさらに減少しているということです。そのことは「(4)よりよい活動を続けていくために」の項での問D-2、D-3に対し、「発表・出演機会が多くあること」が半数以上の要望として寄せられていることにも表れています。この国では、実演家に発表機会がなかなか与えられない、という実状を示していると言えます。

そしてもう一つ特徴的なことは、仕事上の傷害や病気に対する補償がほとんど行われていないということです。特に労災保険適用、傷害保険給付がともに10%を切っていて、自分で負担が傷害で70%、病気で90%という状況は、実演芸能という性格から考えても大きな課題だと言えるでしょう。実演家やスタッフが、安心して仕事ができる環境がないことはもっと社会的にもアピールしていかなければなりません。

この調査結果が各芸能ジャンルで活用され、検討を深めることで、芸能実演全般の問題を掘り下げる材料となることを期待しています。

第 1 部

芸能実演家編

I. 調査集計結果の概観

日々研鑽を積み、技能向上のために研究、トレーニングを欠かさない。

収入は、世間で羨まれているほど高収入の人は少なく、必要経費の個人負担は少なくない。

実演芸術をとりまく仕事環境は、決していいとは言えない。

けれども、自分の能力や才能を発揮するために仕事をし、自分の仕事には高いプライドを持っている……今回の調査から明らかになった実演家像です。

過去の調査と比較をすると、社会の変化とともに変わってきた部分もあります。

また今回は初めて地域別集計を試み、地域によって異なる意識、要望が読みとれる部分もあります。

第9回調査の概観をここに提示します。

■ 中高年齢層の占める割合の増加－回答者の属性分析から

芸能実演家の回答者の年齢構成は、平均年齢が54.0歳、50歳以上で59.6%を占めるに至っています。5年前の第8回調査では平均年齢51.5歳、50歳以上が53.7%、10年前の第7回調査では平均年齢51.8歳、50歳以上が53.5%であったのと比較して、ここに至って中高年齢層の割合が増加しています。

平均年齢2.2ポイント増の要因は、ひとつには第8回調査の対象に年齢層の若いモデルエージェンシーに所属する実演家が多く含まれ平均年齢を押し下げる要因になっていたのに、今回はモデルに集中して対象抽出されていないことがあげられます。さらに8ジャンル別のこれまでの調査の傾向から、平均年齢が比較

的に若い「洋舞」の実演家が占める割合が低めであることと、逆に高齢でも活躍し続ける「邦楽」の回答率が上昇して邦楽実演家の占める割合が若干上がっていることが平均年齢を押し上げているのではないかと考えられます。しかし、ジャンル別の平均年齢の推移を見ていくと、「洋楽」が50.0歳から47.5歳に微減、「洋舞」が48.0歳から47.8歳に微減、あとのジャンルはすべて増加していて、全体的に年齢層があがっている傾向は否めません。参考までに第7回調査の8ジャンル別の平均年齢との比較においては、演芸（57.1歳から52.3歳に平均年齢低下）を除いて、すべてのジャンルで平均年齢があがっています。

ジャンル別の特徴としては、日本古来の芸能分野、すなわち「邦楽」、「邦舞」、「伝統演劇」は60歳以上の割合が高く、特に「邦舞」においては70歳以上で現役である実演家が40.8%となっているのが目立ちます。一方、「洋楽」「洋舞」は、50歳未満の割合が高い傾向がありますが、「洋舞」においても、50歳未満の割合は第8回では50.8%であったのに対し、今回は45.9%にとどまっています。

参入してくる若年層の数を上回るほど、実演家のリタイアがなく、生涯現役で活動し続ける実演家が多いという特徴が浮かび上がっています。

■ ジャンルと仕事の内容－教える仕事に携わる人が過半数

携わっている分野を複数回答で求めたところ、最も多かったのが「放送（テレビ、ラジオ）・スタジオ録音、スタジオ録画」の19.5%で、次いで「現代演劇・メディア」（13.5%）、「オーケストラ」（13.2%）、「能楽」（11.5%）、「日本舞踊」（10.6%）でしたが、ほかは全て10%未満で分散傾向にあります。しかし、最も比重の大きいものの回答1つに限定すると、「放送（テレビ、ラジオ）・スタ

ジオ録音、スタジオ録画」は2.8%にとどまり、10%を超えているのは「オーケストラ」（10.8%）、「能楽」（10.7%）だけになります。

「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇・メディア」「洋舞」「演芸」「演出・制作等」の8ジャンルの内訳をみると、「洋楽」「現代演劇」は最も比重の大きい分野が多岐にわたっています。（問 A-1(a)、(b)）

現在、仕事でしていることを複

数回答で求めたところ、「教える、指導する」が58.4%と6割近くにのぼり、次いで「楽器を演奏する」（32.8%）、「歌・唄・謡をうたう、語る」が25.5%、「踊る・舞う」が25.3%と続いています。最も比重の大きいものに絞っても、「教える、指導する」が最多で21.1%、「楽器を演奏する」が19.1%、「劇やドラマを演ずる」が13.2%となっています。（問 A-2(a),(b)）

■ 実演家のキャリア形成

【芸歴】 芸歴、活動年数の平均は37.0年。出演料、報酬を得るようになってからの平均年数は26.6年でした。(第8回調査では、それぞれ33.0年、24.1年)。ジャンル別にみると、「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋舞」で活動歴「41年から50年」の層が最も割合が大きく、「洋楽」と「演出・制作等」が「31年から40年」が最も多く、「現代演劇・メディア」と「演芸」では「21年から30年」が最も多くなっています。(問A-4(a),(b))

【動機】 現在の仕事をするようになった動機を複数回答で求めたところ「とにかくやりたくて」が最も多く42.2%となっています。次いで「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が33.3%。ほかの理由はいずれも2割未満です。

しかし、ジャンル別に見てみると、動機にはばらつきがあります。

「演芸」は、「とにかくやりたくて」が62.0%と突出しており、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」も41.7%と、意欲と自信が強い動機となっています。

しかし、環境が大きな要因となっていると推察されるジャンルがあります。

「伝統演劇」では、「その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから」が30.4%と最も多く、次いで「とにかくやりたくて」25.0%、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が22.8%となっています。

「邦楽」「邦舞」では「世襲ではないが、家庭環境で自然に入った」がそれぞれ34.3%、26.8%と最も多く、次いで「とにかくやりたくて」(26.9%、25.4%)となっています。

「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」では、「親・兄弟その他に勧められて」が

いずれも16%前後で、ほかのジャンルより高めなのをみると、伝統芸能の分野は家庭や周囲の環境や周囲の人の勧めが重要な要因になっていることが見てとれます。

「洋楽」で最も多いのは、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」で55.0%。「とにかくやりたくて」は49.8%で、全体の傾向とは順位が逆転しており、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が24.5%、「オーディションを受けて合格したから」が18.1%と、自他ともに才能を認めることが重要な要因になっていると推察されます。

「現代演劇・メディア」は、「とにかくやりたくて」が59.5%、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が39.7%と「演芸」と傾向が似ていますが、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が24.5%と、全体平均より高い割合となっています。

「洋舞」は「とにかくやりたくて」が54.2%と、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が31.3%で、あとはそのほかの選択肢に分散しています。

「小さい頃から芸能活動のための教育を受けたから」の選択肢で、「邦舞」23.2%、「洋舞」19.1%が高めで、小さい頃からの稽古、訓練が大きな意味をもつジャンルであるのが伺われます。(問A-3(a),(b))

【技能の習得】 どのように今の活動分野の技能を身に着けたかを複数回答で求めたところ、最も多かったのが「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が42.6%で、次いで「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が32.9%、「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」が22.3%、「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身

に着けた」が20.8%となっています。

この中で最も重要だったと思うものの1つに絞り込むと、こちらも1位、2位は「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」(31.4%)と「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」(14.0%)ですが、3位は「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」(12.4%)でした。

ジャンル別に見てみると、それぞれの技能の習得の道筋に特徴があるのが伺われます。

「演芸」は「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が70.6%と突出していて、ほかの選択肢の比率が小さいのに対し、「現代演劇・メディア」は、最も多いのは「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」が46.4%で、次いで「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」で23.8%です。

「洋楽」は「その分野の専門の大学院、大学、短大で教育を受けた」が33.7%、次いで「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が20.5%となっています。

「洋舞」は「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が43.5%で最も多くなっています。「邦舞」は、「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」と「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」がともに38.7%と並んでいます。(問A-5(a),(b))

活動の状況について

■ ライブ出演、教授業、メディア出演の割合一日数、収入の面から

芸能実演家の仕事の場合は、舞台などのライブの公演への出演、メディアへの出演・撮影・録音、教える仕事の3つに大別されます。出演、収録には、それぞれに稽古、リハーサル等があるほか、個々人で研鑽をつむことも欠かせません。

昨年1年間に行った活動について複数回答で求めたところ、最も多かったのは「舞台、コンサート、ライブ、ショー、イベントなどへの出演」76.9%で、「舞台等への出演のための稽古（リハーサル、移動日を含む）」68.2%、「教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）」63.1%の順です。

これを日数ベースで見えてみると順位が変わります。全ジャンルの平均活動日数で最も多いのは「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」

が151.0日で、次いで「教える仕事」が102.5日です。舞台などへの出演は60.4日で、そのための稽古が84.7日となっています。

これを8ジャンルごとに見ていくと、舞台などへの出演が最も多くなっているのは「演芸」で、平均値が123.5日。次に多いのが「伝統芸能」で81.6日です。そのための稽古、リハーサル等に費やしている日数が一番多いのが「洋舞」（144.1日）で、次いで「洋楽」（107.5日）です。

「教える仕事」が多いのが、「洋舞」（189.5日）、「邦舞」（147.7日）です。

「映画・放送・メディアへの出演」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で54.7日です。（B-2(a)、(b)）

昨年1年間に「芸能以外の仕事をしていない」と回答した人は過半数を超えていて、過去の調査と比べてもあまり変化はありません。（B-4）

これを、収入源の面から見てみます。全ジャンルを総合すると「舞台出演」からが最も多く31.6%、「教える仕事」が25.5%で続きます。芸能以外からの収入も少なくありません。「年金、不動産、その他の事業経営」からの収入は全体で11.7%、「それ以外の収入」は13.9%となっています。

ジャンル別にみると、「舞台出演」が最も多いのは「演芸」（67.4%）、次いで「伝統芸能」（43.6%）と、日数ベースと同じ傾向です。「教える仕事」が多いのが「洋舞」（56.1%）、「邦舞」（50.1%）です。「映画・放送・メディアへの出演」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で24.1%です。（問B-8）

■ 景況感

仕事の機会について2～3年前との比較でいうと、いずれの仕事も「変わらない」が多数派ですが、「舞台」「メディア」への出演が減ったと感じている傾向が強く、「教える仕事」で増加していると感じている人の割合が比較的高いです。

ジャンル別にみると、「舞台」中

心の「演芸」では、舞台などへ出演が「大幅に減った」と回答している人の割合が最も高く、主たる活動で減少傾向を感じている状況があります。

「メディアへの出演」が中心の「現代演劇・メディア」では、「メディアへの出演」が大幅に減ったと感じ

ている傾向が強く出ています。（問B-3）

「教える仕事」が中心の「洋舞」「邦舞」では、景況感が逆で、「邦舞」では減ったと感じている傾向があるのに対し、「洋舞」では増えたと感じている傾向の方が勝っています。

（問B-3）

■ 教える仕事の状況

実演家の6割近くが携わっている「教える仕事」ですが、その教授業の場はさまざまです。

継続的に教えていて「学校や教室、養成機関に勤めて教えている」は51.7%、「自分で教室を主宰して

弟子をとっている」が67.0%で、「不定期でときどき体験指導などを依頼される」が36.9%でした。「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」では、自分で弟子をとる割合が圧倒的に高く、「洋楽」「洋舞」では、学校等に雇われてい

る場合と、自分で生徒をとる割合は拮抗しており、「現代演劇・メディア」と「演芸」では「学校等に勤めて」の方が多くなっています。

生徒・弟子の数では、「学校や教室、養成機関等」で継続的に教えている

生徒数は平均値で47.7人。第8回調査結果(46.5人)から微増です。ジャンル別でみると、「邦楽」「洋舞」「演芸」で増加しています。「自分で教室を主宰して」教えている生徒・弟子の数は平均で23.1人。第8回調査は26.5人でしたから若干の減少です。ジャンル別にみると、増えているのは「邦舞」だけで、ほかは

減少していました。第8回の調査対象とは異なるので、増減の傾向は同一実演家が教える生徒・弟子の増減傾向を現しているものではありませんが、問B-3で見た「2～3年前と比べて」実演家が感じている増減の傾向とはやや異なっていました。(問B-5)

実演家が教える仕事を依頼され

る場、主体について問うている設問では、第8回と分布はほぼ一緒ですが、「小中高校」が17.0%から25.6%に、「民間企業や個人主宰の音楽教室、バレエ教室」が19.4%から23.3%というように増加傾向が見られました。(問B-6)

■ 収入と費用の負担

芸能実演家の昨年1年間の個人収入は、「300万円未満」までの所得層で5割程度を占めています。前回調査と比較すると、最も多い層が前回は「100万から200万円未満」だったのが、「200万から300万円未満」にシフトしました。第8回との比較でいうと、低所得層は減少していますが、高い所得層の割合にそれほど変動は見られません。

年齢別に分布をみると、40～49歳の中堅では「500～600万円未満」の割合が最も高くなっており、若年層と比べると年齢に応じて徐々に収入があがっているのが見てとれます。過去の調査との比較を年齢層別の平均所得の推移で比べてみると、リーマンショックの影響があったと推察される第8回より上回る傾向にあります(ただし「40歳から49歳」で若干低くなっています)、経済全体が今より好況だったと思われる15年前の第6回時よりはいずれの年齢層でも下回っています。とりわけ60歳以上の平均収入が4回の調査のうち下から2番目と低く、高齢者層の収入低下の傾向が強くなっています。(問B-7(a))

芸能実演家の所得水準は、収入だけでなく必要経費の割合も影響するため、第9回調査では、総収入に対する必要経費の割合について問いました。その結果、「給与所得だけで

確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない」と回答した割合が23.3%と最も多くなっていました。(問B-7(b))

収入の形式についてみると「仕事に応じて支払われる報酬」が「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」を上回っていて、月給、年俸など予め決められた報酬を得ていない人の割合が高いです。(問B-9)

にもかかわらず、問B-7(b)で「所得控除の対象になった必要経費はない」という回答が多すぎるのではないかと、回答者の他設問での回答を調べてみると、「月給などの予め決められた報酬」は受け取っていないけれども確定申告はしていないと回答している人が含まれているようです。今回は、確定申告をしている人の割合を掴んでいませんが、実演家の確定申告の状況については、今後より丁寧な調査が必要と思われます。

個人負担となっている仕事上の必要経費について複数回答で問うた設問では、多い順に「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」「交通費」「整髪料、化粧品」「通信費」「接待費・交際費」「身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出」と並び、第8回と比較して上位6位までは変動ありませんでした。

ジャンル別にみると、芸能実演家

が個人で舞踊会、演奏会、独演会など発表の機会を持ち、そのための個人負担が大きいと推察されるのが「邦舞」「邦楽」です。「会場の使用料」に加え「ノルマのチケットの売れ残りの自己負担」が大きいことから、発表機会の観客集めが難しく実演家の負担になっているジャンルです。「演芸」「洋楽」「邦舞」「邦楽」は「チラシ、プログラムの印刷費」が比較的多くなっています。

一方、公演の費用は主催する所属集団・組織で負担するとみられるジャンル「現代演劇・メディア」では「会場の使用料」「チラシ等印刷費」の負担割合が少なく、チケット売れ残りの負担の割合も低めになっています。「洋舞」は「邦舞」「邦楽」よりは個人負担の割合は少ないですが、チケットの自己負担は2割以上あります。

「共演者に対する出演料、謝礼」については「邦楽」(31.4%)を筆頭に、「邦舞」(27.5%)、「演芸」(27.0%)、「洋楽」(24.5%)、「伝統演劇」(23.2%)、「洋舞」(20.6%)と続き、実演家が伴奏者などの実演家に対して支払う立場にあるというのも特徴的といえます。(問C-2)

芸能実演家の仕事環境について

■ 仕事上でのケガ、病気と治療負担、補償

昨年1年間に、医師の治療が必要となった仕事上のケガと病気の経験率はそれぞれ9.0%、17.0%で、ケガの発生場所は半数近くが稽古場で起きています。治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が圧倒的

に多く、ケガの発生での労災適用は7.6%にとどまっています。治療費以外の補償では、「何もない」がほとんどで、「見舞金程度」が若干あるにとどまり、休業補償がうけられないのが実態です。仕事由来のケ

ガ、病気であっても自己負担で補償もないという状況は前回までの調査結果と変わっていません。(問C-3,4,5)

■ 仕事上の問題点

芸能実演家が感じている仕事上の問題点を複数回答で問うたところ、最も多いのが「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」(31.2%)で、次いで「仕事が単発で継続して仕事がない」(27.0%)。その次に「報酬その他についての交渉力が弱い」(25.6%)があがっています。ジャンルによって傾向に違いがありますが、実演家が抱えている問題点は多岐にわたっています。一方、今回、「問題があるとは感じていない」という

選択肢も追加したところ、18.6%の回答があり、特に問題を感じていない層も存在することがわかりました。(問C-1)

契約関係について、放送番組等に出演する場合について契約書の有無を問うたところ、「全く契約書は交わしていない」が16.3%、「マネージャーに任せているので自分では確認していない」10.7%となっており、「必ず契約書は交わしている」は4.9%にとどまっています。(問

B-10)

実演家が有する著作隣接権についての認識を問うたところ、「知っている」37.6%、「聞いたことはあるが、よく分からない」30.6%、「知らない」25.8%で、著作隣接権に由来する権利の委任状況について「権利処理を行う団体に委任している」は30.8%で、「所属事務所等に任せているので自分ではよくわからない」が16.9%、「何もしていない」が44.4%となっていました。(問B-11、12)

■ よりよい活動が続けていくために

実演家としての技術・技能を向上させるためのサポートとして何が必要か、選択肢の中から3つまで選ぶ問では、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」「芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること」「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助があること」の3つが上位に並び、この傾向は第8回調査と変わっていません。

日頃から、仕事に関わらず「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」に費やす時間が多く、自己負担の費用の中で「会場費」が少なからずある状況を見ると、必然的にこ

のようなサポートを強く要望することが頷けます。(問D-2)

安心して活動していくための必要条件として3つまで選択する問では、「発表や公演、出演の機会が多くあること」「報酬額や就労時間など仕事の条件がよくなること」「文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること」が上位3つを占めていて、これも第8回調査結果と同様です。(問D-3)

万一の場合や老後に対しての備えとして、実演家がどう対応しているか複数回答で問うた設問では、「生命保険や損害保険などに加入している」と「国民年金に加入している」がそれぞれ約6割ありますが、

「備えをする経済的余裕がない」が18.9%あるなど、十分な備えがあるとは言えない状況です。第8回調査との比較でいうと、「余裕がない」は2.1ポイント減少し、保険加入や貯蓄などの備えの回答も少しずつ増えていることから、5年前よりは万一に備えるゆとりが出てきたのか、あるいは老後への危機感が高まっていることの表れと推察されます。(問E-7)

仕事や生活に対する考え方

■ プライドを持ち、できる限り今の仕事を続けたい

芸能実演家全体でみると、仕事に対する考え方を問う質問では、「自分の仕事にプライドを持っている」「今の仕事をできる限り続けたい」は9割前後が肯定しており、8割弱が「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている‘本業’の仕事」であると考えています。

「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができている」に至っては、肯定的な回答の割合が6割強です。

その一方、仕事の量は十分とは考えていない人の割合の方が高く、「ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持ってい

る」では、6割弱が否定的な回答となっていて、将来に不安を覚えている状況です。

働く目的について問うたところ、「自分の才能や能力を発揮するために働く」と答えた者の割合が37.4%と最も高く、次いで「生きがいを見つけるために働く」が24.9%、「お金を得るために働く」が20.3%です。

同じ質問がなされている国民生活に関する世論調査（平成26年6月）の回答では、「お金を得るために働く」と答えた割合が51.0%、「生きがいを見つけるために働く」と答えた者の割合が21.3%、「社会の一員として、務めを果たすために働く」と答えた者の割合が14.7%、「自分

の才能や能力を発揮するために働く」と答えた者の割合が8.8%となっています。世間一般に比べて、実演家は自らの才能を活かすことや生きがい目的となっているという違いが明確に出ています。（問 D-1(b)）

地域別集計結果

■ 関東、近畿、沖縄の地域性

第9回調査では、居住都道府県の回答を得て、地域別集計が可能になりました。今回は、「関東地方」「近畿地方」「沖縄県」「その他の地方」の4地域に分けて分析しました。

沖縄県では、「邦楽」と「邦舞」がそれぞれ半数近くを占めていて、「近畿地方」では、日本古来の芸能である「邦楽」「伝統演劇」「演芸」に従事している人の割合が「関東地方」より高くなっています。

仕事の状況では、「メディア出演」が「関東地方」で他の地方より高くなっています。「その他の地方」では、「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆」や「企画・プロデュース・制作」「教える仕事」の割合が他地域より高くなっています。

「教える仕事」では、「沖縄県」では自ら教室を主宰する割合が高く、不定期の指導依頼は少ないです。「関東地方」と「近畿地方」の動向にあまり違いはありません。

収入については、「関東地方」より「近畿地方」「沖縄県」の方が低所得者層の割合が多くなっています。一方、個人負担となっている仕

事上の必要経費は、「関東地方」は高めで、「交通費」「通信費」「接待費・交際費」「身体ケア、ケガ・病気の予防」では「近畿地方」より10ポイント前後高くなっています。

仕事に対する考え方や目的意識について、「関東地方」「近畿地方」は、全国平均と傾向はほぼ変わりません。しかし「仕事の量は十分である」ということについて、「その他の地方」は肯定的に捉えている傾向が見られます。

「仕事上の問題点」では地域差が若干あります。

「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」は、「関東地方」では最も問題視されている項目ですが、「沖縄県」ではさほど多くの方が問題視しておらず、「問題があるとは感じていない」が最も回答が多く29.9%でした。

芸能実演家としての技術・技能を向上させるための必要条件についてみると、全国集計では「稽古、練習のための場所が確保、提供されること」「芸能や映画等の作品を発表、公開できる場の確保・充実」「研修

奨励金」が1位、2位、3位ですが、「関東地方」「近畿地方」「沖縄県」「その他の地方」で、いずれも1位、2位、3位の順位が異なります。

安心して活動できるための必要条件については、各地方とも、1,2,3位はほぼ同じで、「発表や公演、出演の機会が多くあること」「報酬や就労時間など仕事の条件がよくなること」「文化芸術に対する国や自治体の公的支援の充実」が高い割合となっています。4位以下をみると、「近畿地方」と「その他の地方」では、公共劇場等が文化拠点として機能することの必要性をあげる人の割合が高く、「沖縄県」では、研修への支援、練習場の確保、学校での芸能の教育の機会が十分に組み込まれることを要望する人の割合が他地域よりも高くなっています。

今回、地域別分析を部分的に試みてみましたが、このように地域ごとに若干異なる現状があることを踏まえ、きめ細やかな文化政策の策定とその実現が望まれます。

II. 調査設計・調査回答者について

■ 調査設計

	第9回
調査対象者	日本芸能実演家団体協議会の正会員団体を構成する個人
調査方法	郵送法（一部団体発送）
抽出方法	団体名簿による割当法*
調査期間	2014年8月1日（金）～8月31日（日）
発送数	6,941
総回収数**	1,615
有効回収数	1,603
有効回収率	23.1%
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

* 正会員団体を8つの分野に分類し、同一設問ではあるが用紙の色を8種用意し、分野ごとに色をわけて送付。

** 総回収数は白票など無効票を含めた回収数。

< 参考 > 調査設計

	第8回
調査対象者	日本芸能実演家団体協議会の正会員団体を構成する個人
調査方法	郵送法（一部団体発送）
抽出方法	団体名簿による割当法
調査期間	2009年7月10日（金）～8月8日（土）
発送数	5,860
総回収数	1,361
有効回収数	1,353
有効回収率	23.1%
調査協力機関	株式会社インテージ

■ 調査対象の抽出方法の一部変更について

第9回実態調査も、基本的にはこれまでの調査方法を踏まえ、無作為に抽出された実演家、スタッフを調査対象としていますが、抽出母体については一部変更を行っています。本調査は、原則として芸団協正会員団体を構成する実演家、スタッフを、所属団体ごとに「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇」「洋舞」「演芸」「その他」の8ジャンルの分野にわけ、それぞれ少なくとも

100人以上の回答が得られるように抽出数を割り出してきました。

これまで「現代演劇」部門では、芸団協正会員団体のうち現代演劇部門にかかわる協会にサンプル数を割り当てていましたが、今回は、一般社団法人映像実演権利者合同機構（PRE）に協力をあおぎ、正会員傘下の実演家だけでなく、映像実演にかかわる実演家として同機構に権利委任をしている実演家およそ4万

余名から無作為抽出するのを基本としました。ただし正会員傘下には、PREに委任をせず舞台だけで活動している劇団等もあるので、一部、劇団経由で送付し、舞台と映像の両方の分野を網羅する「現代演劇・メディア」部門として扱うことにしました。これにともない、前回は「その他」部門で調査対象となっていた日本モデルエージェンシー協会（芸団協加盟は2002年）は、PREに委

任しているモデルがほとんどであることから、「現代演劇・メディア」部門に含めました（一部、PREに委任していないモデルが多く所属するモデルエージェンシーには調査票を送付し、事務所経由で実演家に調査協力依頼をしています）。したがって、第8回調査では「その他」のカテゴリーにモデルが多く含まれていましたが、第9回の「その他」の部門には含まれていません。今回は、演出と劇団等の製作、オーケストラ、バレエ団の事務局を対象として設問票を送付しました。属性が異なるので、「その他」部門については第8回と第9回の単純比較はできないことにご留意ください。

上述のように「現代演劇・メディア」部門として変更を加えた理由は、芸団協では会員団体への所属の有無にかかわらず、実演家の著作隣接権にかかる徴収分配業務を行っているので、その範囲の実演家の実態把握を試みるべきではないかという観点からでした。また、音楽部門についても同様の考え方から、一般社団法人演奏家権利処理合同機構（MPN）を通じての抽出も検討しま

したが、MPNに委任している実演家より、洋楽部門の会員団体に所属している実演家の方が範囲が広いということで、従来どおり音楽分野については会員団体ごとに調査対象を抽出することとしました。

変更の理由は、もうひとつあります。

個人情報保護法（2005年施行）の浸透により、所属する実演家等の名簿を公表しない方針をとる団体が増え、個々の実演家への送付先情報を入手するのが困難になりつつあります。PREからの協力は、多くが実演家のご自宅ではなく所属事務所等を登録しているため、宛名の提供に理解が得やすかったことがあります。ただし、その反面、所属事務所の移動や引退等の変更が反映されていなかったり、所属事務所の芸団協の調査に対する認知が進んでいなかったと推察され、調査票の受取拒否の返送率が高くなっていました。結果として「現代演劇・メディア」ジャンルは、会員団体経由の追加発送を行い、従来どおりの回答数を得るに至りました。

他分野の協会等においても、送付

方法は変化しています。各役員会等で芸団協調査への協力を検討していただき、了承が得られ名簿提供いただいた団体もありますが、名簿の提供はできないけれども必要な通数の発送に協力するという形での発送が増えました。個人情報保護法施行以前は、全団体から名簿のご提供をいただき、名寄せをして重複を避けて抽出し一括送付作業をしていましたが、名寄せはできなくなりました。そのため設問票を2通受け取る方がいたかもしれません。発送作業は、団体ごとに異なる対応をしたため煩雑となり日数がかかりました。各団体の事務局のご協力がなければ、実演家、スタッフ合わせて8000通を超える調査票の送付は不可能でした。このような時代になっても40年にわたって継続され会員団体の皆様に認知されている調査として実施できたことに、歴史の積み重ねを感じました。本調査の意義をご理解くださり、手間を惜しまずご協力くださった多数の方々に、改めて御礼申し上げます。

■ ジャンル別回収率

	第9回			
	発送数	総回収数	有効回収数	有効回収率
TOTAL	6,941	1,615	1,603	23.1%
A 邦楽	885	251	245	27.7%
B 伝統演劇	710	225	224	31.5%
C 邦舞	1,050	143	142	13.5%
D 洋楽	800	249	249	31.1%
E 現代演劇・メディア	1,606	253	252	15.7%
F 洋舞	623	131	131	21.0%
G 演芸	645	165	163	25.3%
H その他（演出・制作等）	622	198	197	31.7%

* 「E 現代演劇・メディア」には、これまでの現代演劇部門の正会員団体傘下の実演家のほかに、加盟外の映像実演に関わる実演家が対象に含まれています。

* 「H その他（演出・制作等）」は、前回の「その他」での対象と異なるので、比較には注意を要します。

<参考>
第8回 ジャンル別回収率

	第8回			
	発送数	総回収数	有効回収数	有効回収率
TOATL	5,860	1,361	1,353	23.1%
A 邦楽	760	158	154	20.3%
B 伝統演劇	700	200	200	28.6%
C 邦舞	900	137	137	15.2%
D 洋楽	700	176	176	25.1%
E 現代演劇	800	206	205	25.6%
F 洋舞	700	144	144	20.6%
G 演芸	600	164	162	27.0%
H その他	700	176	175	25.0%

先に触れたように、「現代演劇・メディア」においては、初めてPREの名簿から抽出した実演家に送付したので、前回よりも有効回収率は低くなりました。しかし、追加発送の効果があり、前回を上回る有効回答数が得られています。今後は、PREに委任している実演家および所属事務所等に対する本調査の

認知度を高めたり、抽出対象についても過去一定期間に著作権隣接権の分配を受けた実績のある実演家に限るなどして、映像の分野で仕事をしている実演家からの回収率アップのための工夫が必要と思われます。

「邦舞」は、前回も唯一有効回収率が10%台と、8分野の中で最も低い率でしたが、今回はさらに1.6

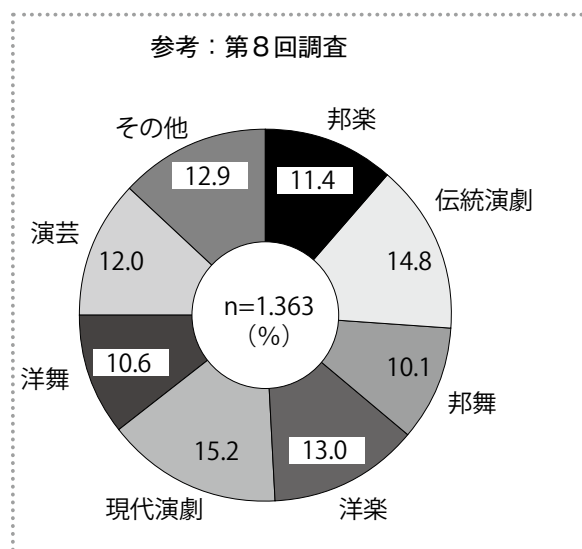
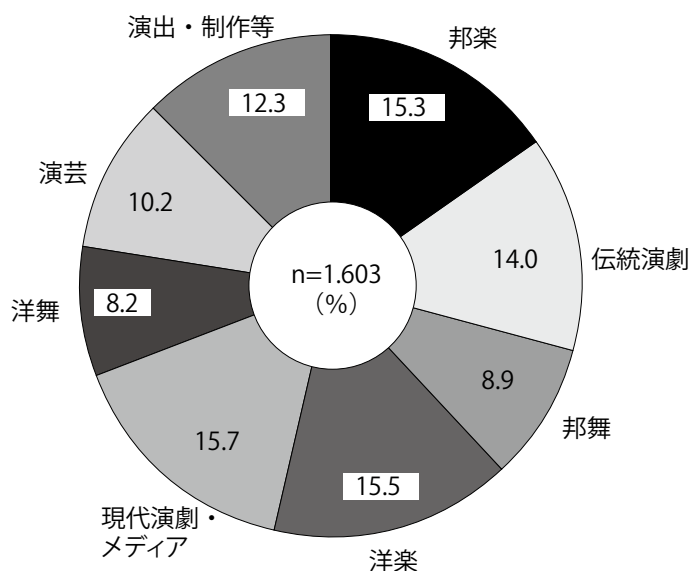
ポイント下がって、13.5%と最も低い有効回収率でした。

一方、伝統演劇は31.5%、邦楽が27.7%と高い回収率の分野もあり、結果として実演家全体では前回と同じく23.1%の有効回収率となっています。

■ 回答者のジャンル構成比について

8つのジャンルの回答者数がすべて100を超えるようにと抽出を行っており、割合がほぼ同じになるのが理想です。従来、「邦舞」「邦楽」「洋舞」は、回収率が低めなので発送数を調整するのですが、第9回では、「洋舞」(8.2%)、「邦舞」(8.9%)の割合が前回より低くなりました。「洋舞」は会員外への調査協力要請が間に合わなかったため、送付数を増やせませんでした。回収率は若干あがっています。「邦舞」は、日本舞踊協会会員以外にも沖縄地域の舞踊家の発送数を増やしましたが、回収率は伸びませんでした。今回は第8回との比較では「邦楽」で回収率が上がり、「現代演劇・メディア」(15.7%)と「洋楽」(15.5%)に次いで割合が高くなりました。

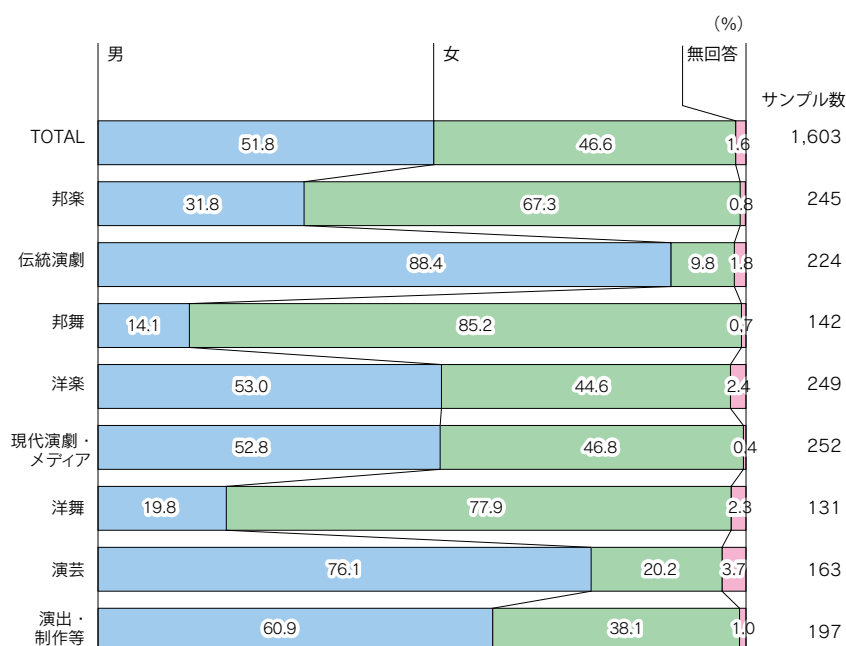
※調査票発送段階で、あらかじめ左図の8つのジャンルに分類しています(巻末参照)。そのためA-1(b)「たずさわっている分野のうち最も比重の大きいもの」(p.133)の回答と若干異なる場合があります。



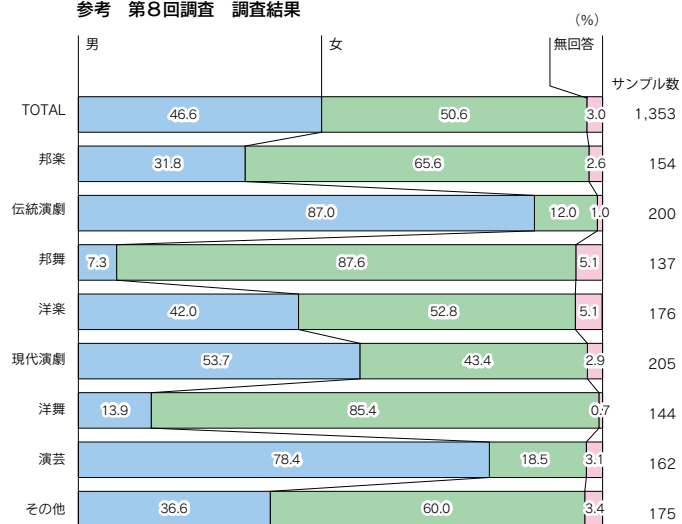
■ E-1 性別

男女の構成比は、男性が51.8%、女性が46.6%と、男性が若干上回っています。第8回調査では男性が46.4%、女性が50.6%で、女性のほうが若干割合が高かったのですが、第9回調査では男女比が逆転しています。これは、既述のとおり前回は、「その他」で日本モデルエージェンシー協会の傘下の実演家を調査対象としており、モデルには女性が多いため、結果的に女性が多く対象となっていたと考えられます。また今回は、前ページにあるように、女性が多い分野である「洋舞」「邦舞」の分野の実演家の占める割合が下がったことから、全体として女性の割合が下がったと考えられます。

問 E-1 性別



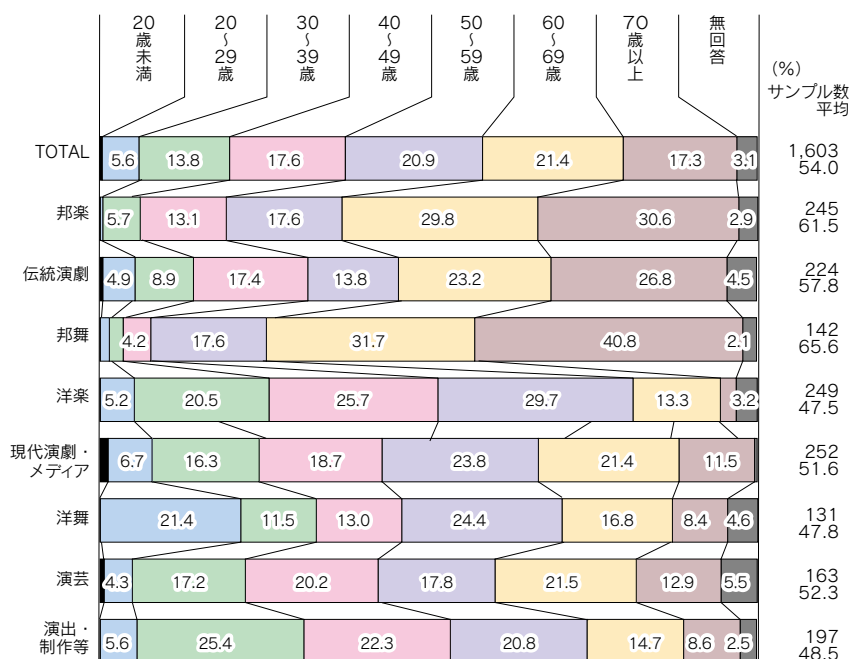
参考 第8回調査 調査結果



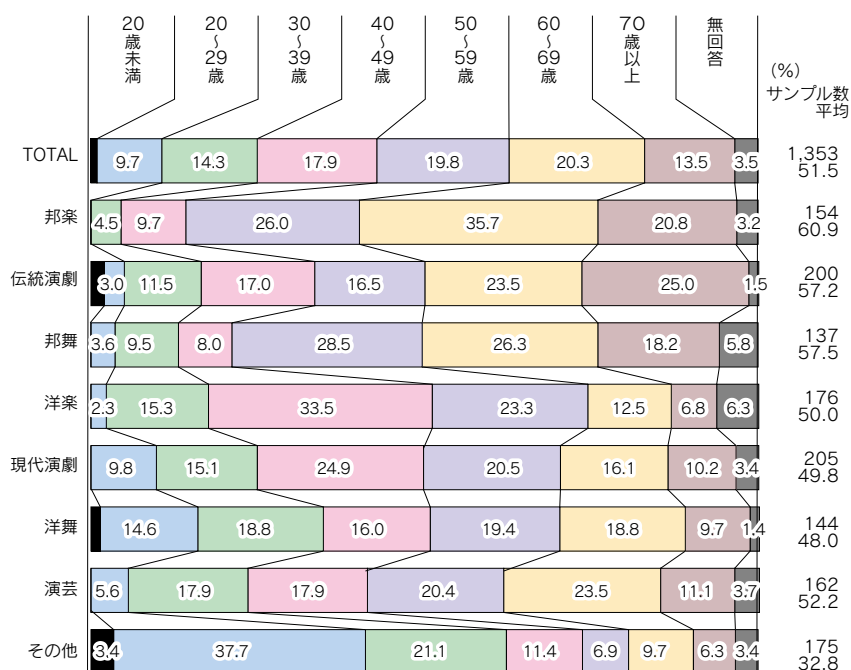
■ E-1 年齢

平均年齢は54.0歳、最も多い年齢層は「60～69歳」(21.4%)です。第8回調査に比べて回答者の平均年齢は2.5歳上がっており、特に「邦舞」で平均年齢が8.1あがっているのが目立ちます。第8回で年齢層が比較的若かったモデルを多く含んでいた「その他」と、今回の「その他(演出・制作等)」で対象が変化したことにより、年齢層を押し下げる要因がなくなったことも影響していると考えられます。

年齢層では第8回との比較すると「60～69歳」「70歳以上」の割合が、ともに高くなっています。



参考 第8回調査 調査結果

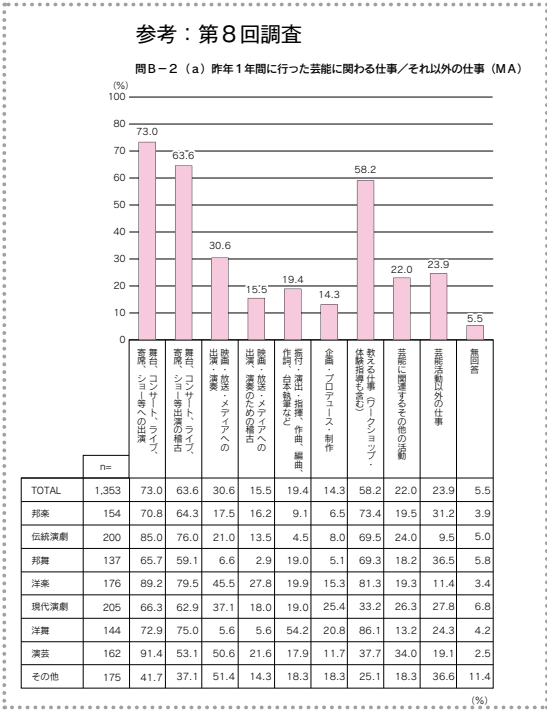
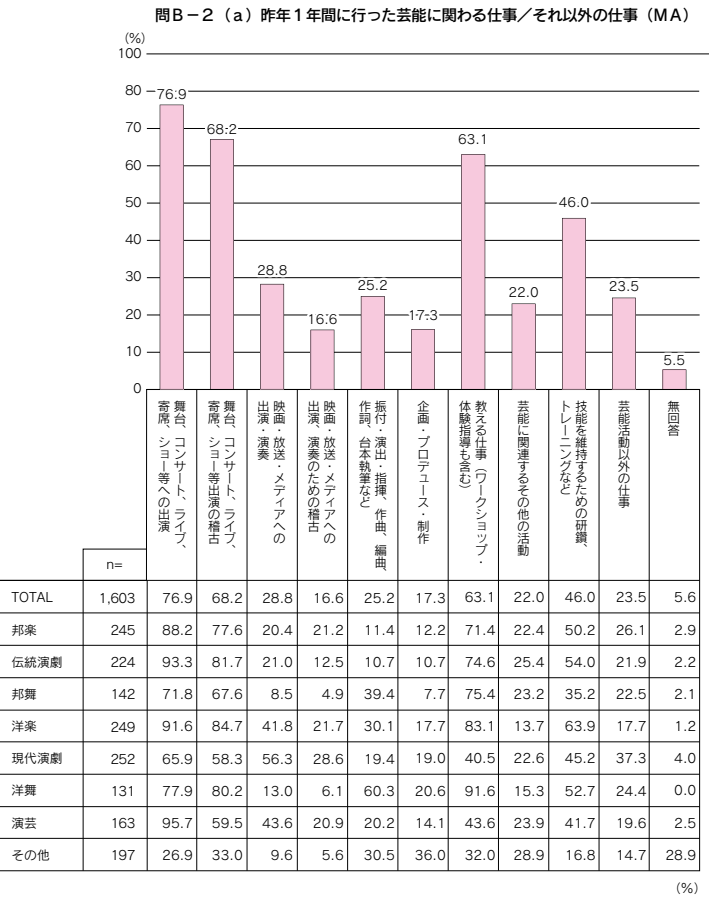


Ⅲ. 分析結果詳細

以下には、テーマごとに、各設問の回答集計結果を示していきます。「B-1」「C-2」というのは設問の記号です。(MA)と表示しているのは、複数回答を可とした設問です。なお設問票のサンプルと回答の集計は巻末(p.132～159頁)に示してあります。

(1) 経済状況・景況感について

B-2 (a) 昨年1年間に行った活動 (MA)



* グラフが間違っておりました。お詫びいたして、正しいものに差し替えさせていただきます。

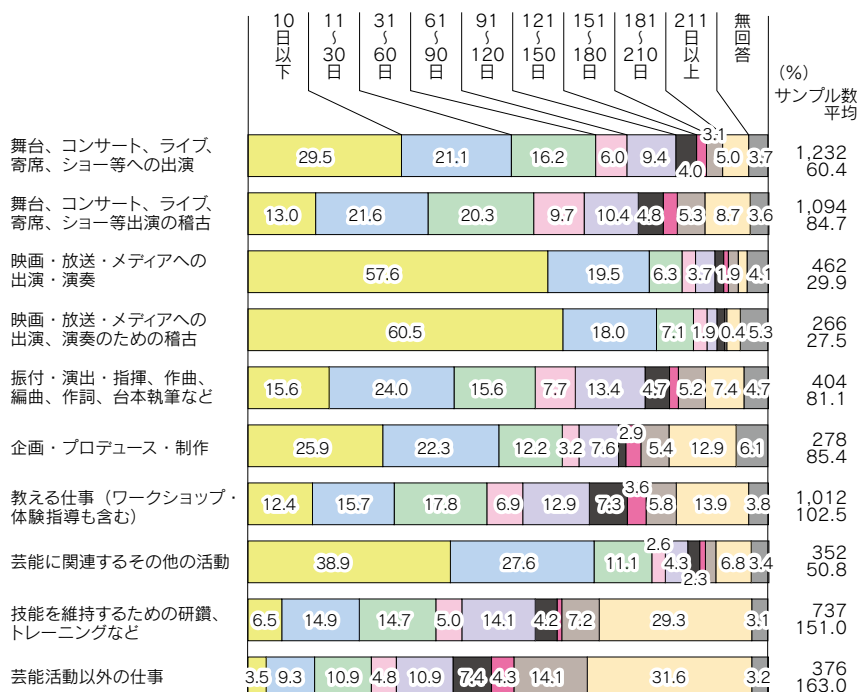
B-2 (b)

昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動にたずさわった人】

昨年1年間に費やした活動日数で、平均活動日数が最も多い活動は「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」で151.0日、最も少ない活動は「映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古」で27.5日です。一方、「芸能活動以外の仕事」は163.0日です。

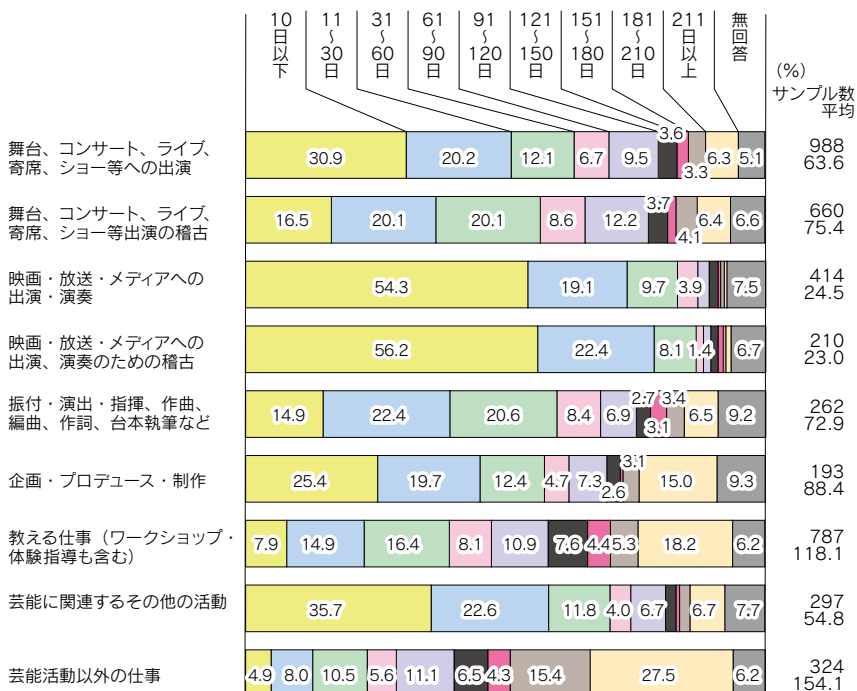
第8回調査と比べると、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古」「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」は平均活動日数が増え、逆に「教える仕事」は減っています。

問B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動に携わった人】



参考：第8回調査

問B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動に携わった人】

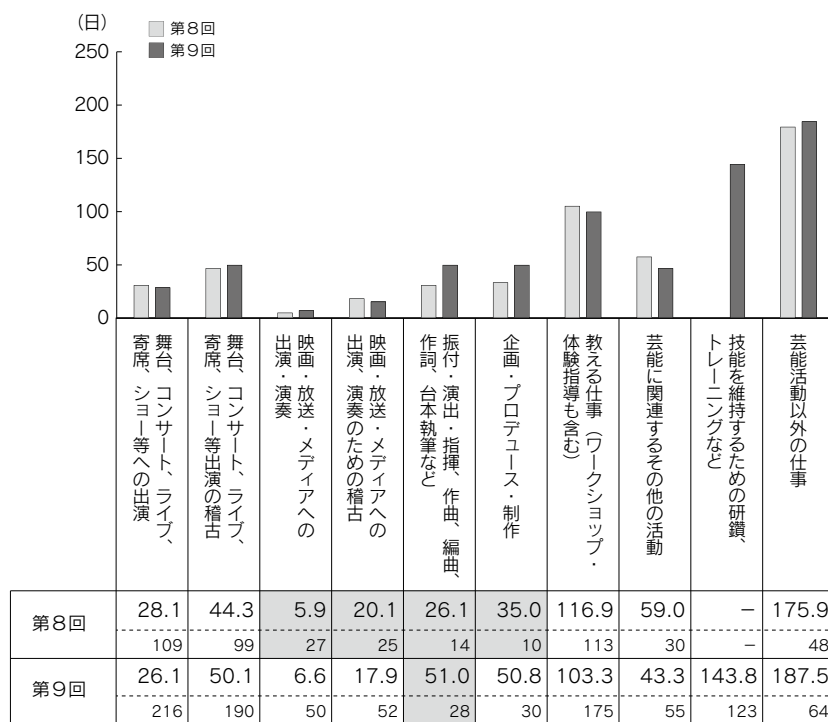


B-2 (b)

昨年1年間に費やした活動日数（ジャンル別）

【ベース：各活動にたずさわった人】

■ 邦楽

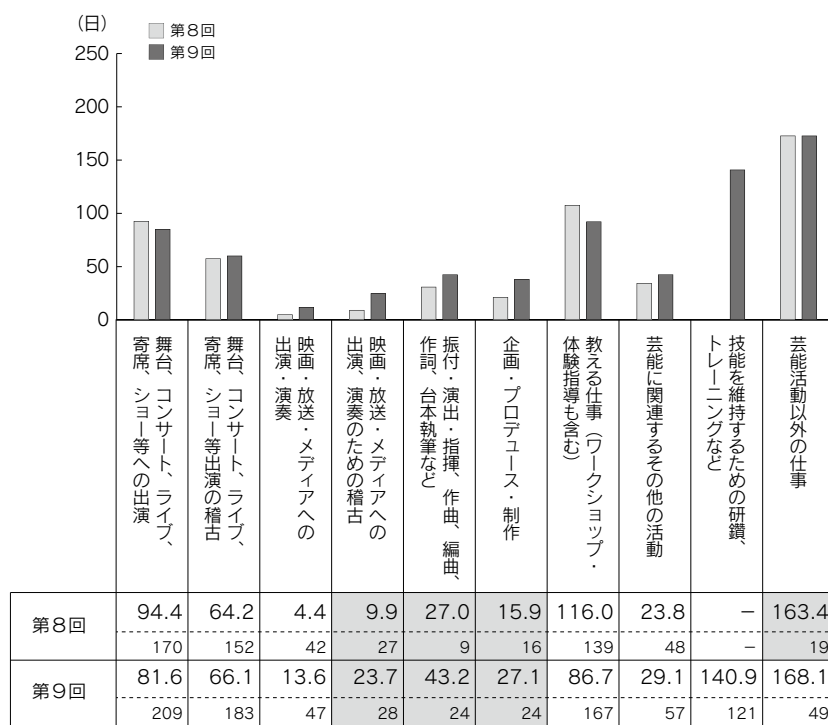


上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30s 未満で参考値扱いとする。

【邦楽】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多い活動は「芸能活動以外の仕事」（187.5日）です。第8回調査結果と比べると、「企画・プロデュース・制作」の活動日数が増え、「教える仕事」が減っています。

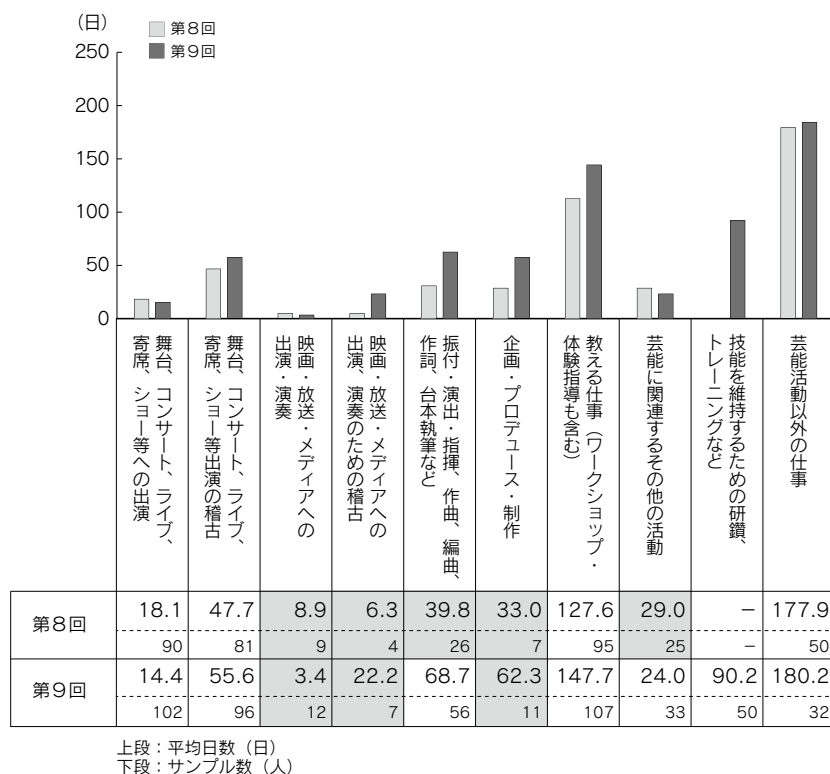
■ 伝統芸能



上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

【伝統演劇】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多い活動は「芸能活動以外の仕事」です（168.1日）。第8回調査結果と比べると、「伝統演劇」では、「映画・放送・メディアへの出演・演奏」が増えており、「舞台・コンサート、寄席・ショー、イベントなどへの出演」や「教える仕事」が減っています。

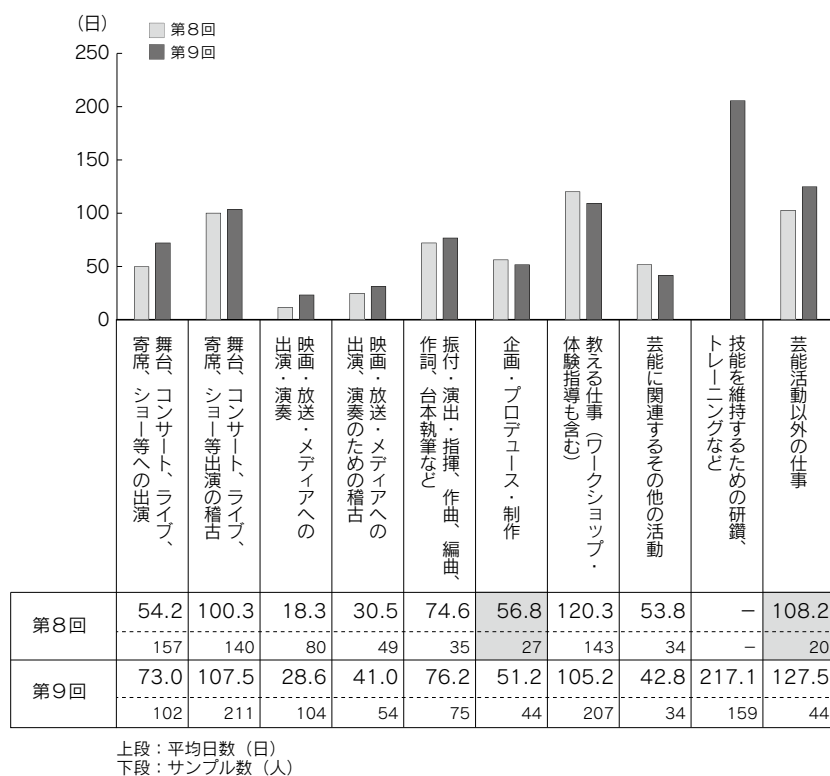
■ 邦舞



【邦舞】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは、「芸能活動以外の仕事」（180.2日）です。第8回調査結果と比べると、「邦舞」では、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古」「教える仕事」が増え、「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演」が減っています。

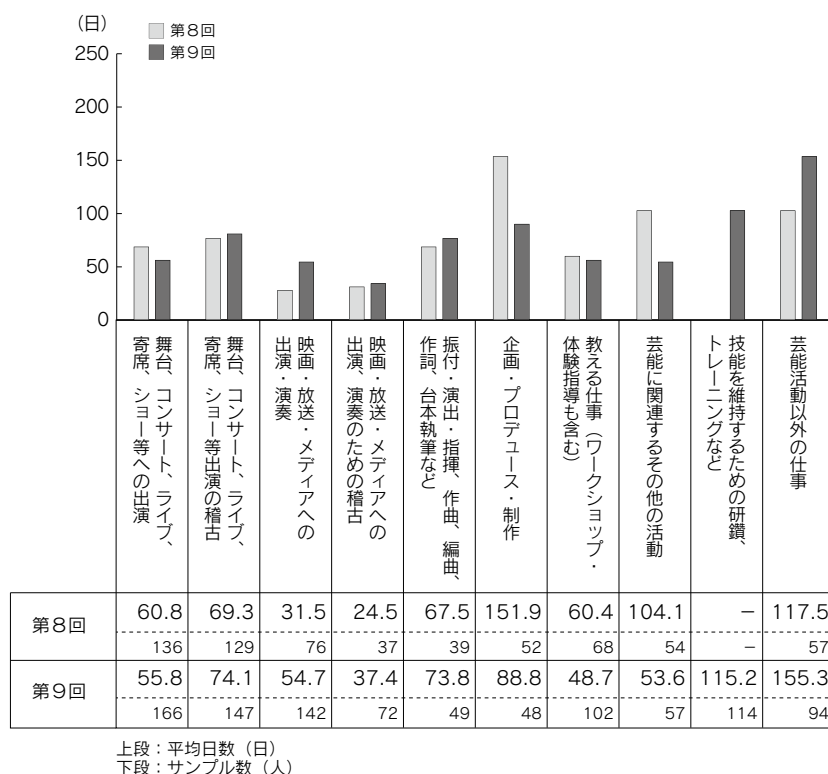
※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数30s未満で参考値扱いとする。

■ 洋楽



【洋楽】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」（217.1日）です。第8回調査結果と比べると「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」などが増え、「教える仕事」が減っています。

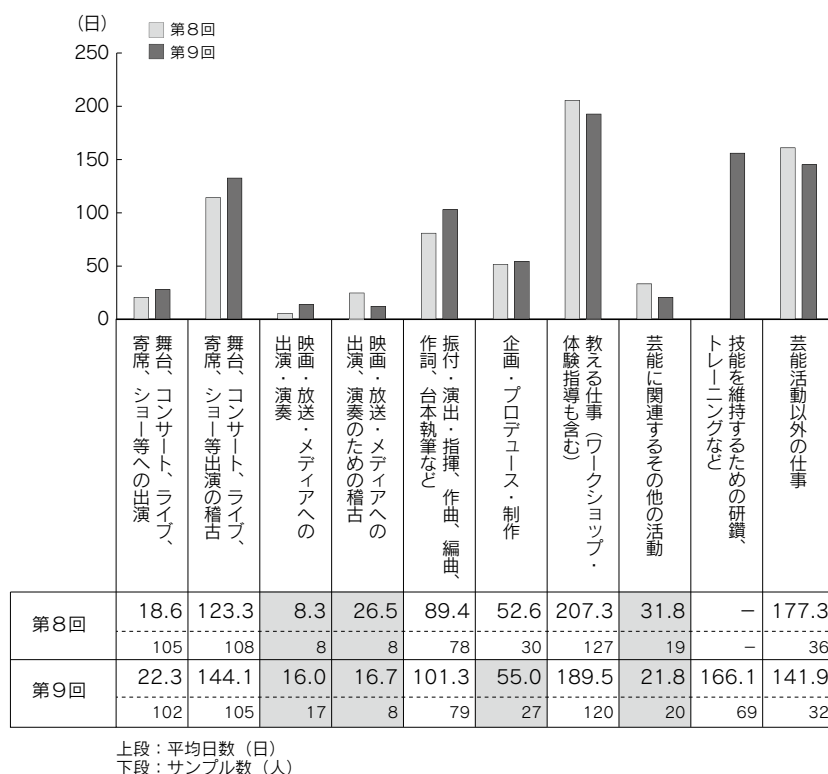
■ 現代演劇・メディア



【現代演劇・メディア】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは「芸能活動以外の仕事」（155.3日）です。第8回調査結果と比べると、「現代演劇」では「映画・放送・メディアへの出演、演奏」「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」が増え、「企画、プロデュース、制作」「教える仕事」で減っています。

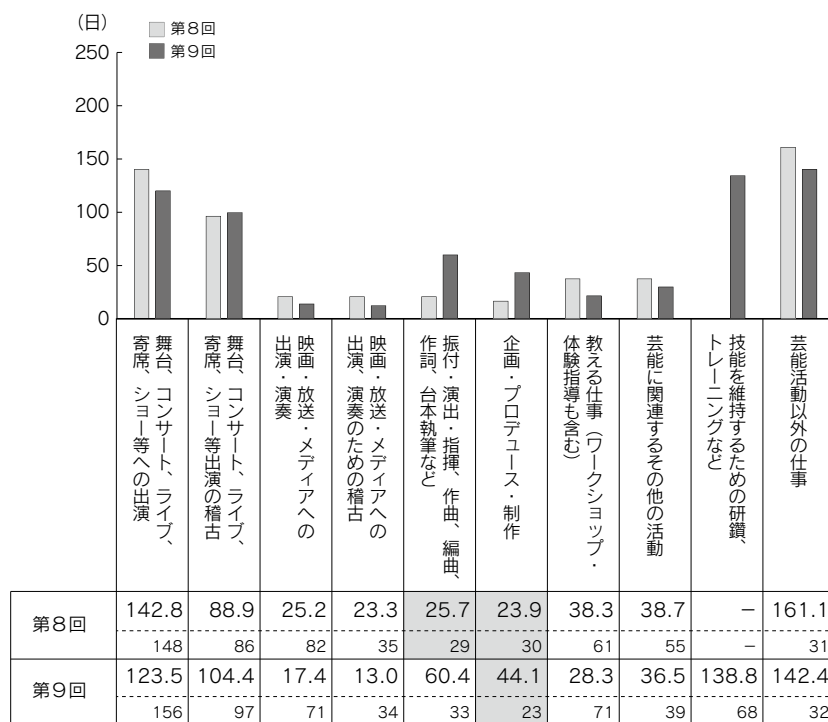
※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30s 未満で参考値扱いとする。

■ 洋舞



【洋舞】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは「教える仕事」（189.5日）です。第8回調査結果と比べると、「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演のための稽古」「振り付け、演出、指揮、作曲、編曲、作詞、台本書き」が増え、「教える仕事」で減っています。

■ 演芸

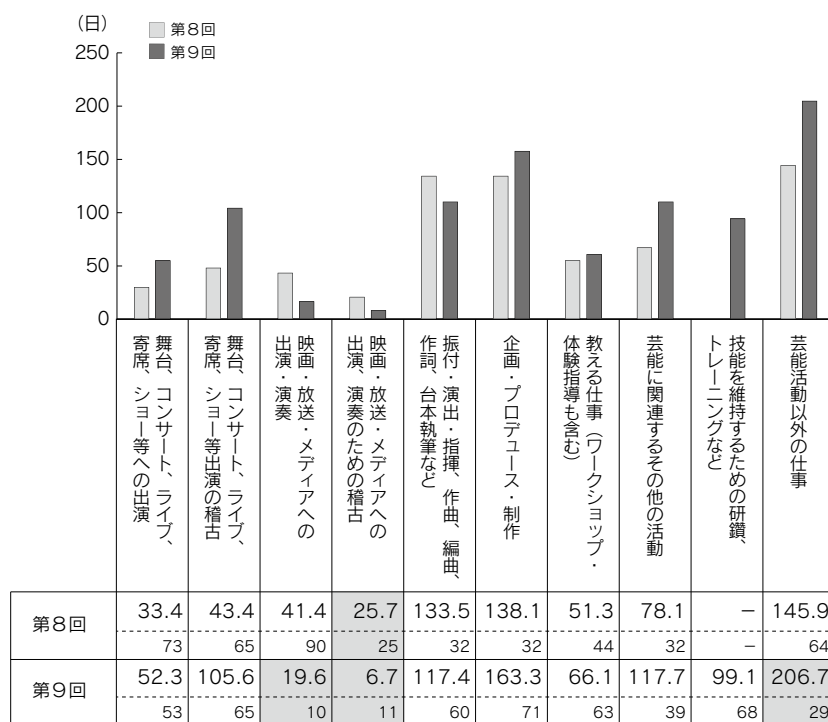


上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

【演芸】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは、「芸能活動以外の仕事」です（142.4日）。第8回調査結果と比べると、「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」「教える仕事」が減っています。

※ 数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30s 未満で参考値扱いとする。

■ その他※



上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

【その他】昨年1年間に費やした活動日数で、平均日数が最も多いものは、「芸能活動以外の仕事」です（206.7日）。

※第9回のこのカテゴリーは、「演出・制作等」の人々が主で第8回の対象とは異なるので比較は適切ではない。

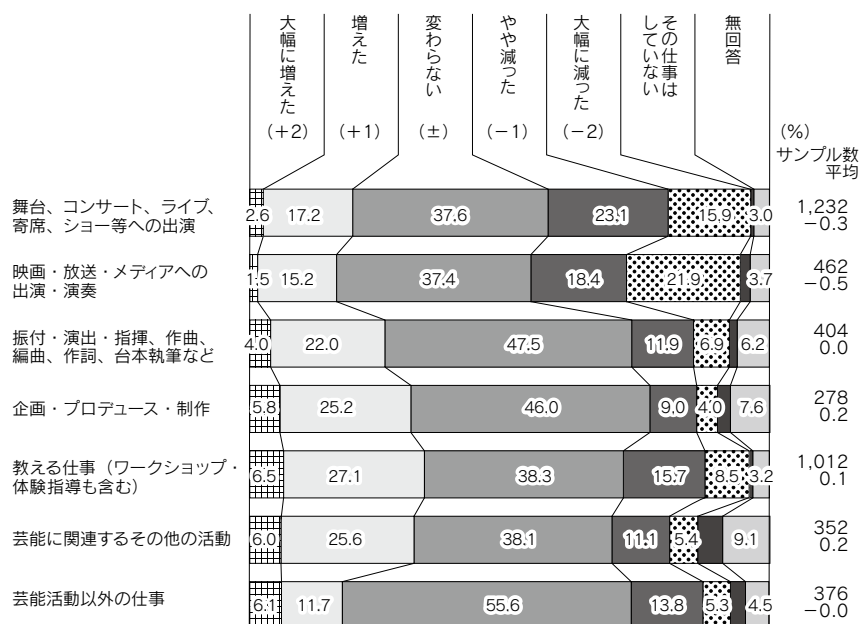
B-3

仕事の機会について2～3年前との比較

【ベース：各活動にたずさわった人】

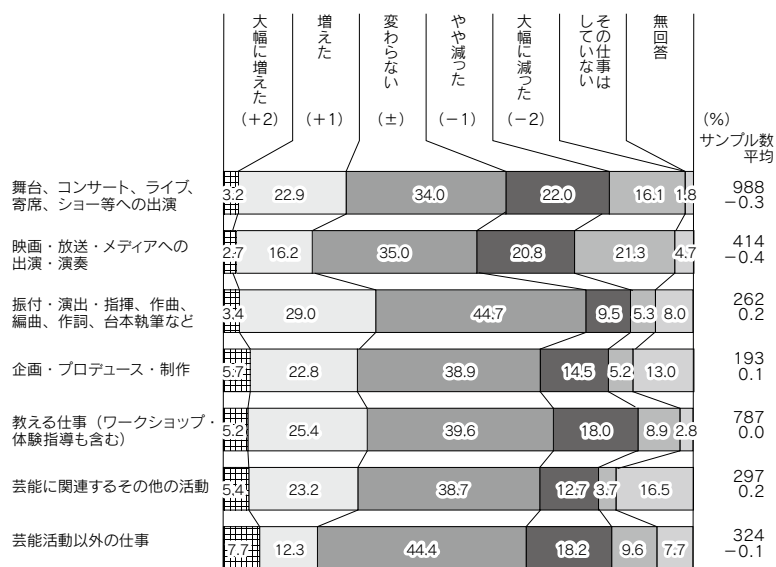
2～3年前と比べた昨年1年間の仕事の機会について、いずれの仕事でも「変わらない」と回答した人が最も割合が多くなっていますが、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」では「大幅に減った／やや減った」を合わせた割合が4割前後を占めています。「大幅に増えた／増えた」を合わせた割合が最も高いのは「教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）」（33.6%）です。

問B-3 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事を昨年1年間行った人】



< 参考 > 第8回調査 調査結果

問B-3 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事を昨年1年間行った人】



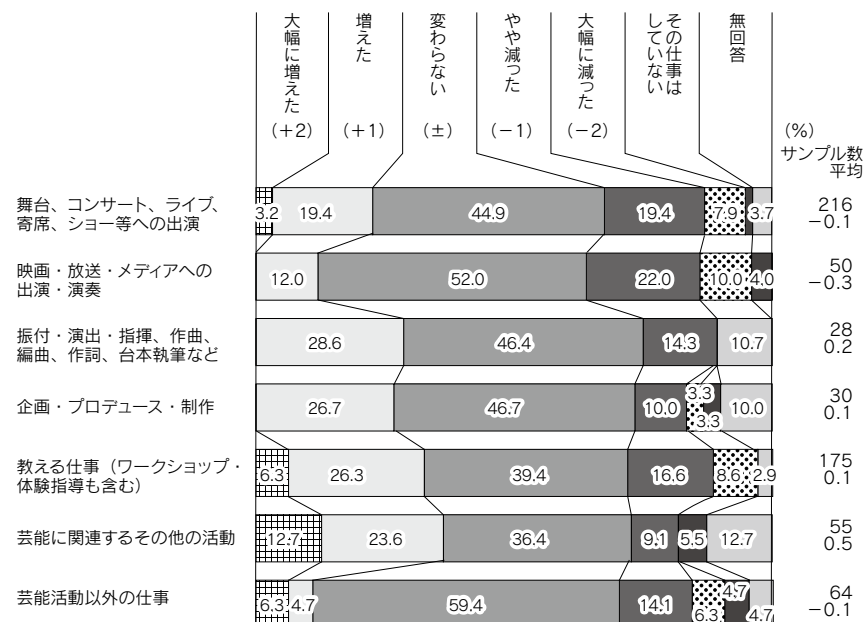
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

B-3

仕事の機会について2～3年前との比較(ジャンル別)

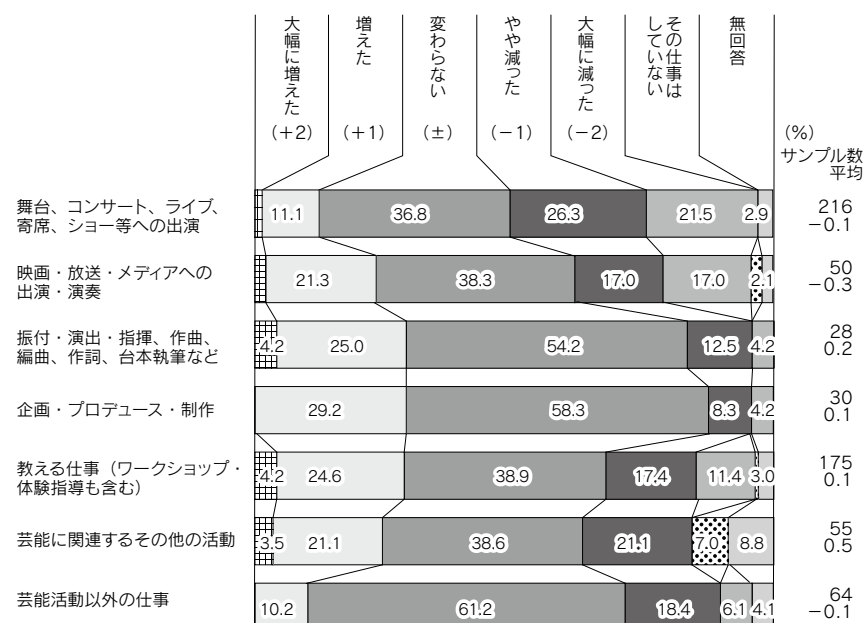
【ベース:各活動にたずさわった人】

■ 邦楽



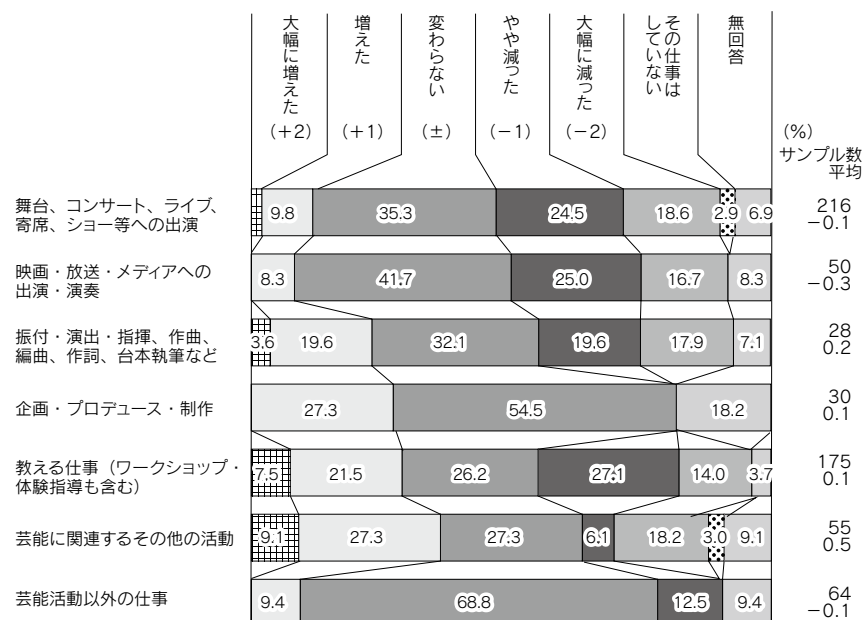
【邦楽】2～3年前と比べた昨年1年間の活動の機会をみると、「教える仕事」は、「大幅に増えた／増えた」を合わせると29.6%で、「やや減った／大幅に減った」の合計25.2%を上回っています。「舞台への出演」では、「大幅に増えた／増えた」が22.6%であるのに対し、「やや減った／大幅に減った」の合計は27.3%です。「芸能に関するその他の仕事」で「大幅に増えた」の割合が12.7%で高く、「増えた」と合わせると36.3%となっています。

■ 伝統演劇



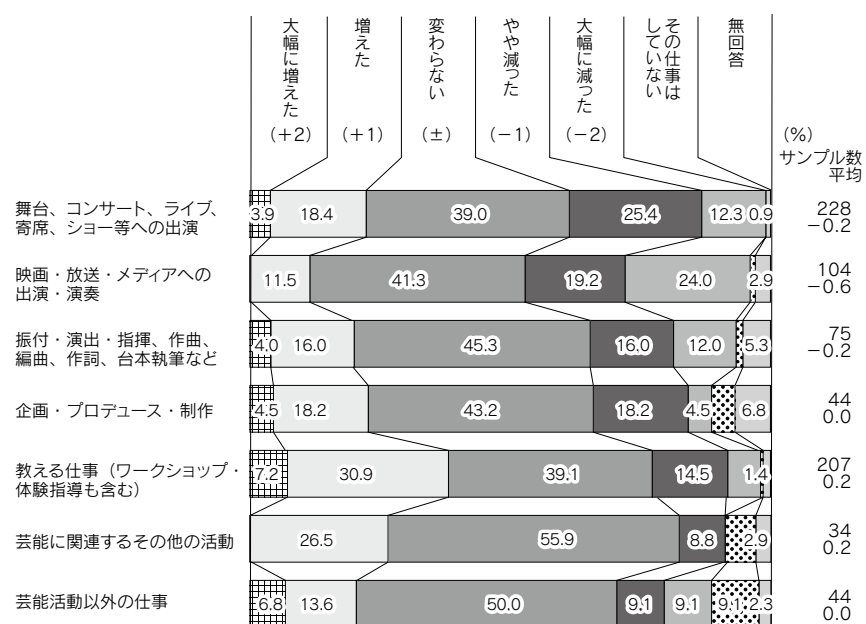
【伝統演劇】「舞台への出演」で「大幅に減った」の割合が21.5%と高く、「やや減った」と合わせると47.8%にのびります。「教える仕事」では、「減った」と感じている人の割合と「増えた」と感じている人の割合の合計は、いずれも28.8%です。

邦舞



【邦舞】「舞台への出演」は、「やや減った／大幅に減った」の合計は43.1%と、減少傾向を感じている人の割合が高いです。「教える仕事」で「大幅に増えた／増えた」が29.0%であるのに対し、「やや減った／大幅に減った」の合計が41.1%で、減ったと感じている人が多いです。

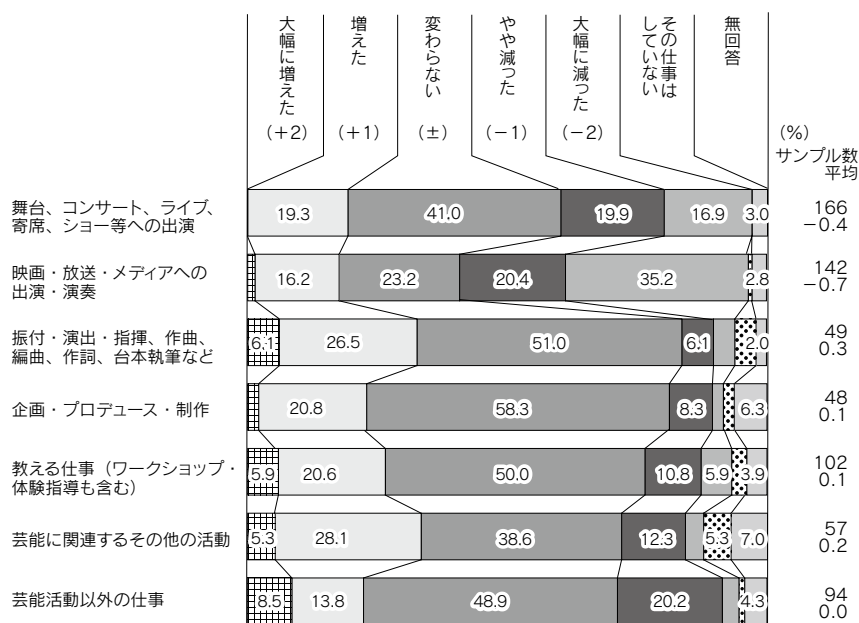
洋楽



【洋楽】「映画・放送・メディアへの出演・演奏」で「大幅に減った」の割合が24.0%で高く、「大幅に増えた／増えた」は11.5%と低い割合となっています。「舞台・コンサート、ライブ等への出演」では「やや減った／大幅に減った」の合計は37.7%で、「変わらない」(39.0%)の方が上回っています。「教える仕事」は、「大幅に増えた／増えた」の合計が38.1%です。

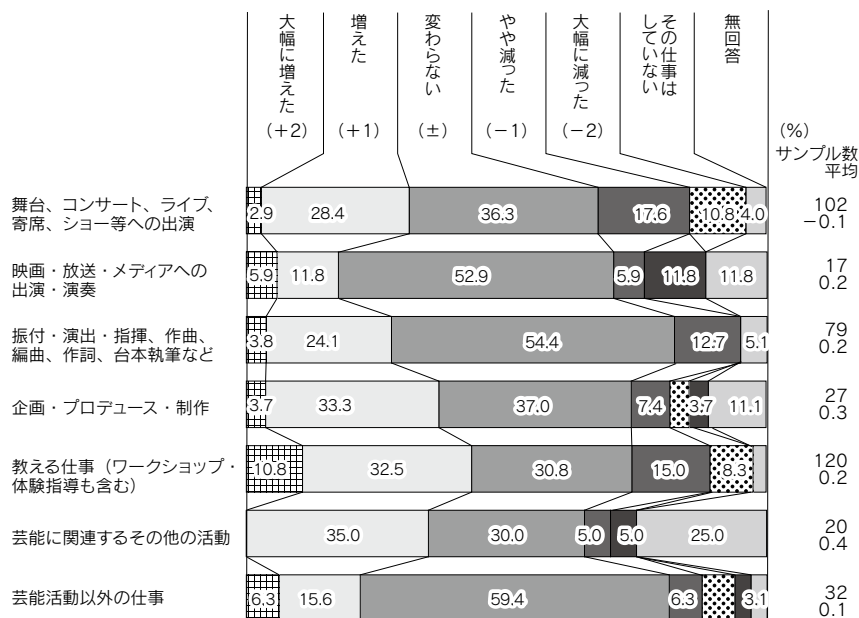
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 現代演劇・メディア



【現代演劇】「映画・放送・メディアへの出演、演奏」で「大幅に減った」が35.2%で他の仕事に比べて相当高い割合となっています。「舞台への出演」は「変わらない」が41.0%ですが、「やや減った／大幅に減った」の合計が36.8%で、「減った」と感じている人の方が増えたという人より多いです。

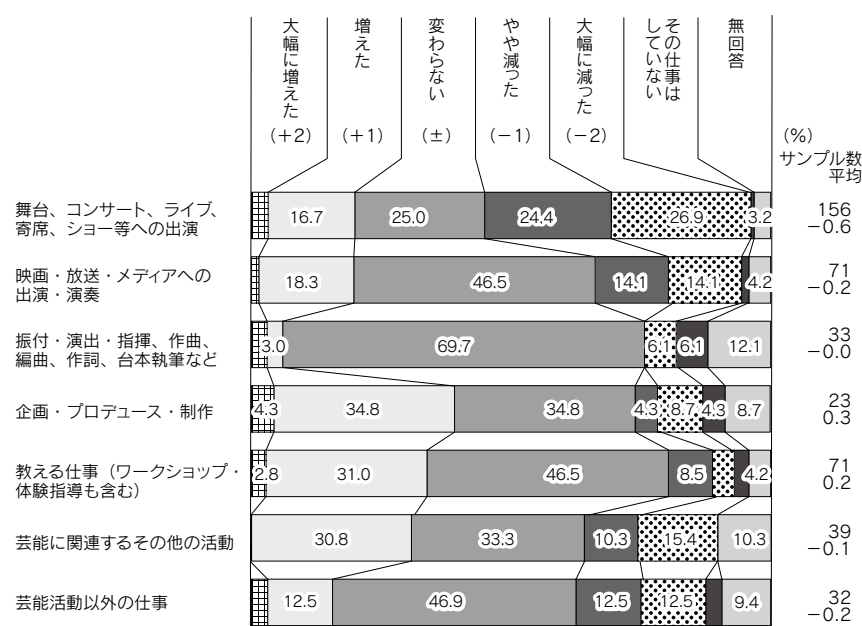
■ 洋舞



【洋舞】「舞台への出演」は「大幅に増えた／増えた」の合計が31.4%、「変わらない」が36.3%、「やや減った／大幅に減った」の合計が28.4%です。「教える仕事」は「増えた」が32.5%で「大幅に増えた」との合計は43.3%。「変わらない」の30.8%を上回っており増加感をもっている人の割合が高いです。「振付・演出など」と「芸能活動以外の仕事」で「変わらない」の割合がそれぞれ54.4%、59.4%で高くなっています。

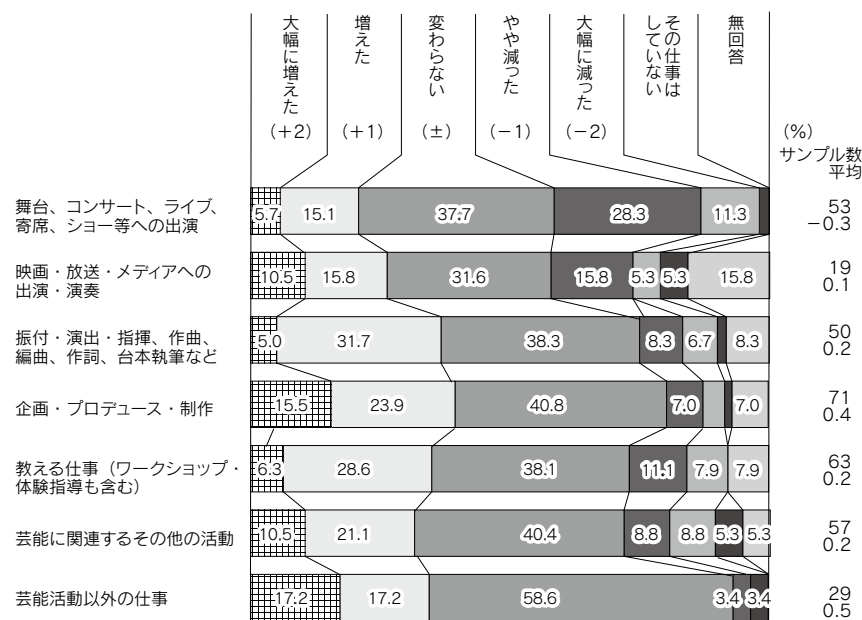
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 演芸



【演芸】「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」で「やや減った」(24.4%)と「大幅に減った」(26.9%)の割合が高く、両者を合わせると51.3%です。「教える仕事」では「変わらない」が46.5%ですが、次いで「増えた」の割合が31.0%となっています。

■ その他（演出・制作等）



【その他】「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」で「やや減った」が28.3%、「大幅に減った」が11.3%と、減ったと感じている人の割合が高くなっています。

※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

B-4

昨年1年間に行った芸能活動以外の仕事(MA)

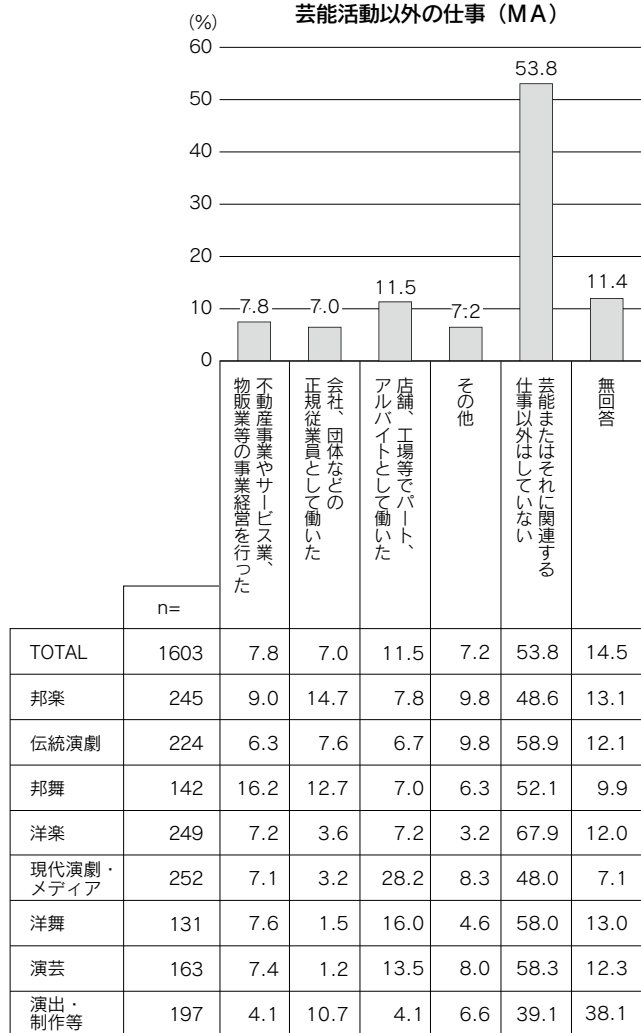
昨年1年間に行なった芸能以外の仕事を訊いたところ、「芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない」とする回答の割合が53.8%と過半数を超えています。無回答が14.5%ですので、残り31.7%の人は芸能活動以外の仕事をしたことになります。

ジャンル別でみると、その割合は「洋楽」が67.9%で特に高くなっています。

具体的な芸能活動以外の仕事では、「店舗、工場等でパート、アルバイトとして働いた」の割合が11.5%で、特に「現代演劇」で28.2%と高いのが目立ちます。

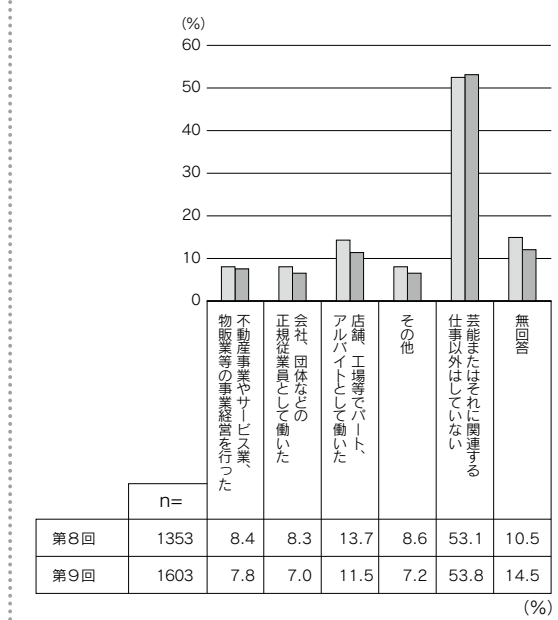
第8回調査結果と比較をすると、「芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない」の割合はほとんど変わっていません。

問B-4 昨年1年間に行った
芸能活動以外の仕事 (MA)



(%)

【参考】第8回 調査結果との比較
問B-7 (a) 昨年1年間の個人収入



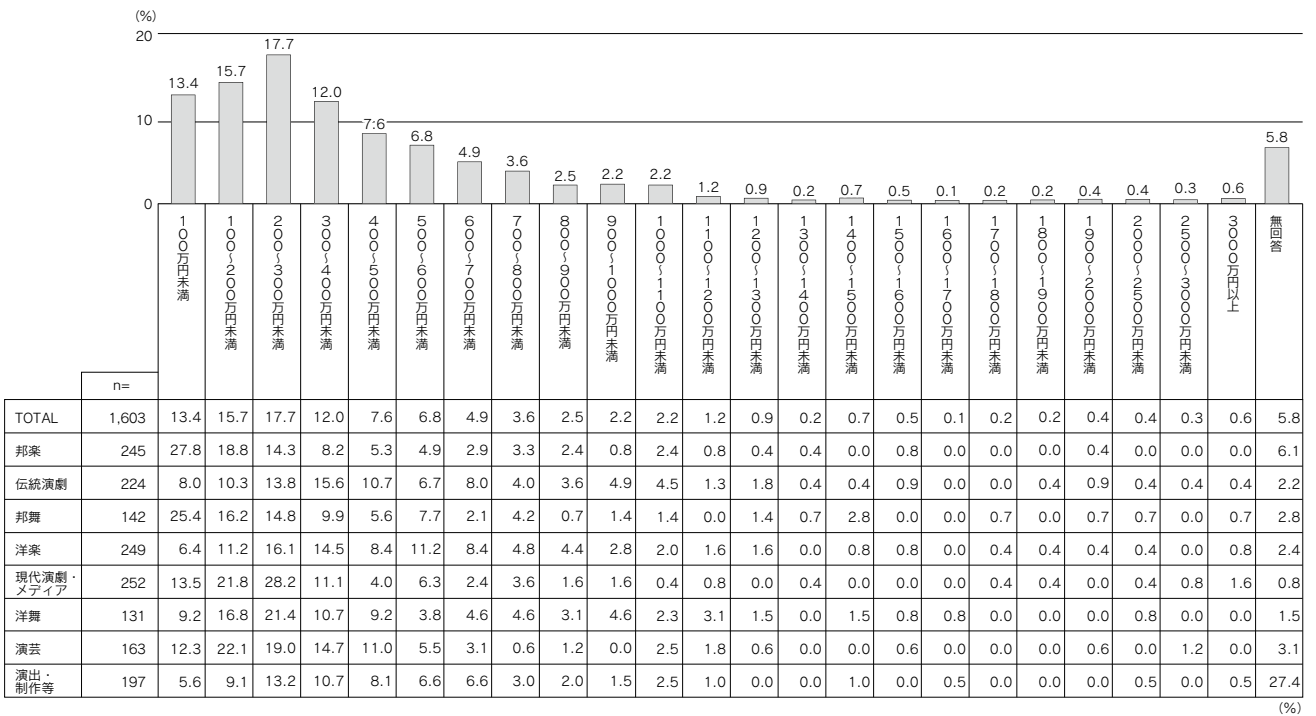
(%)

B-7 (a)
昨年1年間の個人収入(ジャンル別)

芸能実演家の昨年1年間の個人収入は、「300万円未満」までの所得層で全体の5割程度を占めています。特に「200～300万円未満」(17.7%)、「100～200万円未満」(15.7%)の割合が高くなっています。

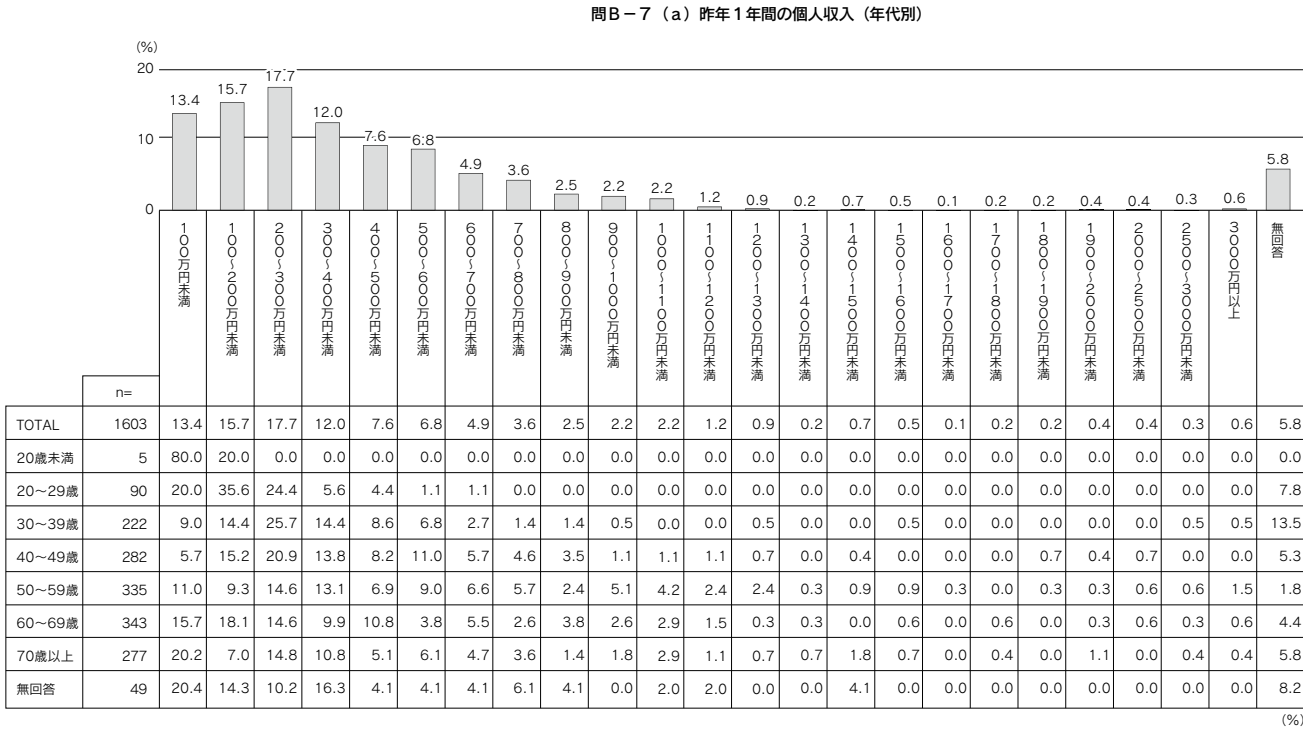
ジャンル別にみると、「100万円未満」の所得層では「邦楽」(27.8%)、「邦舞」(25.4%)の割合が高く、「100～200万円未満」の所得層では「演芸」(22.1%)、「現代演劇・メディア」(21.8%)が高いです。「200～300万円未満」でも「現代演劇・メディア」(28.2%)の割合が高くなっています。

問B-7 (a) 昨年1年間の個人収入 (ジャンル別)



B-7 (a) 昨年1年間の個人収入(年代別)

年代別にみると、20～29歳は「100～200万円未満」で、30～39歳は「200～300万円未満」で、40～49歳は「500～600万円未満」でそれぞれ、他の年齢層よりも割合が高くなっています。

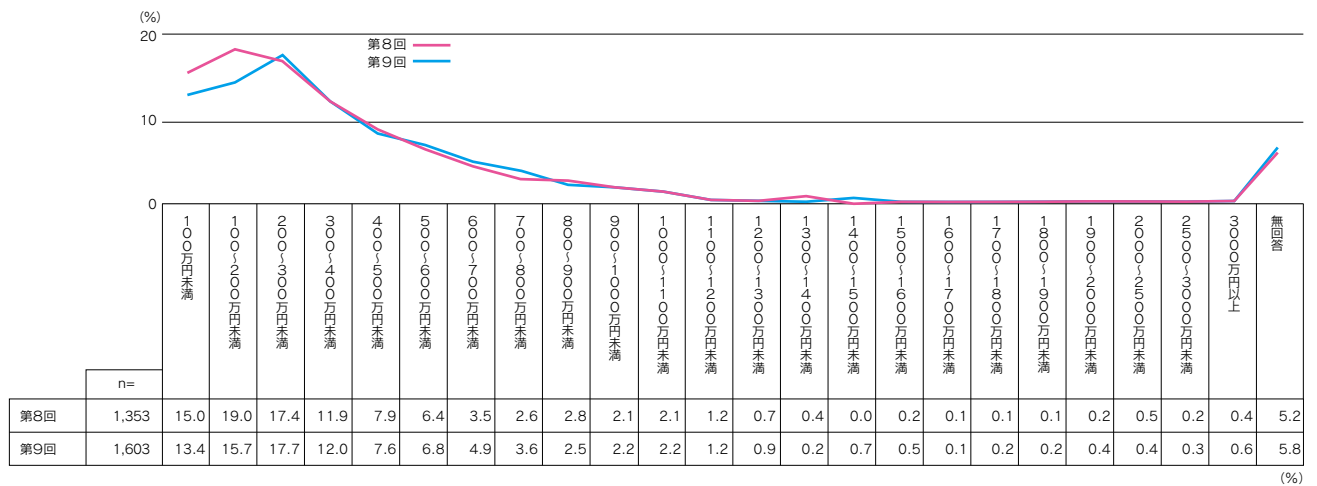


※ サンプル数 30s 未満の年代（20 歳未満）は参考値扱いとする。

B-7 (a) 昨年1年間の個人収入(第8回調査との比較)

「100万円未満」(第8回:15.0%、第9回:13.4%)、「100～200万円未満」(第8回:19.0%、第9回:15.7%)といった低所得層の割合が、第8回調査に比べて第9回調査で低くなっています。それよりも高い所得層では、第8回調査との割合の差はほとんど見られません。

問B-7 (a) 昨年1年間の個人収入 (年代別)



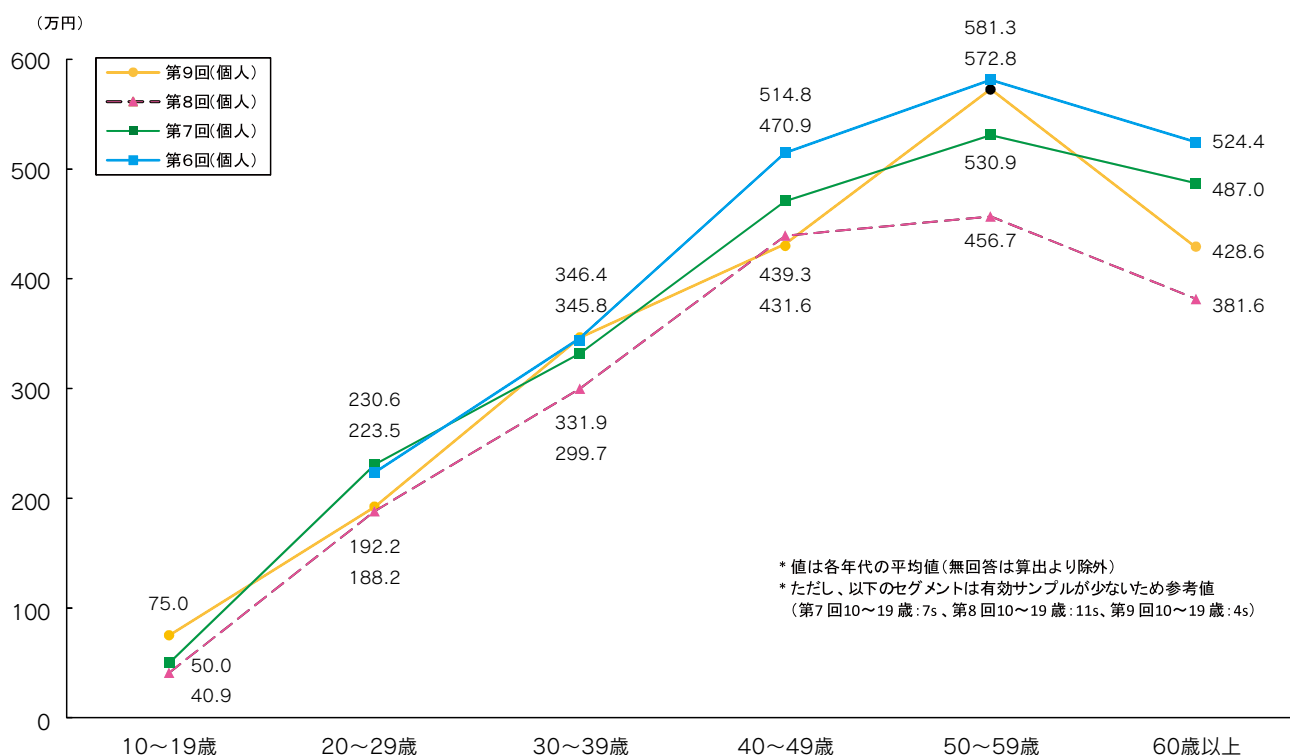
B-7 (a) 昨年1年間の個人収入

昨年1年間の個人収入を過去調査と比較すると、今回の第9回調査では「30～39歳」で、過去の平均収入を上回っていますが、「40～49歳」では逆に最も低くなっています。「50

～59歳」の平均収入がほかの年代の収入を上回るという傾向は過去3回の調査と同じですが、第9回の「50～59歳」の平均収入が4回の調査のうち第一位の第6回調査の値に近

いのに対し、「60～69歳」の平均収入の値の減少が大きく落ち込んでいるのが目立ちます。

〈参考〉過去調査との比較



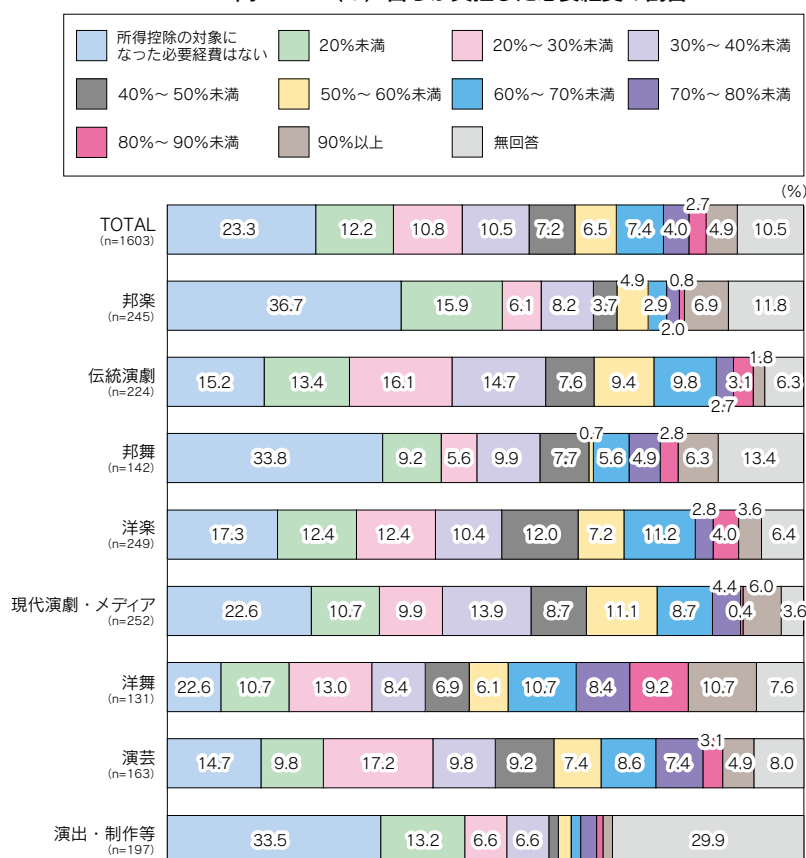
B-7 (b)

自らが負担した必要経費の割合

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費について、「給与所得だけで確定申告していないので、所得控除の対象になった必要経費はない」とする回答が23.3%を占めています。必要経費を負担している場合、総収入に占める割合は、「20%未満」が12.2%、「20%～30%未満」が10.8%、「30%～40%未満」が10.5%となっています。

ジャンル別にみると、「所得控除の対象となった必要経費はない」という回答が多かったのが「邦楽」(36.7%)、「邦舞」(33.8%)、「その他(演出・制作等)」(33.5%)のジャンルです。「洋舞」で「70%～80%未満」「80%～90%未満」「90%以上」の割合が他のジャンルに比べて高くなっています。

問B-7 (b) 自らが負担した必要経費の割合

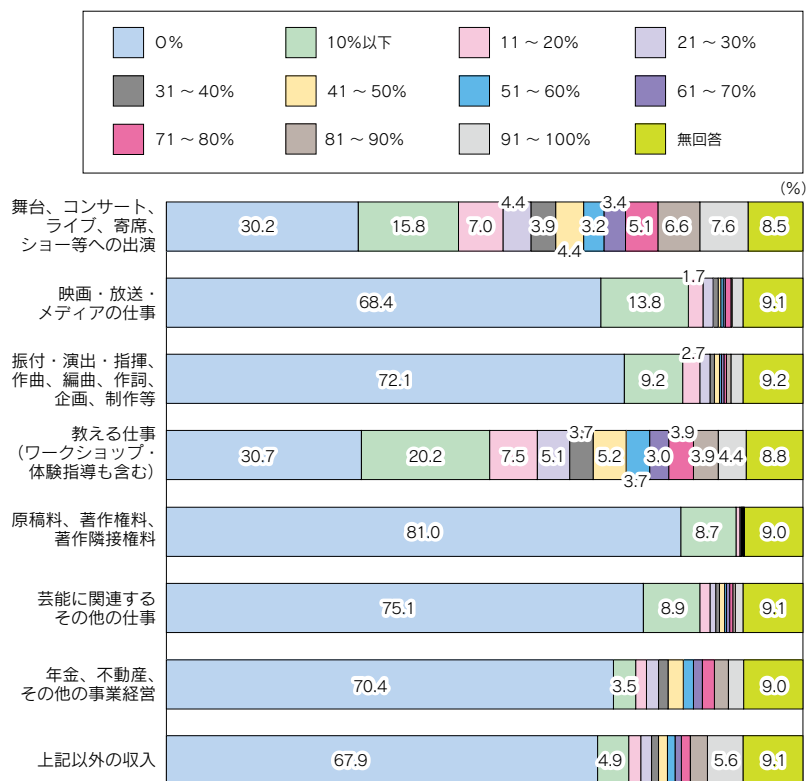


B-8

昨年1年間の活動別収入の割合

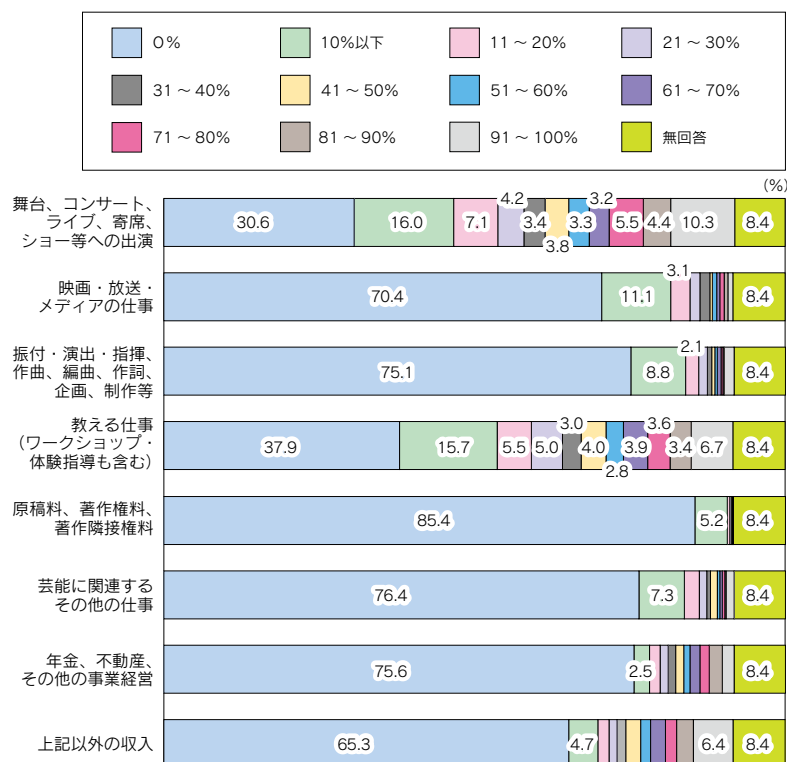
昨年1年間の活動別収入の割合の平均は、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」が31.6%で最も高く、次いで「教える仕事」が25.5%となっています。これらの割合は、第8回調査とほとんど変わっていません。

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合



【参考】第8回 調査結果

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合



B-8

昨年1年間の活動別収入の割合 (ジャンル別:邦楽／伝統演劇／邦舞／洋楽)

ジャンル別に昨年1年間の活動別収入の割合をみると、「教える仕事」の割合が高いのは「洋舞」(56.1%)、「邦舞」(50.1%)、「邦楽」(33.9%)です。

「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」の割合が高いジャンルは、「演芸」が67.4%と最も高く、次いで「洋楽」(48.7%)、「伝統演劇」(43.6%)、「現代演劇・メディア」(27.1%)です。「伝統演劇」「洋楽」は、「教える仕事」の割合も比較的多く、「洋楽」は29.9%、「伝統演劇」は24.0%を占めています。

「映画・放送・メディアの仕事」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で24.1%です。

「邦楽」では、「年金、不動産、その他の事業経営」からの収入が22.6%と、8ジャンルのうちで最も高い割合で、「邦舞」も21.2%と、他ジャンルより高い割合です。

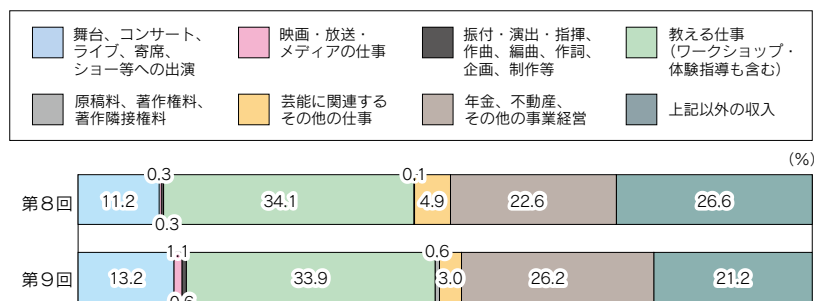
第8回調査と比較すると、「現代演劇」では、「映画・放送・メディアの仕事」の割合が13.0%から24.1%に増加し、「教える仕事」で低くなっています。これは調査対象の変更が影響していることが考えられます。

「洋舞」では「舞台等への出演」が14.3%から23.2%に増加しています。

「邦舞」で「教える仕事」の割合が41.3%から50.1%に上がっています。

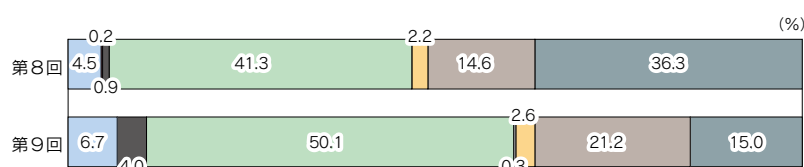
■ 邦楽 (第8回:n=154、第9回:n=245)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 邦楽



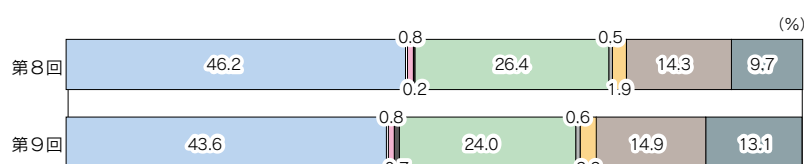
■ 邦舞 (第8回:n=137、第9回:n=142)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 邦舞



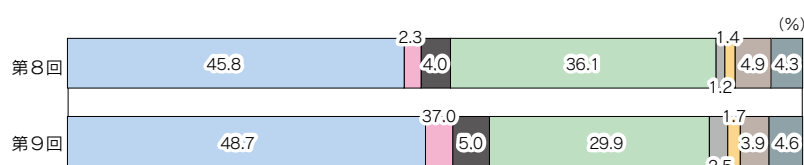
■ 伝統演劇 (第8回:n=200、第9回:n=224)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 伝統演劇



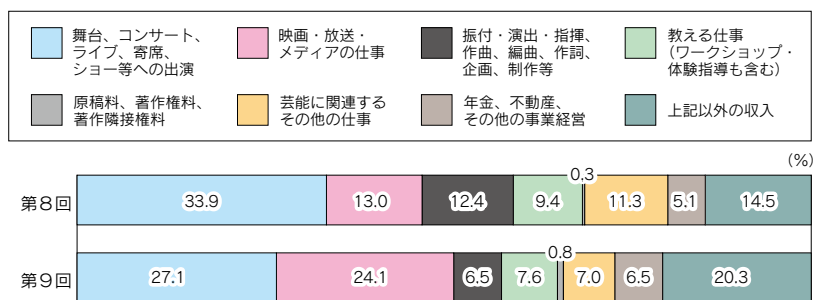
■ 洋楽 (第8回:n=176、第9回:n=249)

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 洋楽



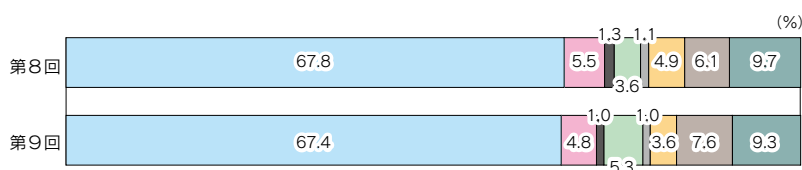
■ 現代演劇（第8回：n=205、第9回：n=252）

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 現代演劇



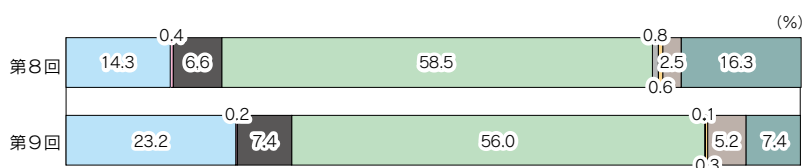
■ 演芸（第8回：n=162、第9回：n=163）

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 演芸



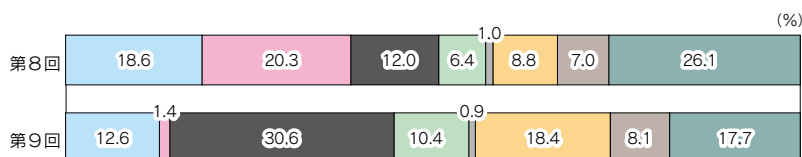
■ 洋舞（第8回：n=144、第9回：n=134）

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 洋舞



■ その他（第8回：n=175、第9回：n=197）※

問B-8 昨年1年間の活動別収入の割合 その他



※第8回と第9回のこのカテゴリー対象が異なるので比較は適切ではない。

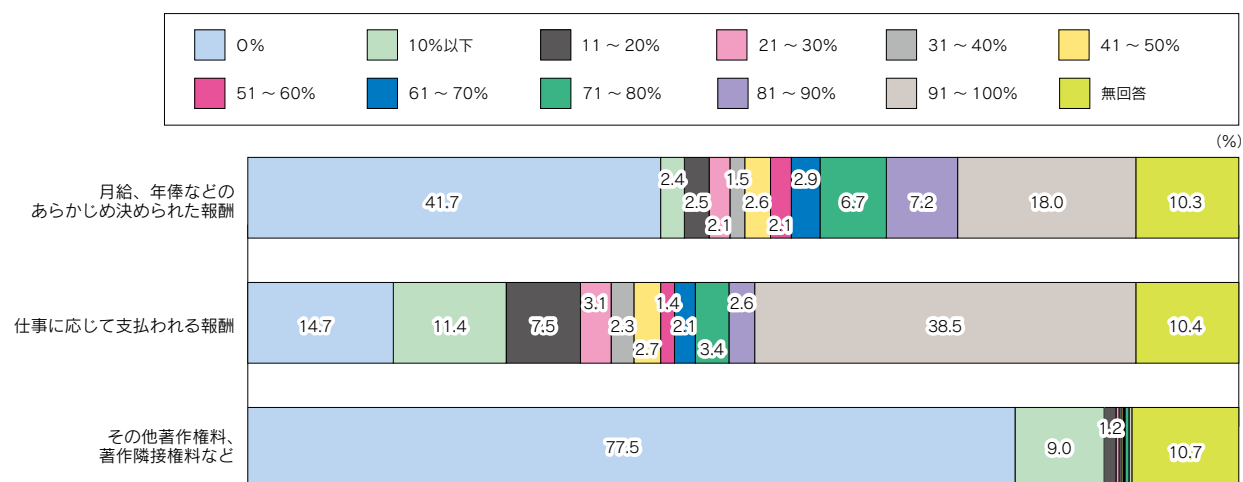
B-9

昨年1年間の収入形式

芸能実演家の昨年1年間の収入形式は、「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俸以外）」が最も高い割合となっており、平均で56.9%です。一方、「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」は40.1%で、月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬を得ていない人（「0%」の人）が41.7%を占めています。

報酬を「その他著作権料、著作隣接権料等」から得ている割合は少なく、そのような報酬を全く得ていない人が77.5%となっています。

問B-9 収入形式の割合 月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬



B-9

昨年1年間の収入形式(ジャンル別)

ジャンル別に昨年1年間の収入形式の割合をみると、「邦楽」「邦舞」「洋楽」は「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」と「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俵以外）」の割合がほぼ同率となっています。

「伝統演劇」「現代演劇」「洋舞」「演芸」は「月給、年俵などのあらかじめ決

め決められた報酬」に比べて「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俵以外）」の割合が高く、特に「演芸」では87.8%を占めています。

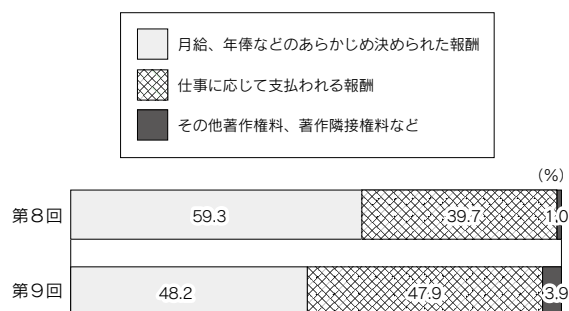
第8回調査と比較すると、「現代演劇」は「仕事に応じて支払われる報酬」が54.7%から69.6%に増えています。「洋舞」「邦楽」「邦舞」も、「月給、年俵などのあらかじめ決

められた報酬」の割合が低くなり、「仕事に応じて支払われる報酬」の割合が増加しています。

「洋楽」「伝統演劇」では逆に「月給、年俵などのあらかじめ決められた報酬」の割合の方が高くなっています。

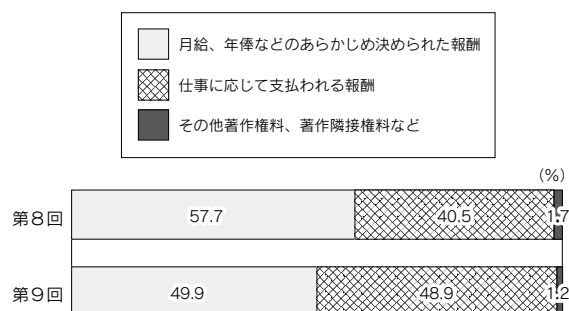
■ 邦楽（第8回：n=154、第9回：n=245）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）邦楽



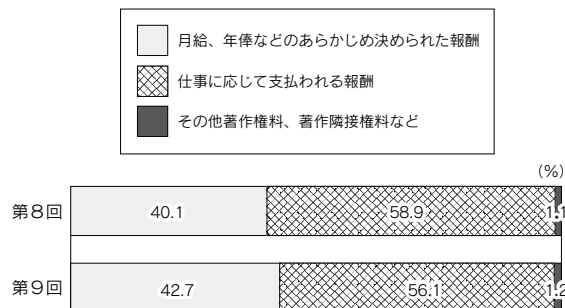
■ 邦舞（第8回：n=137、第9回：n=142）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）邦舞

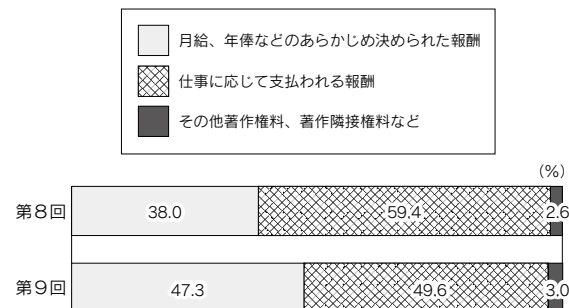


■ 伝統演劇（第8回：n=200、第9回：n=224） ■ 洋楽（第8回：n=176、第9回：n=249）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）伝統演劇

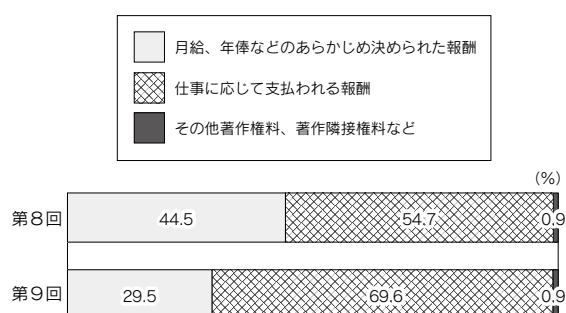


問B-9 収入形式の割合（平均値表）洋楽

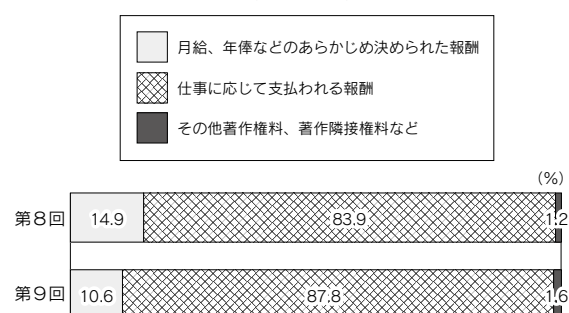


■ 現代演劇（第8回：n=205、第9回：n=252） ■ 演芸（第8回：n=162、第9回：n=163）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）現代演劇

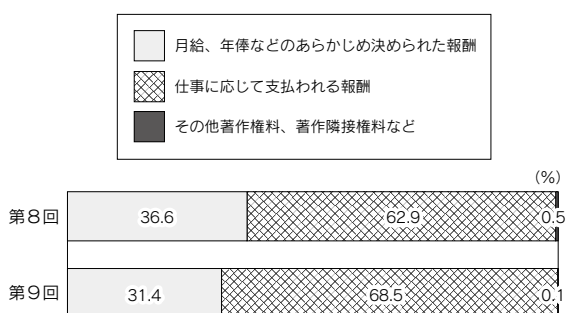


問B-9 収入形式の割合（平均値表）演芸



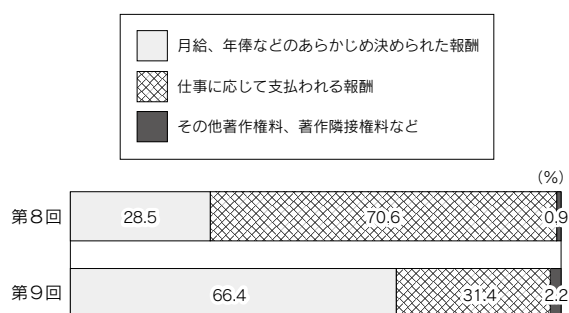
■ 洋舞（第8回：n=144、第9回：n=134）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）洋舞



■ その他（第8回：n=175、第9回：n=197）

問B-9 収入形式の割合（平均値表）その他



※第8回と第9回のこのカテゴリー対象が異なるので比較は適切ではない。

C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)

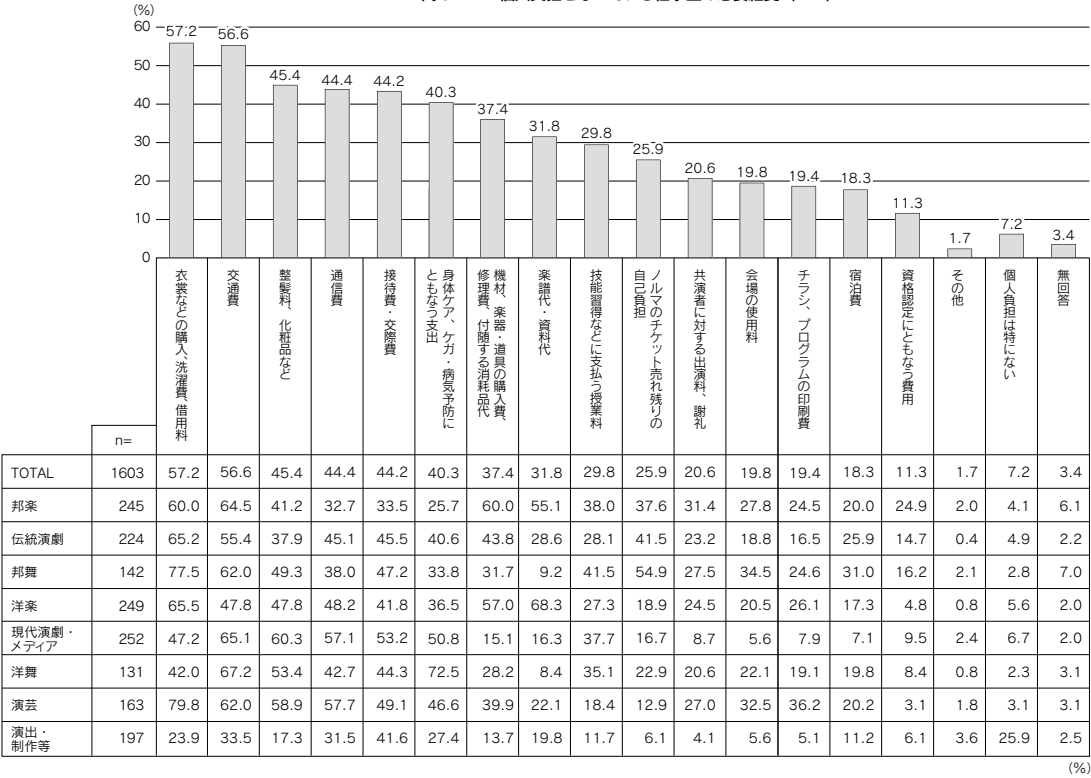
芸能実演家が仕事をするうえで個人負担となっている経費は、「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」が57.2%で最も高く、それに「交通費」(56.6%)、「整髪料、化粧品など」(45.4%)が続いています。

ジャンルによって、負担の大きい費用に特徴があります。「楽譜代・資料代」は「洋楽」が68.3%と最も高く、次いで「邦楽」も55.1%ですが、「邦楽」は「機材、楽器・道具

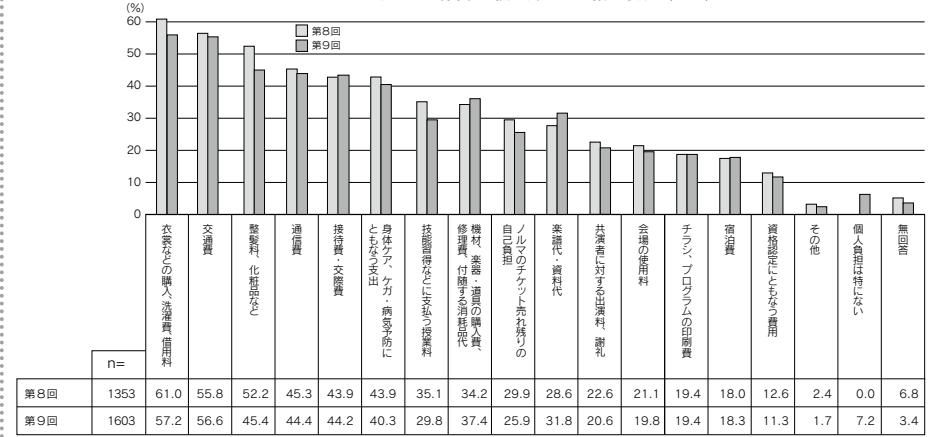
の購入費、修理費、付随する消耗品代」も60.0%と他のジャンルに比べて高い割合です。「身体ケア、けが、病気予防に伴う支出」が多いのは「洋舞」で72.5%と突出しており、次いで「現代演劇・メディア」の50.8%です。「ノルマのチケットの売れ残り自己負担」が多いのは「邦舞」(54.9%)で、「伝統演劇」(41.5%)、「邦楽」(37.6%)、「洋舞」(22.9%)と続きます。「共演者に対する出演料、

謝礼」で高いのは「邦楽」(31.4%)、「邦舞」(27.5%)、「演芸」(27.0%)です。「チラシ、プログラムの印刷費」で多いのが「演芸」(36.2%)で、「洋楽」「邦舞」「邦楽」も比較的高いです。一方、集団で創造する「現代演劇」では、「チラシ、プログラムの印刷費」「共演者に対する出演料、謝礼」などが他ジャンルより低くなっています。

問C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)



【参考】第8回 調査結果との比較
万一の場合や老後に対するの備え状況 (MA)



C-2

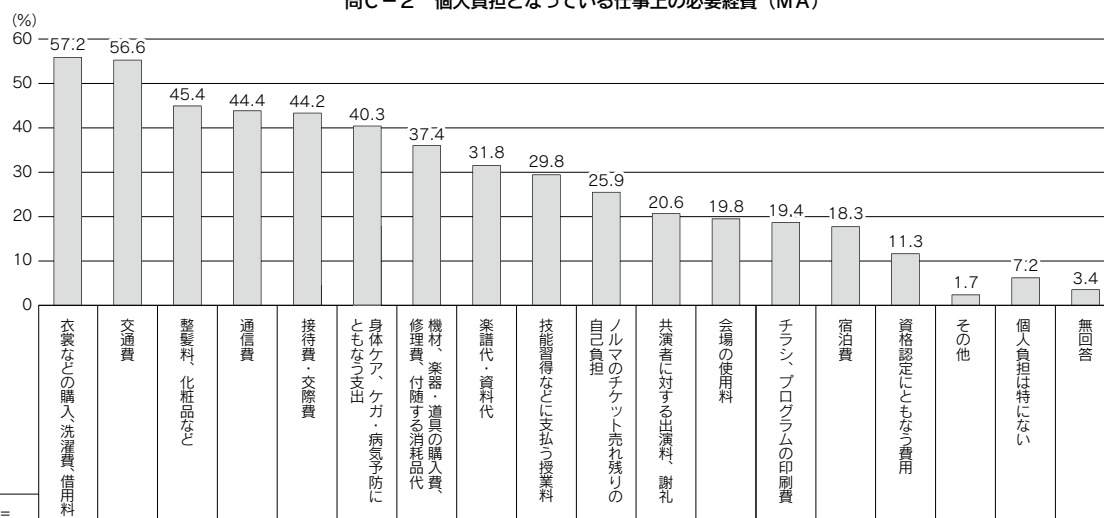
個人負担となっている仕事上の必要経費(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に、個人負担となっている仕事上の必要経費をみると、「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」は、「その他の舞踊」(88.9%)、「落語」(80.8%)、「ソロ(演奏)」(78.8%)などで高くなっています。「交通費」で高いのは、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」(91.9%)、「小劇場系演劇」(90.3%)です。同じ伝統演劇でも「能楽」と「歌舞伎」では

個人負担の費用の内訳がかなり異なっており、「歌舞伎」では「身体ケア・ケガ・病気予防にともなう支出」が80.6%、「整髪料、化粧品など」が83.9%と突出しています。「能楽」では「衣裳など」が66.3%、「ノルマのチケットの売れ残り」が49.4%と多い傾向にあります。

＊小ジャンル別の分析について
小ジャンル別の分析については、よりジャンル、分野ごとの特徴をみるため、問A-2(b)「あなた自身がたずさわっている活動分野のうち、最も比重の大きいものを選びください」という設問の回答結果を元に、30サンプル以上出現したジャンルのみ集計し分析を行っています。

問C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)



	n=	衣裳などの購入、洗濯費、借用料	交通費	整髪料、化粧品など	通信費	接待費・交際費	ともなう支出	身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出	機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代	楽譜代・資料代	技能習得などに支払う授業料	自己負担	ノルマのチケット売れ残りの	共演者に対する出演料、謝礼	会場の使用料	チラシ、プログラムの印刷費	宿泊費	資格認定にともなう費用	その他	個人負担は持たない	無回答
TOTAL	1603	57.2	56.6	45.4	44.4	44.2	40.3	37.4	31.8	29.8	25.9	20.6	19.8	19.4	18.3	11.3	1.7	7.2	3.4		
能楽	172	66.3	54.1	25.6	39.0	36.6	32.6	40.1	24.4	26.7	49.4	22.1	23.3	19.2	27.9	14.5	0.6	5.2	2.9		
歌舞伎	31	48.4	61.3	83.9	71.0	77.4	80.6	45.2	35.5	51.6	12.9	41.9	6.5	9.7	16.1	22.6	0.0	3.2	0.0		
現代演劇・新劇	113	31.9	63.7	49.6	49.6	53.1	40.7	10.6	17.7	31.0	22.1	4.4	2.7	2.7	8.8	1.8	0.9	9.7	3.5		
小劇場系演劇	31	48.4	90.3	45.2	71.0	64.5	48.4	25.8	29.0	25.8	25.8	25.8	35.5	29.0	29.0	3.2	6.5	0.0	0.0		
古曲	31	54.8	71.0	38.7	29.0	29.0	16.1	35.5	35.5	38.7	38.7	22.6	22.6	19.4	16.1	32.3	6.5	3.2	12.9		
三曲	94	64.9	62.8	48.9	33.0	35.1	29.8	68.1	70.2	45.7	45.7	39.4	36.2	33.0	21.3	25.5	1.1	2.1	5.3		
オーケストラ	173	44.5	29.5	29.5	33.5	39.3	26.6	43.4	49.7	19.1	5.2	8.7	6.4	6.4	11.0	3.5	2.3	19.7	1.2		
ソロ(演奏)	33	78.8	66.7	48.5	63.6	42.4	42.4	39.4	87.9	48.5	45.5	36.4	48.5	57.6	21.2	12.1	0.0	0.0	0.0		
日本舞踊	110	73.6	63.6	48.2	42.7	47.3	39.1	30.9	10.9	44.5	50.0	28.2	37.3	30.9	34.5	10.9	2.7	2.7	8.2		
バレエ	92	31.5	65.2	51.1	39.1	41.3	70.7	27.2	5.4	28.3	14.1	14.1	17.4	10.9	16.3	10.9	1.1	1.1	3.3		
その他の舞踊	36	88.9	63.9	55.6	27.8	44.4	25.0	41.7	5.6	36.1	69.4	27.8	30.6	13.9	22.2	30.6	0.0	2.8	2.8		
落語	78	80.8	65.4	55.1	64.1	52.6	56.4	35.9	23.1	21.8	9.0	42.3	48.7	51.3	23.1	1.3	1.3	3.8	1.3		
放送(テレビ、ラジオ)・スタジオ録音・スタジオ録画	45	57.8	68.9	51.1	64.4	46.7	46.7	28.9	20.0	31.1	11.1	6.7	4.4	6.7	20.0	11.1	2.2	4.4	0.0		
外画・アニメ吹き替え、ナレーション	37	70.3	91.9	67.6	67.6	75.7	64.9	21.6	35.1	45.9	10.8	13.5	8.1	10.8	5.4	13.5	0.0	2.7	2.7		
その他・無回答	527	56.7	51.8	47.6	43.3	42.1	38.9	39.8	33.4	25.0	19.9	19.0	15.6	19.0	15.2	11.0	2.1	8.7	3.6		

(%)

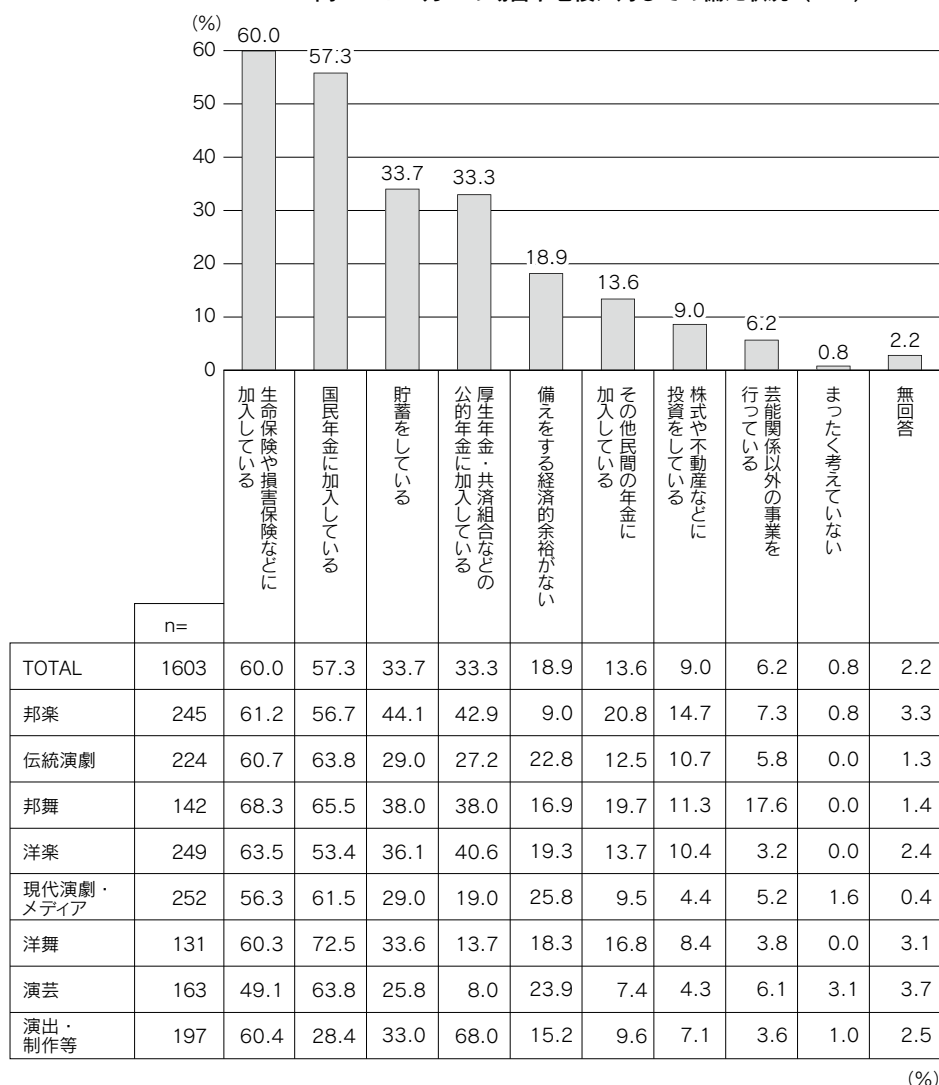
E-7

万一の場合や老後に対しての備え(MA)

万一の場合や老後に対しての備えとして、「生命保険や損害保険などに加入している」(60.0%)、「国民年金に加入している」(57.3%)の割合が6割前後を占めています。「国民年金に加入している」は「洋舞」の割合が他のジャンルに比べて高く、「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」は「邦楽」(42.9%)、「洋楽」(40.6%)でそれぞれ高くなっています。

第8回調査と比較すると、「生命保険や損害保険などに加入している」(第8回：54.4%、第9回：60.0%)、「貯蓄をしている」(同 29.3%、33.7%)、「公的年金に加入している」(同 30.2%、33.3%)の割合が第9回調査でそれぞれ高くなっています。

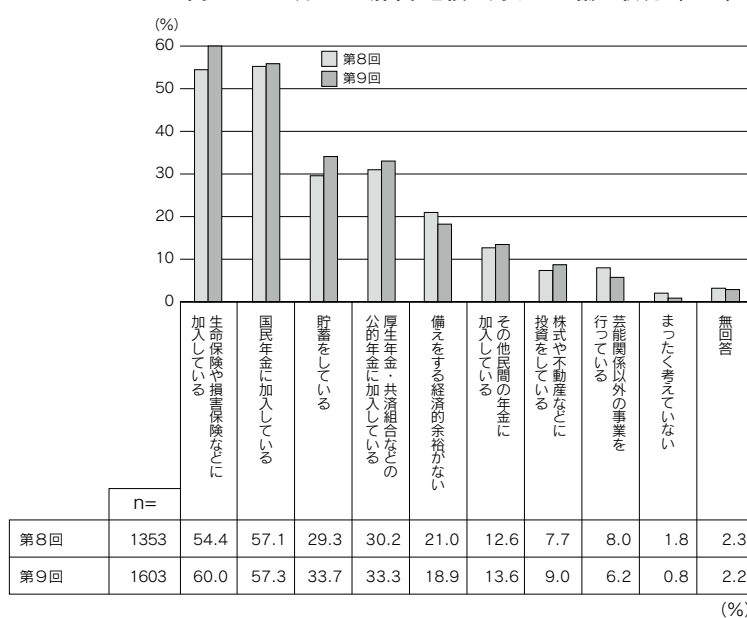
問E-7 万一の場合や老後に対しての備え状況 (MA)



(%)

【参考】第8回 調査結果との比較

問E-7 万一の場合や老後に対しての備え状況 (MA)



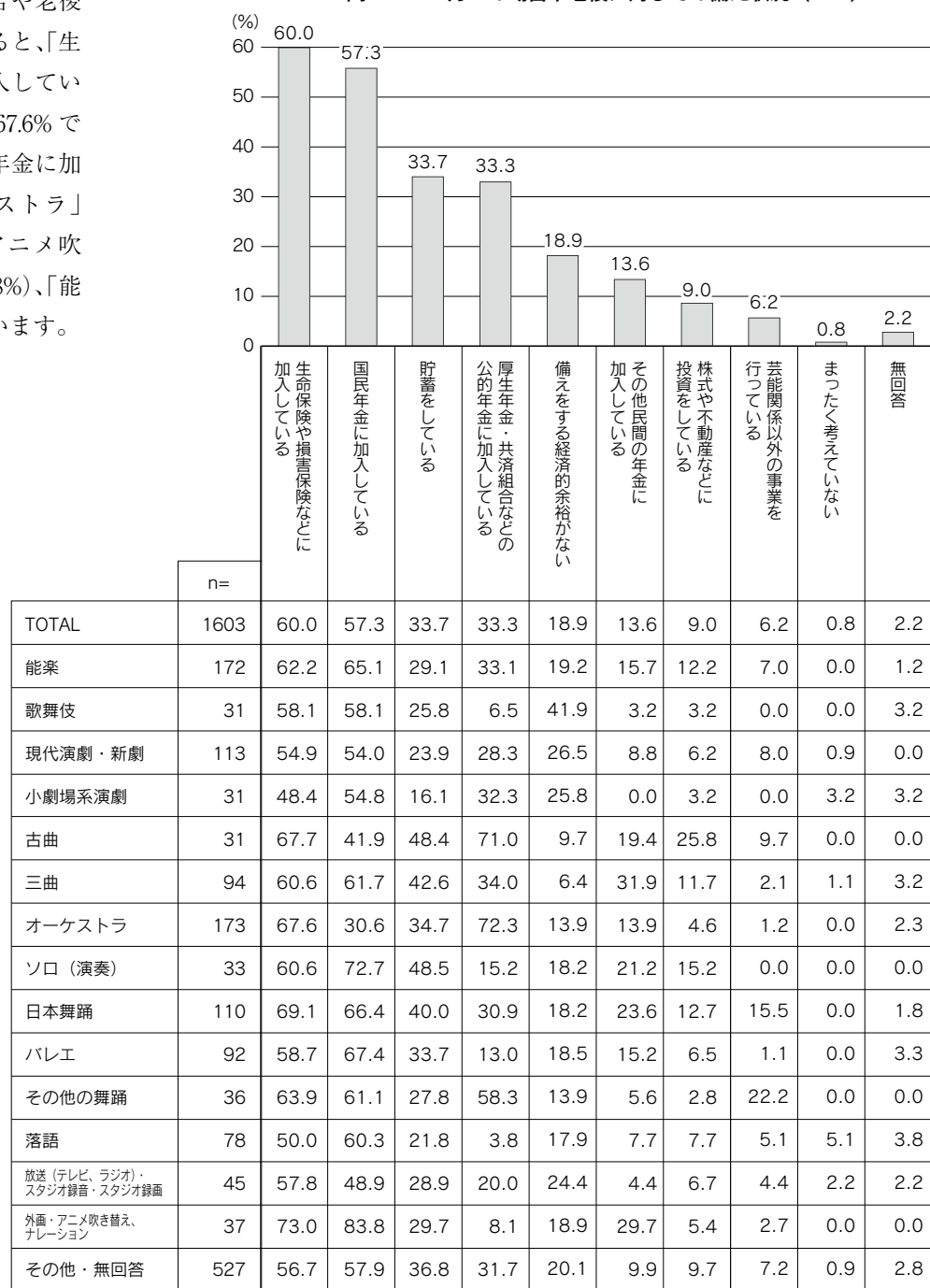
(%)

E-7

万一の場合や老後に対するの備え(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に万一の場合や老後に対するの備えの状況をみると、「生命保険や損害保険などに加入している」は「オーケストラ」が67.6%で最も高いです。逆に「国民年金に加入している」は、「オーケストラ」は30.6%で低く、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」(83.8%)、「能楽」(65.1%)で高くなっています。

問E-7 万一の場合や老後に対するの備え状況 (MA)



(%)

(2) 仕事環境について

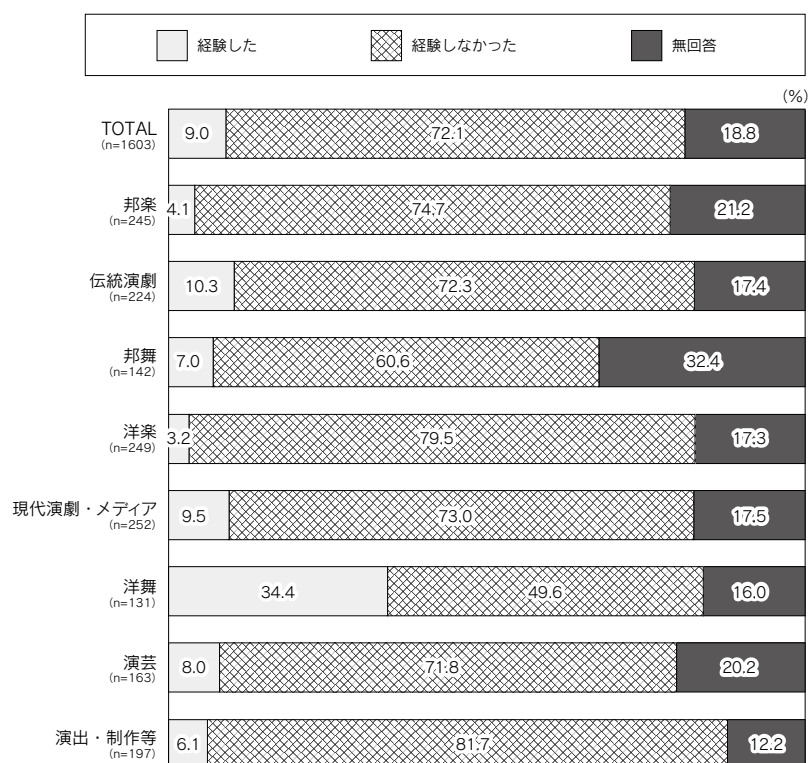
■ 傷害(ケガ)の状況

C-3 (a)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験(傷害(ケガ))

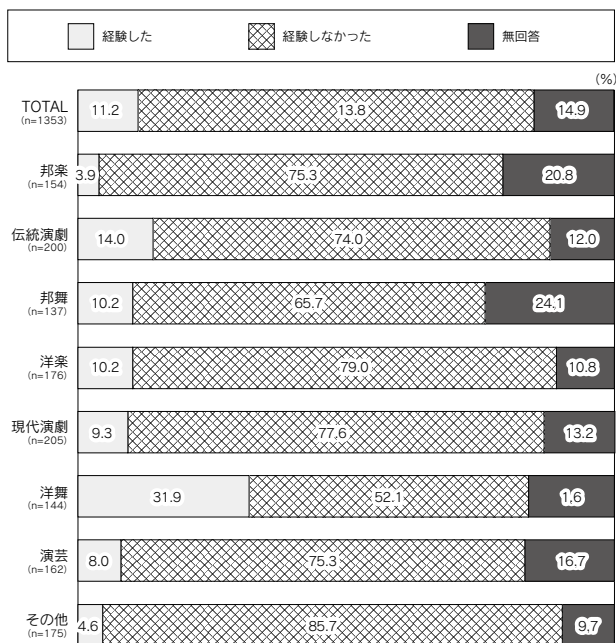
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)を経験した割合は9.0%でした。ジャンル別にみると、「洋舞」が34.4%で、他のジャンルに比べて突出して高いです。

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a) 仕事上の傷害(ケガ)



【参考】第8回 調査結果

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a) 仕事上の傷害(ケガ)

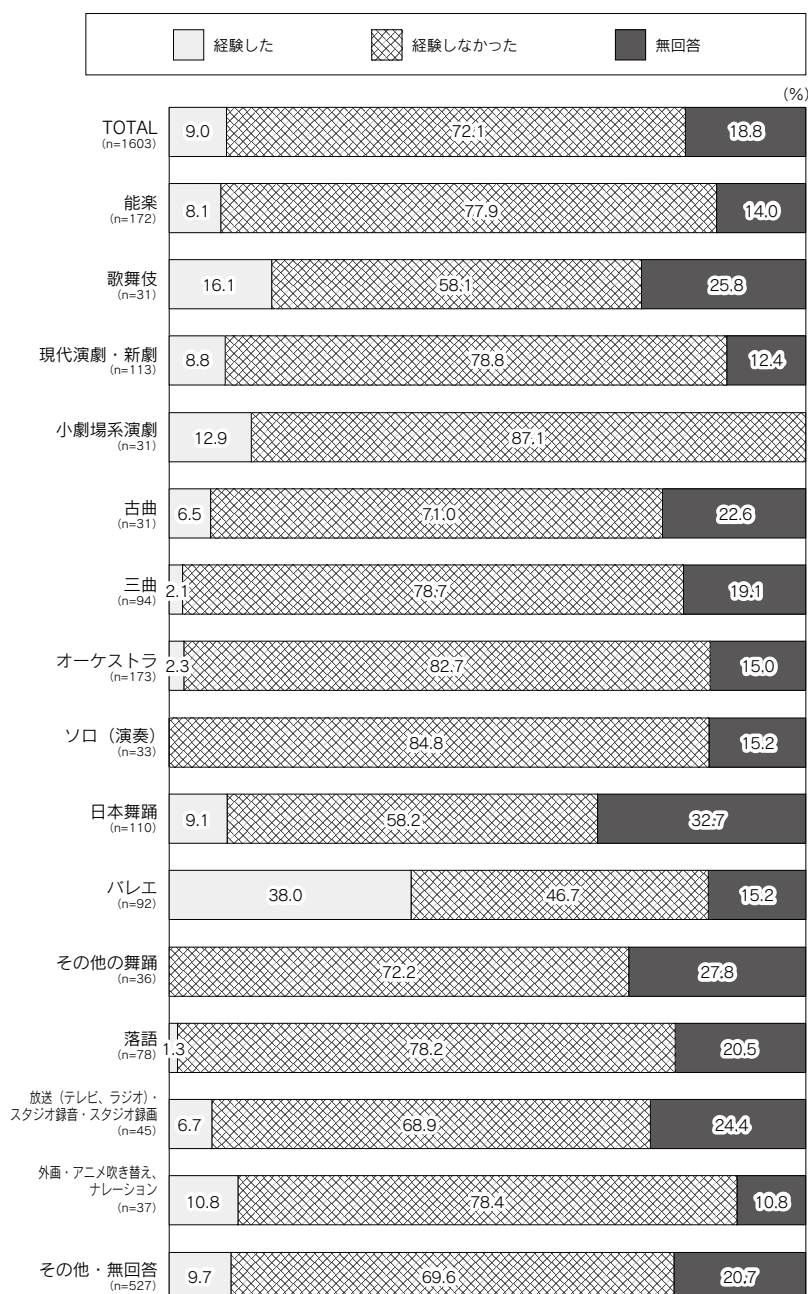


C-3 (a)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (小ジャンル別)(傷害(ケガ))

小ジャンル別に昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)の経験をみると、「バレエ」が38.0%で他の小ジャンルに比べて傷害(ケガ)の経験率が高く、「歌舞伎」も16.1%と高めとなっています。

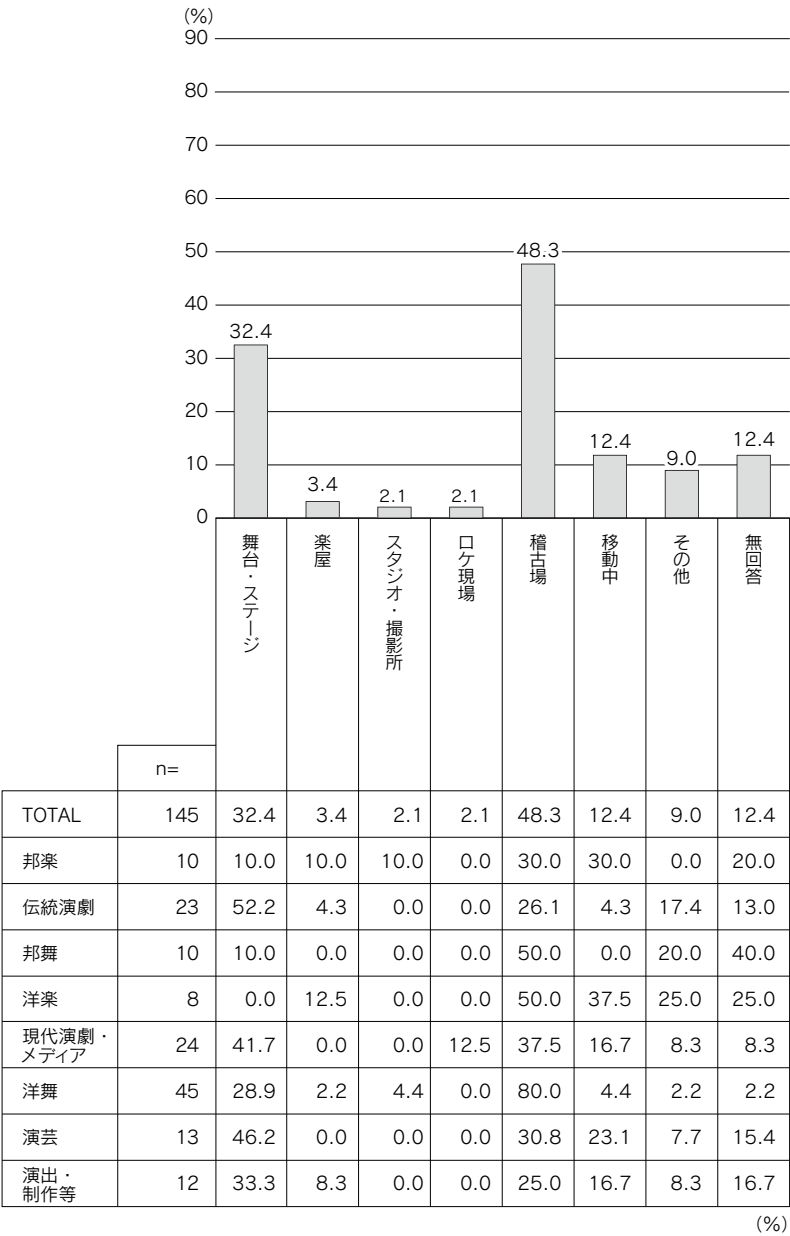
問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(a) 仕事上の傷害(ケガ)



C-4 (a)
昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)の発生場所

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)が発生した場所は、「稽古場」が48.3%で最も高く、それに「舞台・ステージ」が32.4%、「移動中」が12.4%が続いています。「洋舞」は「稽古場」の割合が80.0%で最も高くなっています。

問C-4 (a) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害発生場所 (MA)
【ベース：傷害経験有り】



※「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇」「演芸」「その他」は
サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

C-4 (b)

昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)治療費等の負担状況

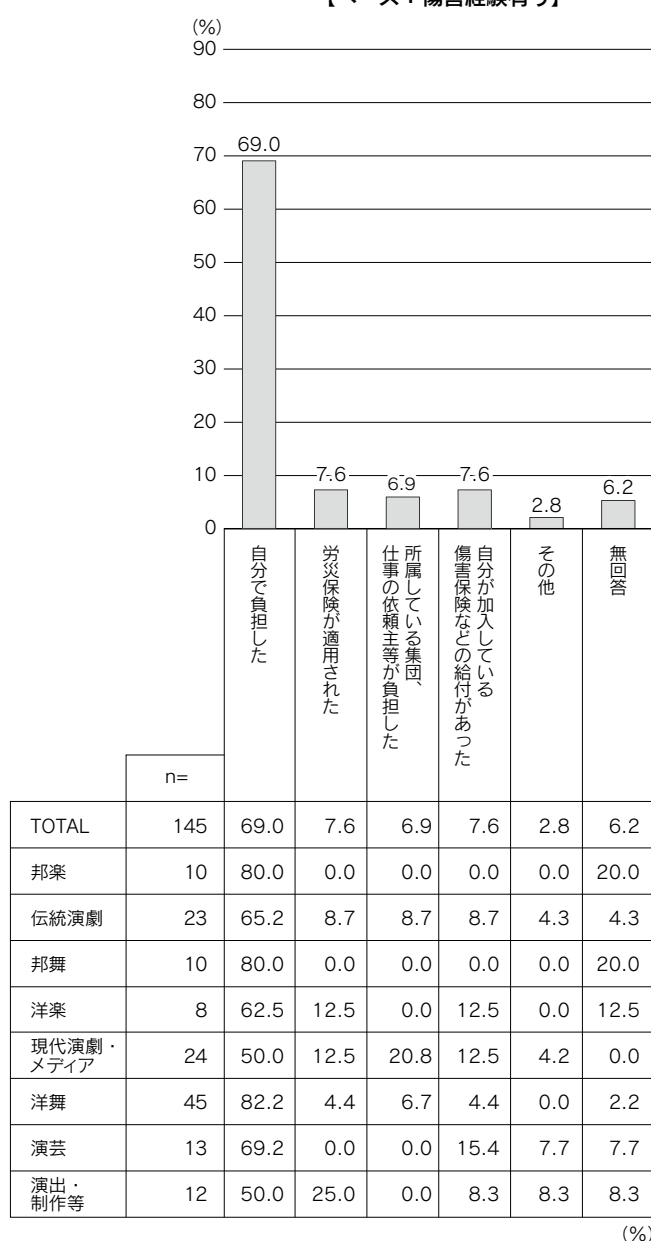
C-4 (c)

昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)に対する治療費以外の補償状況

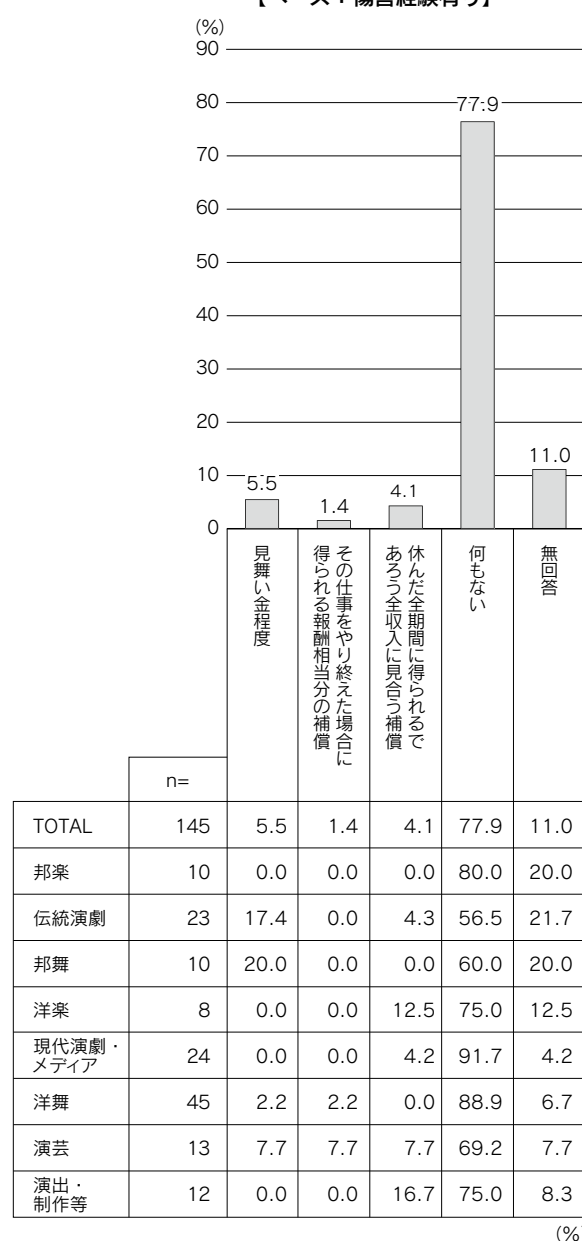
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)に対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く69.0%、その他、「労災保険が適用された」「自分が加入している傷害保険などの給付があった」がともに7.6%でした。

治療費等以外の補償では、「何もない」が77.9%、「見舞い金程度」は5.5%となっています。

問C-4 (b) 昨年1年間に経験した
仕事上の傷害治療費等の負担状況
【ベース：傷害経験有り】



問C-4 (c) 昨年1年間に経験した
仕事上の傷害に対する治療費以外の補償状況
【ベース：傷害経験有り】



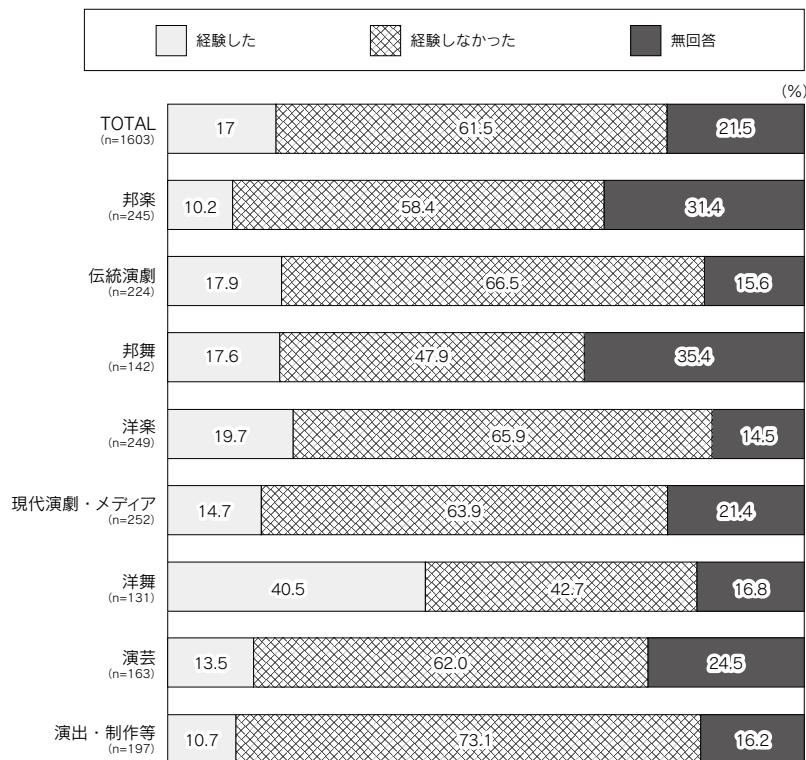
■ 病気・症状の状況

C-3 (b)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験(病気・症状)

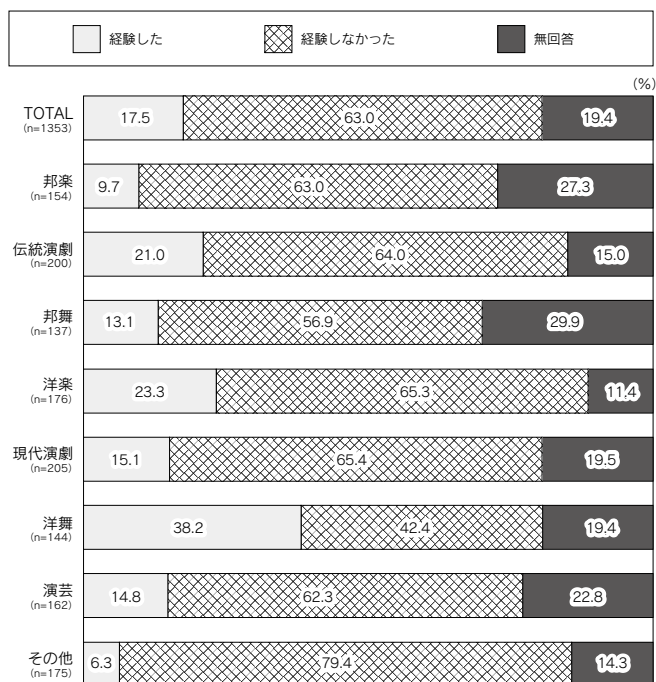
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状などを経験した割合は17.0%です。ジャンル別でみると、傷害(ケガ)と同様に「洋舞」が40.5%で特に割合が高くなっています。

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など



【参考】第8回 調査結果

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など

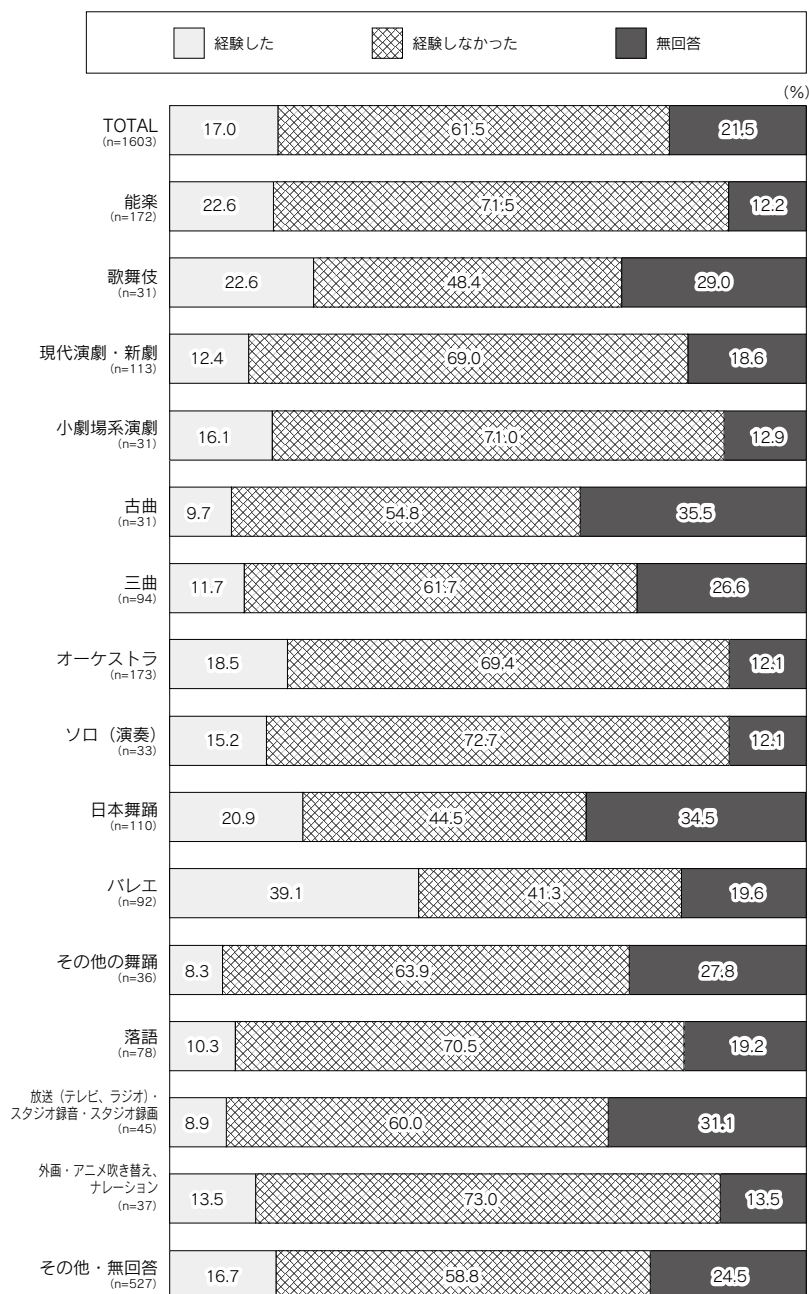


C-3 (b)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(小ジャンル別)(病気・症状)

小ジャンル別に昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状の経験をみると、「バレエ」が39.1%で他の小ジャンルに比べ病気・症状の経験率が高くなっています。

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など



C-5 (a)

仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況(MA)

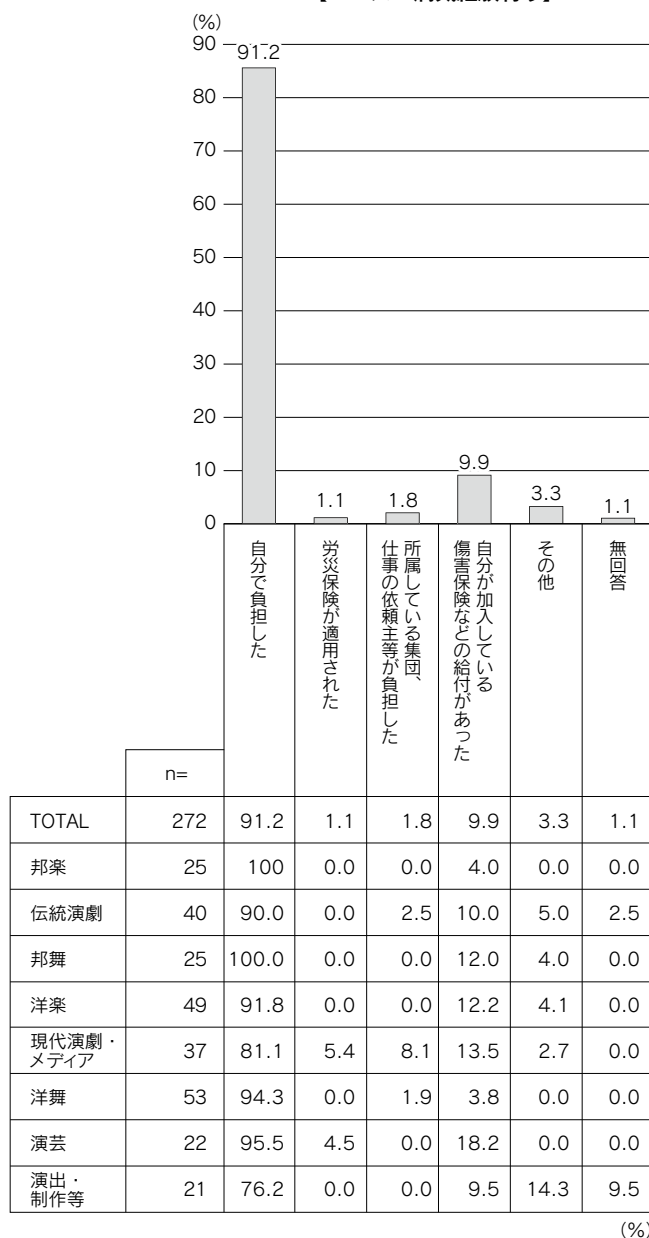
C-5 (b)

仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費以外の補償状況(MA)

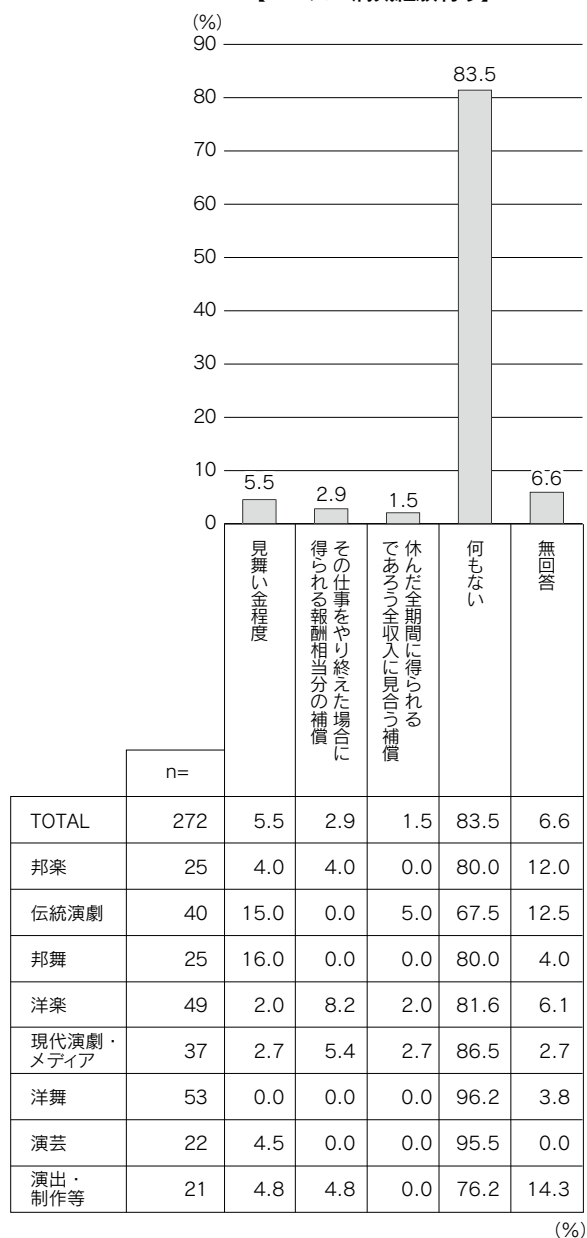
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状などに対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く 91.2%、「自分が加入している傷害保険などの給付があった」が 9.9% となっていました。

治療費等以外の補償では、「何もない」が 83.5%、「見舞い金程度」は 5.5% です。

問C-5 (a) 仕事の原因と考えられる
病気・症状の治療費の負担状況 (MA)
【ベース：病気経験有り】



問C-5 (a) 仕事の原因と考えられる
病気・症状の治療費以外の補償状況 (MA)
【ベース：病気経験有り】



※「邦楽」「邦舞」「演芸」「その他」はサンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

(3) 仕事や生活に対する考え方

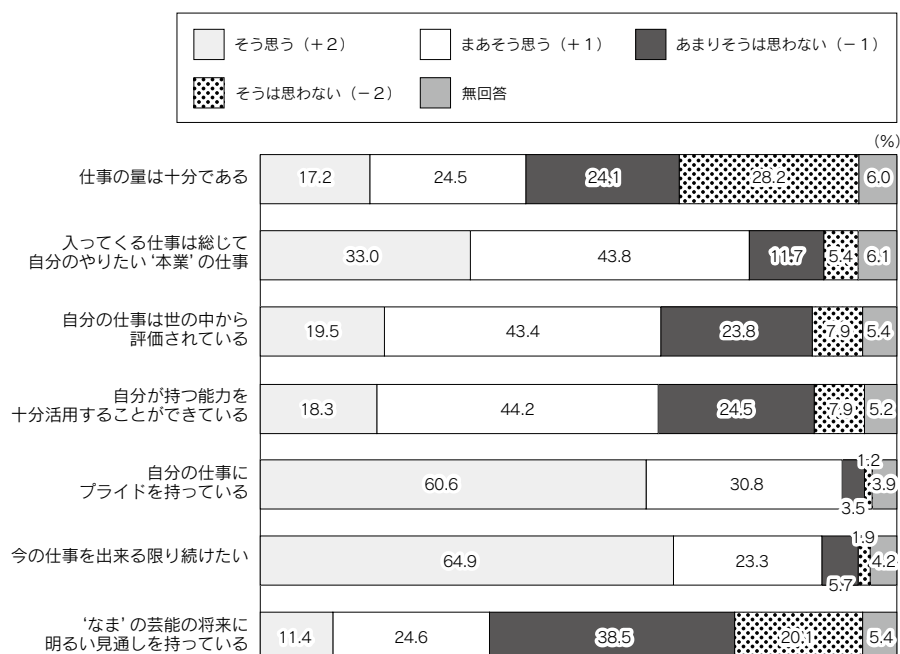
D-1 (a)

仕事に対する考え方について

「自分の仕事にプライドを持っている」「いまの仕事をできるかぎり続けたい」は、「そう思う／まあそう思う」の割合は9割前後となり、他の項目に比べて肯定する割合が高いです。同じく「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている『本業』の仕事である」は8割弱、「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができる」も6割の人が「そう思う／まあそう思う」と回答しています。

その一方で、「仕事の量は十分である」「ライブ、舞台公演など『なま』の芸能の将来に明るい見通しを持っている」は、「そうは思わない／あまりそうは思わない」は過半数を占め、否定する割合が高くなっています。

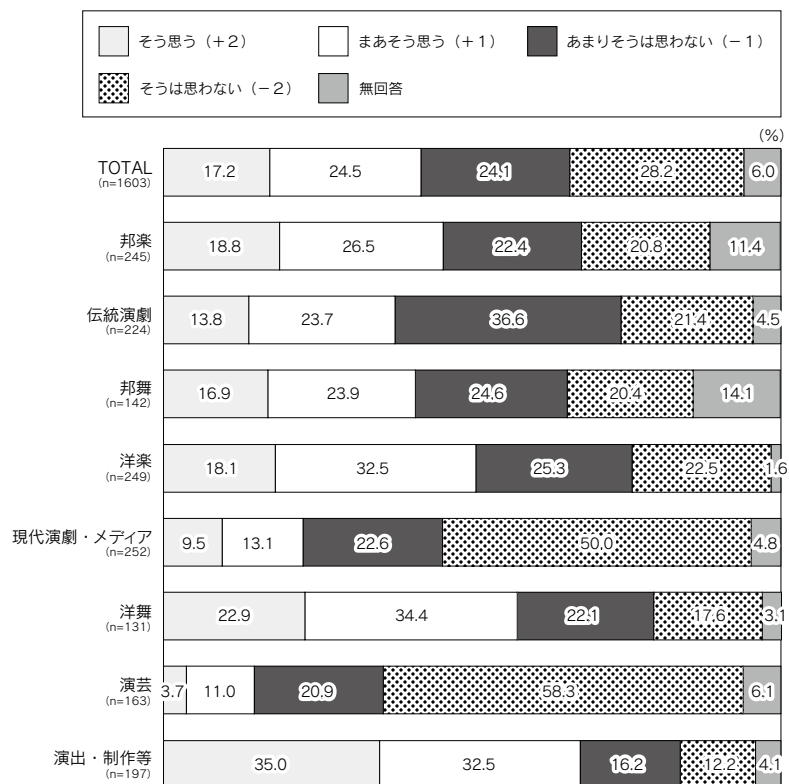
問D-1 (a) 仕事に対する考え方



D-1 (a)

仕事に対する考え方について(1)(ジャンル別)

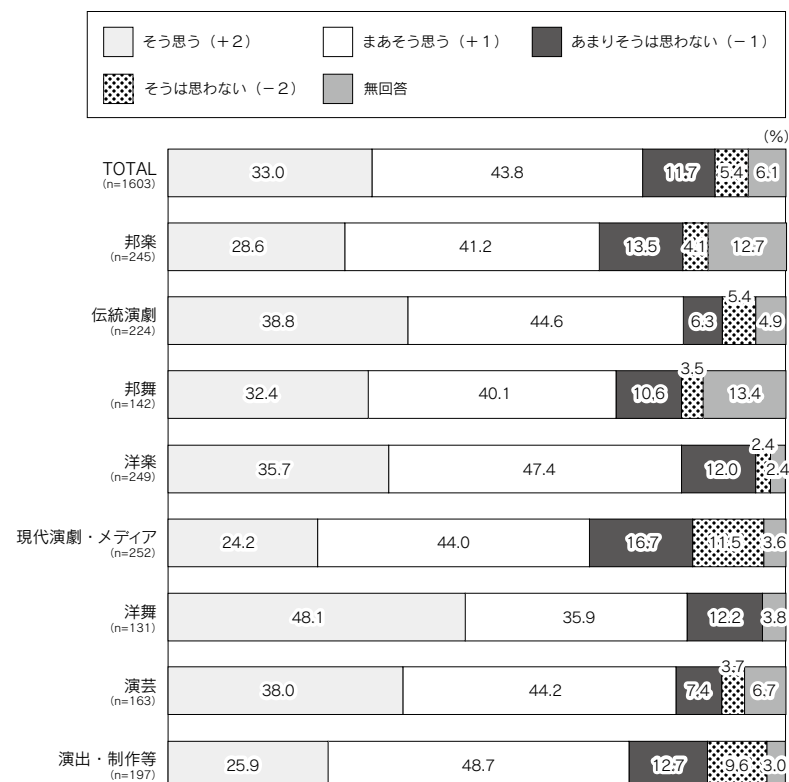
「仕事の量は十分である」は「演芸」と「現代演劇・メディア」で「そうは思わない」の割合が約半数を占めて高く、「あまりそうは思わない」を加えると7割を超えます。「洋舞」は「そう思う」と「まあそう思う」で6割弱となり高くなっています。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
仕事の量は十分である

D-1 (a)

仕事に対する考え方について(2)(ジャンル別)

「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている『本業』の仕事である」で、「そう思う」「まあそう思う」の回答の合計をみると、「洋舞」が84%と最も高く、次いで「伝統演劇」の83.4%です。最も少ない「現代演劇・メディア」でも68.2%、「邦楽」で69.8%となっていて、自分のやりたい『本業』の仕事をしていると肯定的に受け止めている人が大半を占めています。

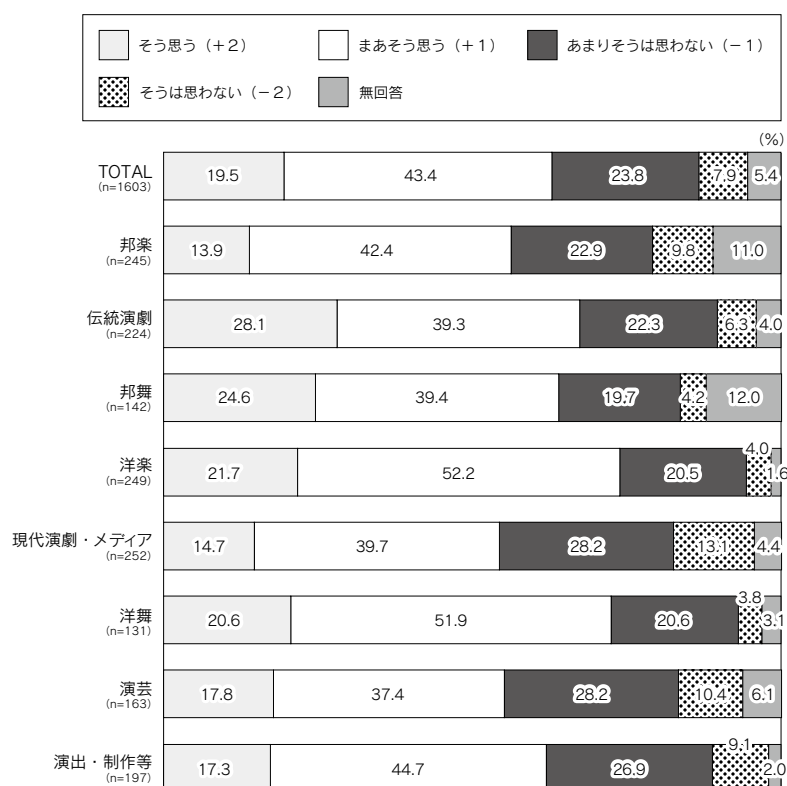
問D-1 (a) 仕事に対する考え方
入ってくる仕事は総じて自分のやりたい『本業』の仕事

D-1 (a)

仕事に対する考え方について(3)(ジャンル別)

「自分の仕事は世の中から評価されている」はすべてのジャンルで「そう思う」「まあそう思う」を合わせた割合が過半数を占めています。合計の割合が最も高いのは「洋楽」で73.9%、次いで「洋舞」の72.5%。最も低いのが「現代演劇・メディア」で54.4%、次いで「演芸」の55.2%でした。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
自分の仕事は世の中から評価されている

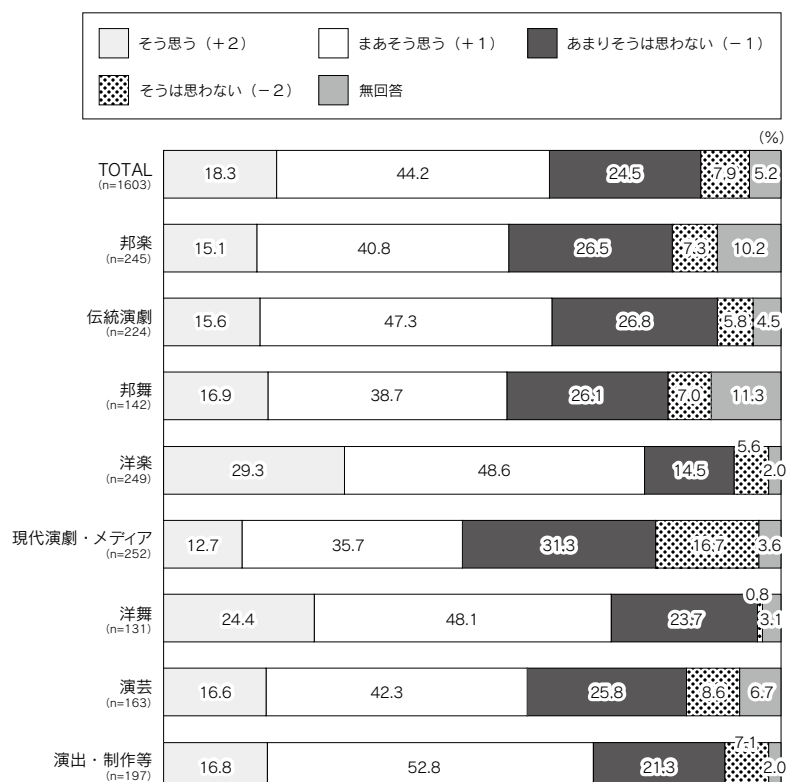


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(4)(ジャンル別)

「自分が持つ能力を十分活用することができる」は、「現代演劇・メディア」を除くジャンルでは、「そう思う」「まあそう思う」の合計が過半数を超えています。最も肯定的なのは「洋楽」で77.9%にのぼるのに対し、「現代演劇・メディア」では「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の合計の割合が48.0%と、他のジャンルに比べて不満感が高くなっています。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
自分が持つ能力を十分活用することができる

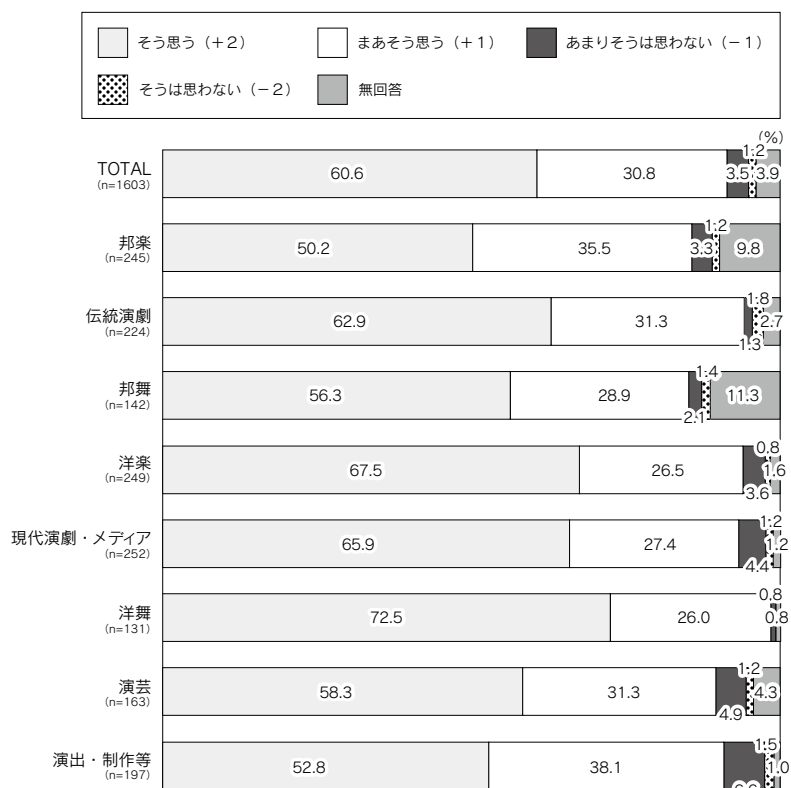


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(5)(ジャンル別)

「自分の仕事にプライドを持っている」は、「洋舞」「洋楽」で「そう思う」の割合が72.5%、67.5%で他に比べて高く、最も低い「邦楽」でも50.2%と過半数を超えています。「まあそう思う」も合計すると圧倒的に「プライドを持っている」という人たちの割合が高いです。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
自分の仕事にプライドを持っている

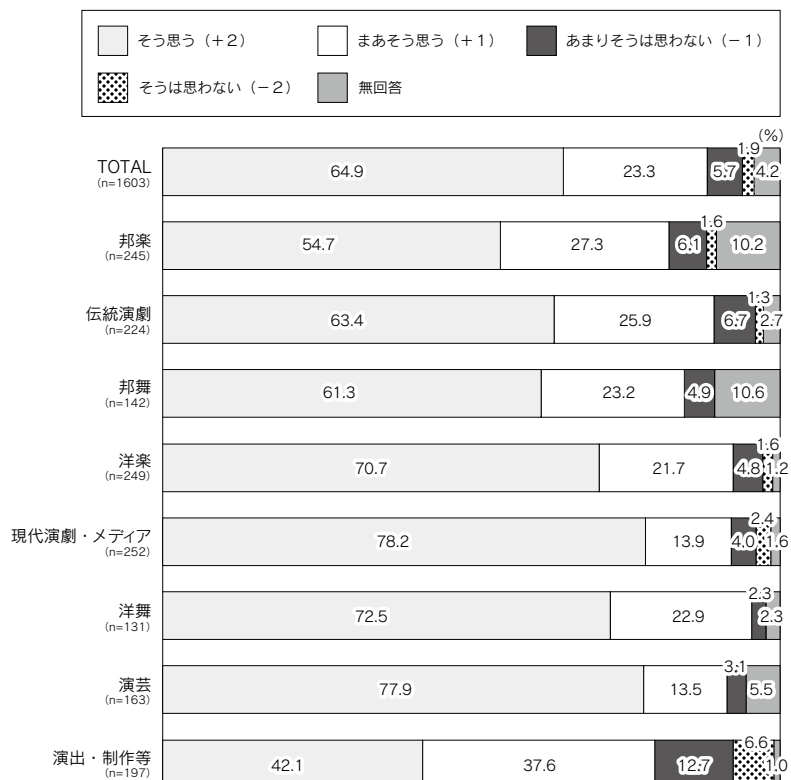


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(6)(ジャンル別)

「いまの仕事をできるかぎり続けたい」では、「現代演劇・メディア」「演芸」で「そう思う」の割合が78.2%、77.9%で高くなっています。「まあそう思う」も合計すると、「その他（演出・制作等）」以外は8割を超えています。「その他（演出・制作等）」は、実演家以外も含むジャンルですが、「そうは思わない」「あまりそうは思わない」が他ジャンルに比べて高く、それぞれ12.7%、6.6%です。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
今の仕事を出来る限り続けたい

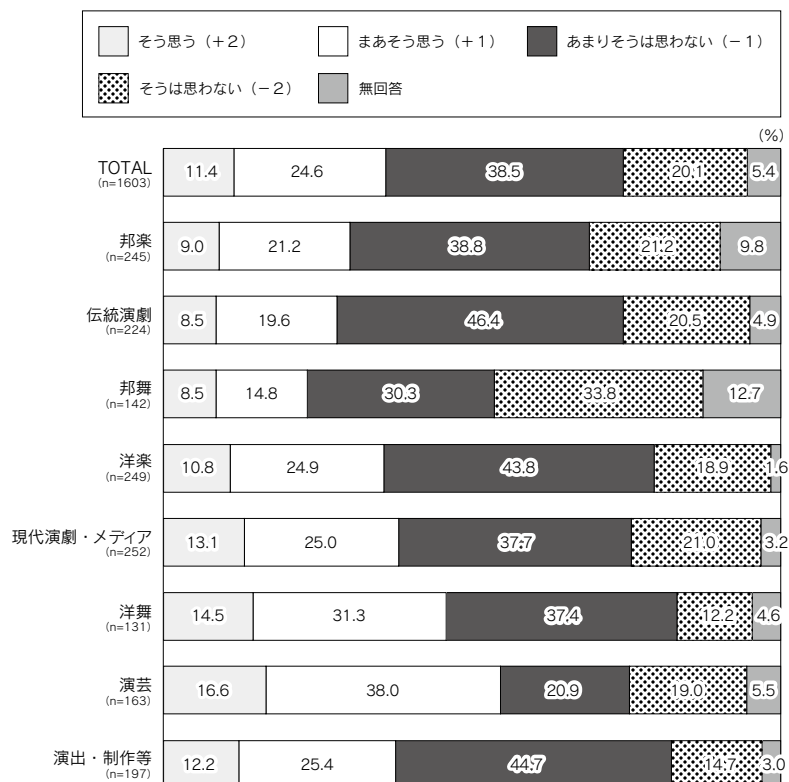


D-1 (a)

仕事に対する考え方について(7)(ジャンル別)

「ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている」は、「演芸」で「そう思う」に「まあそう思う」を加えた割合が過半数を占めて最も高くなっていますが、それ以外のジャンルでは「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の割合の方が高くなっています。「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の合計が高いのは「伝統演劇」66.9%、「邦舞」64.1%で、将来に危機感を多く感じているようです。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方
‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている



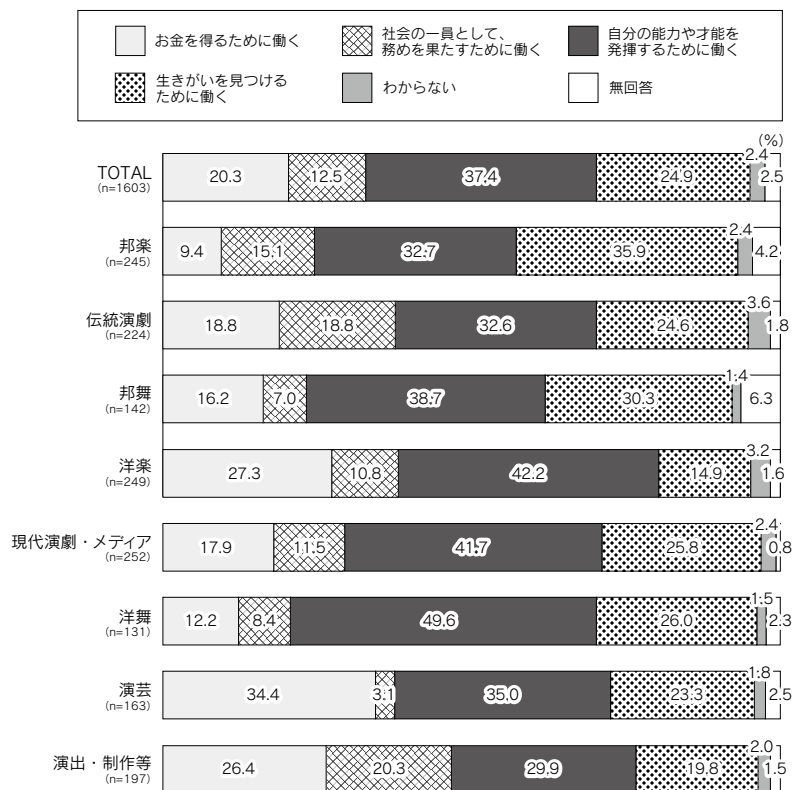
D-1 (b) 働く目的

働く目的は「自分の能力や才能を発揮するために働く」が37.4%で最も高く、「生きがいを見つけるために働く」が24.9%、「お金を得るために働く」が20.3%でそれに続いています。

ジャンル別では、ほとんどのジャンルで「自分の能力や才能を発揮するために働く」が最も多く、「洋舞」では49.6%を占めています。「邦楽」のみ、「生きがいを見つけるために働く」の方が35.9%と最も多くなっています。

「お金を得るために働く」は「演芸」が34.4%と最も高く、次いで「洋楽」が27.3%です。「社会の一員として、務めを果たすために働く」の回答は「演出・制作等」で最も高く20.3%であるのに対し、「演芸」で3.1%と最も低くなっています。

問D-1 (b) 働く目的



(4) より良い活動が続けていくために

C-1

仕事上の問題点(MA)

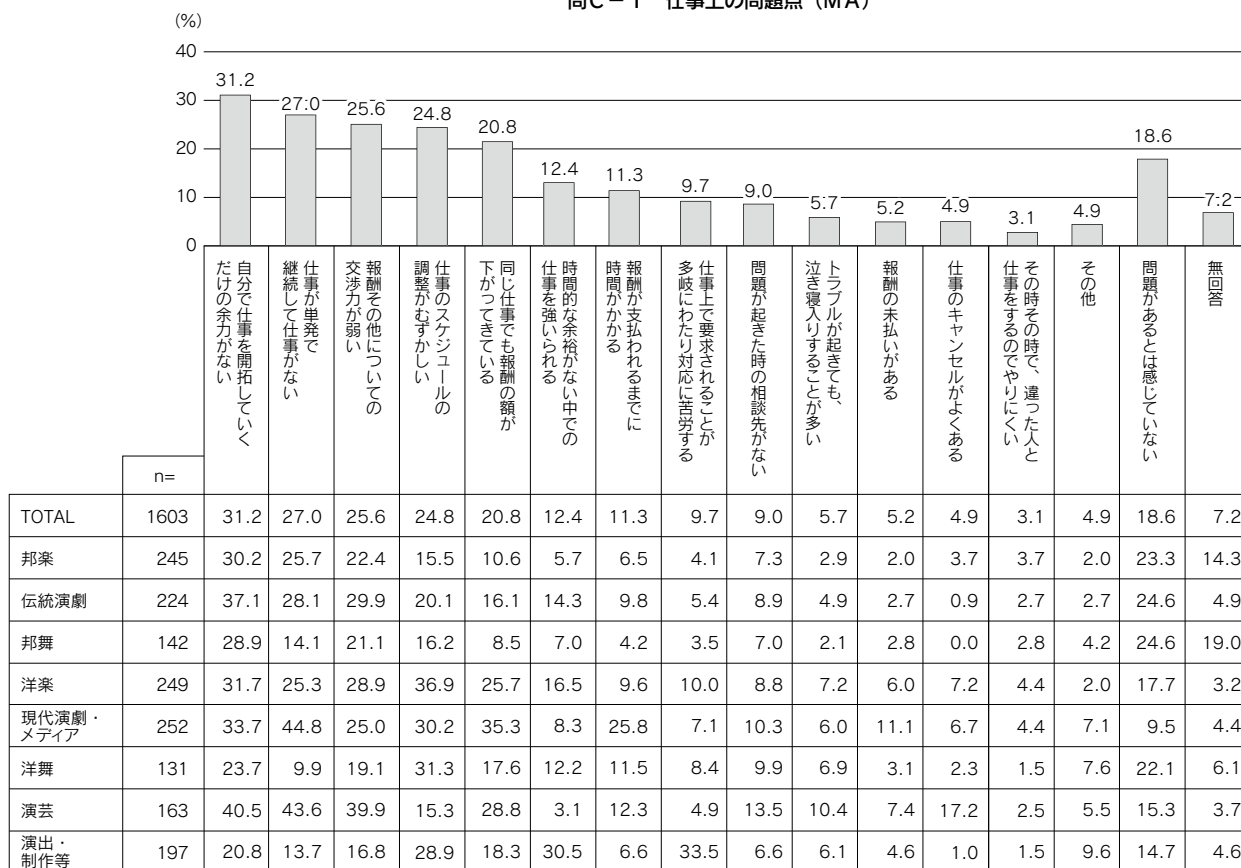
現在、芸能実演家が抱えている仕事上の問題点として、「自分で仕事を開拓していきただけの余力がない」が31.2%で最も高く、「仕事が単発で継続して仕事がない」が27.0%、「報酬その他についての交渉力が弱い」が25.6%、「報酬その他についての交渉力が弱い」が24.8%、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が20.8%、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」が12.4%、「時間的な余裕がない中で仕事を強いられる」が11.3%、「報酬が支払われるまでに時間がかかる」が9.7%、「多岐にわたる対応に追いつかない」が9.0%、「問題が起きた時の相談先がない」が5.7%、「泣き寝入りすることが多い」が5.2%、「トラブルが起きて、トランプルが入ることが多い」が4.9%、「報酬の未払いがある」が3.1%、「仕事のキャンセルがよくある」が4.9%、「その時その時で、違った人と仕事をするのでやりにくい」が3.1%、「その他」が4.9%、「問題があるとは感じていない」が18.6%、「無回答」が7.2%。

い」が25.6%でそれに続いています。

ジャンル別にみると、「自分で仕事を開拓していきただけの余力がない」は「演芸」が40.5%で他のジャンルに比べて高いです。「仕事が単発で継続して仕事がない」は「現代

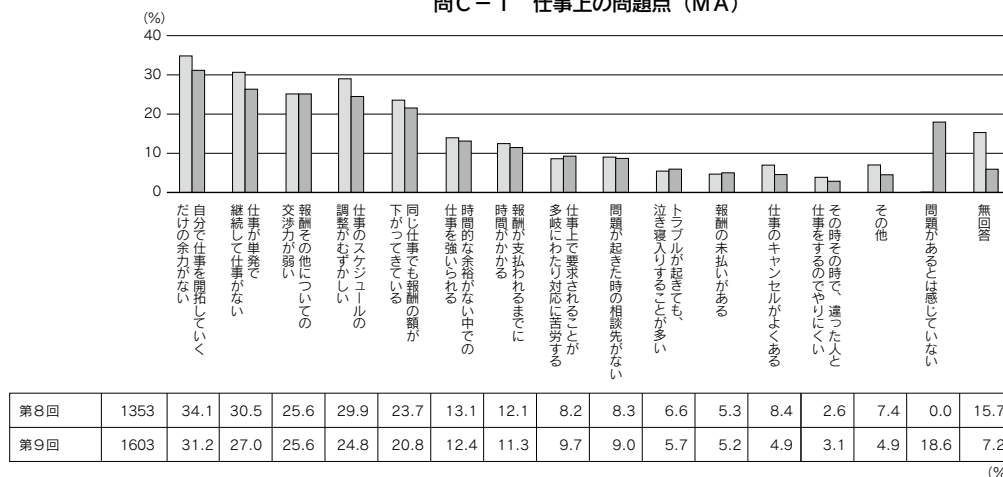
演劇・メディア」と「演芸」がそれぞれ44.8%、43.6%で高く、「洋舞」(9.9%)、「邦舞」(14.1%)で低くなっています。「報酬その他についての交渉力が弱い」でも「演芸」で高く、39.9%です。

問C-1 仕事上の問題点 (MA)



(%)

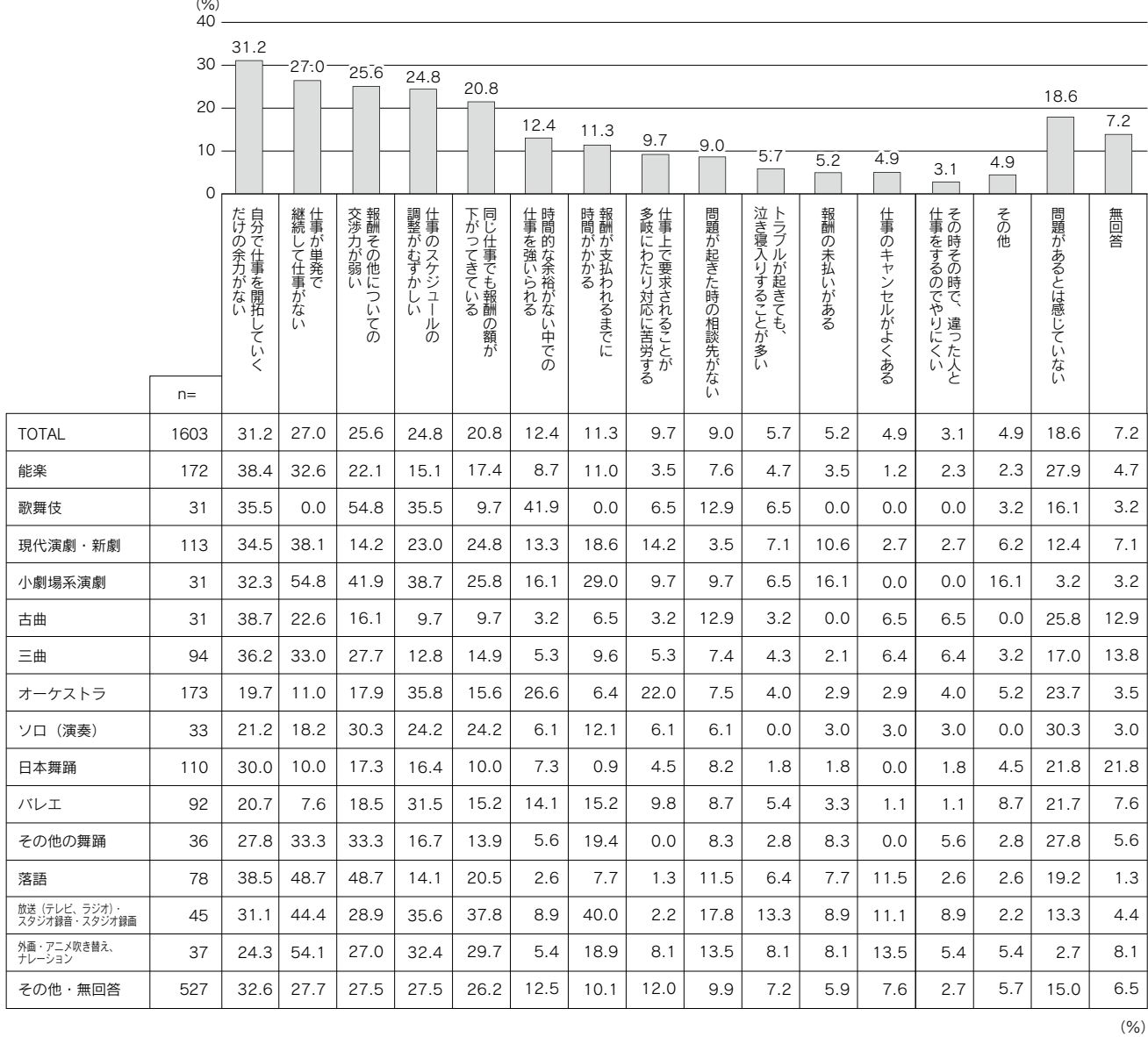
【参考】第8回 調査結果との比較
問C-1 仕事上の問題点 (MA)



C-1 仕事上の問題点(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に仕事上の問題点をみると、「仕事が単発で継続して仕事がない」は「小劇場系演劇」(54.8%)、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」(54.1%)、「落語」(48.7%)などで他の小ジャンルに比べて高くなっています。「報酬その他についての交渉力が弱い」では、「歌舞伎」(54.8%)、「落語」(48.7%)、「小劇場系演劇」(41.9%)で高くなっています。

問C-1 仕事上の問題点 (MA)



D-2

技術・技能を向上させるための必要条件(3L A)

技術・技能を向上させるための必要条件として特に必要と思う選択肢3つまで選ぶ設問では、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」が最も高く35.7%、次いで「芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること」が34.6%、「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあるこ

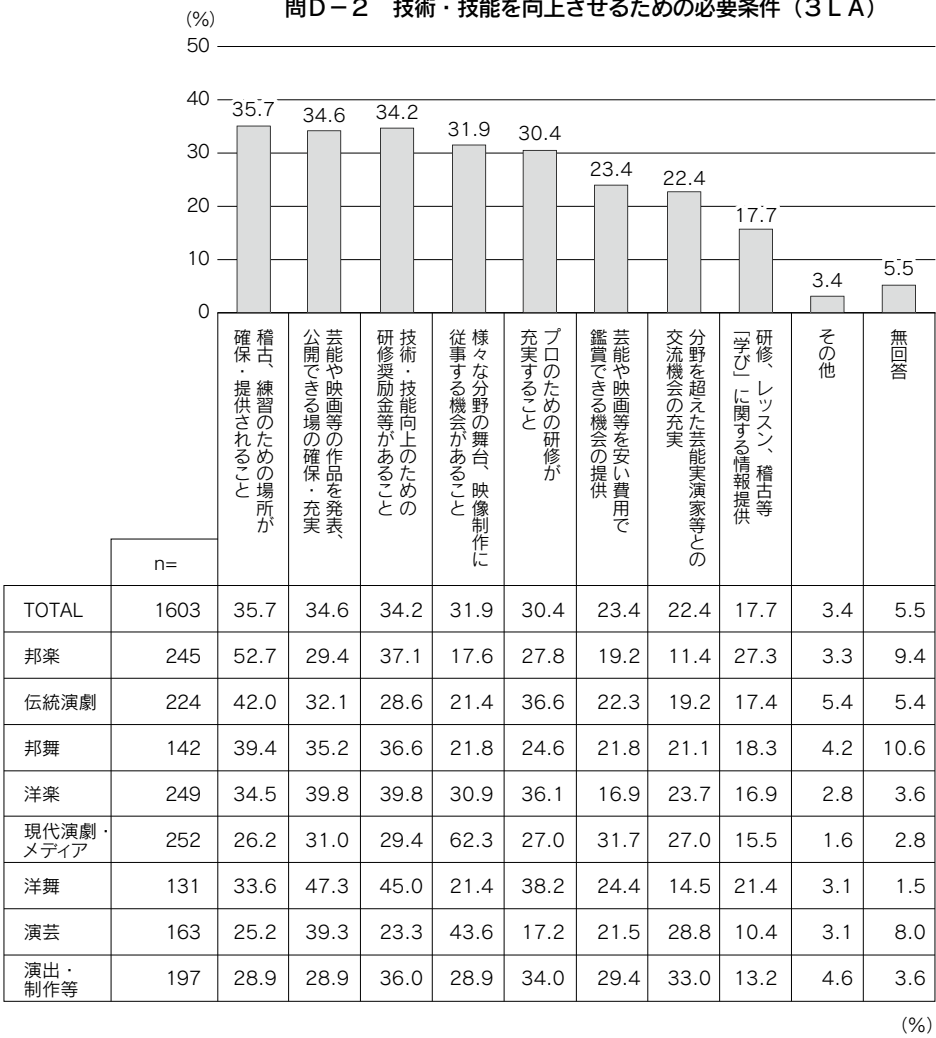
と」が34.2%で続いています。

ジャンル別にみると、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」は「邦楽」(52.7%)「伝統演劇」(42.0%)で高く、「演芸」(25.2%)、「現代演劇・メディア」(26.2%)で低くなっています。

「芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実される

こと」は、各ジャンルとも高い割合で回答していますが、「洋舞」が47.3%と、突出しており、とりわけ公演機会の確保・充実に困難を感じていることが伺われます。「洋舞」では、「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること」も45.0%と、他ジャンルより高い割合になっています。

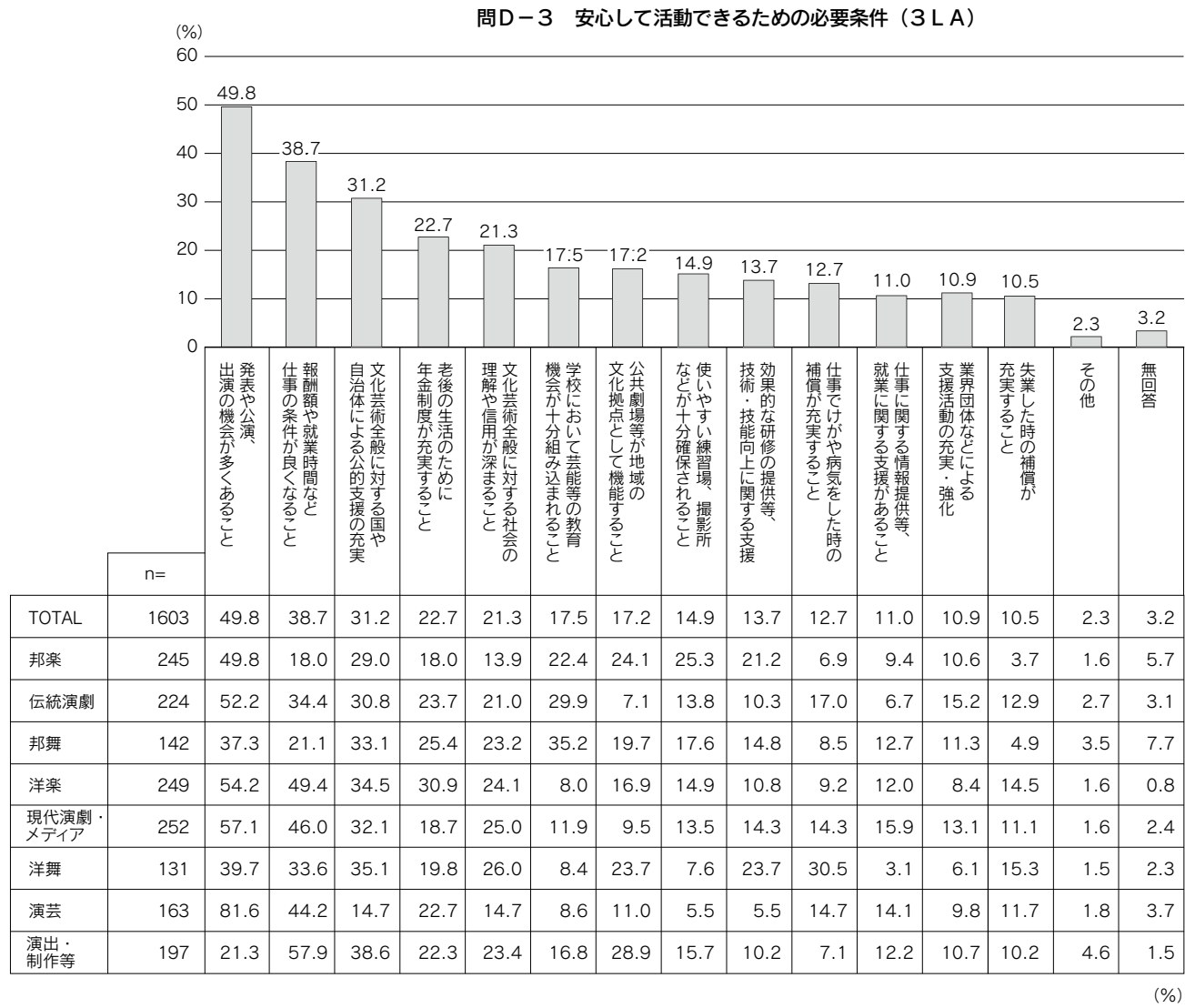
問D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3L A)



D-3 安心して活動していくための必要条件(3L A)

安心して活動していくための必要条件を3つまで選ぶ設問では、「発表や公演、出演の機会が多くあること」が49.8%で最も高く、以下、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」(38.7%)、「芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること」(31.2%)となっています。

ジャンル別では、「発表や公演、出演の機会が多くあること」は「演芸」(81.6%)、「現代演劇」(57.1%)で高く、「邦舞」(37.3%)、「洋舞」(39.7%)で低くなっています。

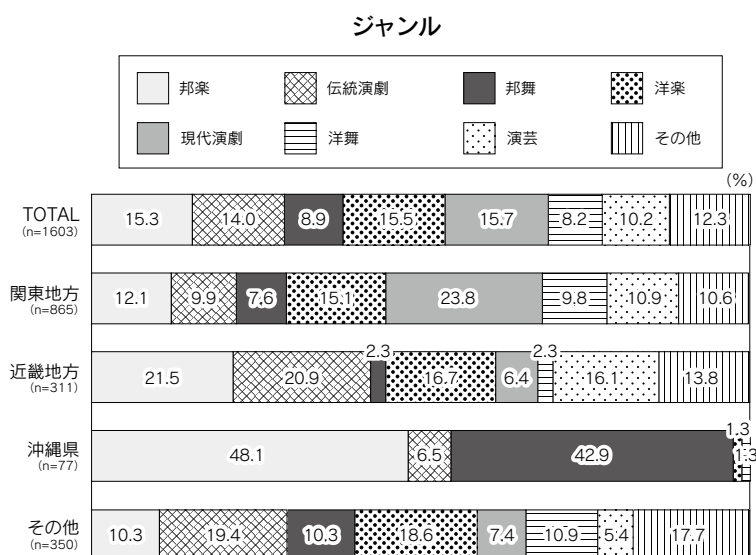


(5) 地域別集計結果

第9回では、居住都道府県の回答を求めており、その結果を4つの地域区分にわけて分析してみました。「関東地方」(n=865)、「近畿地方」(n=311)、「沖縄県」(n=77)、「その他の地方」(n=350)と「関東地方」が約半数を占め、「近畿地方」と「その他の地方」が同程度となっています。地域ごとに特色のある回答が出た項目を中心に示します。

■ 回答者の属性—ジャンルと所属団体

地域ごとの回答者のジャンル構成をみると、沖縄県では「邦楽」と「邦舞」がそれぞれ半数近くを占めています。「現代演劇・メディア」の回答者は関東に多く分布しています。「近畿地方」では「邦楽」、「伝統芸能」、「演芸」に従事している割合が「関東地方」より高くなっています(回答数では、「演芸」は「関東地方」94人、「近畿地方」50人)。

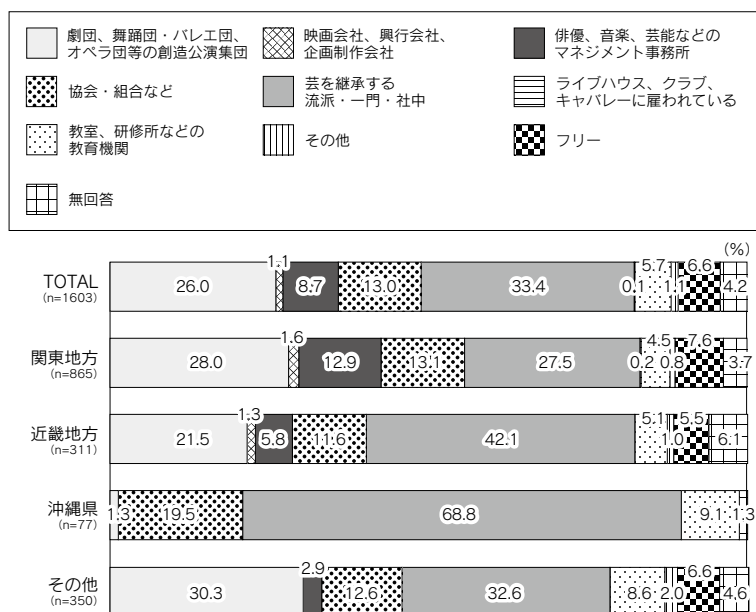


B-1 (b)

もっとも関係が深い所属している集団・流派・組織

所属している団体については、ジャンルの特性もあり、「芸を継承する流派・一門・社中」が「近畿地方」では42.1%、「沖縄県」では68.8%と大半を占めています。「劇団、舞踊団等の創造公演集団」は関東地方や「その他の地方」で割合が高くなっています。

問B-1 (b) もっとも関係が深い所属している集団・流派・組織



■ 仕事の状況—昨年 1 年間の活動

B-2 (a)

昨年 1 年間に行った行動(MA)

昨年 1 年間に行った行動では、「映画・放送・メディアへの出演・演奏」が「関東地方」で他地域よりも高いです。「その他の地方」では、「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆」などと「企画プロデュース・制作」、「教える仕事」の割合が他地域よりも高いです。

問B-2 (a) 昨年 1 年間に行った行動 (MA)

	n=	映画・放送・メディアへの出演・演奏	舞台・コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演の稽古	映画・放送・メディアへの出演・演奏	映画・放送・メディアへの出演・演奏のための稽古	振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など	企画・プロデュース・制作	教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）	芸能に関連するその他の活動	技能を維持するための研鑽、トレーニングなど	芸能活動以外の仕事	無回答
TOTAL	1,603	76.9	68.2	28.8	16.6	25.2	17.3	63.1	22.0	46.0	23.5	5.6
関東地方	865	75.5	67.7	36.0	20.7	27.2	17.9	60.6	21.4	46.5	23.6	5.1
近畿地方	311	81.4	67.8	25.7	14.1	19.0	14.5	64.3	22.5	49.8	20.9	6.8
沖縄県	77	83.1	76.6	9.1	9.1	14.3	6.5	51.9	27.3	37.7	31.2	3.9
その他	350	74.9	68.0	18.3	10.3	28.3	20.9	70.9	21.7	43.1	23.7	6.0

(%)

B-5 (a)

教える(指導・教授)仕事の状況(MA)

【ベース:指導者・教授】

「教える（指導・教授）仕事」の状況については、「関東地方」と「近畿地方」では傾向は同程度ですが、「沖縄県」では雇われるよりも自ら教室を主催している割合が他地域よりも高く、不定期の仕事としての依頼は少なくなっています。

問B-5 (a) 教える（指導・教授）仕事の状況 (MA)
【ベース：指導者・教授】

	n=	学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている	自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている	不定期の仕事として、ときどき体験指導など依頼される	無回答
TOTAL	936	51.7	67.0	36.9	4.3
関東地方	480	51.5	64.6	40.0	3.8
近畿地方	174	55.2	64.4	37.9	4.6
沖縄県	46	34.8	80.4	15.2	4.3
その他	236	53.0	71.2	33.9	5.1

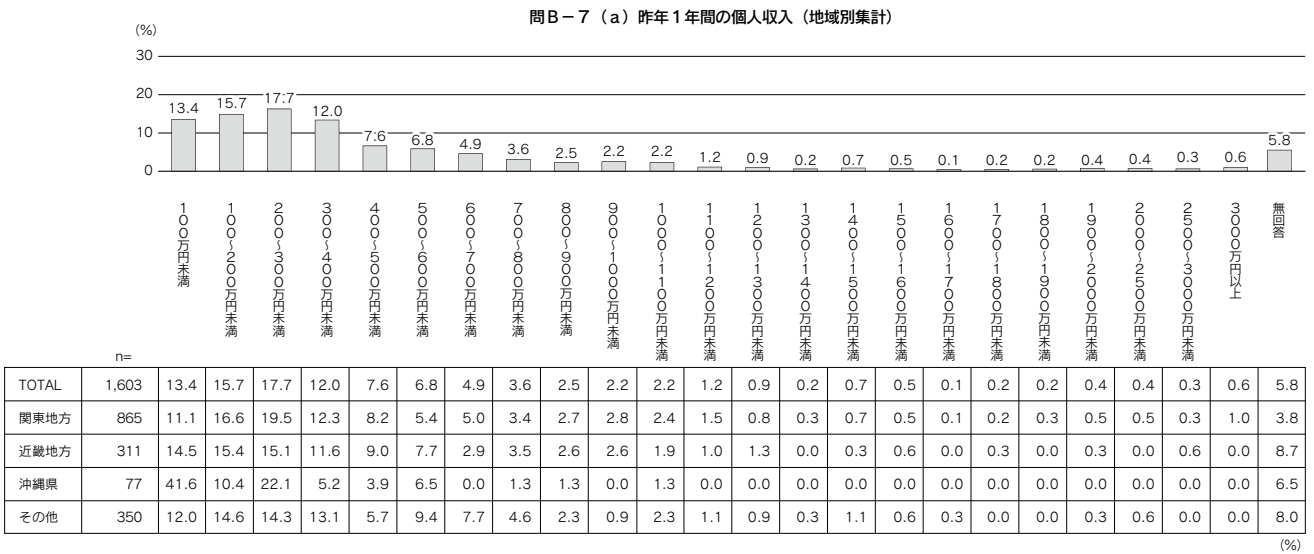
(%)

■ 収入について

B-7 (a)

昨年1年間の個人収入

関東と近畿を比べると、「近畿地方」で100万円未満の割合が高く200～300万円未満の割合が低くなっています。一方「沖縄県」では、100万円未満が41.6%を占めています。



C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)

個人負担となっている仕事上の必要経費について、「関東地方」と「近畿地方」を比べてみると、交通費、通信費、ケガ、病気予防などで「関東地方」の方が10ポイント前後高くなっています。

また、「沖縄県」ではノルマチケットの売れ残り自己負担が、全体の倍の割合で高くなっているのが目立ちます。

問C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)

	回答数	洗濯費、借用料	衣裳などの購入、整髪料、化粧品など	機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代	楽譜代・資料代	チラシ、プログラムの印刷費	共演者に対する出演料、謝礼	ノルマのチケット売れ残りの自己負担	会場の使用料	技能習得などに支払う授業料	資格認定にともなう費用	交通費	宿泊費	通信費	接待費・交際費	身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出	その他	個人負担は特にならない	無回答
TOTAL	1,603	57.2	45.4	37.4	31.8	19.4	20.6	25.9	19.8	29.8	11.3	56.6	18.3	44.4	44.2	40.3	1.7	7.2	3.4
関東地方	865	57.3	51.2	36.1	29.4	20.0	21.5	23.0	19.2	29.4	8.6	62.3	14.8	49.9	48.0	46.9	2.1	6.6	2.1
近畿地方	311	60.8	46.3	40.8	41.2	21.9	22.2	27.3	22.2	33.4	14.5	49.8	19.9	41.8	44.7	34.1	1.3	6.1	6.1
沖縄県	77	75.3	40.3	46.8	27.3	10.4	16.9	54.5	16.9	24.7	29.9	71.4	19.5	27.3	33.8	18.2	1.3	5.2	1.3
その他	350	49.7	31.1	35.4	30.3	17.7	17.7	25.4	19.7	28.6	11.1	45.4	25.1	36.6	36.9	34.3	1.4	10.0	4.6

(%)

■ よりよい仕事を続けるために

C-1

仕事上の問題点(MA)

仕事上の問題点では、「仕事を開拓していくだけの余力がない」と感じているのは「関東地方」では3人に1人の割合ですが、「沖縄県」では5人に1人となっています。逆に、「問題があるとは思っていない」の割合が「沖縄県」で高くなっています。

問C-1 仕事上の問題点 (MA)

	回答数	仕事のキャンセルがよくある	仕事のスケジュールの調整がむずかしい	自分で仕事を開拓していくだけの余力がない	その時その時で、違った人と仕事をするのでやりにくい	仕事が単発で継続して仕事がない	報酬その他についての交渉力が弱い	報酬が支払われるまでに時間がかかる	報酬の未払いがある	トラブルが起きても、泣き寝入りすることが多い	問題が起きた時の相談先がない	時間的な余裕がない中で仕事を強いられる	仕事上で要求されることが多岐にわたりに対応に苦労する	同じ仕事でも報酬の額が下がってきている	その他	問題があるとは思っていない	無回答
TOTAL	1,603	4.9	24.8	31.2	3.1	27.0	25.6	11.3	5.2	5.7	9.0	12.4	9.7	20.8	4.9	18.6	7.2
関東地方	865	5.9	26.5	33.6	2.7	30.2	26.9	13.4	7.3	6.5	9.8	12.3	9.1	22.8	5.0	16.0	6.6
近畿地方	311	5.8	27.0	28.9	4.8	27.0	27.7	8.7	1.6	6.8	9.0	14.1	11.6	22.8	4.2	17.7	8.0
沖縄県	77	0.0	19.5	20.8	6.5	28.6	26.0	16.9	5.2	2.6	6.5	6.5	2.6	10.4	1.3	29.9	9.1
その他	350	2.9	19.7	29.4	2.0	18.9	20.3	7.1	3.1	3.7	7.4	12.6	10.9	16.3	6.0	23.4	7.4

(%)

■ 仕事上のケガや病気

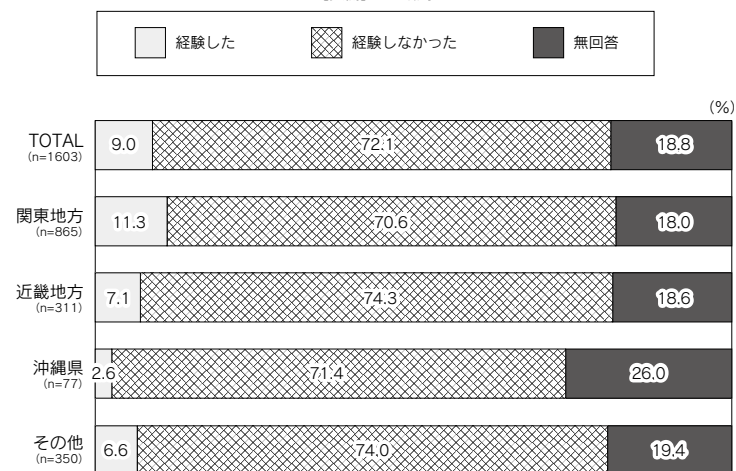
仕事上の傷害は、「関東地方」で割合が若干高くなっています。「沖縄県」では仕事上のケガ、仕事が原因と考えられる病気・症状ともに無回答の割合が高いです。

C-3

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a) 仕事上の傷害(ケガ)

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (a)
仕事上の傷害(ケガ)

【表側】*地域別

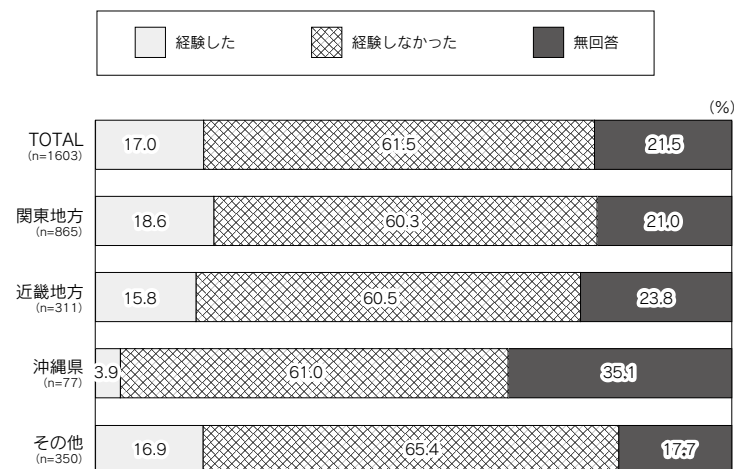


C-3

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (b)
仕事の原因と考えられる病気・症状など

【表側】*地域別

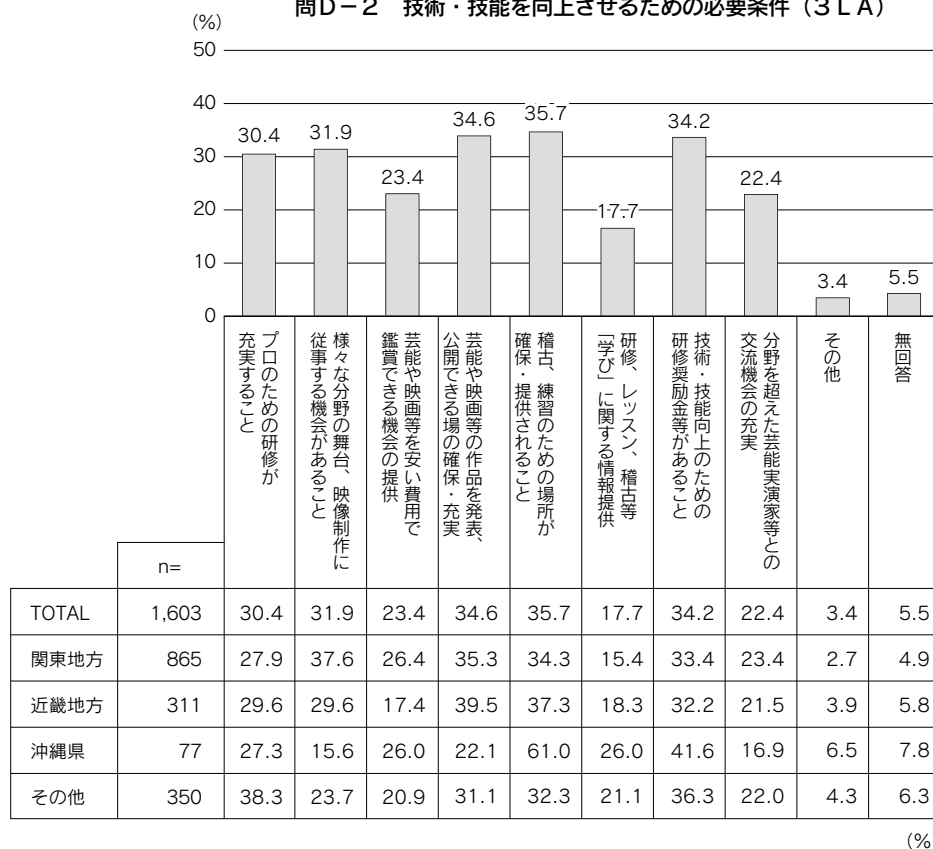


D-2

技術・技能を向上させるための必要条件(3 L A)

技術・技能を向上させるための必要条件では、「沖縄県」で稽古、練習のための場所の確保が61.0%、研修奨励金が41.6%と高くなっています。「関東地方」と「近畿地方」では「稽古、練習のための場所が確保・提供されること」については「近畿地方」が37.3%、「関東地方」が34.3%、「芸能や映画等の作品を発表、公開できる場の確保・充実」が「近畿地方」で39.5%、「関東地方」で35.3%と、「場所」、「場」については「近畿地方」で要望が高いです。「様々な分野の舞台、映像制作に従事する機会があること」では、「関東地方」が37.6%、「近畿地方」が29.6%と、「関東地方」の要望が高くなっています。

問D-2 技術・技能を向上させるための必要条件(3 L A)



■ 仕事に対する考え方と目的

仕事に対する見方は、「関東地方」「近畿地方」は、全国の集計結果の傾向とほとんど変わりませんが、「沖縄県」と「その他の地方」では若干特徴が出ています。

「仕事の量は十分である」については、「その他の地方」は肯定的に捉えている割合がやや高くなっています。「沖縄県」では「そうは思わない」の回答が少ないですが、無回答が多くなっていて、やや否定的な

方に傾いています。

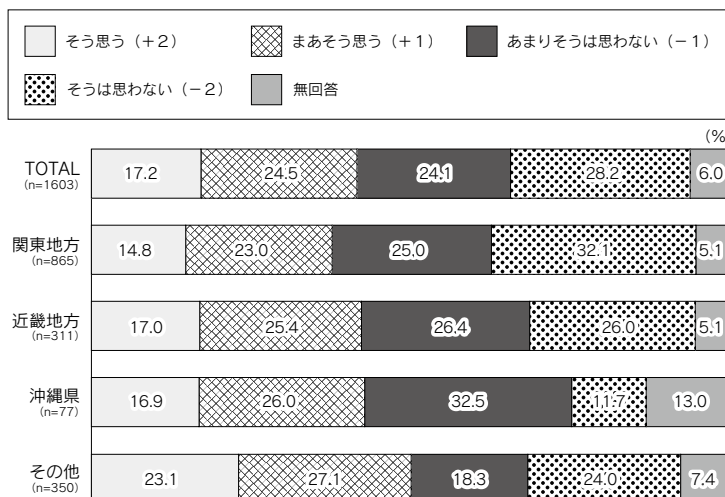
「入ってくる仕事は総じて自分のやりたい『本業』の仕事か」「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができている」「自分の仕事にプライドを持っている」「今の仕事を出来る限り続けたい」については、いずれも地域差はほとんど見られませんでした。

働く目的については、「自分の能

力や才能を発揮するために働く」は「関東地方」で高く、「近畿地方」「沖縄県」と6ポイント程度の差があります。「沖縄県」では「生きがいをを見つけるために働く」が他地域より10ポイント以上高く、「社会の一員として務めを果たすために働く」は他地域の半分程度となっています。

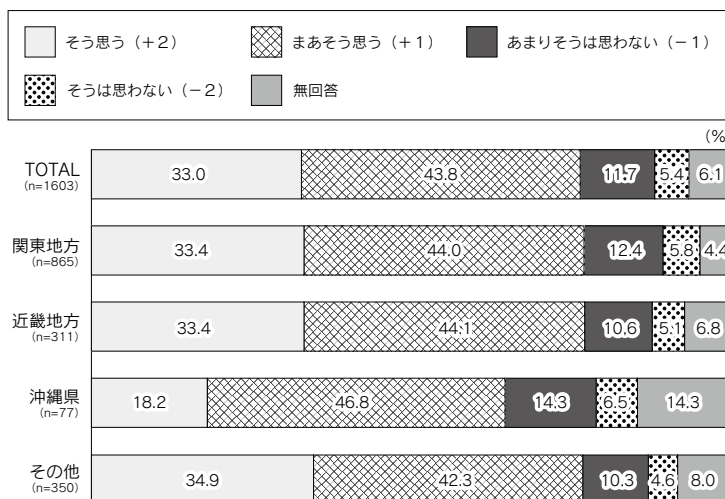
D-1 (a)

仕事に対する考え方
仕事の量は十分である



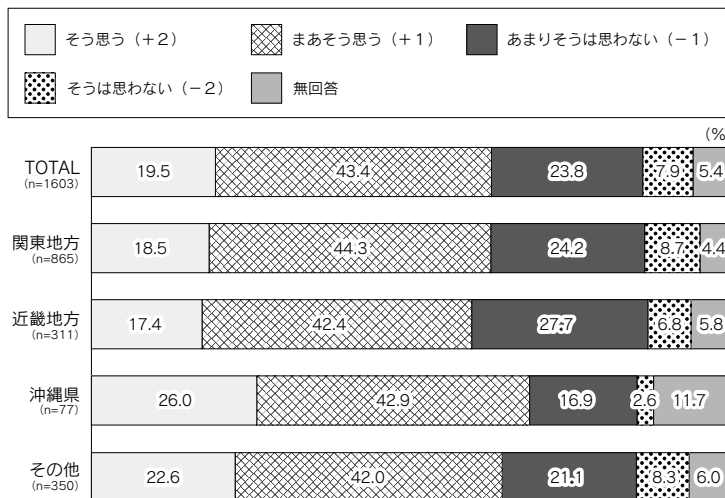
D-1 (a)

仕事に対する考え方
入ってくる仕事は総じて
自分のやりたい
‘本業’の仕事



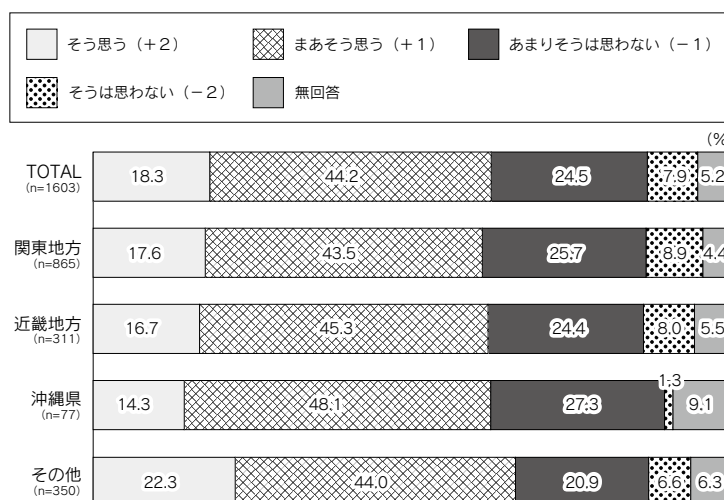
D-1 (a)

仕事に対する考え方
自分の仕事は世の中から
評価されている



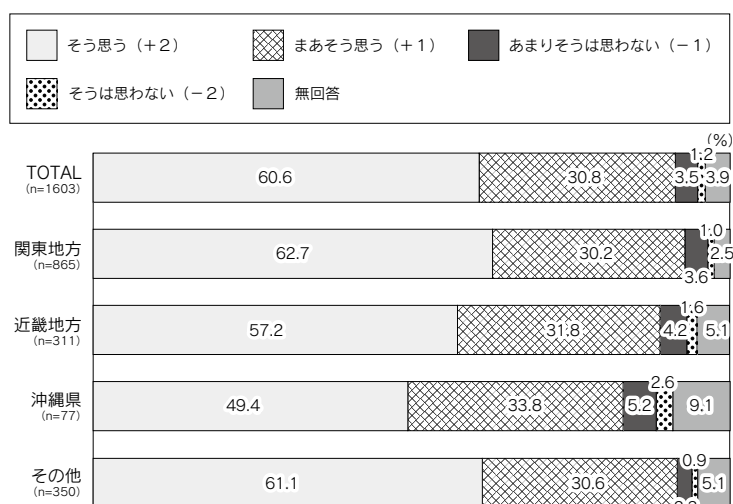
D-1 (a)

仕事に対する考え方
自分が持つ能力を
十分活用することが
できている



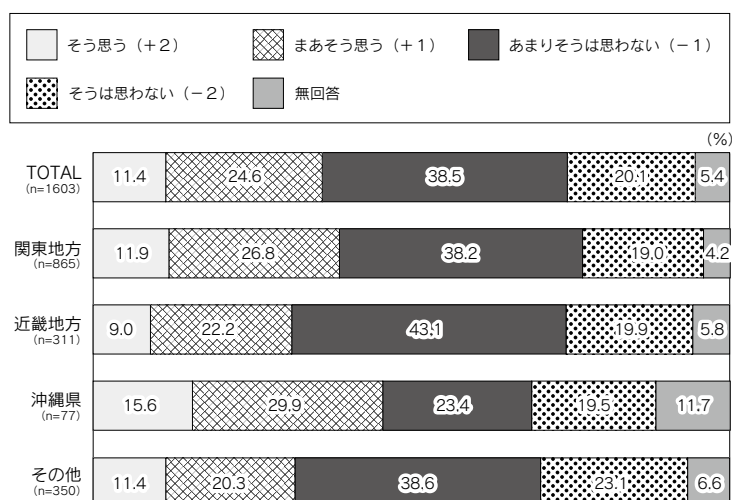
D-1 (a)

仕事に対する考え方
自分の仕事に
プライドを持っている

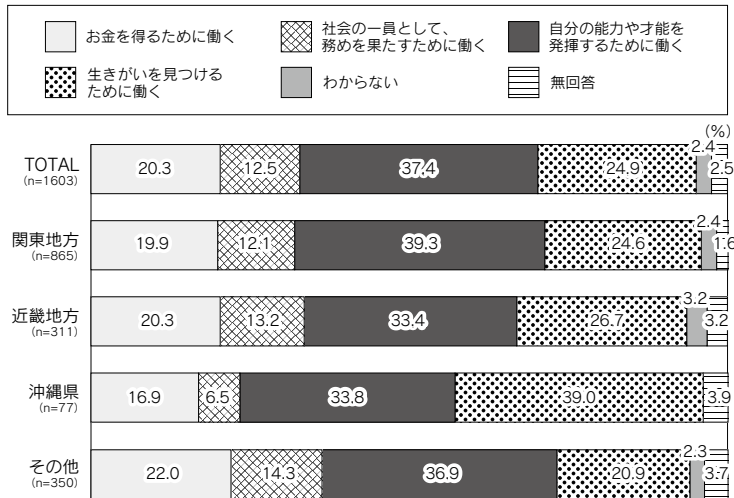


D-1 (a)

仕事に対する考え方
今の仕事を
出来る限り続けたい



D-1 (b)
働く目的



D-3
安心して活動できるための必要条件(3 L A)

安心して活動できるための必要条件については、「関東地方」で文化芸術にたいする社会の理解や公的支援の充実、また、けがや病気の補償や老後の年金制度の充実の割合が他地域よりも高くなっています。「近畿地方」と「その他の地方」では、公共劇場等が文化拠点として機能することの必要性をあげる人の割合が高くなっています。「沖縄県」では、研修への支援、練習場の確保、学校での芸能の教育の機会が十分に組み込まれることを要望する人の割合が他地域よりも高く、地域ごとに異なった傾向があります。

問D-3 安心して活動できるための必要条件(3 L A)

		発表や公演、 出演の機会が多くあること	仕事に関する情報提供等、 就業に関する支援があること	報酬額や就業時間など 仕事の条件が良くなること	効果的な研修の提供等、 技術・技能向上に関する支援	使いやすい練習場、撮影所 などが十分確保されること	失業した時の補償が 充実すること	仕事でけがや病気をした時の 補償が充実すること	老後の生活のために 年金制度が充実すること	公共劇場等が地域の 文化拠点として機能すること	学校において芸能等の教育 機会が十分組み込まれること	文化芸術全般に対する社会の 理解や信用が深まること	文化芸術全般に対する国や 自治体による公的支援の充実	業界団体などによる 支援活動の充実・強化	その他	無回答
	回答数															
TOTAL	1,603	49.8	11.0	38.7	13.7	14.9	10.5	12.7	22.7	17.2	17.5	21.3	31.2	10.9	2.3	3.2
関東地方	865	50.8	11.7	41.3	12.7	12.6	12.5	14.5	25.0	13.3	15.7	24.9	32.6	10.2	1.7	2.1
近畿地方	311	55.6	10.3	38.3	9.6	16.7	9.3	11.6	22.5	22.8	18.6	16.7	25.4	11.3	1.6	3.9
沖縄県	77	51.9	10.4	36.4	20.8	28.6	6.5	7.8	18.2	15.6	24.7	6.5	27.3	9.1	1.3	5.2
その他	350	41.7	10.3	33.1	18.0	16.0	7.4	10.6	18.3	22.0	19.1	19.7	33.7	12.9	4.6	5.1

(%)

第 2 部

スタッフ 編

Ⅰ. 調査集計結果の概観

映画や放送、ライブや舞台など、実演芸術を支えるプロフェッショナルとして、職能団体に所属するスタッフの仕事の状況の調査です

スタッフは、スタッフ会社や劇場・ホールに雇用されている人もいますが、フリーランスとして、あるいは自らスタッフ会社を経営している人も多く、作品ごと、現場ごとに移動しつつ仕事をしています。

スタッフの就労の形態はさまざまで、仕事の依頼主も多様なので、労働環境の整備は進んでいるとは言えず、収入においては景気を反映してか低迷傾向にあります。それでも、技術革新に対応し、常に創造現場に関わることに誇りをもって仕事に臨んでいます。

職能団体所属のプロフェッショナルという範囲内の調査ではありますが、実演芸術に関わるスタッフの現状がここに浮かび上がっています。

■ 中高年齢層、男性が多いスタッフ—回答者の属性分析から

第9回実態調査の対象となったスタッフ回答者の平均年齢は55.1歳です。平均年齢を第8回調査と比較すると3.2歳上昇しており、60歳以上の割合が増え、4割近くを占めて

います。

男女の構成比は、全体では男性が8割以上です。第8回調査に比べると女性の比率は8.0%から7ポイントあがって14.0%になりました。「映

像系」と「ライブ系」を比較すると「ライブ系」の方が女性比率が若干高くなっています。

■ ジャンルと仕事の内容

現在たずさわっている活動分野を複数回答で尋ねた設問では、「テレビ」が最も多く（41.6%）、次いで「演劇・ミュージカル」（36.5%）ですが、「映像系」と「ライブ系」では傾向が異なるので、第8回同様、最も比重が大きい分野の回答に基づき、「映像系」（小ジャンルは3つ）と「ライブ系」（小ジャンルは3つ）に分けて分析していきます。（問A-1(a)、(b)）

たずさわっている職種でみると、「照明」が最も多く33.1%、次いで「ホール・劇場管理」（22.5%）が続きます。最も比重が大きいもの1つに絞っての回答でも「照明」が最も多く19.1%です。

「映像系」と「ライブ系」に分けて傾向をみると、「映像系」で一番多いのは「撮影」（25.8%）で次が「録音—整音」（15.7%）です。「ライブ系」の中では「照明」（26.1%）、「舞台

監督」（25.4%）、「舞台音響」（21.6%）の順です。

現在たずさわっている職務を複数回答で問うと、最も多いのが「技術・担当部門の責任者」（48.9%）、次いで「オペレーター」（35.9%）、「デザイナー・プランナー」（28.0%）です。最も比重が大きいもの1つに絞っても、1位、2位の順位は変わりません。

■ スタッフのキャリア形成

スタッフとしての経験年数は全体の平均が31.6年ですが、「映像系」(32.1年)より「ライブ系」(30.3年)が若干若いです。(問A-4)

現在の活動分野の技術・技能をどのように身につけたかを複数回答で問うと、「舞台技術会社や劇団、撮

影所、製作プロダクションなどに入って技能を身につけた」が56.2%で最も多く、次いで「フリー契約やアルバイトなど現場の経験を経ながら身につけた」が42.6%、3番目に「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」(33.4%)となってい

ます。最も比重が大きいものに絞った回答でも同様の順位です。学校など教育機関よりも、仕事をしながら身につけたという回答が多いのが目立ちます。(問A-5(a)、(b))

■ 教える仕事

昨年1年間に「教える仕事」を行ったスタッフの割合は24.0%で、第8回調査の22.5%よりは1.5ポイント上がりましたが、芸能実演家より経

験率が低いです。(問A-3(a))

どのような学校、機関で教えているかの設問(複数回答)では、「大学・大学院」が46.8%、「専門学

校」(44.3%)、「公立施設などで開催する入門講座、ワークショップ」(22.8%)の順です。

経済状況・景況感について

■ 仕事の状況、景況感

昨年1年間に行った仕事は、「映像系」では「テレビ」(52.8%)、「劇場用映画」(50.9%)が多く、「ライブ系」では、「演劇・ミュージカル」(67.2%)、「コンサート」(65.7%)、「ショー・イベント」が56.0%と続きます。

これを本数でみると、「テレビ」が最も多く27.3本。次が「コンサート」で20.0本です。第8回調査と比較すると、「テレビ」は微減、「コンサート」は微増で、増加が大きかったのは「ビデオ・DVD」(6.3本から10.8本)で、逆に減少が目立ったのは「CM」です(17.3本から8.6本)。日数で比べると平均日数が最も多いものは「劇場用映画」(112.6)、次いで「演劇・ミュージカル」(109.8日)、「テレビ」(108.6日)です。第8回と比較すると、「演劇・ミュージカル」で平均日数が大幅に増え、「劇場用映画」でも増えているのに対し、「PR・教育・記録映画」「CM」「舞踊」で減っています。(問B-1(a)、(b)、(c))

2、3年前と比べて仕事の機会がどうなっているかを問うた設問では、「劇場用映画」「PR・教育・記録映画」「CM」で「大幅に減った／やや減った」が占める割合が5割前後となっています。この3つのジャンルでは、「変わらない」という回答より「大幅に減った」という回答をした人の割合が高く、仕事が減っていると感じている人が多いといえます。

逆に「大幅に増えた／増えた」と感じている人の割合が最も高いのは「テレビ」で約3割を占めています。(問B-2)

舞台・映画・放送メディアスタッフとして通常たずさわっている仕事以外について尋ねた設問では、「通常業務以外の仕事はしていない」という回答が最も多く56.7%です。「通常業務以外の仕事はしていない」は「ライブ系」63.4%に対して「映像系」50.9%で、「ライブ系」のほうが高い割合になっています。(問B-7)

■ 収入～40歳以上で過去の水準を下回る傾向

昨年1年間の個人収入は、「100万円未満」から「400～500万円未満」までの所得層でほぼ5割を占めています。最も多い層は「400万～500万未満」です。ジャンルによって、最も多い所得層に異同があります。

年代別に収入をみてみると、60歳未満までは年齢層があがるにつれて、最も多い所得層の水準が上がっていますが、「65歳から64歳」では「300～400万未満」で小さな山ができており、一方、「500～600万未満」「600～700万未満」「700～800万未満」の階層で、なだらかな

なもうひとつのピークがあるような分布です。年齢層が上がると、そのまま収入が多く維持できている人と、仕事が減って収入が落ち込む人に分化するようです。

第8回の調査と比較してみると、最頻値が「300～400万円」から「400～500万円未満」の所得層に移動しており、「400～500万円未満」「500～600万円未満」の所得層では第9回の方が多くなっていますが、「600～700万円未満」の所得層では、第8回調査（13.5％）に比べて第9回調査（6.4％）が低くなっています。

年代別の収入の平均値を過去の調

査と比較すると、今回の結果は、過去2回と比較して40歳代、50歳代、60歳以上の収入が最も低くなっています。

活動別収入の割合を見てみると、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」が約6割で、次いで「舞台、映画、放送に関するその他の仕事」が13.7％となっています。「年金、不動産、その他の事業」からの収入は6.3％です。第8回調査と比較すると、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」の収入の割合が減り、ほかの収入の割合が上がっています。

■ ライブ系より映像系で多い個人負担の必要経費

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費について、「給与所得だけで確定申告していないので、所得控除の対象になった必要経費はない」とする回答が4割弱を占めています。ジャンル別にみると、「所得控除の対象に

なった必要経費はない」は「ライブ系」が48.5％に対して「映像系」が23.9％で「ライブ系」の方が高いです。

必要経費の中で最も多いのが「交通費」で、次いで「通信費」「接待費・交際費」です。

ジャンル別にみると、「映像系」の方が「ライブ系」より負担の割合が高い項目が多く、「個人負担はない」は「映像系」より「ライブ系」の方が高くなっています。

労働環境について

■ 雇用形態と仕事の入り方

スタッフの雇用形態は、4割強が「フリーランス」で、「正社員・正職員」が26.7%、「会社を経営」が19.8%となっています。

ジャンル別にみると、「映像系」と「ライブ系」の構成は異なっています。「映像系」では「フリーランス」の割合が最も高く62.9%で、「正社員・正職員」の14.5%、「会社を経営」の13.8%を大幅にしのいでいます。小ジャンルでみると、「フリーランス」の割合が特に高いのが、「劇場用映画」(73.8%)です。

これに対し、「ライブ系」では「正社員・正職員」が59.5%と最も高く、次いで「会社を経営」(28.4%)、「フリーランス」(23.1%)の順です。「ライブ系」の小ジャンルでみると、「正社員・正職員」の割合が多いのが「コンサート」(47.2%)で、「ライブ系その他」では、「会社を経営」「正社員・正職員」の割合がともに38.0%となっています。

「フリーランス」「契約社員」の場合、「作品契約」の割合は「映像系」、特に「劇場用映画」で高く、「ライ

ブ系」でも「演劇・ミュージカル」で「作品契約」が多くなっています。「テレビ」は「本数契約」が多く、「ライブ系」では「年契約」「1日単位」も多めです。

昨年1年間で、仕事をする意思があっても仕事が入らず、スケジュールが空いた合計日数の平均は108.2日でした。ジャンル別にみると、「映像系」が133.9日であるのに対して「ライブ系」は51.6日で、「映像系」のほうが長くなっています。

■ 深夜作業の程度について

事前に予定されていた、公共交通機関での帰宅が難しい深夜作業は、スタッフ全体では「ほとんどない」の割合が最も高く26.7%ですが、ジャンル別にみると、「映像系」では「たまにある」(24.5%)、「ときどきある」(22.0%)、「よくある」

(22.0%)と、「ある」と回答している割合の方が高いです。

当日急に発生した深夜作業も、スタッフ全体では「ほとんどない」の割合が最も高く34.3%です。ジャンル別にみると、「映像系」の方が「ライブ系」より「ある」という経

験率が高くなっています。当日発生した深夜作業への対応では、「映像系」は、「タクシー等による送り」が多く、「ライブ系」では「車で移動している」が多くなっていて、ジャンルによって対応の傾向が異なります。

■ 仕事上でのケガ、病気と治療負担、補償

昨年1年間に仕事上で、医師の治療が必要となった傷害(ケガ)を経験した割合は9.1%、仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状を経験した割合は14.3%です。傷害(ケガ)が発生した場所は、最も多いのが「舞台・ステージ」(33.3%)で、次いで「ロケ現場」(30.0%)です。

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)に対す

る治療費等の負担状況は、仕事上のケガを経験したと回答した30人中17人が「自分で負担した」で、「労災保険が適用された」は4人のみです。

治療費以外の補償状況では、30人中23人が「何もない」で、「見舞い金程度」が2名、休業補償があったのが1人のみです。

昨年1年間に仕事上で医師の治療

が必要となった病気・症状などを経験したという回答者は47名で、それに対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が47人中44人の9割以上で、「労災が適用された」は1名にすぎません。

治療費以外の補償状況では、47人中38人が「何もない」で、「見舞い金程度」「休業補償」は3人です。

■ 仕事上の問題点

仕事上の問題点を複数回答で尋ねたところ、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」、「時間的な余裕がない中での仕事を強い

られる」が1～3位でした。

ジャンル別にみると、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」は「映像系」で高く、「仕事が単発で継続して仕事がない」「報酬その

他についての交渉力が弱い」「仕事のキャンセルがよくある」などで「ライブ系」に比べて「映像系」で問題と感じている割合が高くなっています。

■ よりよい活動が続けていくために

技術・技能を向上させるための必要条件として、「様々な分野の舞台、映画製作に従事する機会があること」、「プロのための研修が充実すること」、「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること」、「分野を超えて舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること」が続いています。

ジャンル別にみると、「芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること」は「映像系」の方が高くなっています。

安心して活動していくための必要条件是、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が63.5%で最も高く、「芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実するこ

と」、「老後の生活のために年金制度が充実すること」が続いています。

ジャンル別にみると、「公的な支援が充実すること」は「ライブ系」の中でも「演劇・ミュージカル」が54.2%で特に高くなっています。「公共劇場や音楽堂などが整備され、地域の文化拠点として機能すること」も、「ライブ系」は「映像系」より高くなっています。

仕事や生活に対する考え方

■ プライドを持ち、できる限り今の仕事を続けたい

「自分の仕事にプライドを持って」おり、「いまの仕事をできる限り続けたい」と思っています。入ってくる仕事はだいたい「自分がやりたい」と思っている「本業」の仕事で、「自分の仕事は世の中から評価されている」もので、まあまあ「自分が持つ能力を活用することができている」と考えています。ただし、「仕事の量は十分」と言われると、「映像系」は「ライブ系」より十分でないと思っている割合の方が高く、「ラ

イブ、舞台公演など“なま”の芸能の将来」については、あまり明るい見通しを持っているとは言えないようです。

働く目的は「自分の能力や才能を発揮するために働く」という回答が36.5%で最も高く、「お金を得るために働く」が31.9%でそれに続いています。「生きがいを見つけるために働く」は15.5%、「社会の一員として、務めを果たすために働く」は10.6%です。

小ジャンルの傾向を見てみると、「コンサート」では「お金を得るため」(47.2%)が「自分の能力や才能を発揮するため」(19.4%)を上回っているのが目立ちます。

芸能実演家に比べると「お金を得るため」の割合が高いですが、国民生活に関する世論調査にみる世間一般の意識と比べると、やはり「能力や才能の発揮」や「生きがい」が勝っています。

II. 調査設計・調査回答者について

■ 調査設計

調査対象者は、第8回と同様に芸団協加盟の技術スタッフ関連の協会および、映像関係職能団体に協力を依頼し、それぞれに所属の個人に調査票を送付しました。

	第9回
調査対象者	日本芸能実演家団体協議会加盟団体および 映像関係職能団体7団体に所属する個人 **
調査方法	郵送法（一部団体発送）
抽出方法	団体名簿による割当法 ***
調査期間	2014年8月1日（金）～31日（日）
発送数	1,440
総回収数 *	334
有効回収数	329
有効回収率	22.8%
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

* 総回収数は、白票など無効票を含めた回収数

** 映像関係職能団体は8団体あるが、シナリオ作家協会は現場スタッフではないので対象外

*** スタッフ編は、発送時にジャンルによる分類を行っていない。

< 参考 > 調査設計

	第8回
調査対象者	日本芸能実演家団体協議会加盟団体および 映像関係職能団体7団体に所属する個人 **
調査方法	郵送法（一部団体発送）
抽出方法	団体名簿による割当法 ***
調査期間	2009年7月10日（金）～8月8日（土）
発送数	1,320
総回収数 *	291
有効回収数	289
有効回収率	21.9%
調査協力機関	株式会社インテージ

■ 回答者のジャンル構成比について

問 A-1(b)「たずさわっている仕事の分野のうち最も比重の大きいもの」の回答結果をもとに、下記のように映像系(3ジャンル)、ライブ系(3ジャンル)の計6ジャンルに分類しています。映像系が48.4%、ライブ系が40.7%を占めています。

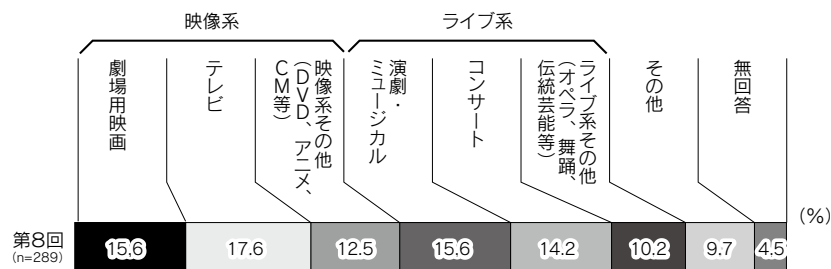
第9回調査回答者のうち、最も多いジャンルは、「劇場用映画」(19.8%)、次いで「テレビ」(15.8%)、それに「ライブ系その他(オペラ、舞踊、伝統芸能等)」(15.2%)が続いています。

第8回調査と比べて「劇場用映画」の回答者の割合が高くなっています。



<参考>

第8回 ジャンル別回収率

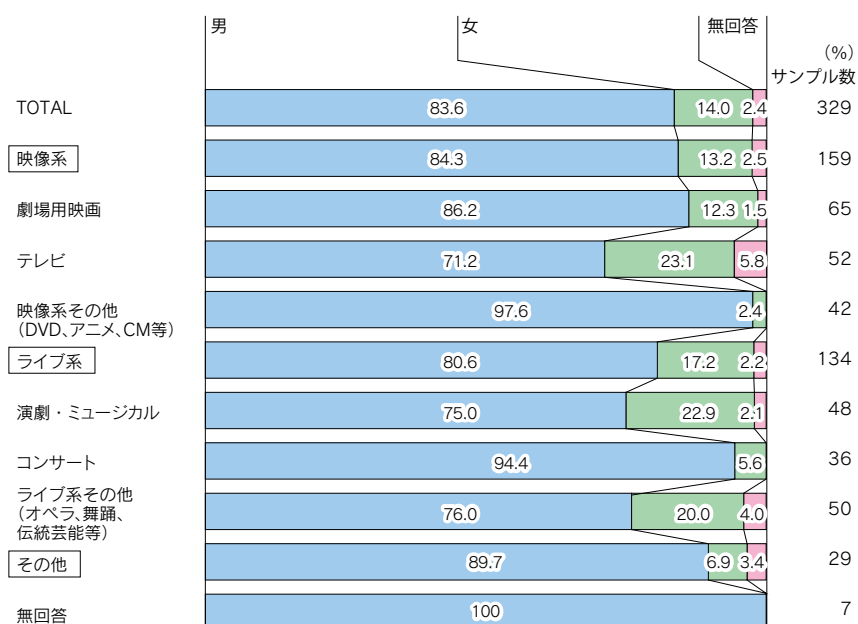


■ E-1 性別

男女の構成比は、男性が83.6%、女性が14.0%で男性が8割以上を占めています。

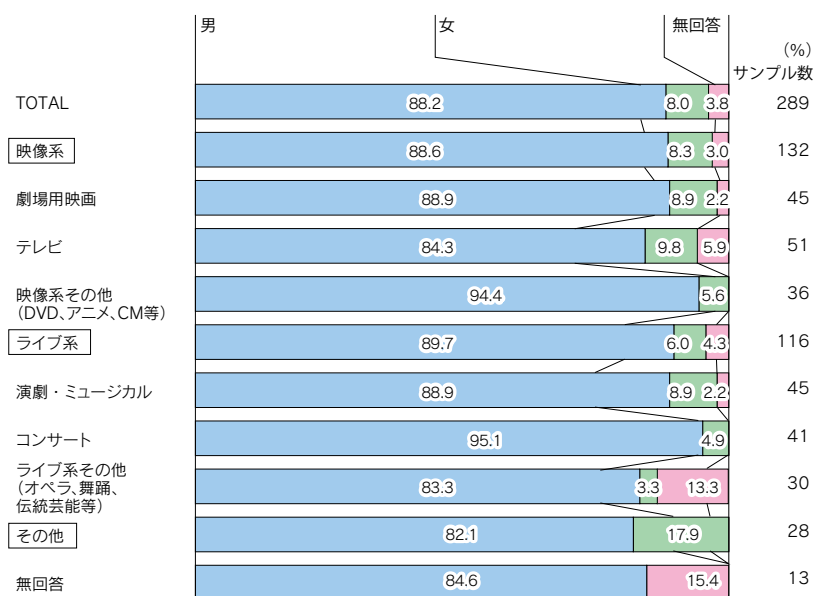
第8回調査と比較すると、女性の比率は8.0%から6ポイントあがっており、「テレビ」「演劇・ミュージカル」「ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）」で女性の割合が増えています。小ジャンルでみると「テレビ」で女性の比率が23.1%、「演劇・ミュージカル」で22.9%と2割を超えています。

問 E-1 性別



<参考> 第8回調査 調査結果

問 E-1 性別

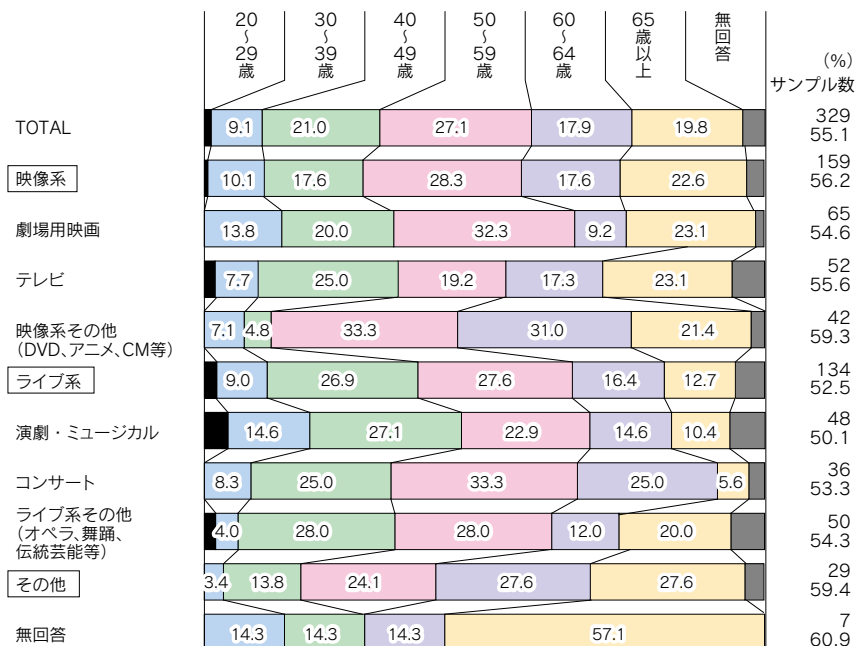


■ E-1 年齢

第9回調査の平均年齢は55.1歳。最も多い年齢層は「50～59歳」(27.1%)です。「映像系」と「ライブ系」では、「映像系」の方が年齢層が高くなっています。小ジャンル別にみて、特に年齢層が高いのは、「映像系その他」で、平均年齢は59.3%、50歳以上で85.7%を占めています。全般的に中高年齢層が多数派ですが、小ジャンルでみると「映像系」の中の「テレビ」、「ライブ系」の中の「演劇・ミュージカル」は「40歳～49歳」の層の割合の方が「50歳～59歳」より高く、若干若い層が多いです。

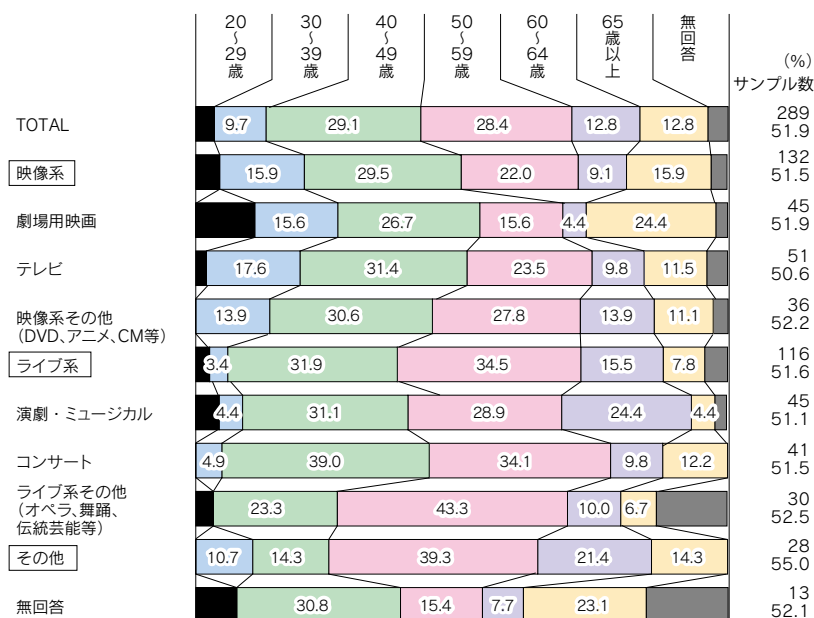
第8回調査結果と比べると平均年齢は3.2歳上がっており、「60～64歳」「65歳以上」の割合が増えて4割近くになっています。

問 E-1 年齢



<参考> 第8回調査 調査結果

問 E-1 年齢



Ⅲ. 分析結果詳細

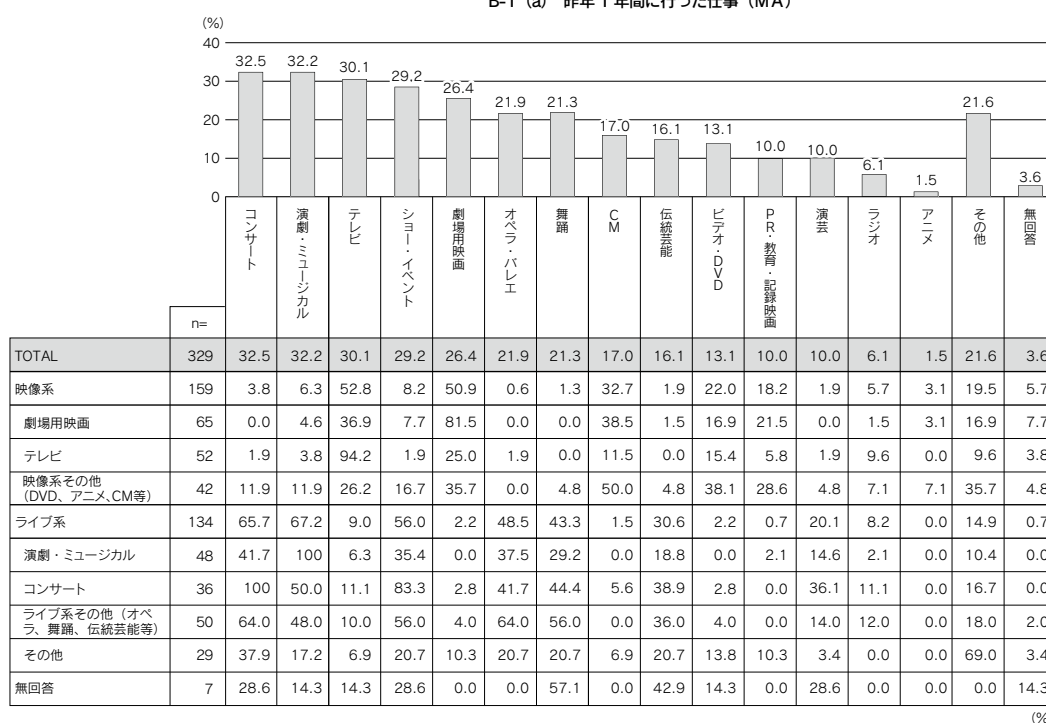
(1) 経済状況・景況感について

B-1 (a)

昨年1年間に行った仕事(MA)

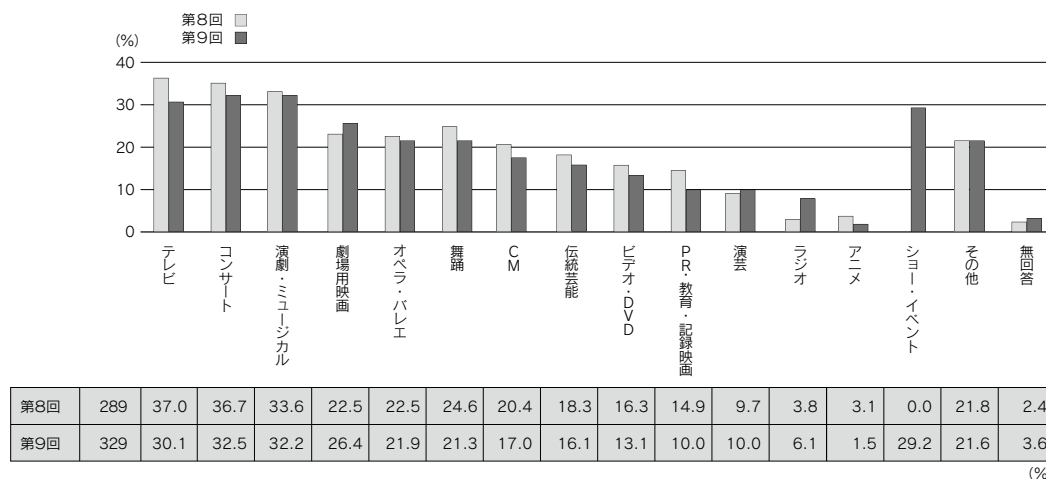
昨年1年間に行った仕事は、全体で見ると「コンサート」が最も多く32.5%ですが、「映像系」と「ライブ系」で分けると「映像系」では「テレビ」(52.8%)、「劇場用映画」(50.9%)が多く、「ライブ系」では、「演劇・ミュージカル」(67.2%)、「コンサート」(65.7%)、「ショー・イベント」(56.0%)と続きます。

B-1 (a) 昨年1年間に行った仕事 (MA)



<参考> 第8回調査 調査結果

B-1 (a) 昨年1年間に行った仕事 (MA)

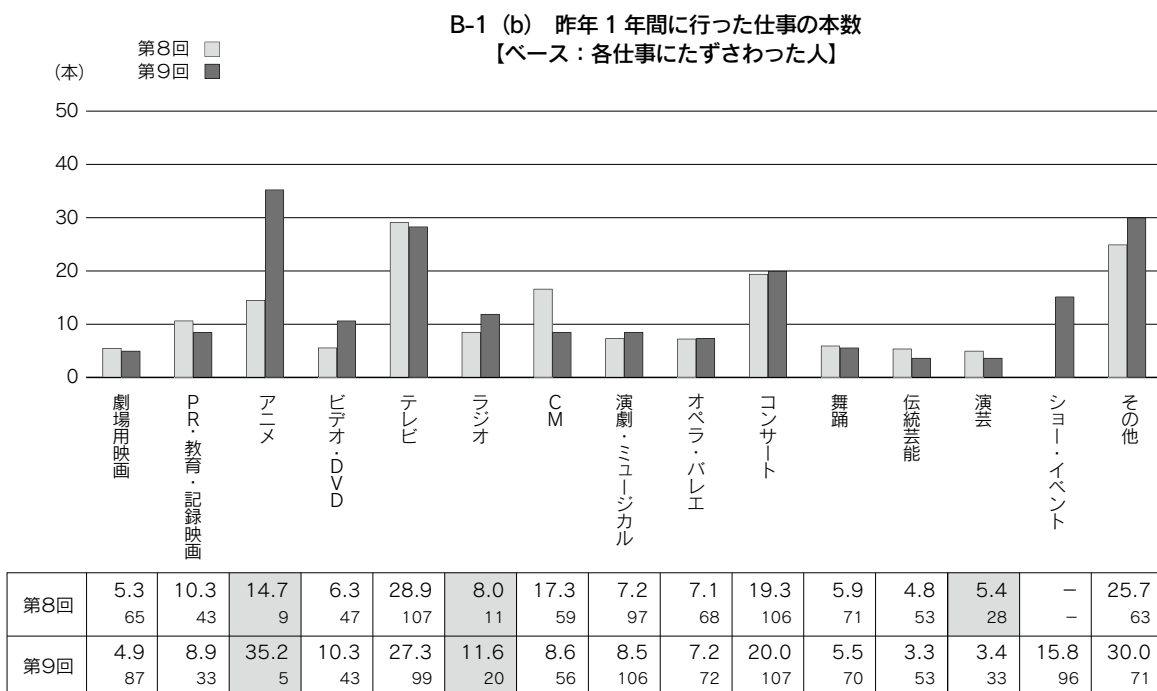


B-1 (b)

昨年1年間に行った仕事の本数【ベース：各活動にたずさわった人】

昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いものは「テレビ」で27.3本、最も少ないものは「伝統芸能」で3.3本です。

第8回調査結果と比べると、「ビデオ・DVD」（第8回：6.3本、第9回：10.8本）は平均本数が増えており、「CM」（第8回：17.3本、第9回：8.6本）は減っています。



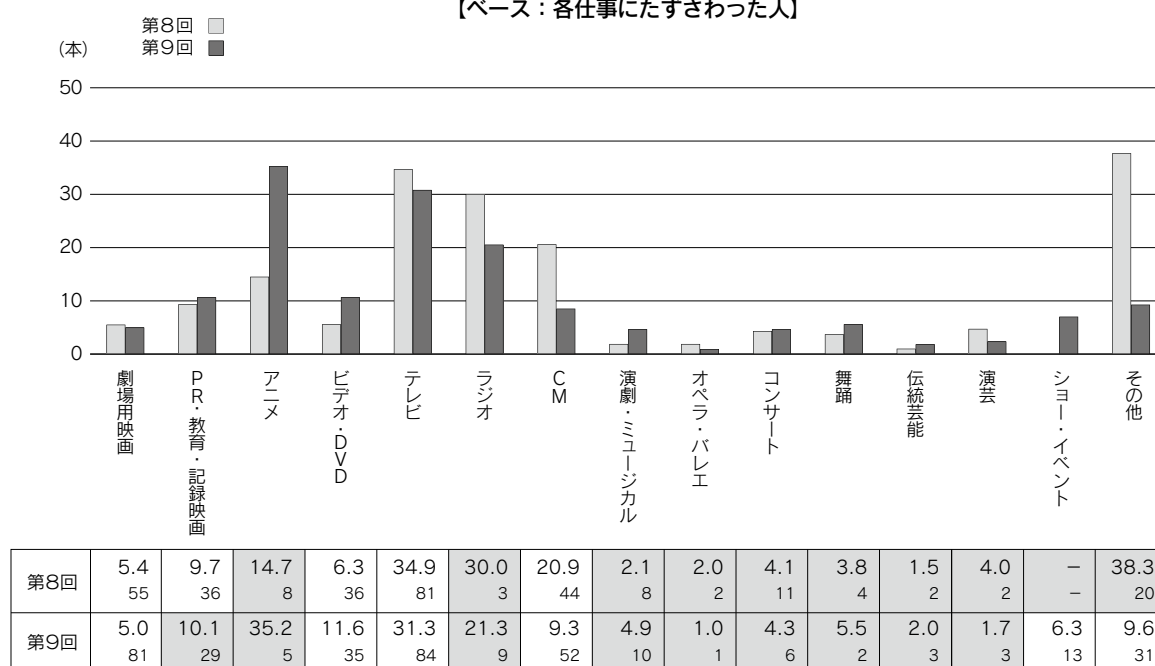
B-1 (b)

昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別:映像系) 【ベース:各仕事にたずさわった人】

昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いものは「テレビ」で27.3本、最も少ないものは「伝統芸能」で3.3本です。

第8回調査結果と比べると、「ビデオ・DVD」(第8回:6.3本、第9回:10.8本)は平均本数が増えており、「CM」(第8回:17.3本、第9回:8.6本)は減っています。

B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別:映像系)
【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段:平均本数(本)

下段:サンプル数(人)

※数表に網かけしている箇所は、サンプル数30未満のため参考値扱いとする。

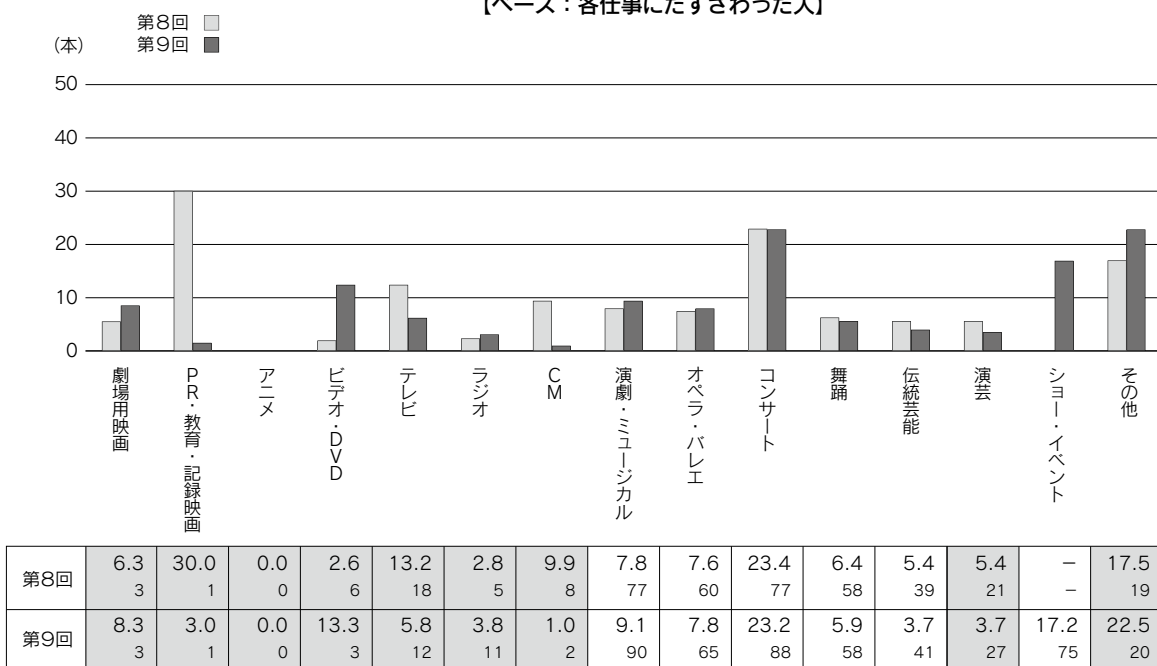
B-1 (b)

昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別:ライブ系) 【ベース:各仕事にたずさわった人】

ライブ系では、昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いものは「コンサート」で23.2本、最も少ないものは「伝統芸能」で3.7本です。第9回調査では選択肢に「ショー・イベント」を追加していますが、「ライブ系」では17.2本にのぼっていて、「コンサート」に次いで多いです。

第8回調査結果と比べると、「演劇・ミュージカル」(第8回:7.8本、第9回:9.1本)は平均本数が若干増えており、「伝統芸能」(第8回:5.4本、第9回:3.7本)は減っています。

B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別:ライブ系)
【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段: 平均本数 (本)

下段: サンプル数 (人)

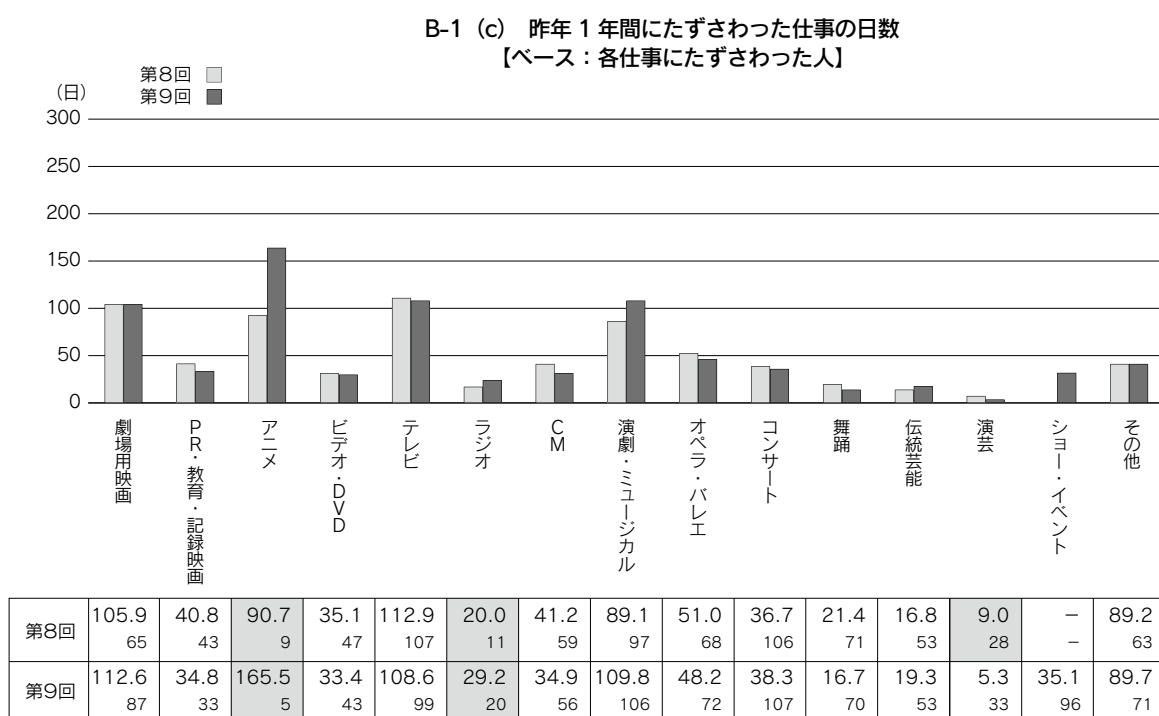
※数表に網かけしている箇所は、サンプル数30未満のため参考値扱いとする。

B-1 (c)

昨年1年間にたずさわった仕事の日数 【ベース：各仕事にたずさわった人】

昨年1年間にたずさわった仕事の日数で平均日数が最も多いものは「劇場用映画」で112.6日、最も少ないものは「演芸」で5.3日です。

第8回調査結果と比べると、「演劇・ミュージカル」で平均日数が大幅に増え、「劇場用映画」でも増えているのに対し、「PR・教育・記録映画」「CM」「舞踊」で減っています。



上段：平均本数（本）

下段：サンプル数（人）

※数表に網かけしている箇所は、サンプル数30未満のため参考値扱いとする。

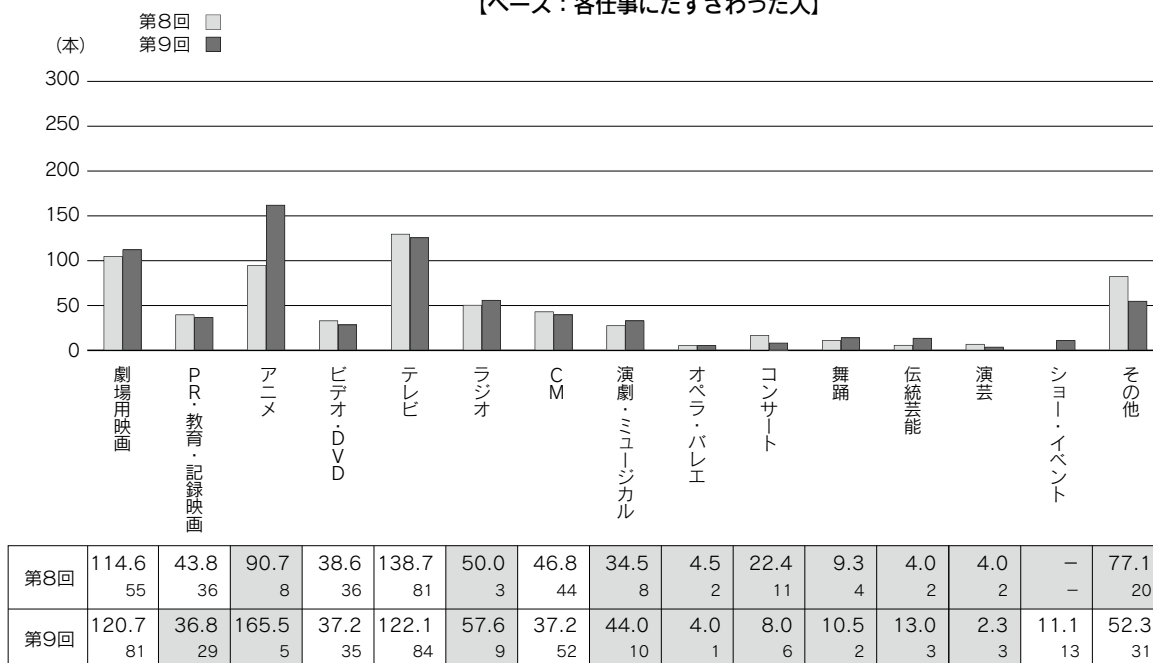
B-1 (c)

昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:映像系) 【ベース:各仕事にたずさわった人】

ジャンル別に仕事にたずさわった日数を問うてみると、「映像系」では、昨年1年間にたずさわった仕事の日数で平均日数が最も多いものは「テレビ」で122.1日、最も少ないものは「ビデオ・DVD」「CM」でともに37.2日です。

第8回調査結果と比べると、「劇場用映画」で平均日数が増えていますが、「テレビ」「CM」では減っています。

B-1 (c) 昨年1年間にを行った仕事の日数(ジャンル別:映像系)
【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段: 平均本数 (本)

下段: サンプル数 (人)

※数表に網かけしている箇所は、サンプル数 30 未満のため参考値扱いとする。

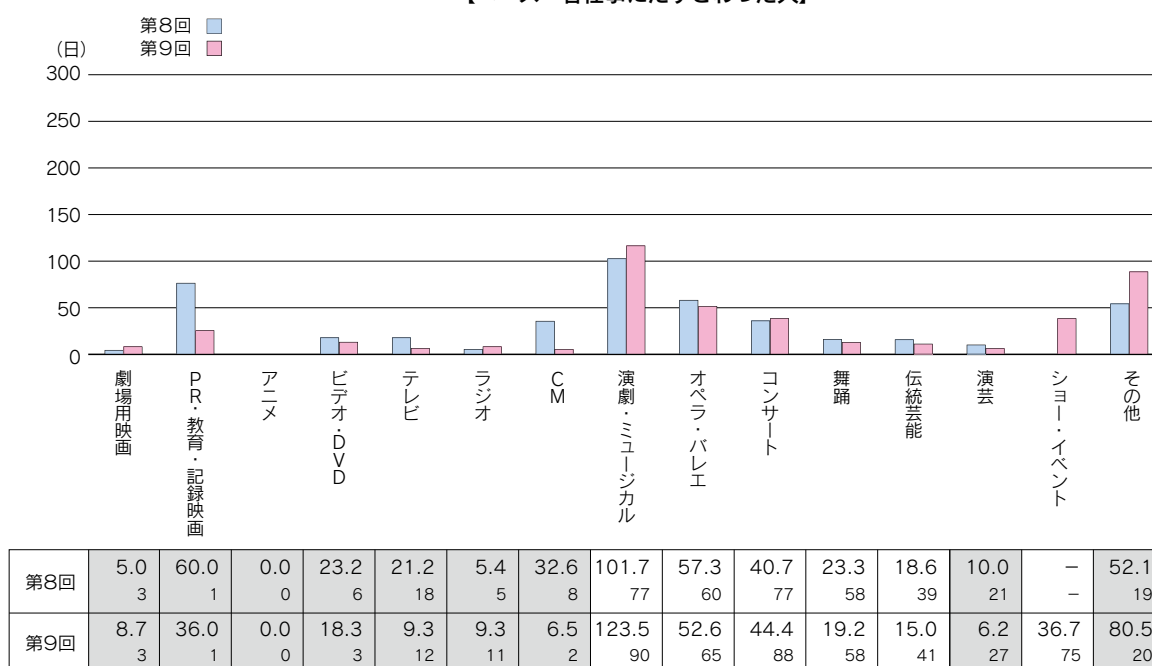
B-1 (c)

昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:ライブ系) 【ベース:各仕事にたずさわった人】

「ライブ系」では、昨年1年間にたずさわった仕事の日数で平均日数が最も多いものは「演劇・ミュージカル」で123.5日、次いで「オペラ・バレエ」が52.6日。最も少ないものは「伝統芸能」で15.0日です。

第8回調査結果と比べると、「演劇・ミュージカル」の平均日数が大きく増え、「コンサート」でも増えているのに対し、「オペラ・バレエ」「舞踊」「伝統芸能」で減っています。

B-1 (c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:ライブ系)
【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段: 平均本数 (本)

下段: サンプル数 (人)

※数表に網かけしている箇所は、サンプル数30未満のため参考値扱いとする。

B-2

仕事の機会について 2～3年前との比較

【ベース：
各仕事にたずさわった人】

2～3年前と比べて昨年1年間の仕事の機会についてどう感じているかを問う設問では、「劇場用映画」「PR・教育・記録映画」「CM」で「大幅に減った／やや減った」が占める割合が5割前後で高くなっています。この3つのジャンルでは、「変わらない」という回答より「大幅に減った」という回答をした人の割合が高いです。

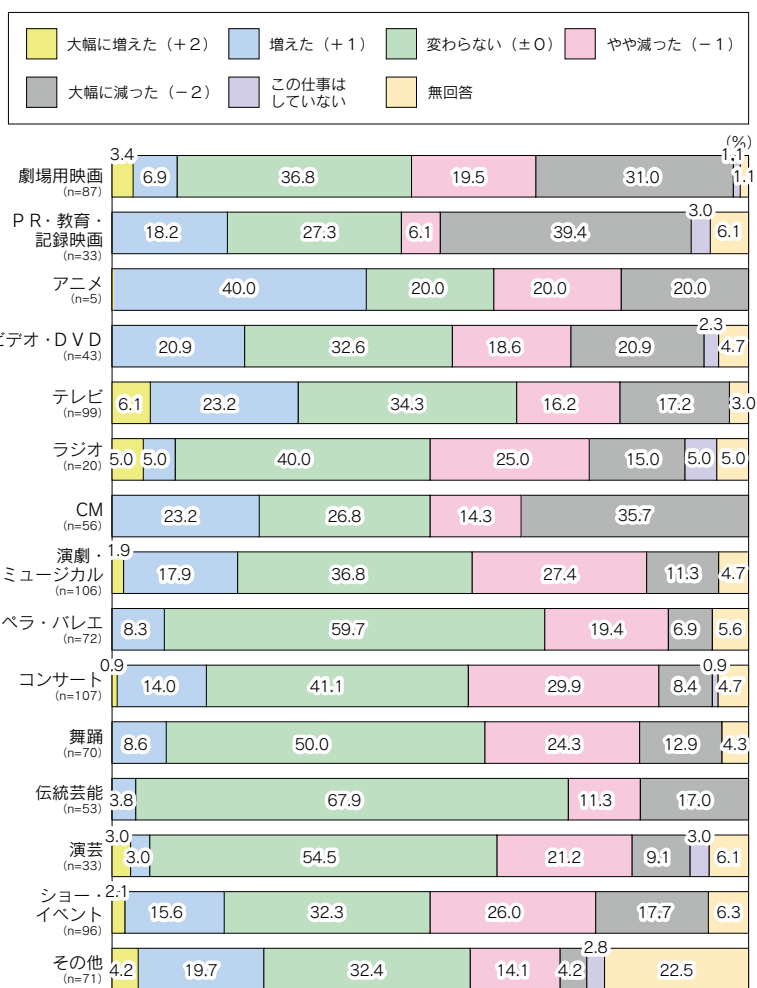
「大幅に増えた／増えた」の割合が最も高いのは「テレビ」で約3割を占めています。

※「アニメ」「ラジオ」は、サンプル数30未満のため参考値扱いとする。

映像系の仕事内容

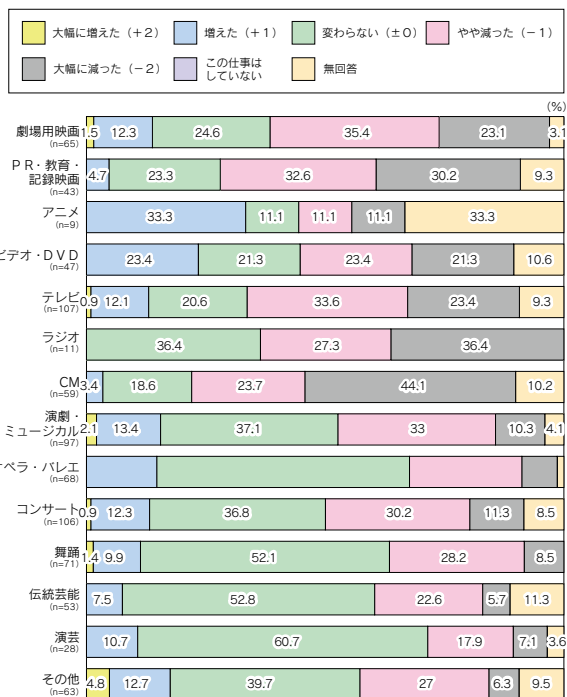
ライブ系の仕事内容

問B-2 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事にたずさわった人】



<参考>第8回調査 調査結果

問B-2 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事にたずさわった人】



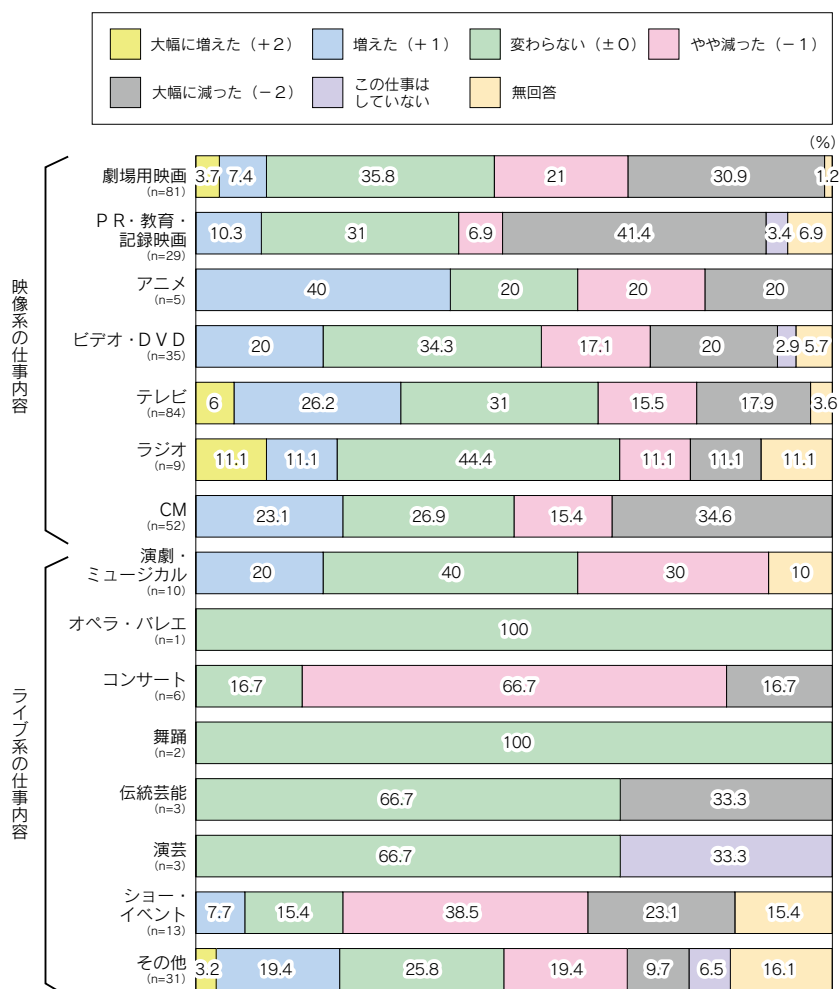
B-2

仕事の機会について2～3年前との比較 【ベース：各仕事にたずさわった人】

「映像系」では、2～3年前と比べて昨年1年間の仕事の機会について「劇場用映画」と「CM」で「やや減った／大幅に減った」の割合が5割を超えています。「CM」では、「大幅に増えた」はゼロで、「増えた」が23.1%ありますが、「劇場用映画」では、「大幅に増えた／増えた」を合わせても11.1%です。「ビデオ・DVD」「テレビ」では、増加したと感じている人と減少したと感じている人の割合がほぼ拮抗しているのに比べて減少したと感じている人の割合が高いです。

■ 映像系

問B-2 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事にたずさわった人】



※サンプル数30未満の仕事は参考値扱いとする。

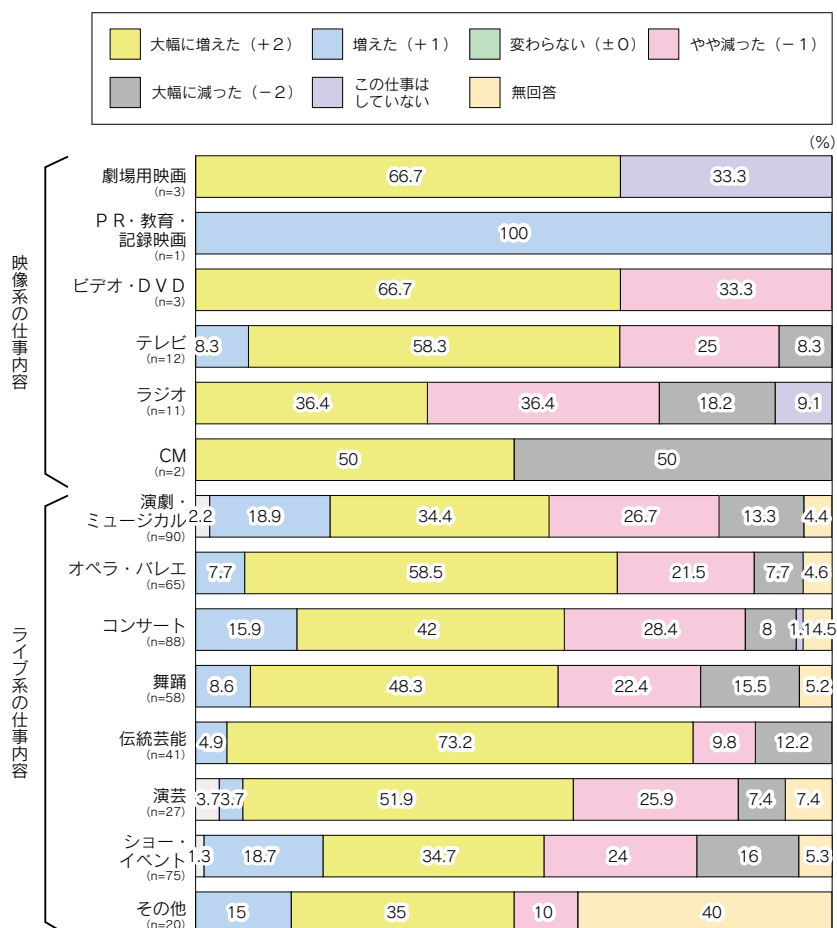
B-2

仕事の機会について2～3年前との比較 【ベース：各仕事にたずさわった人】

「ライブ系」では、いずれのジャンルでも「変わらない」という回答が一番多いですが、「演劇・ミュージカル」と「ショー・イベント」で「やや減った／大幅に減った」の割合が4割を占めています。この2つの仕事では「大幅に増えた／増えた」も20%あり、人によって、増減の感じ方が異なるようです。一方「オペラ・バレエ」「舞踊」は増えたと感じている人の割合は低いです。

■ ライブ系

問B-2 仕事の機会について2～3年前との比較
【ベース：各仕事にたずさわった人】



※サンプル数 30 未満の仕事は参考値扱いとする。

B-7

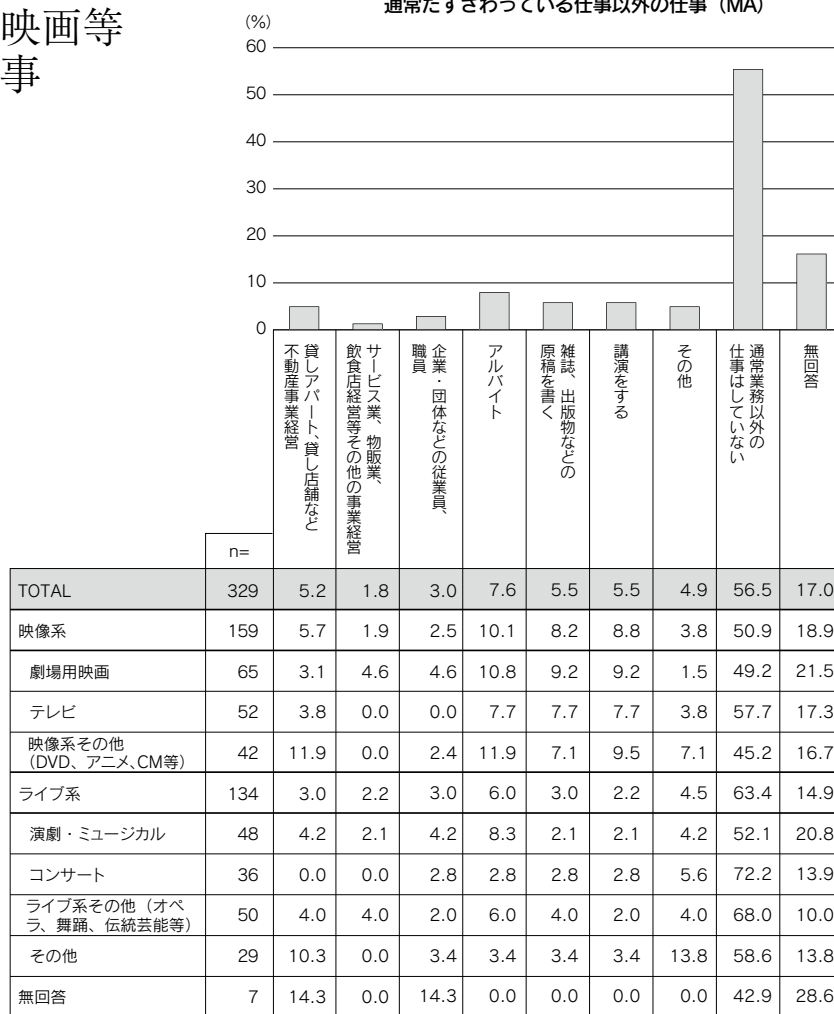
昨年1年間に行った舞台・映画等 通常たずさわっている仕事 以外の仕事(MA)

昨年1年間に舞台・映画等通常たずさわっている仕事以外の仕事の経験を問うています。「通常業務以外の仕事はしていない」は56.5%と、全体の約6割は通常の仕事以外の仕事はしていません。一方、選択肢にあるいずれかの仕事をした人の割合は26.5%です。

通常たずさわっている仕事以外の具体的な仕事は、「アルバイト」が7.6%、「雑誌、出版物などの原稿を書く」と「講演をする」がともに5.5%です。

「通常業務以外の仕事はしていない」は「ライブ系」63.4%に対して「映像系」50.9%で、「ライブ系」のほうが高い割合になっています。

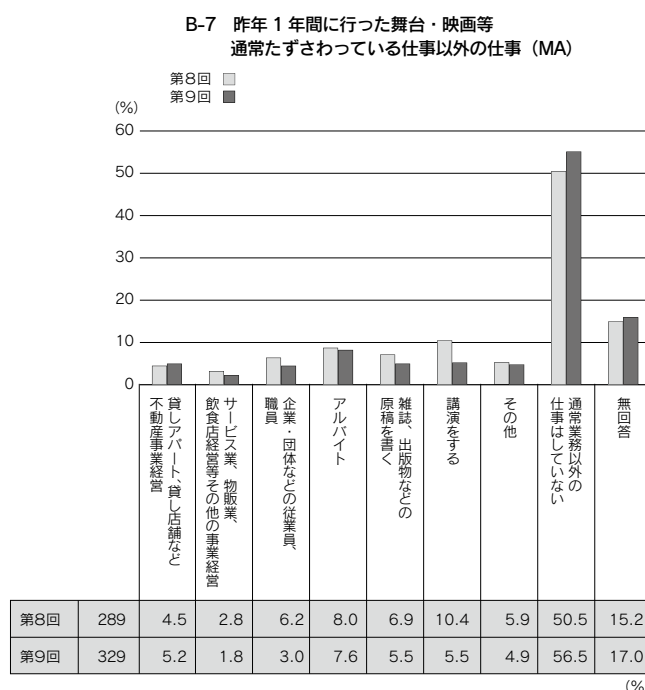
B-7 昨年1年間に行った舞台・映画等
通常たずさわっている仕事以外の仕事 (MA)



※サンプル数30未満は参考値扱いとする。

(%)

<参考>第8回調査 調査結果



(%)

B-3 (a)

昨年1年間の個人収入(ジャンル別)

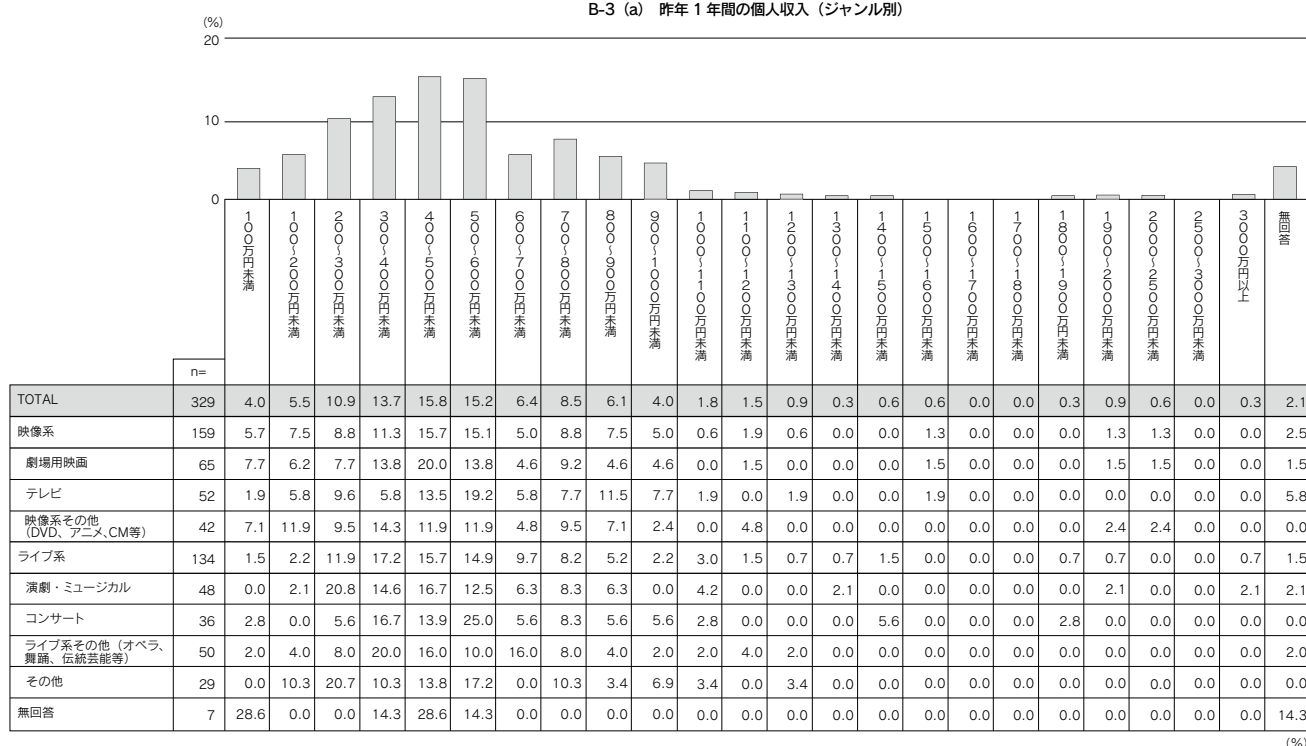
昨年1年間の個人収入は、「100万円未満」から「400～500万円未満」までの所得層でほぼ5割を占めています。「300～400万円」(13.7%)、「400～500万円未満」(15.8%)、「500～600万円未満」(15.2%)の割合が比較的高いです。

「映像系」では最頻値が「400～

500万円未満」(15.7%)で、「600～700万円未満」で5.0%と大きく減少した後、「700～800万円未満」で8.8%と、二つめの小さなピークが形成されています。一方「ライブ系」は最頻値は「300～400万円未満」(16.7%)で、所得層があがるにつれ割合は減少し、ピークはひとつです。さらに

小ジャンルでみると、「演劇・ミュージカル」は「200～300万円未満」が20.8%と最も多くなっていますが、「コンサート」では、「500～600万円未満」が25.0%で最も多く、ジャンルによって収入の傾向が若干異なります。

B-3 (a) 昨年1年間の個人収入(ジャンル別)



(%)

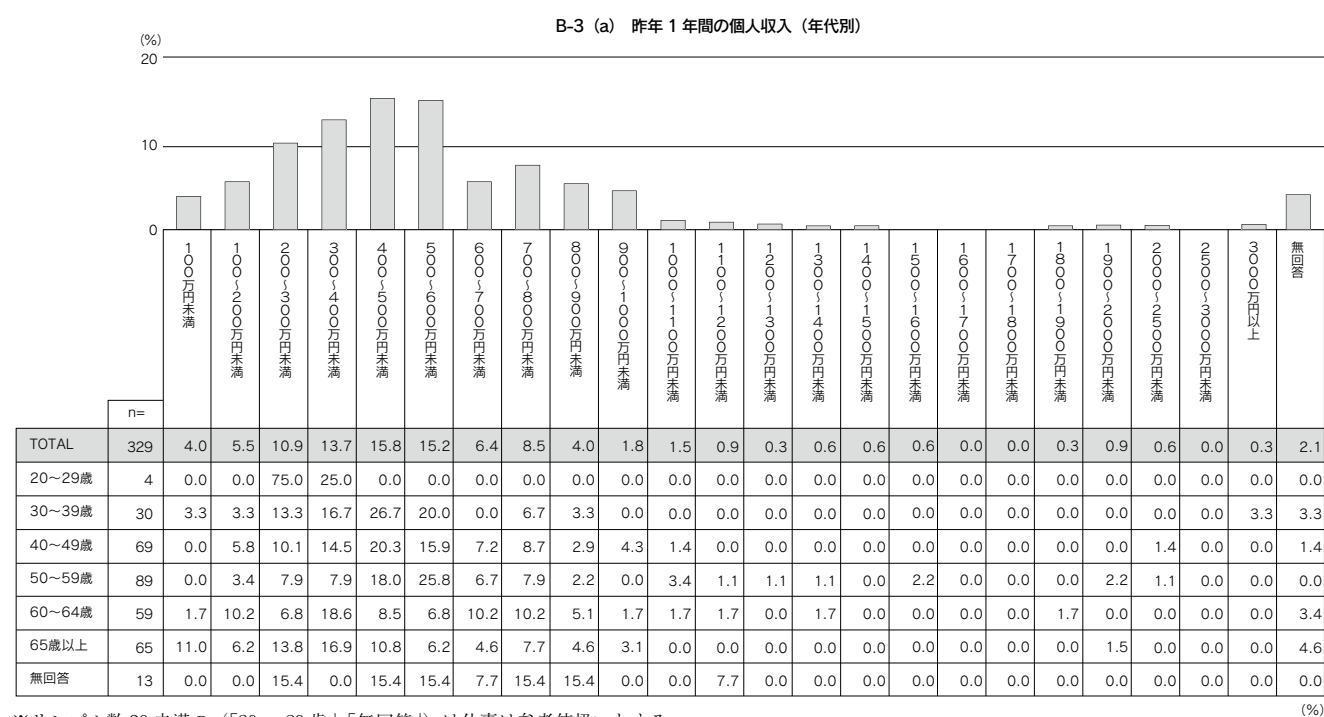
B-3 (a)

昨年1年間の個人収入(年代別)

個人収入を年代別にみてみます。年代別の最頻値は、「30～39歳」では「400～500万円未満」が26.7%と最も多く、「40～49歳」では同じく「400～500万円未満」が最も多く、「50～59歳」は「500～

600万円未満」が25.8%と最も多くなっています。「60～64歳」では、「600～700万円未満」「700～800万円未満」がともに10.2%となっています。ここまでは年齢層が高くなるにつれて収入もあがってい

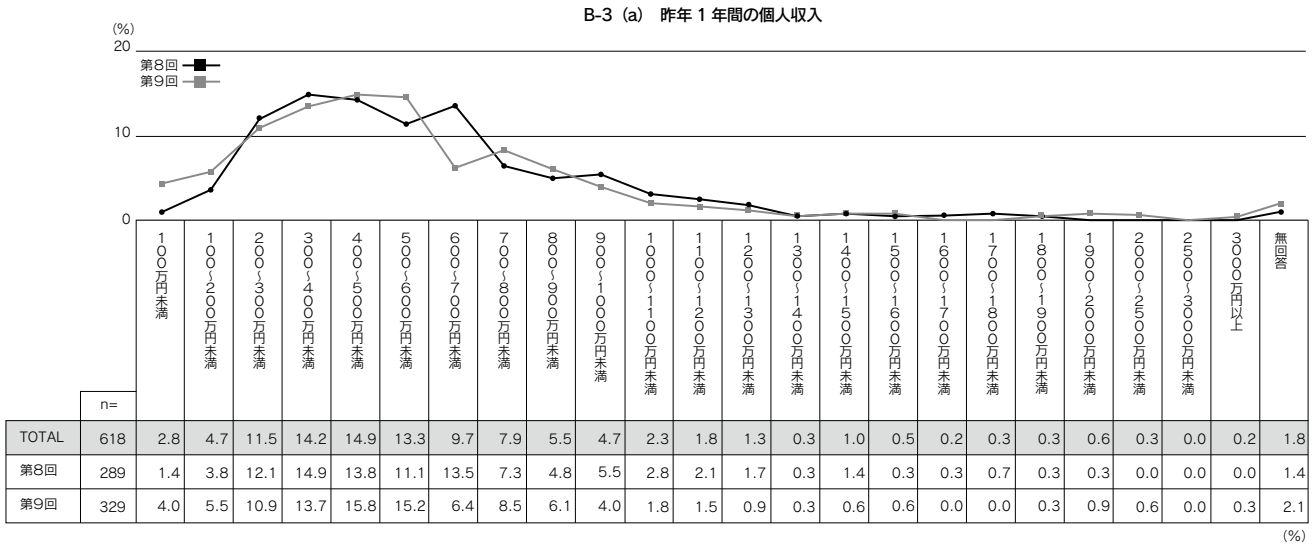
る傾向がみてとれますが、「65歳以上」では、最頻値は「300～400万円未満」が16.9%と下がります。



※サンプル数30未満の(「20～29歳」「無回答」)は仕事は参考値扱いとする。

B-3 (a) 昨年1年間の個人収入

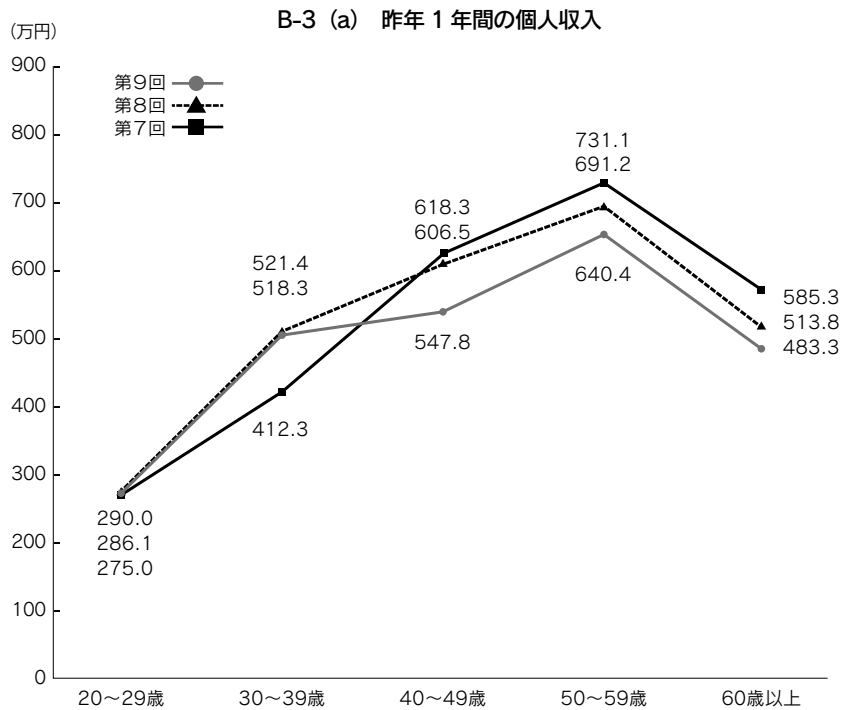
第8回調査における個人収入の結果と比較してみると、最頻値が「300～400万円」から「400～500万円未満」の所得層に移動しています。「400～500万円未満」「500～600万円未満」の所得層では第9回の方が多くなっていますが、「600～700万円未満」の所得層では、第8回調査（13.5%）に比べて第9回調査（6.4%）で低くなっています。



B-3 (a) 昨年1年間の個人収入

昨年1年間の個人収入の年齢層ごとの推移を過去調査と比較すると、今回の第9回調査は40歳代、50歳代、60歳以上の収入が最も低くなっています。

※値は各年代の平均値（無回答は算出より除外）
※ただし、以下のセグメントは有効サンプル数が少ないため参考値扱いとする。
第7回 20～29歳（18）
第8回 20～29歳（28）
第9回 20～29歳（4）



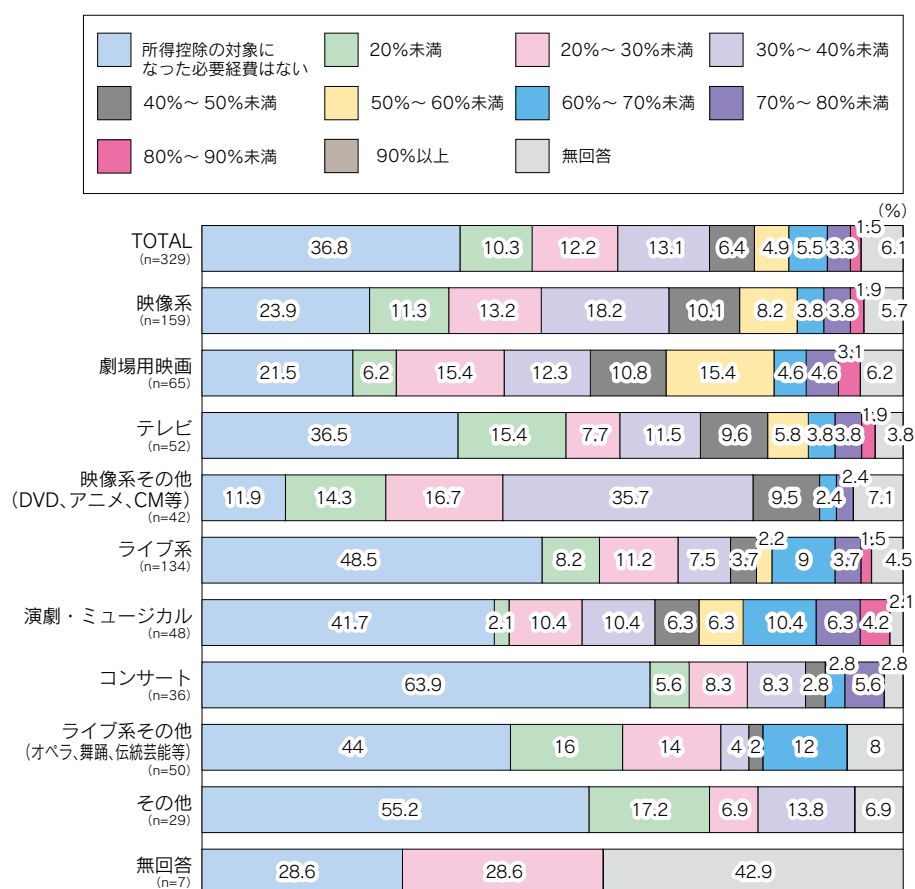
B-3 (b)

自らが負担した必要経費の割合

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費について、「給与所得だけで確定申告していないので、所得控除の対象になった必要経費はない」とする回答が36.8%を占めています。必要経費を負担している場合、総収入に占める割合は、「30%～40%未満」が13.1%、「20%～30%未満」が12.2%、「20%未満」が10.3%となっています。

ジャンル別にみると、「所得控除の対象になった必要経費はない」は「ライブ系」が48.5%に対して「映像系」が23.9%で「ライブ系」の方が高いです。

問B-3 (b) 自らが負担した必要経費の割合



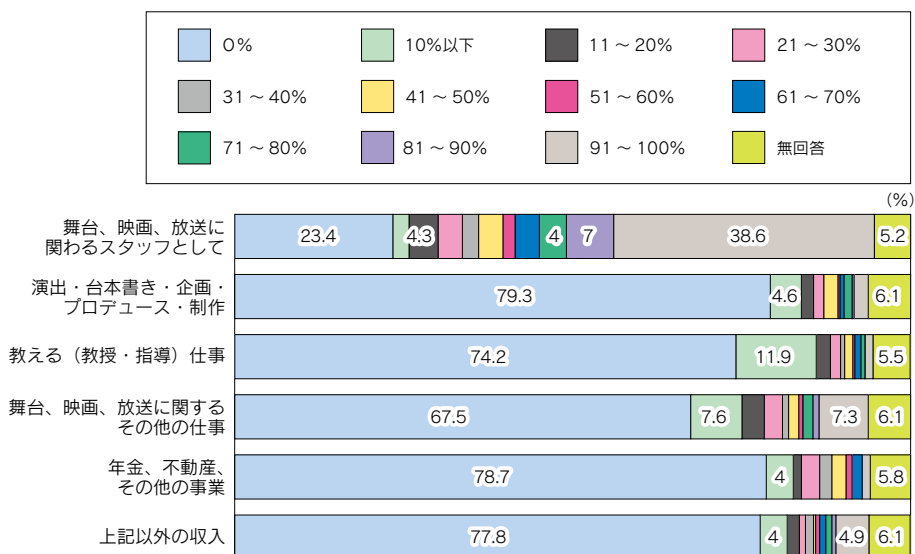
B-4

昨年1年間の活動別収入の割合

昨年1年間の活動別収入の割合の平均は、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」が59.3%で最も高く、次いで「舞台、映画、放送に関するその他の仕事」が13.7%となっています。

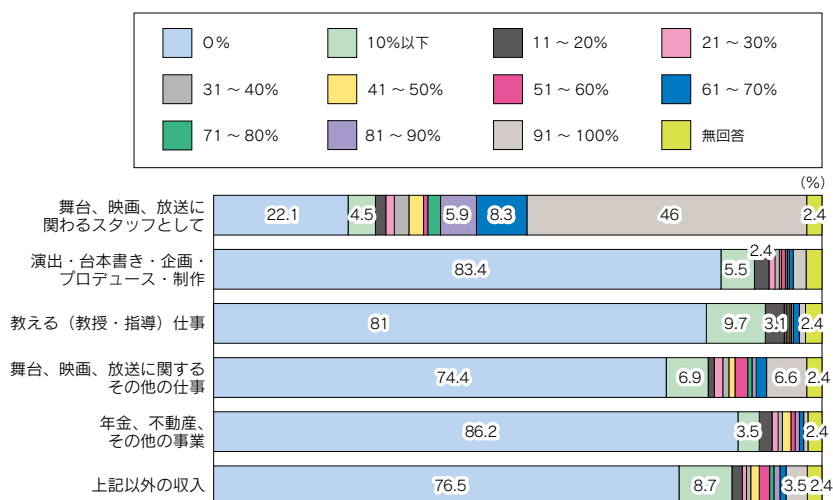
第8回調査と比べると、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」得た収入の割合は5.2ポイント下がっていて、ほかからの収入の割合が若干ずつ上昇しています。

問B-4 昨年1年間の活動別収入の割合



<参考> 第8回調査 調査結果

問B-4 昨年1年間の活動別収入の割合



B-4

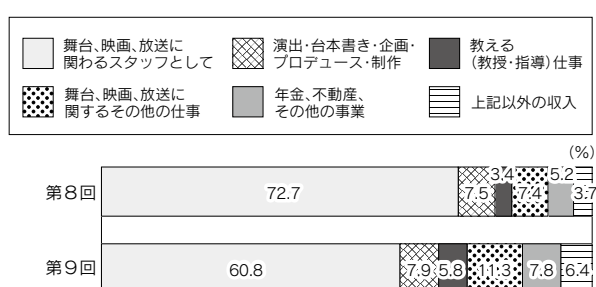
昨年1年間の活動別収入の割合

(ジャンル別：映像系／劇場用映画／テレビ／映像系その他)

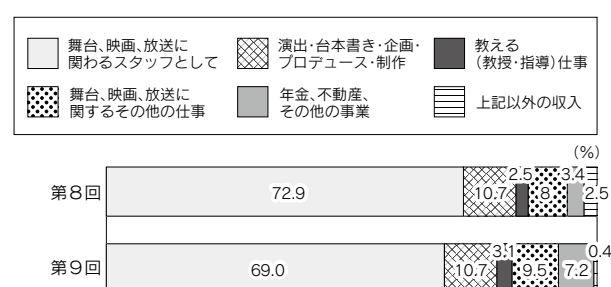
ジャンル別に昨年1年間の活動別収入の割合をみると、「映像系」全体では、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」が最も多く60.8%ですが、第8回調査結果と比べると、割合が下がっていて、「教える仕事」「舞台、映画、放送に関するその他の仕事」と「年金、不動産、その他の事業」からの収入の割合が上がっています。

小ジャンルで比較してみると、「テレビ」「映像系その他（DVD、アニメ、CM等）」では「年金、不動産、その他の事業」からの収入の割合が倍以上にあがっています。

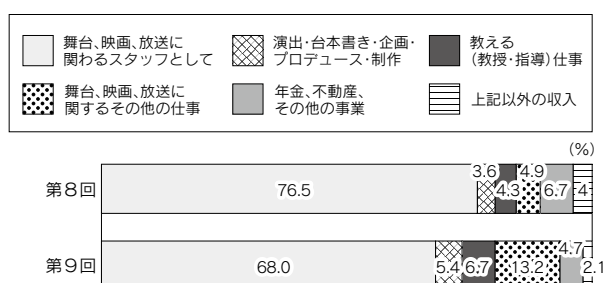
■ 映像系（第8回：n=132、第9回：n=159）



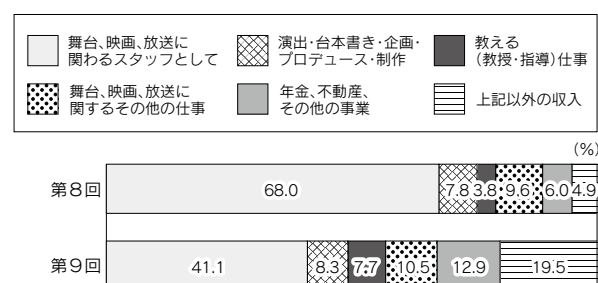
■ テレビ（第8回：n=51、第9回：n=52）



■ 劇場用映画（第8回：n=45、第9回：n=65）



■ 映像系その他（DVD、アニメ、CM等）（第8回：n=36、第9回：n=42）



B-4

昨年1年間の活動別収入の割合

(ジャンル別:ライブ系/演劇・ミュージカル/コンサート/ライブ系その他)

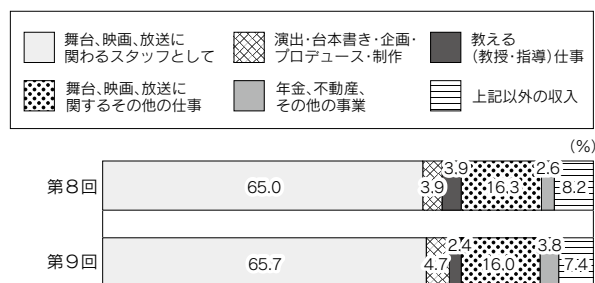
「ライブ系」全体で昨年1年間の活動別収入の割合をみると、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」が65.7%で大半を占めています。小ジャンルごとに内訳をみると、「演劇・ミュージカル」が71.8%で最も高く、「ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）」の、「舞台、映

画、放送に関わるスタッフとして」は58.0%と低めです。

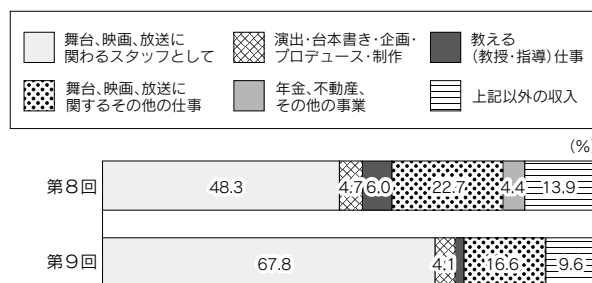
第8回調査結果と比べると、「ライブ系」全体ではそれほど変化はありませんが、「コンサート」では「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」の割合が48.3%から67.8%へと上昇し、「舞台、映画、放送に

関するその他の仕事」が減っています。「ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）」では逆に「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」74.2%から58.0%に低下し、「その他の仕事」が高くなっています。

■ ライブ系（第8回：n=116、第9回：n=134）

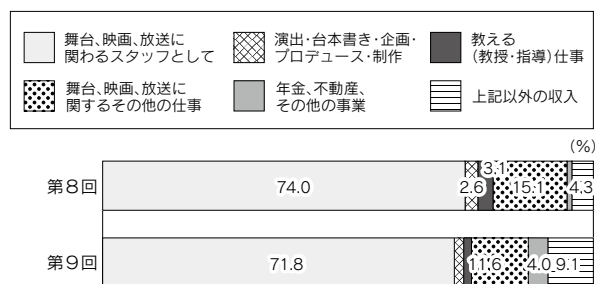


■ コンサート（第8回：n=41、第9回：n=36）



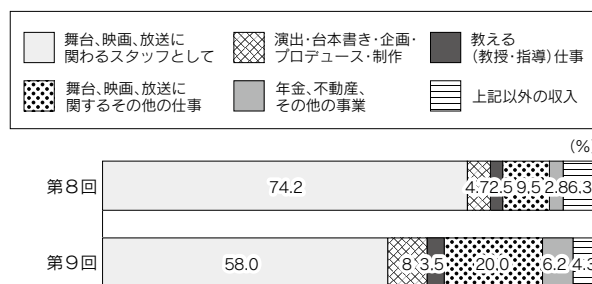
■ 演劇・ミュージカル

(第8回：n=45、第9回：n=48)



■ ライブ系その他(オペラ、舞踊、伝統芸能等)

(第8回：n=45、第9回：n=48)



C-2

個人負担となっている仕事上の必要経費(MA)

仕事をするうえで個人負担となっている経費は、「交通費」が47.4%で最も高く、それに「通信費」(46.2%)、「接待費・交際費」(40.1%)が続いています。

ジャンル別にみると、「交通費」は「ライブ系」に比べて「映像系」で高く、特に「映像系その他(DVD、アニメ、CM等)」「劇場用映画」で高いです。「通信費」も同様に「映

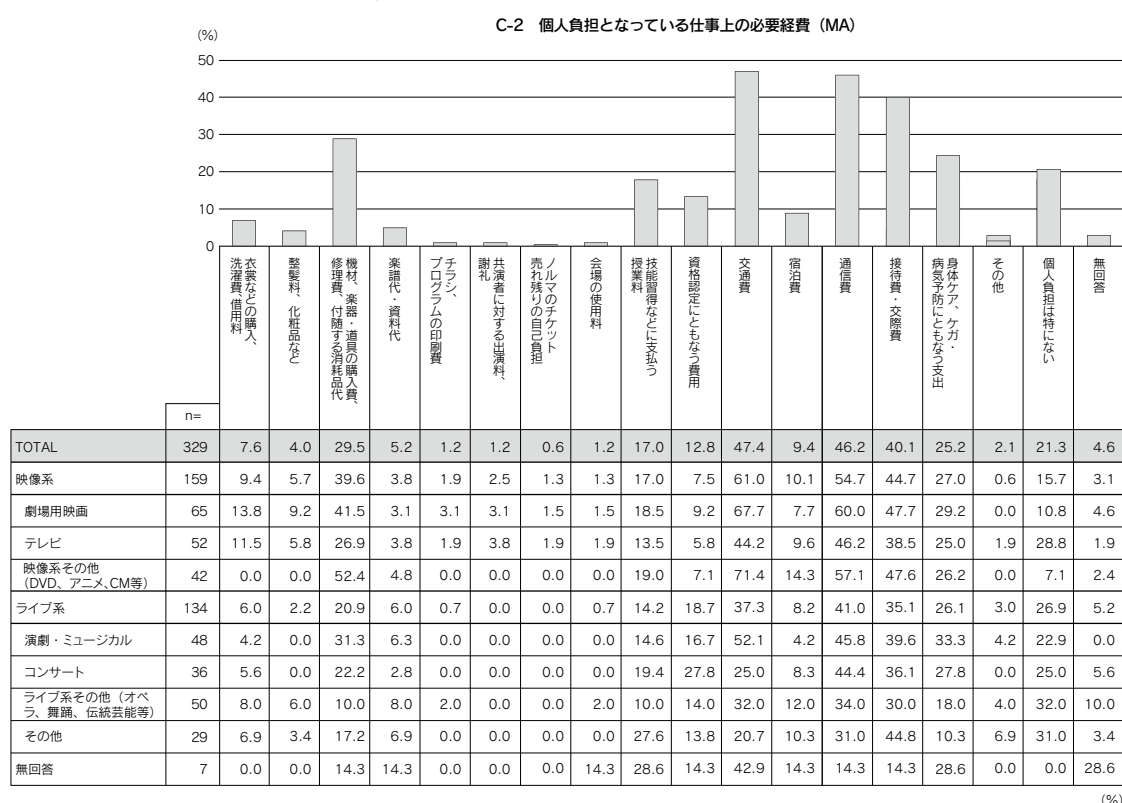
像系」で高く、その中でも「劇場用映画」が高いです。

「映像系」では「劇場用映画」と「映像系その他(DVD、アニメ、CM等)」で「機材、道具の購入費、修理代」の割合が高くなっています。「ライブ系」では、「通信費」「交通費」「接待費・交際費」の順で多くなっています。また「資格認定にともなう費用」の割合が「映像系」に比べ

高くなっています。

「個人負担はない」は「映像系」15.7%に比べて「ライブ系」が26.9%となっています。

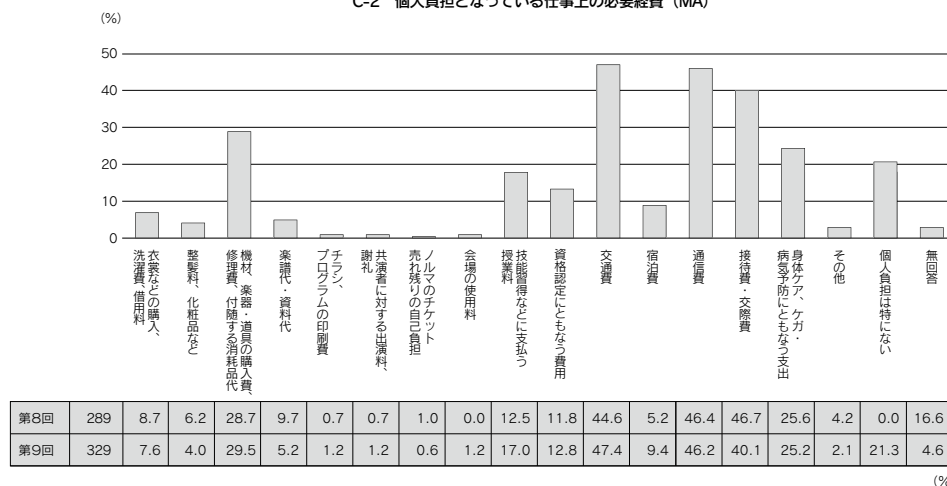
第8回調査結果と比べると、「接待費・交際費」の割合が若干下がっています。(第8回46.7%、第9回40.1%)



※「その他」「無回答」は、サンプル数30s未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第8回調査 調査結果

C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)



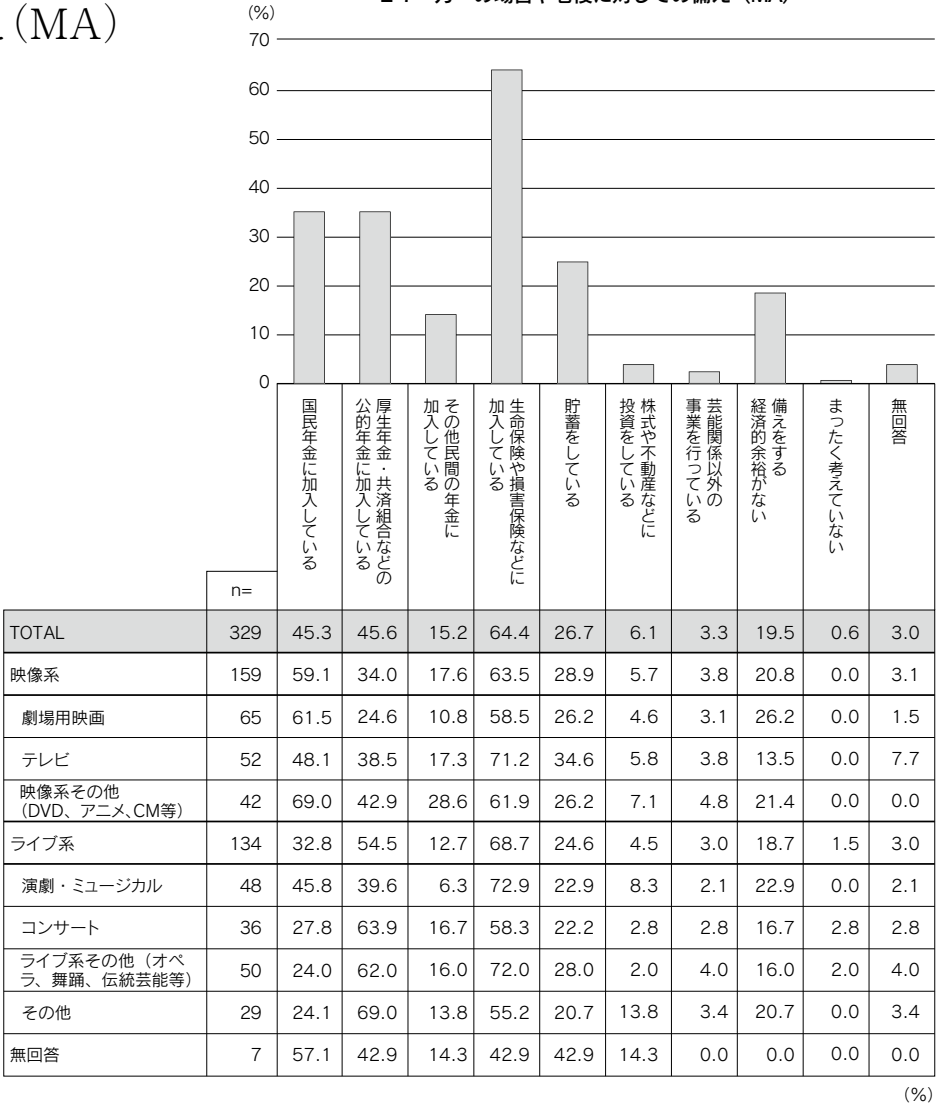
E-7 万一の場合や 老後に対しての備え(MA)

万一の場合や老後に対しての備えとして、「生命保険や損害保険などに加入している」が64.4%で最も高く、以下、「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」(45.6%)、「国民年金に加入している」(45.3%)となっています。

ジャンル別にみると、「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」の割合は「映像系」よりも「ライブ系」で高く、特に「コンサート」「ライブ系その他(オペラ、舞踊、伝統芸能等)」で高いです。「国民年金に加入している」は逆に「映像系」よりも「ライブ系」のほうが低いです。

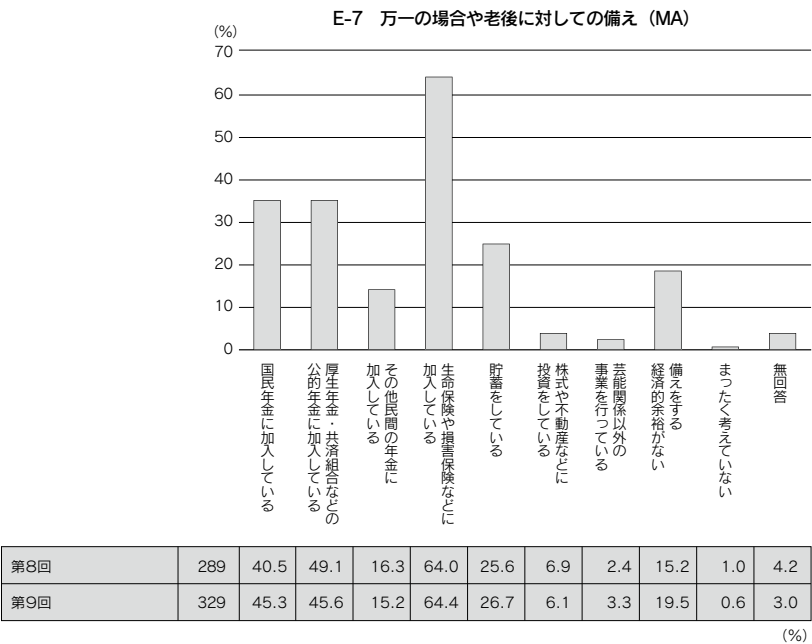
第8回調査結果と比べると、「国民年金に加入している」の割合が高くなっています。(第8回40.5%、第9回45.3%)

E-7 万一の場合や老後に対しての備え (MA)



※「その他」「無回答」は、サンプル数30s未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第8回調査 調査結果



(2) 労働環境について

B-5

雇用形態

スタッフの雇用形態は、「フリーランス」が最も高く 42.9%、次いで「正社員・正職員」が 26.7%、「会社を経営」が 19.8%となっています。

ジャンル別にみると、「映像系」と「ライブ系」の構成は異なっています。

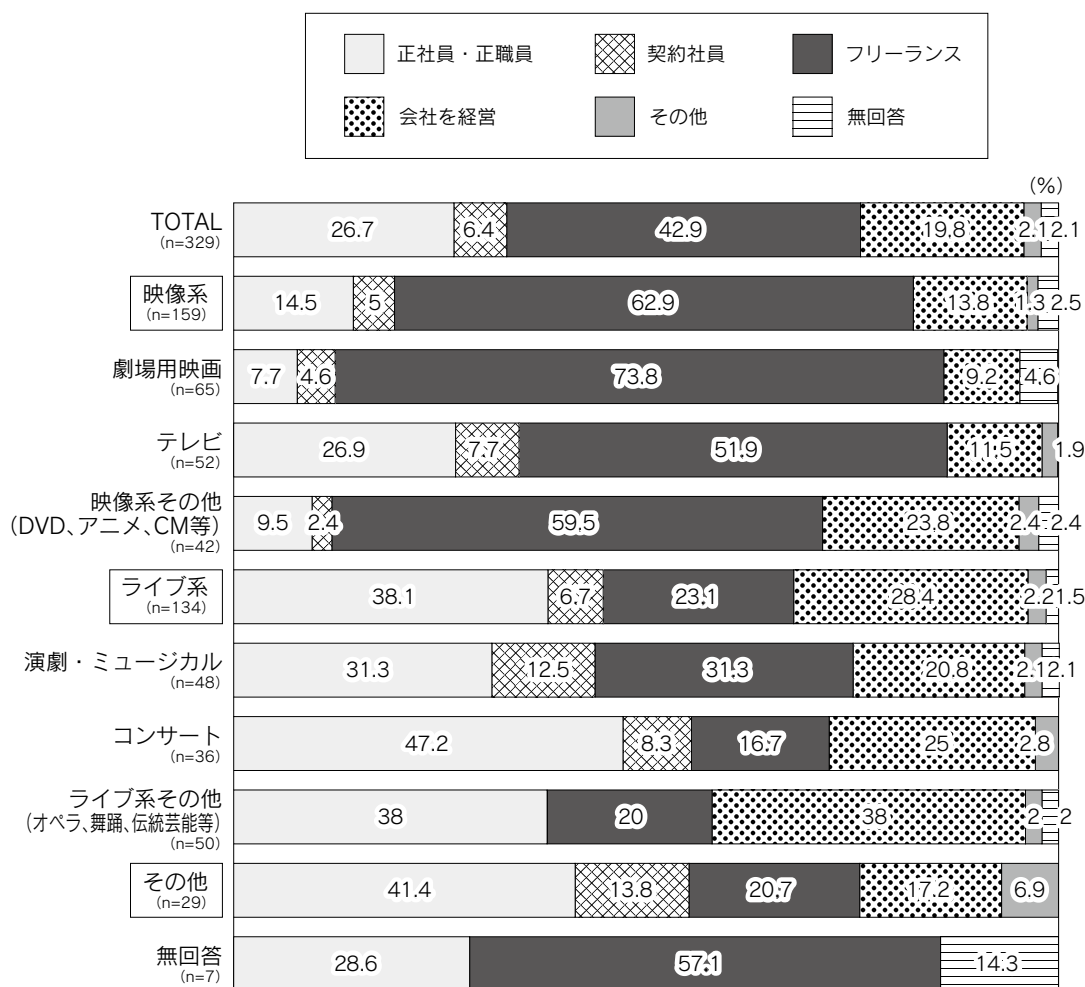
「映像系」では「フリーランス」の割合が最も高く 62.9%で、「正社員・正職員」の割合が最も高く 62.9%で、「正社員・正職員」

員・正職員」の 14.5%、「会社を経営」の 13.8%を大幅にしのいでいます。小ジャンルでみると、「フリーランス」の割合が特に高いのが、「劇場用映画」(73.8%)です。

これに対し、「ライブ系」では「正社員・正職員」が 59.5%と最も高く、「会社を経営」の方が 28.4%と「フリーランス」(23.1%)に比べて高

くなっています。「ライブ系」の小ジャンルでみると、「正社員・正職員」の割合が多いのが「コンサート」(47.2%)で、「ライブ系その他」では、「会社を経営」「正社員・正職員」の割合がともに 38.0%となっています。

問B-5 (a) 雇用形態



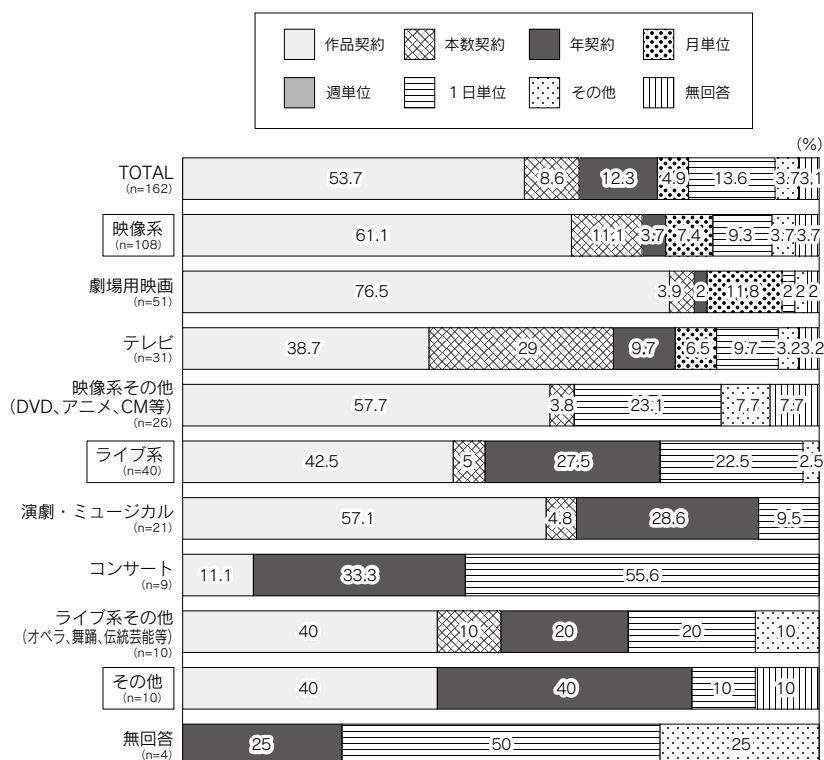
※「その他」「無回答」はサンプル数 30 未満のため参考値扱いとする。

B-5 (b) 契約形態で最も多いもの

雇用形態が「フリーランス」「契約社員」である場合に最も多い契約形態は、「作品契約」の割合が53.7%で最も高く、「1日単位」が13.6%、「年契約」が12.3%、「本数契約」が8.6%となっています。

ジャンル別にみると、「作品契約」は「映像系」が「ライブ系」に比べて割合が高く、「年契約」「1日単位」は逆に「映像系」に比べて「ライブ系」のほうが高くなっています。

問B-5 (b) 契約形態で最も多いもの
【ベース：契約社員・フリーランス】



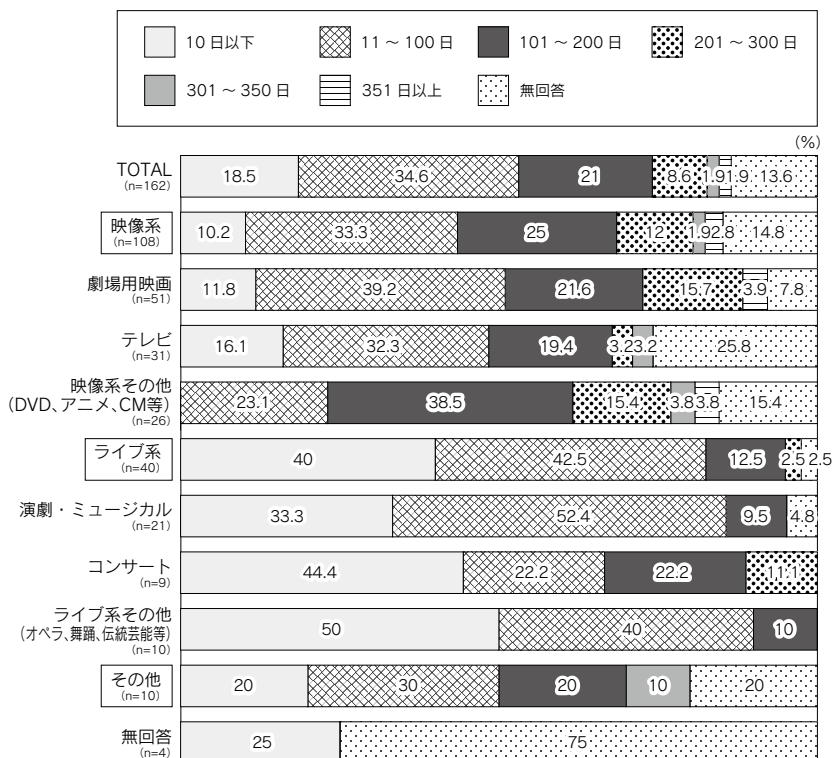
※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

B-5 (c) 昨年1年間で仕事が入らず スケジュールが空いた日数

昨年1年間で、仕事をする意思があっても仕事が入らず、スケジュールが空いた合計日数の平均は108.2日でした。

ジャンル別にみると、「映像系」が133.9日であるのに対して「ライブ系」は51.6日で、「映像系」のほうが長くなっています。

問B-5 (c) 昨年1年間で仕事が入らず
スケジュールが空いた日数



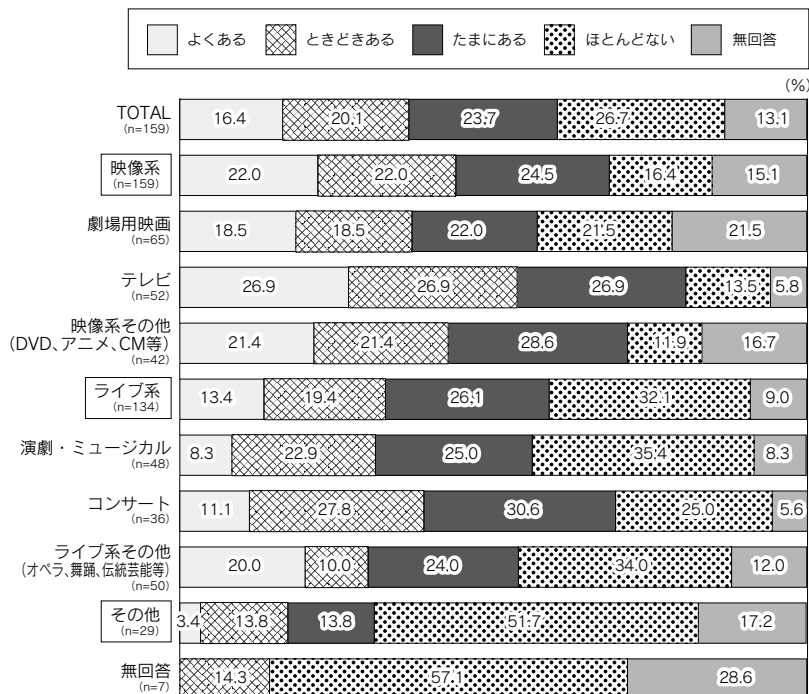
※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

B-8 (a)

公共交通機関での帰宅が難しい深夜作業の程度
(事前(前日)までに予定されていた作業)

事前に予定されていた、公共交通機関での帰宅が難しい深夜作業は、「ほとんどない」の割合が最も高く26.7%、以下、「たまにある」が23.7%、「ときどきある」が20.1%、「よくある」は16.4%となっています。

ジャンル別にみると、「映像系」では「たまにある」24.5%、「ときどきある」22.0%、「よくある」16.4%と、程度の差はあれ、あると回答している割合が高いのに対し、「ライブ系」では「ほとんどない」が32.1%で最も多く、「よくある」の回答は13.4%で「映像系」の22.0%より低いです。

問B-8 (a) 公共機関での帰宅が難しい深夜作業の頻度
事前(前日)までに予定されていた作業

※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

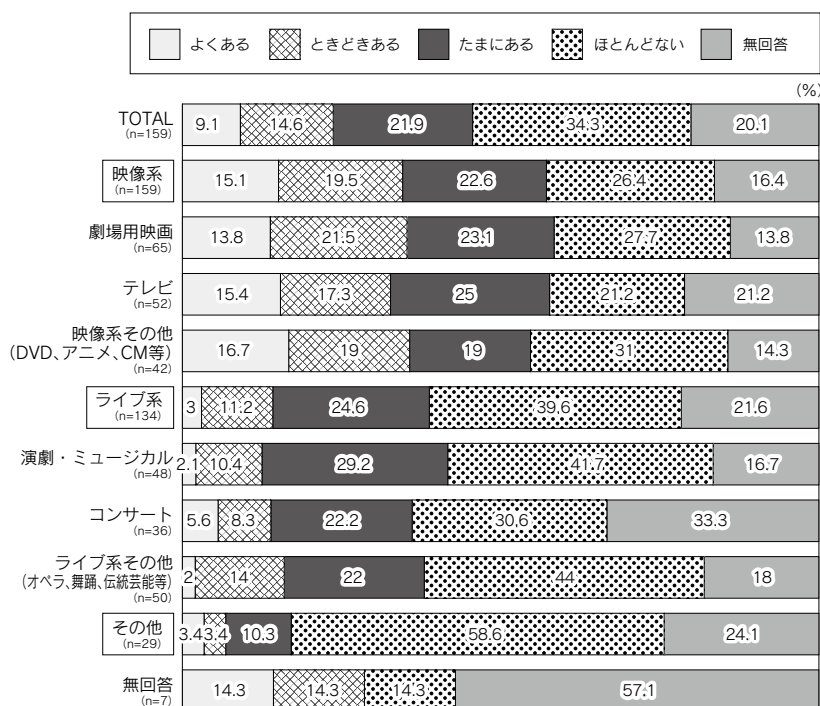
B-8 (a)

公共交通機関での帰宅が難しい深夜作業の程度(当日急に発生した作業)

当日急に発生した、公共交通機関での帰宅が難しい深夜作業は、「ほとんどない」の割合が最も高く26.4%、以下、「たまにある」が21.9%、「ときどきある」が14.6%、「よくある」が9.1%となっています。

ジャンル別にみると、「映像系」では「よくある」が15.1%で「ときどきある」が19.5%、「たまにある」が22.6%と、頻度に差はありますが、「ある」と経験した割合が過半数を超えています。

一方「ライブ系」では「ほとんどない」が4割前後で、「たまにある」は24.6%ですが、「よくある」の割合は3.0%と少なく、「映像系」より、急に発生する深夜作業の経験頻度は低い傾向が見てとれます。

問B-8 (a) 公共機関での帰宅が難しい深夜作業の頻度
当日急に発生した深夜作業

※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

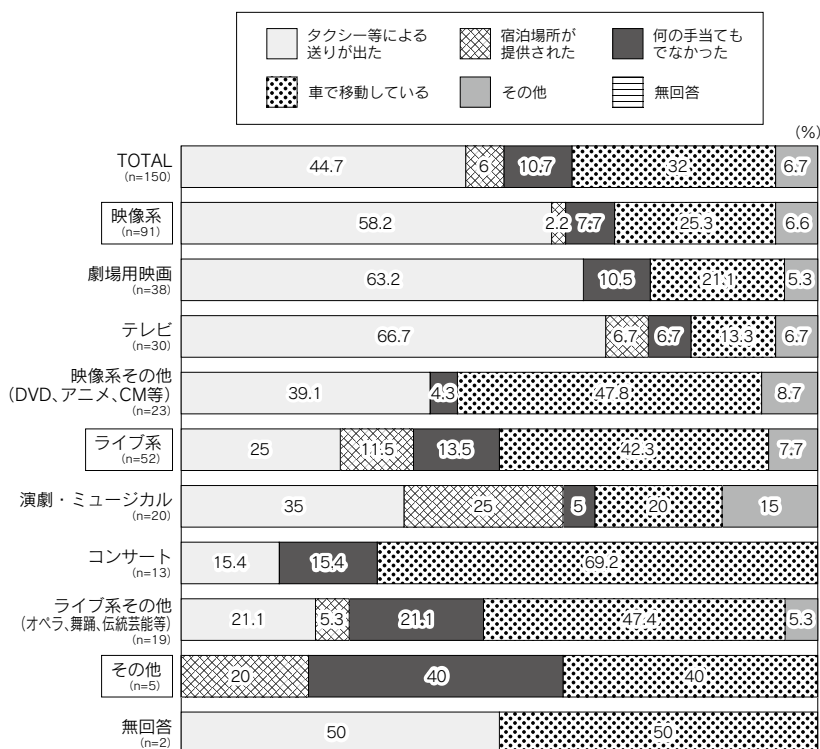
B-8 (b)

当日急に深夜作業が発生した時の対応 【ベース：当日急な深夜作業が発生した人】

当日急に深夜作業が発生した時の対応としては、「タクシー等による送りが出た」が最も高く44.7%、次いで「車で移動している」が32.0%となっています。

ジャンル別にみると、「タクシー等による送りが出た」は「ライブ系」(25.0%)に比べて「映像系」(58.2%)で割合が高く、「テレビ」が66.7%、「劇場用映画」が63.2%となっています。「車で移動している」の割合は、「映像系」(25.3%)に比べて「ライブ系」(42.3%)のほうが高いです。

問B-8 (b) 当日急に深夜作業が発生したときの対応
【ベース：当日の急な深夜作業が発生した人】



※「映像系その他」ライブ系の各ジャンル「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

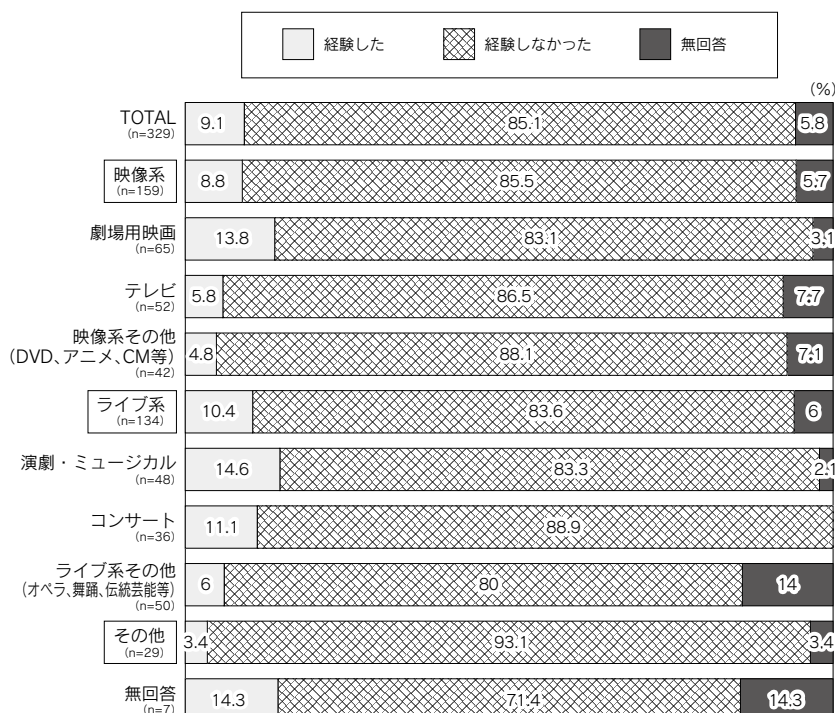
■ 傷害(ケガ)の状況

C-3 (a)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験(傷害(ケガ))

昨年1年間に仕事上で、医師の治療が必要となった傷害(ケガ)を経験した割合は9.1%となっています。「映像系」「ライブ系」の小ジャンルの経験率をみると、「映像系」では「劇場用映画」に携わる人で13.8%、「ライブ系」では「演劇・ミュージカル」で14.6%、「コンサート」で11.1%と全体平均を超えています。

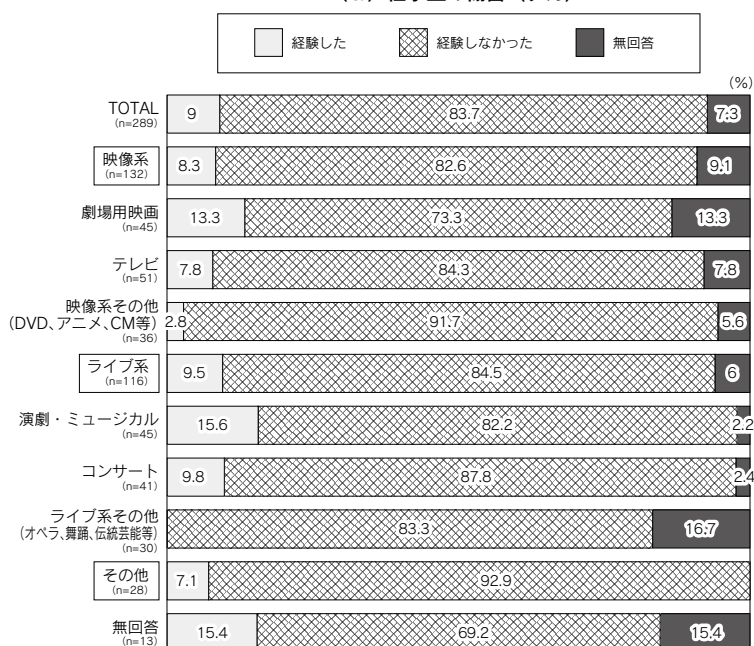
問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(a) 仕事上の傷害(ケガ)



※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第8回調査 調査結果

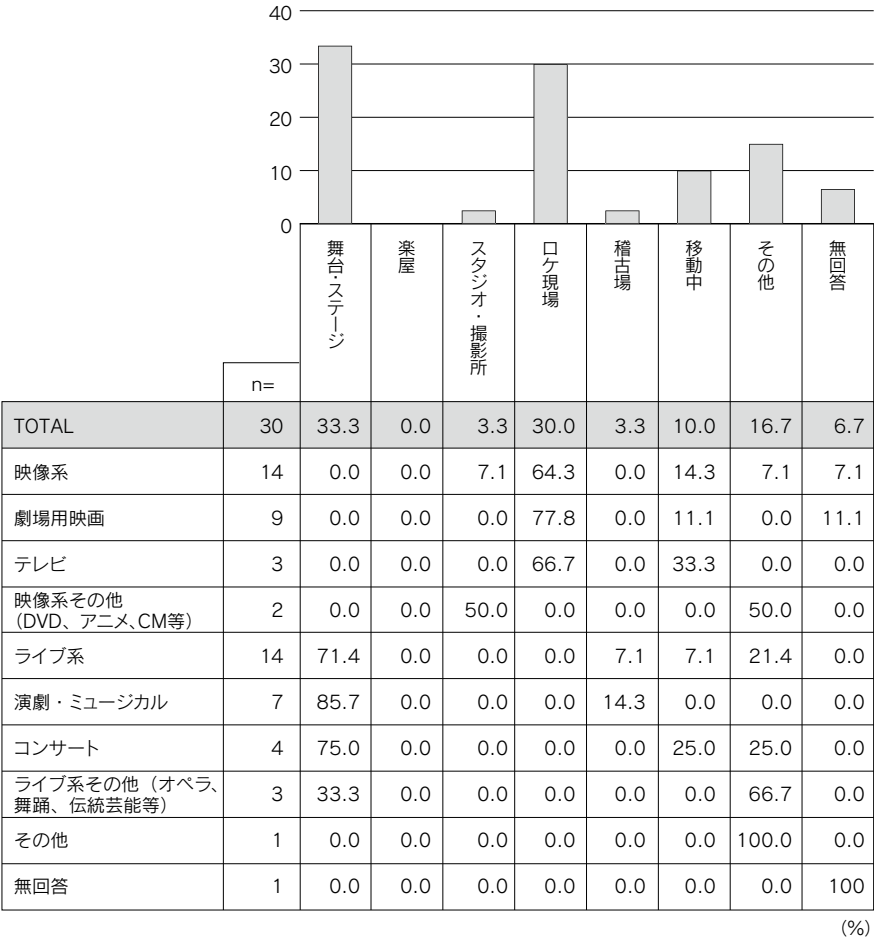
問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(a) 仕事上の傷害(ケガ)



C-4 (a) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)発生場所

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)が発生した場所は、「舞台・ステージ」が33.3%(30人中10人)で最も高く、それに「ロケ現場」が30.0%(30人中9人)で続いています。

C-4 (a) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)発生場所 (%)



C-4 (b)

昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)治療費等の負担状況(MA)

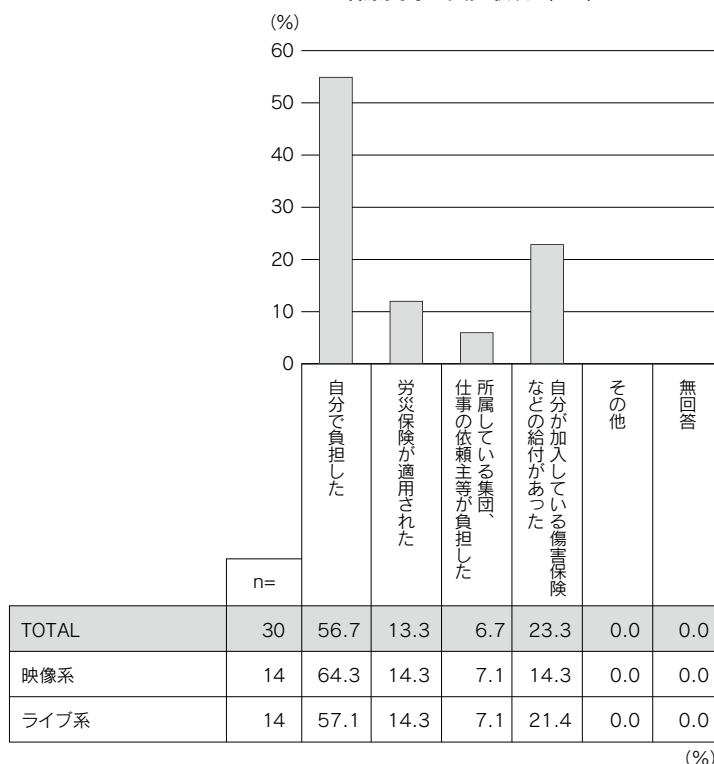
C-4 (c)

昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)に対する治療費以外の補償状況(MA)

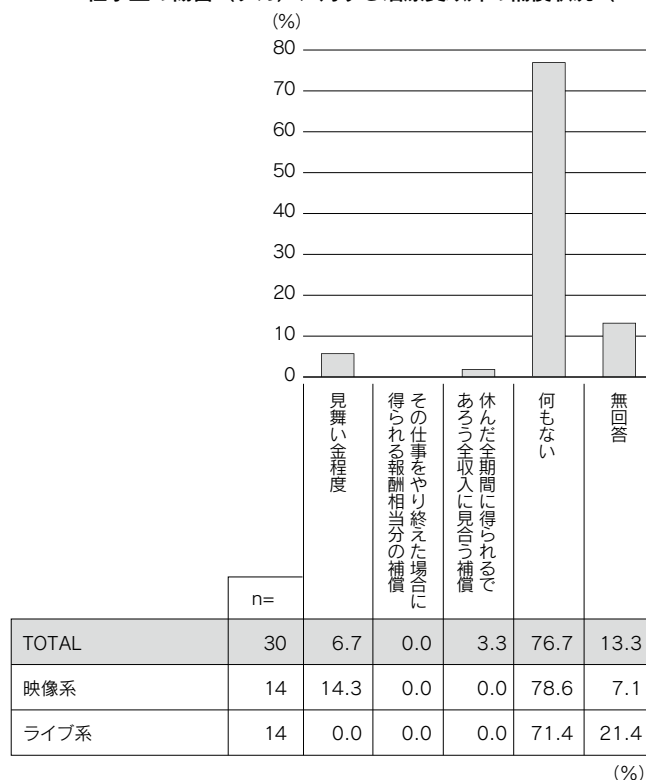
昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害(ケガ)に対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く56.7%(30人中17人)、次いで「自分が加入している傷害保険などの給付があった」が23.3%(30人中7人)、「労災保険が適用された」は13.3%(30人中4人)です。

治療費以外の補償状況では、「何もない」が76.7%(23人)、「見舞い金程度」が6.7%(2人)です。

C-4 (b) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)治療費等の負担状況(MA)



C-4 (c) 昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)に対する治療費以外の補償状況(MA)



※ サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

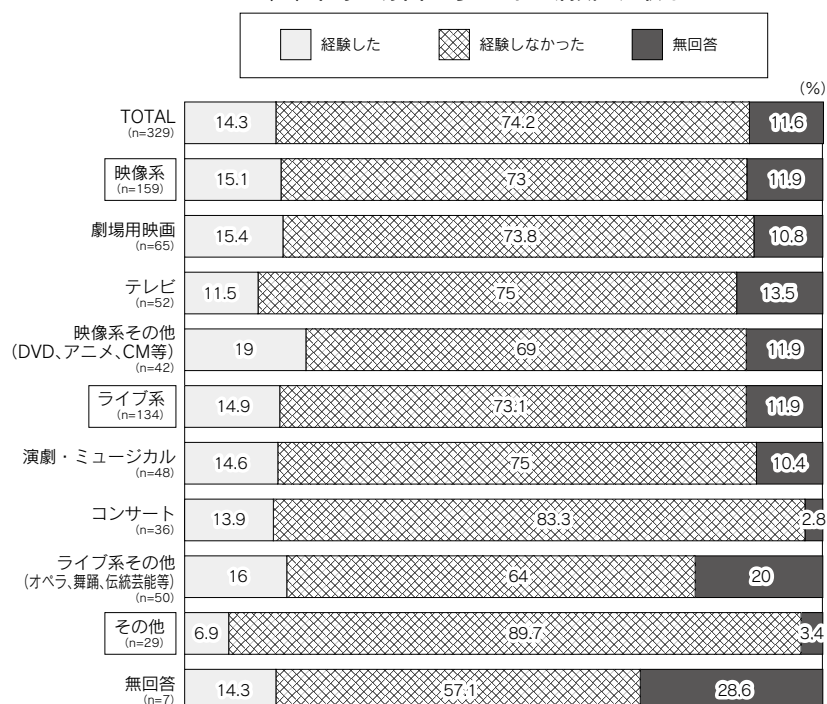
■ 病気・症状の状況

C-3

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験(病気・症状)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状を経験した割合は14.3%です。第8回の経験率と比較すると、全体では1.8ポイントの上昇ですが、小ジャンルでは「テレビ」で減少しているのに対し(17.6%から11.5%)、「映像系その他」(17.6%から11.5%)、「映像系その他」で増加(8.3%から19.0%)。「ライブ系」では「演劇・ミュージカル」(8.9%から14.6%)、「コンサート」(9.8%から13.9%)で増加しています。

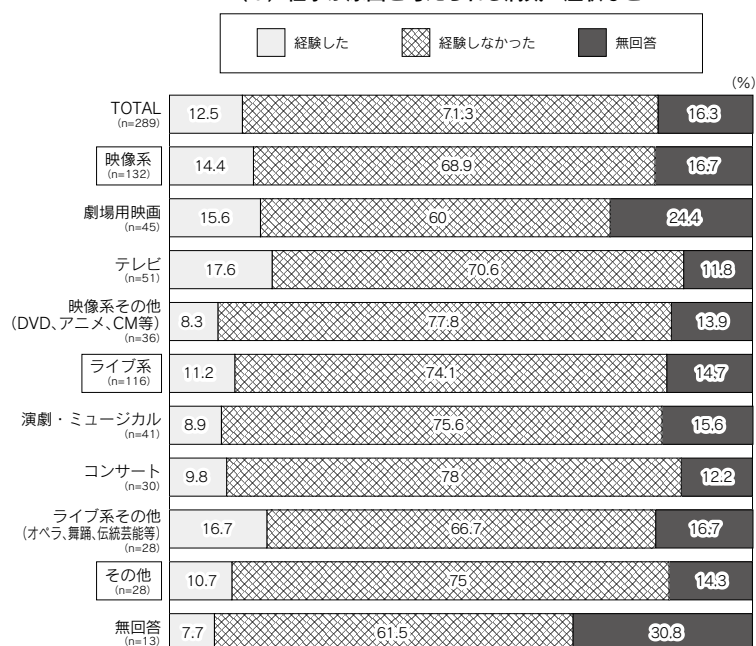
問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事が原因と考えられる病気・症状など



※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第8回調査 調査結果

問C-3 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事が原因と考えられる病気・症状など



C-5 (a)

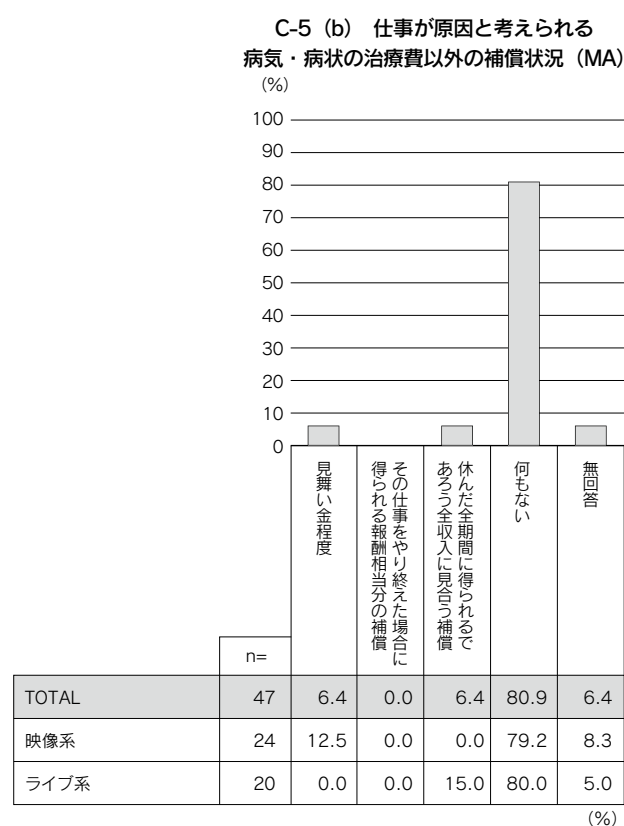
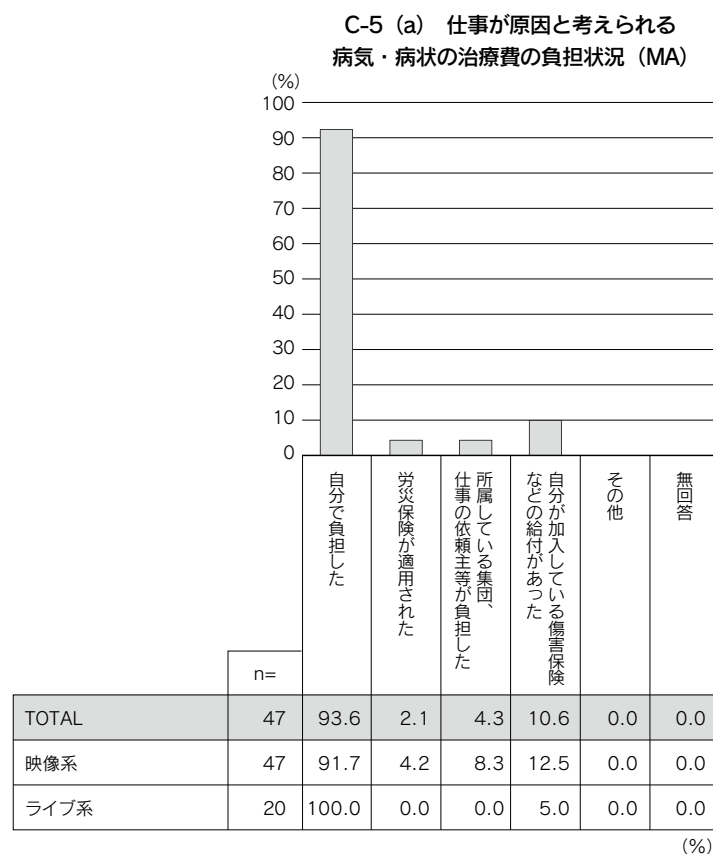
仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況(MA)

C-5 (b)

仕事の原因と考えられる病気・病状の治療費以外の補償状況(MA)

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった病気・症状などに対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く93.6% (47人中44人)、「自分が加入している傷害保険などの給付があった」は10.6%(47人中5人)となっています。「労災が適用された」は2.1% (1名)にすぎません。

治療費以外の補償状況では、「何もない」が80.9%(47人中38人)、「見舞い金程度」は6.4% (3人)です。



※ サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

(3) 仕事や生活に対する考え方

D-1 (a)

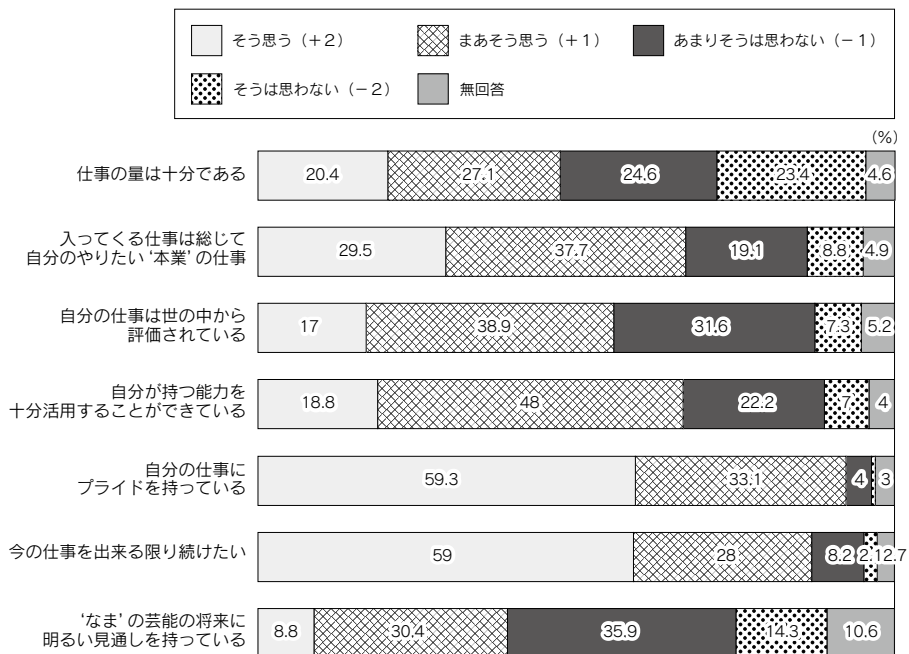
仕事に関する考え方

「自分の仕事にプライドを持っている」「いまの仕事をできる限り続けたい」は、「そう思う／まあそう思う」は9割前後となり、肯定する割合が高いです。

同じく「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている‘本業’の仕事である」「自分が持つ能力を十分活用することができている」も7割弱の人が「そう思う／まあそう思う」と回答しています。

その一方で、「仕事の量は十分である」「ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている」は、「そうは思わない／あまりそうは思わない」が約半数を占め、否定的な見方の割合が高くなっています。

問D-1 (a) 仕事に対する考え方



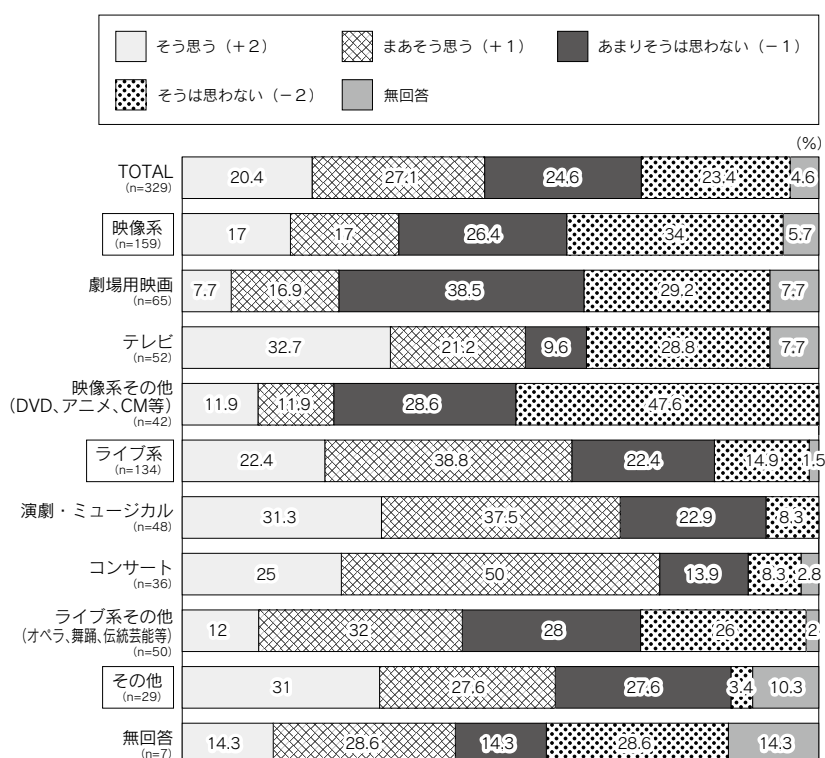
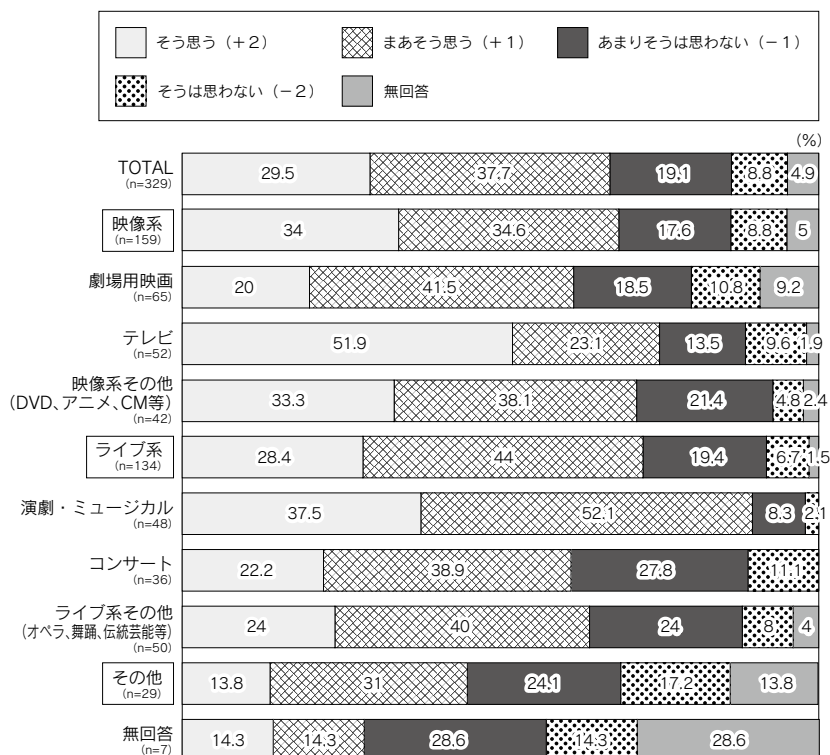
D-1 (a)

仕事に対する考え方について(1)(2)(ジャンル別)

「仕事の量は十分である」は「そう思う／まあそう思う」の割合が「ライブ系」61.2%に対して「映像系」34.0%で「ライブ系」のほうが高く、「映像系」は十分でないと思っている割合の方が高いです。

「入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている‘本業’の仕事である」については「映像系」「ライブ系」とともに肯定的な捉え方が同じように過半数を占めていますが、小ジャンルでみると、「演劇・ミュージカル」で「そう思う(37.5%)／まあそう思う(52.1%)」と肯定的に捉えた人が9割近くにのぼっており、また「テレビ」でも「そう思う(51.9%)／まあそう思う(23.1%)」と、75%が肯定的に捉えており、やりたい仕事にたずさわっているという意識が高いのが目立ちます。

問D-1 (a) 仕事について 仕事の量は十分である

問D-1 (a) 仕事について
入ってくる仕事は総じて自分のやりたい‘本業’の仕事

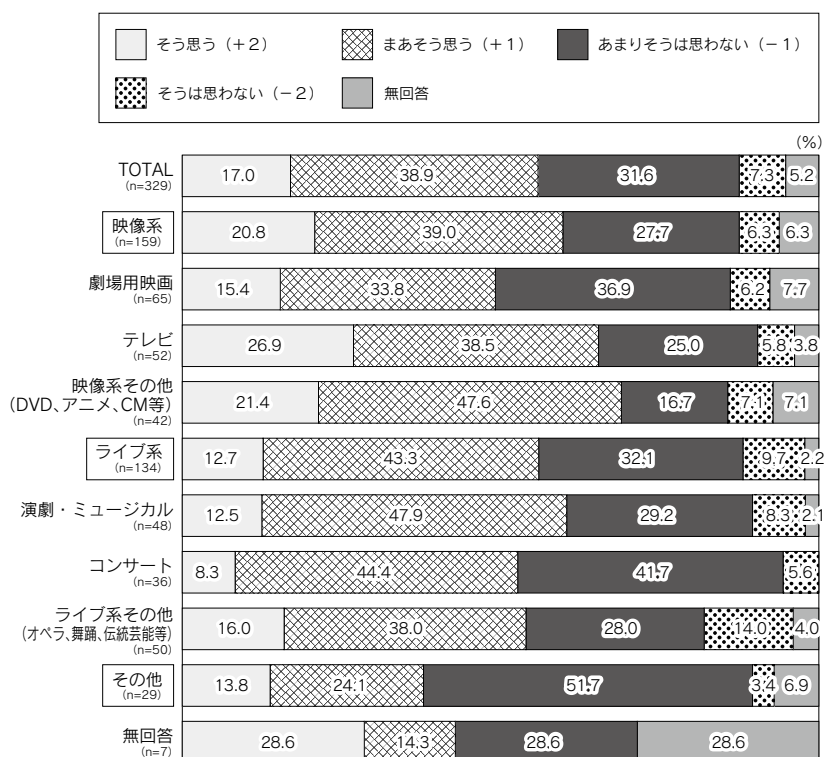
D-1 (a)

仕事に関する考え方 (3)(4)(ジャンル別)

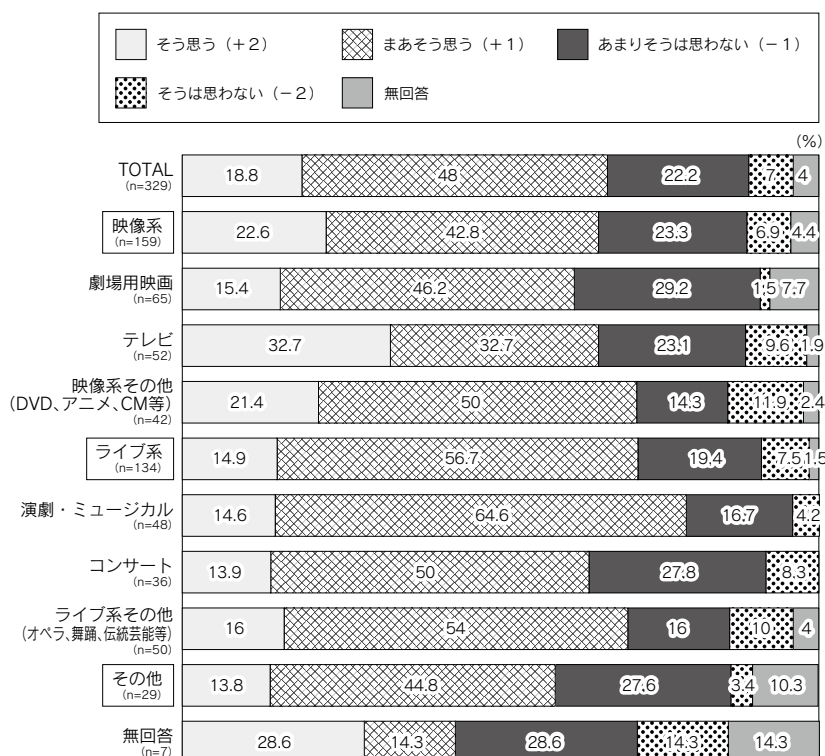
「自分の仕事は世の中から評価されている」では、「映像系」は「そう思う(20.8%)」／「まあそう思う(39.0%)」、「ライブ系」で「そう思う(12.7%)」／「まあそう思う(43.3%)」で、ともに過半数が肯定的に捉えています。

「自分が持つ能力を十分活用することができる」では、「映像系」は7割弱が、「ライブ系」では8割弱が肯定的に捉えています。その内訳を小ジャンルごとにみると、「ライブ系」の方が全般的に「まあそう思う」の割合が高いです。特に「演劇・ミュージカル」は64.6%となっています。それに対し「映像系」の中でも「テレビ」では「そう思う」の割合が32.7%と他の小ジャンルに比べて高いのが目立ちます。

問D-1 (a) 仕事について
自分の仕事は世の中から評価されている



問D-1 (a) 仕事について
自分が持つ能力を十分活用することができる



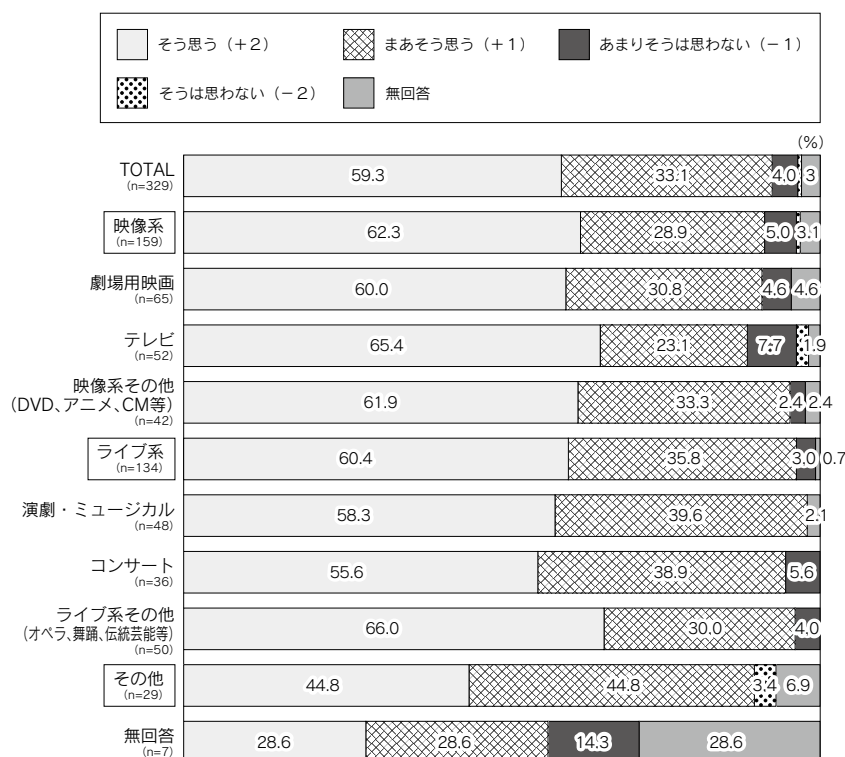
D-1 (a)

仕事に関する考え方 (5)(6)(ジャンル別)

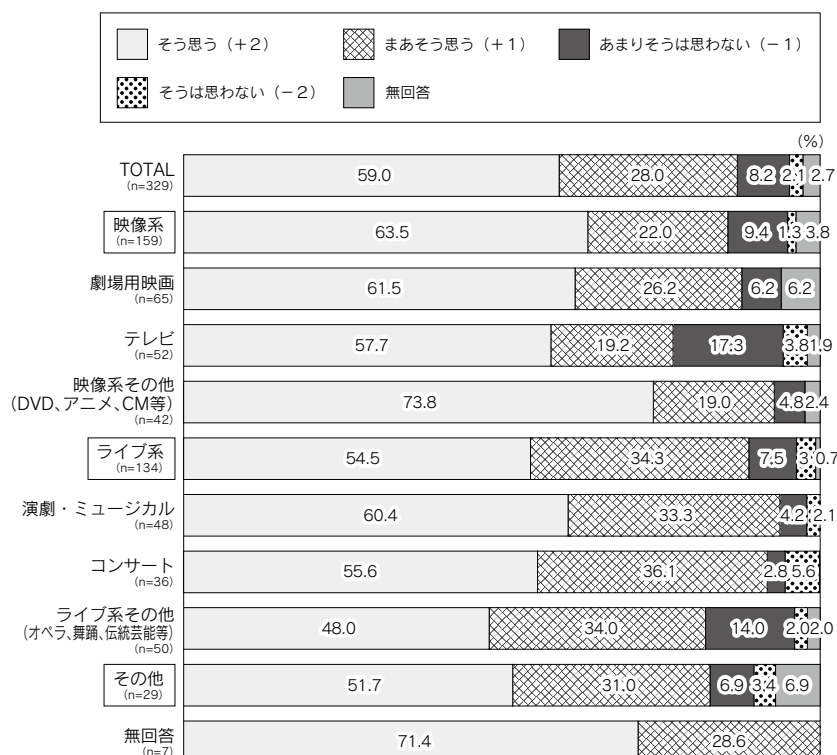
「自分の仕事にプライドを持っている」は、「映像系」「ライブ系」いずれも圧倒的に肯定的に捉えられています。「そうは思わない」は、「映像系」で1名、「ライブ系」でゼロです。

「いまの仕事をできる限り続けたい」では「そう思う」「まあそう思う」を合計した割合は「映像系」が85.5%、「ライブ系」が88.8%で高い割合となっています。内訳をみると、「映像系」は、「映像系その他」で「そう思う」が73.8%と高くなっているのが目立ちます。

問D-1 (a) 仕事について
自分の仕事にプライドを持っている



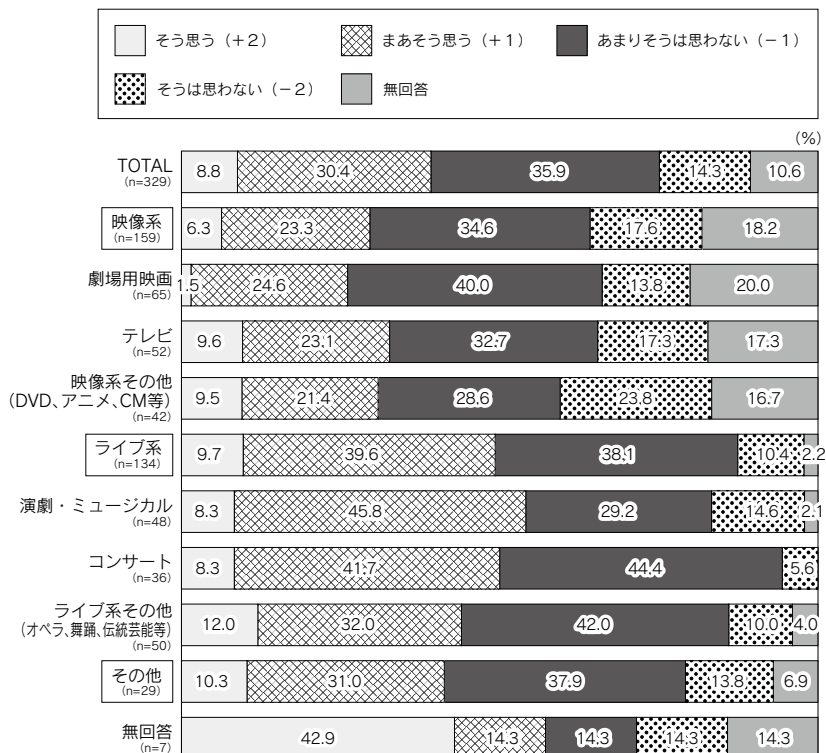
問D-1 (a) 仕事について
今の仕事を出来る限り続けたい



D-1 (a) 仕事に関する考え方 (7)(ジャンル別)

「ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている」は「そう思う」「まあそう思う」の合計の割合が「ライブ系」半数近くなのに対し、「映像系」では3割弱にとどまっています。「ライブ系その他」が44.0%とやや肯定的見方が弱いです。

問D-1 (a) 仕事について
‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている

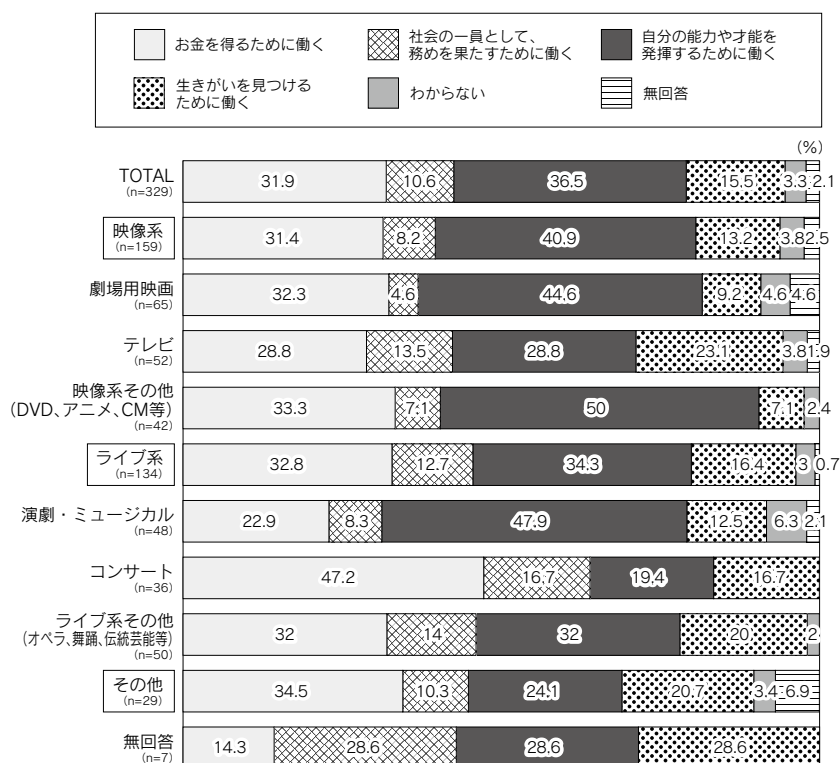


D-1 (b) 働く目的

働く目的は「自分の能力や才能を発揮するために働く」が36.5%で最も高く、「お金を得るために働く」が31.9%でそれに続いています。「生きがいを見つけるために働く」は15.5%、「社会の一員として、務めを果たすために働く」は10.6%です。

小ジャンルの傾向を見てみると、「コンサート」では「お金を得るため」(47.2%)が「自分の能力や才能を発揮するため」(19.4%)を上回っているのが目立ちます。「ライブ系」では「社会の一員として」の割合が「映像系」より高めの傾向がありますが、「テレビ」も「社会の一員として」(13.5%)が全体平均を超えています。

問D-1 (b) 働く目的

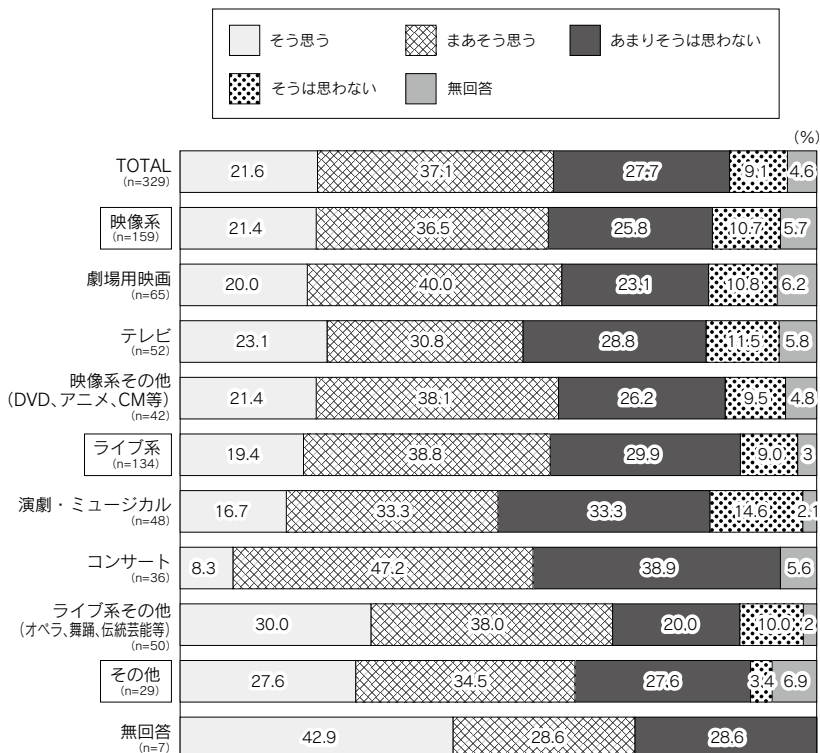


B-9 (a) 仕事に関して当てはまること

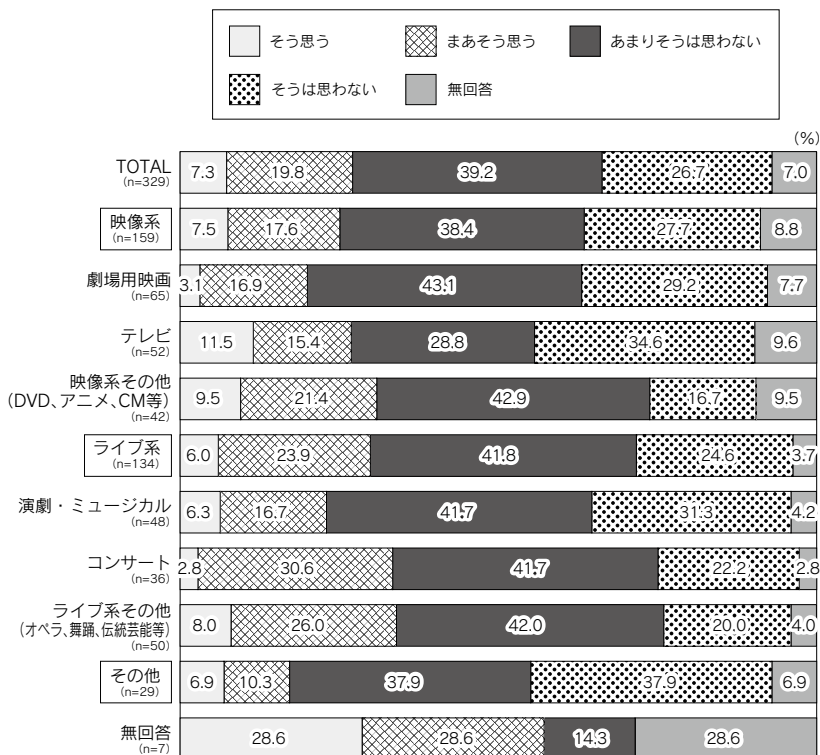
「新しい機材や技術の導入によって戸惑うことがある」は「そう思う／まあそう思う」の割合が58.7%に対して「そうは思わない／あまりそうは思わない」は36.8%で、戸惑うとする回答のほうが多くなっています。

「新しい機材や技術の導入に対応するための研修の機会は十分にある」は「そうは思わない／あまりそうは思わない」が65.9%、「そう思う／まあそう思う」は27.1%で、研修機会が不足と感じている回答が多くなっています。小ジャンルで見ると、「劇場用映画」と「演劇・ミュージカル」で、「そうは思わない／あまりそうは思わない」の合計がそれぞれ72.3%、73.0%と、全体平均より研修機会が十分でないと感じている人の割合が高めになっています。

問B-9仕事に関してあてはまること
新しい機材や技術の導入に戸惑うことがある



問B-9仕事に関してあてはまること
新しい機材や技術に対応する為の研修機会は十分にある



(4) より良い活動が続けていくために

C-1

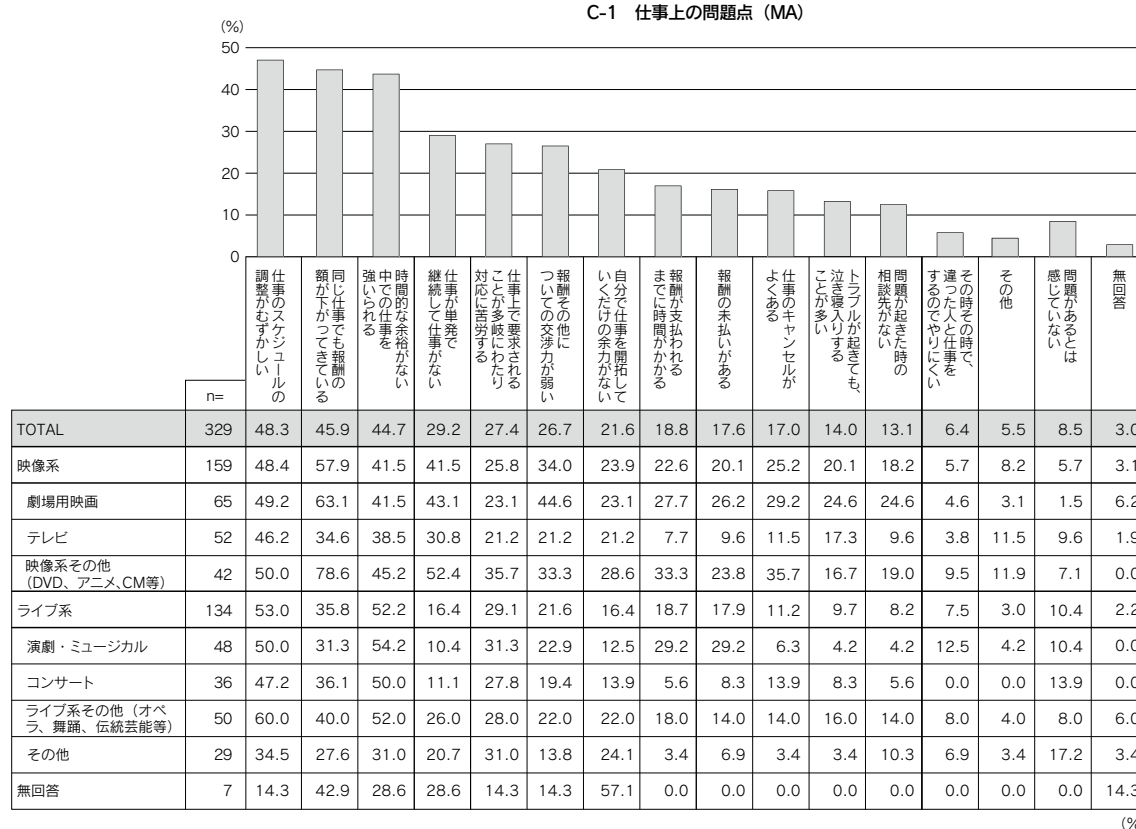
仕事上の問題点(MA)

現在抱えている仕事上の問題点として、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が48.3%で最も高く、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」が45.9%、「時間的な余裕がない中での仕事を強いられる」が44.7%でそれに続いています。

ジャンル別にみると、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」は「映像系」57.9%に対して「ライブ系」35.8%で「映像系」で割合が多くなっています。その他にも、「仕

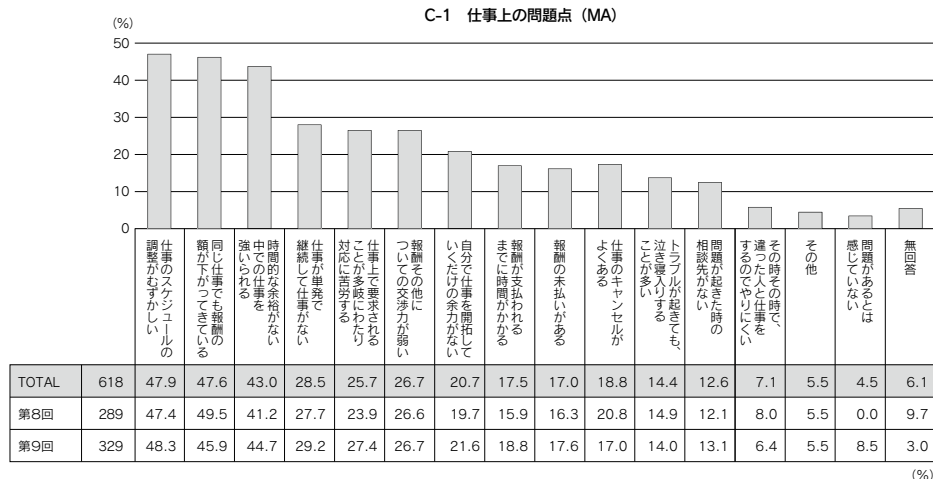
事が単発で継続して仕事がない」「報酬その他についての交渉力が弱い」「仕事のキャンセルがよくある」などで「ライブ系」に比べて「映像系」で問題と感じている割合が高くなっています。

C-1 仕事上の問題点 (MA)



<参考>第8回調査 調査結果

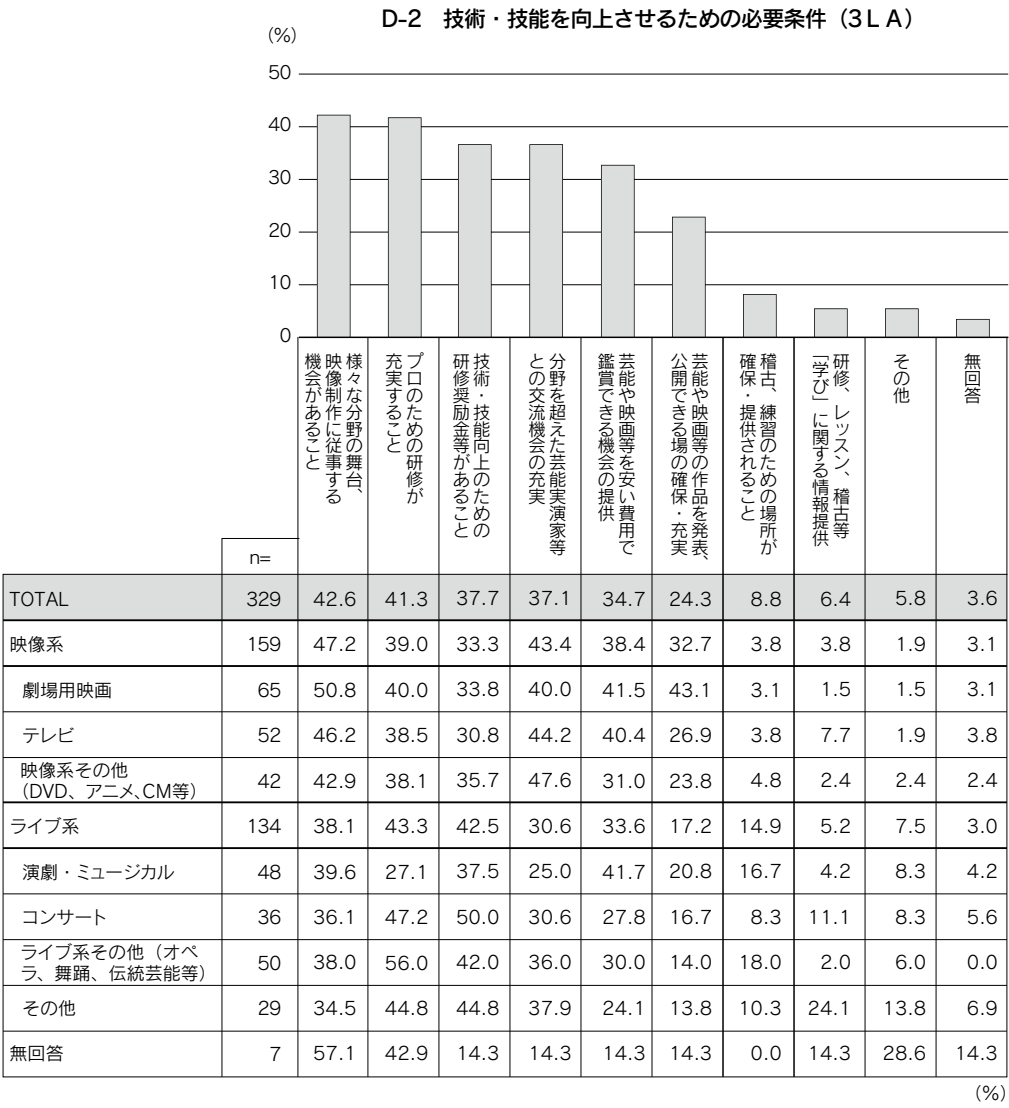
C-1 仕事上の問題点 (MA)



D-2 技術・技能を向上させるための必要条件(3L A)

技術・技能を向上させるための必要条件として、「様々な分野の舞台、映画製作に従事する機会があること」が最も高く42.6%、次いで「プロのための研修が充実すること」が41.3%、以下、「技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること」(37.7%)、「分野を超えて舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること」(37.1%)が続いています。

ジャンル別に見ると、「芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること」は「映像系」43.4%に対して「ライブ系」30.6%で「映像系」の方が高くなっています。



※「その他」「無回答」はサンプル数30未満のため参考値扱いとする。

D-3

安心して活動していくための必要条件(3L A)

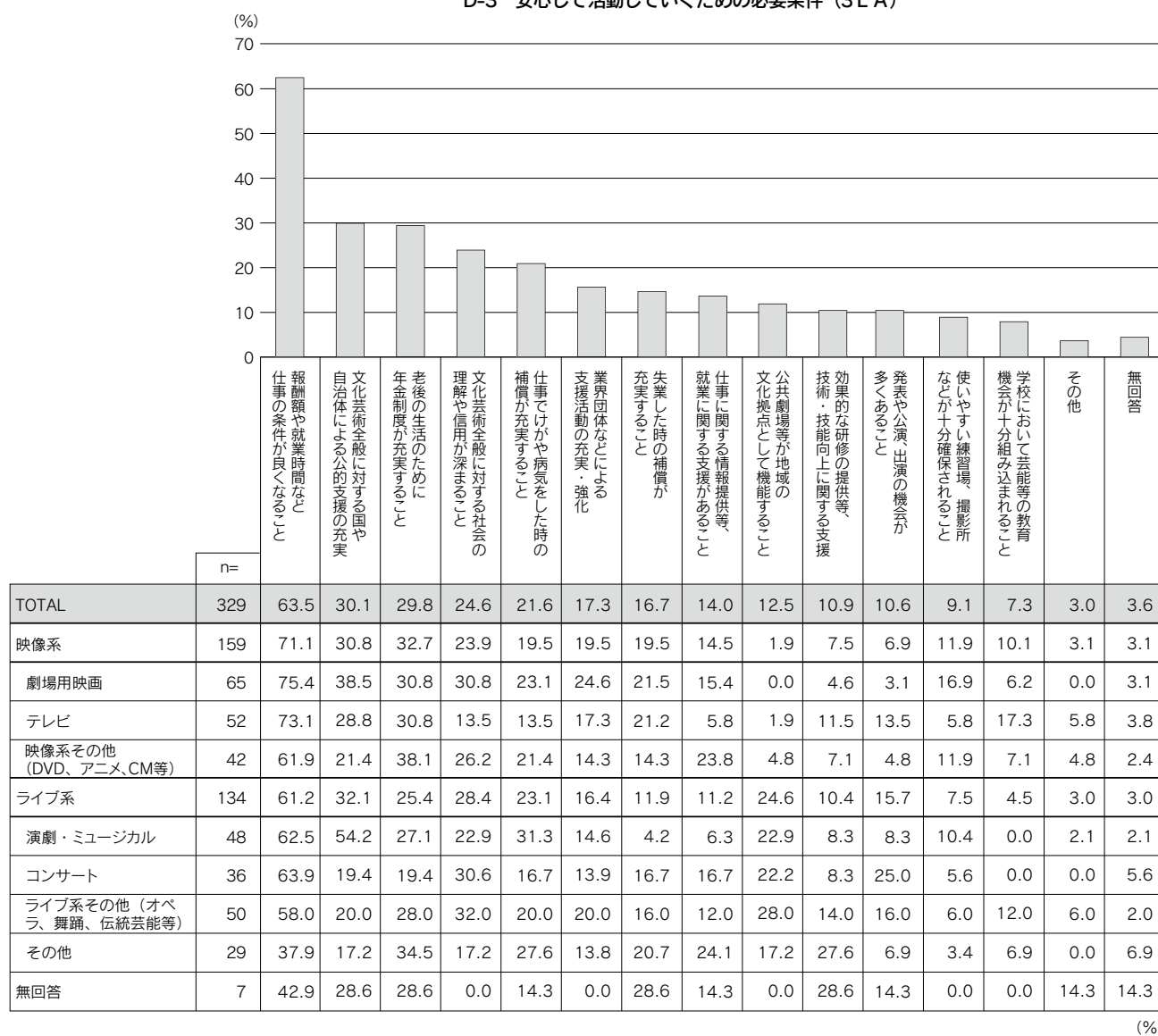
安心して活動していくための必要条件は、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が63.5%で最も高いです。以下、「芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が

充実すること」が30.1%、「老後の生活のために年金制度が充実すること」が29.8%で続いています。

ジャンル別にみると、「公的な支援が充実すること」は「ライブ系」の中でも「演劇・ミュージカル」が

54.2%で特に高くなっています。「公共劇場や音楽堂などが整備され、地域の文化拠点として機能すること」も、「ライブ系」では24.6%と、回答者の割合が「映像系」より高くなっています。

D-3 安心して活動していくための必要条件 (3L A)



(%)

※「その他」「無回答」はサンプル数30未満のため参考値扱いとする。

巻末資料

調査票・集計結果

本調査で使用した芸能実演家用とスタッフ用の2種の調査票に、各設問毎の有効回答数を【n= 】で示し、総回答数に占める割合をパーセンテージで表記、または平均の数値を示す形で集計結果を表示しています。

【巻末資料】調査票（実演家編）

第9回

芸能実演家・スタッフの活動実態についてのアンケート

＜実演家用＞

この調査は、日本芸能実演家団体協議会（芸団協）が 1974 年から 5 年ごとに実施している大規模調査で、舞台、映画、放送、CD、ビデオ、インターネットなど様々なメディア（以下、メディア）、教授・指導などに関わる芸能実演家やスタッフの活動実態を明らかにすることを目的としています。

調査結果は、俳優、歌手、演奏家、舞踊家、演芸家などの芸能実演家やスタッフの仕事をよりよくするための基礎資料として活用されます。社会に対し芸能実演家やスタッフについての理解を深めてもらうために、また、法整備や文化予算拡充など、国や地方自治体への政策提言を行うためにも重要な調査です。調査結果は報告書にまとめて文化庁に提出されるほか、概要は、芸団協のホームページなどを通じて公開いたしますので、皆様にもご覧いただけます。

ご多忙のところ大変お手数ですが、本調査の趣旨をご理解の上、是非ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

無記名でお答えいただきますので、回答から個人を特定することはできません

*匿名でお答えいただき、調査の結果はすべて統計的に処理いたします

皆さまにご迷惑をおかけすることは一切ございません

この調査票を受け取られた実演家・スタッフご自身にて記入をお願いいたします
ご回答は、選択肢から選んで○をつけるか、数字を記入していただくようになっています
回答に迷うような場合は、同封の「記入のてびき」をご参照ください

8月31日(日)までに、同封の返信用封筒(切手不要)でご投函ください

この調査は平成 26 年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の事業として、芸団協正会員団体、映像実演権利者合同機構、および映画放送関連団体のご協力を得て実施しています。

この調査についてご質問等

＜調査に関して不明な点などあれば、遠慮なくお問い合わせください＞

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会（芸団協） 実演芸術政策推進室 担当：米屋（よねや）
〒163-1466 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー11F
TEL.03-5353-6600 FAX.03-5353-6614 E-mail:research@geidankyo.or.jp
<http://www.geidankyo.or.jp/>

【PART① 芸能実演家用】

A. ご自身と仕事との関わりについて伺います

問A-1 (a) 次のうち、現在あなた自身がたずさわっている分野の番号すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=1,603】

《伝統演劇》	《洋楽》	《演芸》
1. 能楽(11.5%)	25. オーケストラ(13.2%)	48. 落語(5.9%)
2. 人形浄瑠璃・文楽(1.1%)	26. 室内楽(10.8%)	49. 講談(0.6%)
3. 組踊(2.2%)	27. オペラ・オペレッタ(6.6%)	50. 浪曲(0.4%)
4. 歌舞伎(3.1%)	28. 合唱(4.4%)	51. 漫才(1.3%)
《現代演劇》	29. ソロ(演奏)(9.0%)	52. 漫談(1.1%)
5. 現代演劇・新劇(13.5%)	30. ソロ(歌唱)(3.5%)	53. 奇術(0.9%)
6. 商業演劇(5.3%)	31. ジャズ(2.1%)	54. 曲芸・太神楽(0.9%)
7. 小劇場系演劇(8.4%)	32. J-POP・フォーク(3.8%)	55. クラウン(0.6%)
8. 児童・青少年演劇(5.1%)	33. ロック・ソウル・R&B(2.0%)	56. 物真似(0.4%)
9. 人形劇(1.7%)	34. ダンス・ヒップホップミュージック(1.1%)	57. 司会(3.9%)
10. 影絵(0.1%)	35. 民族音楽(1.6%)	58. その他の演芸(1.6%)
11. ミュージカル(5.1%)	36. 演歌・流行歌(3.2%)	
《邦楽》	37. その他の音楽(3.0%)	《メディア、そのほか》
12. 雅楽(0.5%)	《舞踊など》	59. 映画(7.5%)
13. 琵琶(0.9%)	38. 日本舞踊(10.6%)	60. 放送(テレビ、ラジオ)・スタジオ録音・スタジオ録画(19.5%)
14. 義太夫(1.2%)	39. バレエ(8.0%)	61. オリジナルビデオ、PV(3.9%)
15. 常磐津(0.7%)	40. 現代舞踊(1.9%)	62. 外画・アニメ吹き替え、ナレーション(5.9%)
16. 清元(0.7%)	41. ジャズダンス(1.9%)	63. 殺陣・アクション・スタント(1.2%)
17. 新内(0.4%)	42. 児童舞踊(0.4%)	64. その他メディア(0.4%)
18. 古曲(4.7%)	43. 舞踏(0.2%)	65. モデル(1.4%)
19. 長唄(2.9%)	44. フラメンコ(2.2%)	66. ショー・イベント・プロモーション(4.7%)
20. 囃子(1.6%)	45. その他の舞踊(3.4%)	67. その他(1.0%)
21. 小唄(1.5%)	46. パントマイム(0.5%)	無回答(3.2%)
22. 三曲(7.9%)	47. パフォーマンス(0.9%)	
23. 民謡(1.9%)		
24. 現代邦楽(4.9%)		

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,603】

問A-2 (a) あなたが現在お仕事でなさっていることを次の選択肢であてはまるものすべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=1,603】

1. 劇やドラマを演ずる(21.0%)	11. 脚本、台本を書く(7.4%)
2. 嘶す・読む・語るなどの芸を演ずる(18.0%)	12. 作詞、作曲・編曲をする(7.7%)
3. 楽器を演奏する(32.6%)	13. 振付け、演出、指揮などをする(16.9%)
4. 歌・唄・謡をうたう・語る(25.5%)	14. 舞台監督をする(3.5%)
5. 踊る・舞う(25.3%)	15. 美術、照明、音響などのプランをつくる(3.1%)
6. 人形をあやつる(1.8%)	16. 大道具、照明、音響などの操作をする(3.2%)
7. プロモーションなどで演ずる(1.9%)	17. 企画をたてる・制作をする(18.0%)
8. その他の実演(2.2%)	18. 主宰・運営・経営をする(19.8%)
9. 司会・レポートなどを行う(7.3%)	19. その他(4.0%)
10. 教える、指導をする(58.4%)	無回答(4.1%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,603】

【PART① 芸能実演家用】

問A-3 あなたがいまの仕事をしようになった動機は何ですか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,603】

1. その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから(8.2%)
 2. 世襲ではないが、家庭環境で自然に入った(16.7%)
 3. とにかくやりたくて(42.2%)
 4. 自分の素質や才能を活かせると思ったから(33.3%)
 5. ごくあたり前の職業には就きたくなかったから(13.5%)
 6. 有名になりたい、目立つことがしてみたいと思ったから(5.9%)
 7. 実力しだいが高収入を得られるようになるから(3.1%)
 8. 芸能活動を通じて自分の主義・思想を伝えることができるから(12.5%)
 9. 先輩、友人、その他の影響を受けて(19.8%)
 10. 小さい時から芸能活動のための教育を受けたから(9.6%)
 11. 親・兄弟その他に勧められて(9.5%)
 12. スカウトされて(2.1%)
 13. オーディションを受けて合格したから(6.4%)
 14. 偶然・何となく(10.2%)
 15. その他(6.1%)
- 無回答(4.5%)

問A-4 あなたの芸歴、活動年数について伺います。

(a) いまの活動分野に関わりはじめてから何年ですか(習いはじめ・養成期間を含む)。

右の欄に年数を記入してください。(端数は6ヵ月単位で切上げ、切下げ。

ただし、1年未満の場合は「1」と記入してください。) 【n=1,603】

平均 37.0 年

(b) 出演料、教授料など報酬を得るようになってから何年ですか。

右の欄に年数を記入してください。(端数は6ヵ月単位で切上げ、切下げ。

ただし、1年未満の場合は「1」と記入してください。) 【n=1,603】

平均 26.6 年

問A-5 (a) あなたは、どのようにしていまの活動分野の技能を身につけましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,603】

1. 小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた(32.9%)
 2. 親や親戚が同じ芸能活動をしていて小さい時から指導を受けた(14.3%)
 3. 小さい時から劇団や合唱団に入って訓練を受けた(3.0%)
 4. その道のプロに弟子入りをして教えを受けた(42.6%)
 5. 専門学校・教室・養成所などで教育を受けた(22.3%)
 6. その分野の専門の大学院、大学、短大で教育を受けた(19.9%)
 7. 学校や職場、地域などのサークル活動で技能を身につけた(13.9%)
 8. プロの仕事の手伝いやアルバイトで技能を身につけた(15.0%)
 9. 劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身につけた(20.8%)
 10. 独学をした(13.5%)
 11. その他(4.1%)
- 無回答(4.1%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も重要だったと思うものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,603】

[PART① 芸能実演家用]

B. ご自身の仕事について伺います

問B-1 (a) 次のうち、あなたが所属している集団、流派、組織等はどれですか。あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいつでも)【n=1,603】

1. 劇団、舞踊団・バレエ団、オペラ団、合唱団、オーケストラ、室内楽団、バンドなどの創造公演集団(32.1%)
2. 映画会社、興行会社、企画制作会社(2.9%)
3. 俳優、音楽、芸能などのマネジメント事務所、プロダクション(14.9%)
4. 協会・組合など(47.8%)
5. 芸を継承する流派・一門・社中(38.6%)
6. ライブハウス、クラブ、キャバレーに雇われている(0.7%)
7. 教室、研修所、学校などの教育機関(17.7%)
8. その他(1.9%)
9. フリー(10.0%)
- 無回答(3.7%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、あなたと最も関係の深いものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,603】

問B-2 (a) あなたが昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)1年間に行なった芸能に関わる仕事とそれ以外の仕事について、あてはまるものの番号すべてに○印をつけてください。(○印はいつでも)【n=1,603】

(b) また、上記(a)で○印をつけたお仕事で昨年1年間にあなたが費やした日数をお答えください。その際、1日の活動時間が数十分から数時間程度の仕事でも1日としてカウントしてください。

	(a)行った活動	(b)日数
1. 舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演	76.9%	60.4日 【n=1,232】
2. 舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古(リハーサル、移動日を含む)	68.2%	84.7日 【n=1,094】
3. 映画・放送・メディアへの出演、演奏(テレビ、ラジオ出演、演奏、アテレコ、ビデオ出演、レコード・CD・テープなどのレコーディング、CM出演、印刷媒体への露出など)	28.8%	29.9日 【n=462】
4. 映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古(リハーサル、移動日を含む)	16.6%	27.5日 【n=266】
5. 振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など(自宅などで個人での作業を含む)(25.2%)	25.2%	81.1日 【n=404】
6. 企画・プロデュース・制作	17.3%	85.4日 【n=278】
7. 教える仕事(ワークショップ・体験指導も含む)	63.1%	102.5日 【n=1,012】
8. 芸能に関連するその他の活動(関連する講演、執筆、スタッフや、組織などでの活動)	22.0%	50.8日 【n=352】
9. 技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など	46.0%	151.0日 【n=737】
10. 芸能活動以外の仕事(事業経営、パート・アルバイトなど)	23.5%	163.0日 【n=376】
無回答	5.6%	

[PART① 芸能実演家用]

問B-3 あなたの仕事の機会は2～3年前に比べて増えていますか、減っていますか。

問B-2でお答えになった仕事の内容別に、あてはまる選択肢の番号に、それぞれ○印をつけてください。

(○印は1つずつ)

	大幅に増えた	増えた	変わらない	やや減った	大幅に減った	この仕事はしていない	無回答
(a) 舞台・コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演【n=1,232】	2.6%	17.2%	37.6%	23.1%	15.9%	0.6%	3.0%
(b) 映画・放送・メディアへの出演、演奏 (テレビ、ラジオ出演、演奏、アテレコ、ビデオ出演、レコード・CD・テープなどのレコーディング、CM出演、印刷媒体への露出など)【n=462】	1.5%	15.2%	37.4%	18.4%	21.9%	1.9%	3.7%
(c) 振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など (自宅などで個人での作業を含む)【n=404】	4.0%	22.0%	47.5%	11.9%	6.9%	1.5%	6.2%
(d) 企画・プロデュース・制作【n=278】	5.8%	25.2%	46.0%	9.0%	4.0%	2.5%	7.6%
(e) 教える仕事(ワークショップ、体験指導も含む)【n=1,012】	6.5%	27.1%	38.3%	15.7%	8.5%	0.7%	3.2%
(f) 芸能に関連するその他の活動 (関連する講演、執筆、スタッフや、組織などでの仕事)【n=352】	6.0%	25.6%	38.1%	11.1%	5.4%	4.8%	9.1%
(g) 芸能活動以外の仕事(事業経営、パート・アルバイトなど)【n=376】	6.1%	11.7%	55.6%	13.8%	5.3%	2.9%	4.5%

問B-4 次のうち、あなたが昨年(2013(平成 25)年 1 月から 12 月末まで)1年間にした、芸能以外の仕事すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=1,603】

1. 貸しアパート、貸し店舗など不動産事業やサービス業、物販業、飲食店経営などの事業経営を行った(7.8%)
 2. 会社、団体などの正規従業員として働いた(7.0%)
 3. 事務所やコンビニ、飲食店などの店舗、工場、工事現場などでパート、アルバイトとして働いた(11.5%)
 4. その他(7.2%)
 5. 芸能またはそれに関連する仕事以外はしていない(53.8%)
- 無回答(14.5%)

[PART① 芸能実演家用]

★問A-2で「10.教える、指導をする」に○印を付けた方に伺います

* 教える仕事をされていない方は、次ページ、問B-7へ

問B-5 (a) あなたがなさっている教える仕事について、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=936】

(b) 【問B-5(a)で1、2に○印をつけた方にうかがいます。】現在、あなたが(a)の選択肢1、2の教授所で直接、継続的に教えている生徒(弟子)数は何名ですか。右の欄に、おおよその人数を記入してください。

	(a)該当するもの	(b)直接の生徒・弟子の数
1. 学校や教室、養成機関に勤めて(雇われて)教えている	51.7%	平均47.7人 【n=484】
2. 自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている	67.0%	平均23.1人 【n=627】
3. 不定期の仕事として、ときどき、体験指導などを依頼される	36.9%	
無回答	4.3%	

問B-6 【問B-5(a)で、「1. 学校や教室、養成機関に勤めて(雇われて)教えている」に○印をつけた方に伺います。】(それ以外の方は問B-7へ)

あなたが勤めて(雇われて)いるのはどんな学校、教室ですか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=484】

1. 大学・大学院(23.1%)	6. 民間企業や個人主催の音楽教室、バレエ教室等 (23.3%)
2. 短大(4.1%)	7. 公立施設等で開催する入門講座、ワークショップ (16.5%)
3. 専門学校(5.2%)	8. カルチャーセンター(25.6%)
4. 小・中学・高校(25.6%)	9. その他(11.2%)
5. 劇団、舞踊団、プロダクションなどの付属養成機関(13.4%)	
無回答(2.1%)	

[PART① 芸能実演家用]

★ここからはすべての方に伺います

問B-7 (a) あなた個人の昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)分の税込みの総収入(芸能以外の仕事による収入を含む)はおおよそいくらでしたか。あてはまるものの番号に○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. 100万円未満(13.4%)	13. 1,200～1,300万円未満(0.9%)
2. 100～200万円未満(15.7%)	14. 1,300～1,400万円未満(0.2%)
3. 200～300万円未満(17.7%)	15. 1,400～1,500万円未満(0.7%)
4. 300～400万円未満(12.0%)	16. 1,500～1,600万円未満(0.5%)
5. 400～500万円未満(7.6%)	17. 1,600～1,700万円未満(0.1%)
6. 500～600万円未満(6.8%)	18. 1,700～1,800万円未満(0.2%)
7. 600～700万円未満(4.9%)	19. 1,800～1,900万円未満(0.2%)
8. 700～800万円未満(3.6%)	20. 1,900～2,000万円未満(0.4%)
9. 800～900万円未満(2.5%)	21. 2,000～2,500万円未満(0.4%)
10. 900～1,000万円未満(2.2%)	22. 2,500～3,000万円未満(0.3%)
11. 1,000～1,100万円未満(2.2%)	23. 3,000万円以上(0.6%)
12. 1,100～1,200万円未満(1.2%)	無回答(5.8%)

(b) あなたが昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)、実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費は、総収入に対してどのくらいの割合でしたか。確定申告で、おおよそどのくらいの割合を必要経費に計上したか、あてはまるものの番号に○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. 給与所得だけで確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない (23.3%)	
2. 20%未満(12.2%)	7. 60%～70%未満(7.4%)
3. 20%～30%未満(10.8%)	8. 70%～80%未満(4.0%)
4. 30%～40%未満(10.5%)	9. 80%～90%未満(2.7%)
5. 40%～50%未満(7.2%)	10. 90%以上(4.9%)
6. 50%～60%未満(6.5%)	無回答(10.5%)

問B-8 あなた個人の昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)の年収を仕事の種別に分けると、どのような割合になりますか。おおよその割合を欄内に記入してください。【n=1,603】
(該当しない仕事の場合は「0」(ゼロ)を記入し、すべての項目の合計が100になるようにお答えください。小数点以下、四捨五入)

(a) 舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演	31.6%
(b) 映画・放送・メディアの仕事	5.7%
(c) 振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆・企画・プロデュース・制作	6.2%
(d) 教える(指導・教授)仕事	25.5%
(e) 原稿料、著作権料、著作隣接権料	1.0%
(f) 芸能に関連するその他の仕事	4.6%
(g) 年金、不動産、その他の事業経営	11.7%
(h) 上記以外の収入	13.9%
合 計	100%

[PART① 芸能実演家用]

問B-9 あなたが得ている報酬を形式別に分けると、どのような割合になりますか。おおよその数字を欄内に記入してください。【n=1,603】
(該当しない場合は「0」(ゼロ)を記入し、すべての項目の合計が 100 になるようにお答えください。小数点以下、四捨五入)

(a) 月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬	40.1%
(b) 仕事に応じて支払われる報酬 (月給、年俸などのあらかじめ決められたものでないもの)	56.9%
(c) その他-著作権料、著作隣接権料など	1.8%
合 計	100%

問B-10 あなたは、放送番組等に出演する際には契約書を交わしていますか。あてはまる番号に○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. 必ず契約書は交わしている(4.9%)
 2. なるべく交わすようにしているがいつもではない(5.9%)
 3. ときどき交わすことがある(9.5%)
 4. 全く契約書は交わしていない(16.3%)
 5. マネージャーに任せているので自分では確認していない(10.7%)
 6. 放送番組には出演していない(42.2%)
- 無回答(10.4%)

問B-11 あなたは、実演家が有する著作隣接権について知っていますか。あてはまる番号に○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. 知っている(37.6%)
 2. 聞いたことはあるが、よく分からない(30.6%)
 3. 知らない(25.8%)
- 無回答(6.1%)

問B-12 あなたは、著作隣接権に由来する権利についてどうしていますか。あてはまる番号に○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. 権利処理を行う団体に委任している(30.8%)
 2. 所属事務所、マネージャーに任せているので、自分ではよくわからない(16.9%)
 3. 何もしていない(44.4%)
- 無回答(8.0%)

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

C. 仕事をするうえでの環境や条件について伺います

●ここからは、実演家、スタッフ、共通の質問です

問C-1 あなたが仕事をするうえで、どのような点に問題があると感じていますか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,603】

1. 仕事のキャンセルがよくある(4.9%)
2. 仕事のスケジュールの調整がむずかしい(24.8%)
3. 自分で仕事を開拓していくだけの余力がない(31.2%)
4. その時その時で、違ったメンバーと仕事をするのでやりにくい(3.1%)
5. 仕事が単発で継続して仕事がない(27.0%)
6. 報酬その他についての交渉力が弱い(25.6%)
7. 報酬が支払われるまでに時間がかかる(11.3%)
8. 報酬の未払いがある(5.2%)
9. トラブルが起きても、泣き寝入りをする人が多い(5.7%)
10. 問題が起きた時の相談先がない(9.0%)
11. 時間的な余裕がない中での仕事を強いられる(12.4%)
12. 仕事上で要求されることが多岐にわたり対応に苦勞する(9.7%)
13. 同じ仕事でも報酬の額が下がってきている(20.8%)
14. その他(4.9%)
15. 問題があるとは思っていない(18.6%)
- 無回答(7.2%)

問C-2 あなたが仕事をするうえで必要な費用で、通常あなた個人の負担になっているものには、どのようなものがありますか(所属集団・流派・組織や依頼主、制作プロダクションが通常負担してくれないもの)。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=1,603】

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 衣裳などの購入、洗濯費、借用料(57.2%) | 10. 資格認定にともなう費用(11.3%) |
| 2. 整髪料、化粧品など(45.4%) | 11. 交通費(56.6%) |
| 3. 機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代(37.4%) | 12. 宿泊費(18.3%) |
| 4. 楽譜代・資料代(31.8%) | 13. 通信費(44.4%) |
| 5. チラシ、プログラムの印刷費(19.4%) | 14. 接待費・交際費(44.2%) |
| 6. 共演者に対する出演料、謝礼(20.6%) | 15. 身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出(40.3%) |
| 7. ノルマのチケット売れ残りの自己負担(25.9%) | 16. その他(1.7%) |
| 8. 会場の使用料(19.8%) | 17. 個人負担は特にない(7.2%) |
| 9. 技能習得などに支払う授業料(29.8%) | 無回答(3.4%) |

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

問C-3 あなたは昨年(2013(平成 25)年 1 月から 12 月末まで)1年間に医師の治療が必要な

(a) 仕事上の傷害(ケガ)、(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験がありますか。

(○印は1つずつ)【n=1,603】

	経験した	経験しなかった	無回答
(a) 仕事上の傷害(ケガ)	9.0%	72.1%	18.8%
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など	17.0%	61.5%	21.5%

【問C-3(a)で仕事上の傷害(ケガ)を「経験した」に○印をつけた方に伺います】

問C-4 (a) それらはどこで起きましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=145】

1. 舞台・ステージ(32.4%)	4. ロケ現場(2.1%)	7. その他(9.0%)
2. 楽屋(3.4%)	5. 稽古場(48.3%)	無回答(12.4%)
3. スタジオ・撮影所(2.1%)	6. 移動中(12.4%)	

(b) その傷害(ケガ)の治療費などの補償はどのようになりましたか。(○印は1つだけ)【n=145】

1. 自分で負担した(69.0%)	4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(7.6%)
2. 労災保険が適用された(7.6%)	5. その他(2.8%)
3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(6.9%)	無回答(6.2%)

(c) その時、治療費以外の補償はありましたか。

(○印は1つだけ)【n=145】

1. 見舞い金程度(5.5%)	3. その仕事を含め休んだ全期間に得られるであろう収入に見合う補償(4.1%)
2. その仕事をやり終えた場合に得られる報酬に相当する分の補償(1.4%)	4. 何もない(77.9%)
	無回答(11.0%)

問C-5 【問C-3(b)で仕事の原因と考えられる病気・症状などを「経験した」に○印をつけた方に伺います】

(a) 治療費などの負担はどのようになりましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=272】

1. 自分で負担した(91.2%)	4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(9.9%)
2. 労災保険が適用された(1.1%)	5. その他(3.3%)
3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(1.8%)	無回答(1.1%)

(b) その時、治療費以外の補償はありましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=272】

1. 見舞い金程度(5.5%)	3. その仕事を含め休んだ全期間に得られるであろう収入に見合う補償(1.5%)
2. その仕事をやり終えた場合に得られる報酬に相当する分の補償(2.9%)	4. 何もない(83.5%)
無回答(6.6%)	

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

D. 仕事や生活に対する意識について伺います

問D-1 (a) あなたはご自分の仕事について、どのように思っていますか。
 あてはまる番号に1つつつ○印をつけてください。

(○印は1つつつ)【n=1,603】

	そう思う	まあそう思う	あまり そうは 思わない	そうは 思わない	無 回 答
仕事の量は十分である	17.2%	24.5%	24.1%	28.2%	6.0%
入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っ ている‘本業’の仕事である	33.0%	43.8%	11.7%	5.4%	6.1%
自分の仕事は世の中から評価されている	19.5%	43.4%	23.8%	7.9%	5.4%
自分が持つ能力を十分活用することができている	18.3%	44.2%	24.5%	7.9%	5.2%
自分の仕事にプライドを持っている	60.6%	30.8%	3.5%	1.2%	3.9%
いまの仕事をできるかぎり続けたい	64.9%	23.3%	5.7%	1.9%	4.2%
ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明る い見通しを持っている	11.4%	34.6%	38.5%	20.1%	5.4%

(b) あなたが働く目的は何ですか。あなたの考え方に近いものを次の中から1つ選んで番号に○
 印をつけてください。

(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. お金を得るために働く(20.3%)
2. 社会の一員として、務めを果たすために働く(12.5%)
3. 自分の能力や才能を発揮するために働く(37.4%)
4. 生きがいを見つけるために働く(24.9%)
5. わからない(2.4%)
- 無回答(2.5%)

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

問D-2 あなたは、あなたの技術・技能を向上させるためのサポートとして何が重要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うもの3つまで〇印をつけてください。(〇印は3つまで)

【n=1,603】

1. プロのための研修が充実すること(30.4%)
2. さまざまな分野の舞台、映像制作に仕事として携わる機会があること(31.9%)
3. 芸能や映画などを安い費用で鑑賞できる機会が提供されること(23.4%)
4. 芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること(34.6%)
5. 稽古、練習のための場所が確保・提供されること(35.7%)
6. 研修、レッスン、稽古など「学び」に関する情報が提供されること(17.7%)
7. 技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること(34.2%)
8. 分野を超えて舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること(22.4%)
9. その他(3.4%)
- 無回答(5.5%)

問D-3 あなたが安心して活動に取り組めるようになるために、何が重要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うもの3つまで〇印をつけてください。(〇印は3つまで) 【n=1,603】

1. 発表や公演、出演の機会が多くあること(49.8%)
2. 仕事に関する情報提供など、就業に関する支援があること(11.0%)
3. 報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること(38.7%)
4. 効果的な研修、レッスンの提供など、技術・技能向上に関する支援があること(13.7%)
5. 使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること(14.9%)
6. 失業した時の補償が充実すること(10.5%)
7. 仕事でけがや病気をした時の補償が充実すること(12.7%)
8. 老後の生活のために年金制度が充実すること(22.7%)
9. 公共劇場や音楽堂などが整備され、地域の文化拠点として機能すること(17.2%)
10. 学校における芸能や映画、放送などの教育機会が十分組み込まれること(17.5%)
11. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること(21.3%)
12. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること(31.2%)
13. 業界団体などによる芸能や映画、放送などの活動を支援する活動が充実・強化されること(10.9%)
14. その他(2.3%)
- 無回答(3.2%)

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

E. あなたご自身のことについて伺います

問E-1 あなたの性別と年齢を記入してください。【n=1,603】

1. 男(51.8%)
2. 女(46.6%)
無回答(1.6%)

平均 54.0 歳

問E-2 あなたの最終学歴をお答えください。

(○印は1つだけ)【n=1,603】

1. 義務教育修了(4.1%)	4. 高専卒業(1.7%)	7. その他(1.0%)
2. 高校卒業(29.8%)	5. 短大卒業(7.7%)	無回答(1.6%)
3. 専門学校卒業(7.4%)	6. 大学・大学院卒業(46.7%)	

問E-3 (a) 現在、配偶者はいらっしゃいますか。【n=1,603】

1. 配偶者あり(61.6%) 2. 配偶者なし(未婚)(25.9%) 3. 配偶者なし(離・死別)(11.0%)
無回答(1.4%)

(b) お子さんはいらっしゃいますか。【n=1,603】

1. 子どもあり(53.2%) 2. 子どもなし(45.1%) 無回答(1.7%)

問E-4 現在一緒に住まいのご家族は何人ですか(あなたご自身を含みます)。【n=1,603】

1. 1人(20.5%)	3. 3人(21.8%)	5. 5人(4.2%)
2. 2人(35.6%)	4. 4人(13.6%)	6. 6人以上(2.6%)
無回答(1.7%)		

問E-5 あなたのご家族やご親戚に舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの方がいらっしゃいますか。あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=1,603】

1. 父(6.4%)	4. 子ども(10.6%)	7. その他の家族・親戚(12.9%)
2. 母(4.9%)	5. 祖父母(2.0%)	8. 誰もいない(59.5%)
3. 配偶者(14.0%)	6. 兄弟姉妹(7.5%)	無回答(2.3%)

問E-6 現在、住まいの都道府県をお答えください。

都 道
府 県

あと少しです！

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

問E-7 あなたは事故など万一の場合や老後の暮らしに対して、何らかの備えをしていますか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,603】

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| 1. 国民年金に加入している(57.3%) | 6. 株式や不動産などに投資をしている(9.0%) |
| 2. 厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している(33.3%) | 7. 芸能関係以外の事業を行っている(6.2%) |
| 3. その他民間の年金に加入している(13.6%) | 8. 備えをする経済的余裕がない(18.9%) |
| 4. 生命保険や損害保険などに加入している(60.0%) | 9. まったく考えていない(0.8%) |
| 5. 貯蓄をしている(33.7%) | 無回答(2.2%) |

* 芸団協や所属団体などに行なってほしい舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの仕事環境改善に必要なこと、その他のご意見、ご要望がありましたら、何でもご自由にお書きください。

設問は以上です。ご協力大変ありがとうございました。

同封の返信用封筒でご返送ください。(切手は不要です)

【巻末資料】調査票（スタッフ編）

第9回 芸能実演家・スタッフの活動実態についてのアンケート ＜スタッフ用＞

この調査は、日本芸能実演家団体協議会（芸団協）が 1974 年から 5 年ごとに実施している大規模調査で、**舞台、映画、放送、CD、ビデオ、インターネットなど様々なメディア（以下、メディア）、教授・指導などに関わる芸能実演家やスタッフの活動実態を明らかにすることを目的**としています。

調査結果は、**芸能に関わるスタッフの仕事環境をよりよくするための基礎資料として活用されます**。社会に対し芸能実演家やスタッフについての理解を深めてもらうために、また、法整備や文化予算拡充など、国や地方自治体への政策提言を行うためにも重要な調査です。調査結果は報告書にまとめて文化庁に提出されるほか、概要は、芸団協のホームページなどを通じて公開いたしますので、皆様にもご覧いただけます。

ご多忙のところ大変お手数ですが、本調査の趣旨をご理解の上、是非ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

無記名でお答えいただきますので、回答から個人を特定することはできません

* 匿名でお答えいただき、調査の結果はすべて統計的に処理いたします

皆さまにご迷惑をおかけすることは一切ございません

この調査票を受け取られたスタッフご自身にて記入をお願いいたします
ご回答は、選択肢から選んで○をつけるか、数字を記入していただくようになっています
回答に迷うような場合は、同封の「記入のてびき」をご参照ください

8月31日(日)までに、同封の返信用封筒(切手不要)でご投函ください

この調査は平成 26 年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の事業として、芸団協正会員団体、映像実演権利者合同機構、および映画放送関連団体のご協力を得て実施しています。

この調査についてご質問等

＜調査に関して不明な点などあれば、遠慮なくお問い合わせください＞

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会（芸団協） 実演芸術政策推進室 担当：米屋（よねや）
〒163-1466 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー11F
TEL.03-5353-6600 FAX.03-5353-6614 E-mail: research@geidankyo.or.jp
<http://www.geidankyo.or.jp/>

[PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用]

A. ご自身と仕事との関わりについて伺います

問A-1 (a) 次のうち、あなたが現在たずさわっている活動分野の番号すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=329】

1. 劇場用映画(35.0%)	7. CM(23.1%)	13. 伝統芸能(19.8%)
2. PR・教育・記録映画(17.3%)	8. レコーディング(10.0%)	14. 演芸(13.4%)
3. アニメ(3.0%)	9. 演劇・ミュージカル(36.5%)	15. ショー・イベント・プロ モーション(29.2%)
4. ビデオ・DVD(24.0%)	10. オペラ・バレエ(26.7%)	16. その他(15.8%)
5. テレビ(41.6%)	11. コンサート(35.3%)	無回答(0.9%)
6. ラジオ(8.5%)	12. 舞踊(26.4%)	

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=329】

問A-2 (a) 次のうち、あなたが現在たずさわっている職種すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=329】

1. プロデューサー(13.4%)	9. 音響効果(14.3%)	17. メイキャップ・結髪(0.0%)
2. ディレクター(14.3%)	10. 舞台音響(20.1%)	18. 特撮・特殊映像(2.1%)
3. 映画監督(8.8%)	11. 編集(12.5%)	19. 特殊効果(2.4%)
4. 舞台監督(20.7%)	12. スクリプター(4.6%)	20. アクション指導・構成(0.3%)
5. 助監督・アシスタントディレクター (1.5%)	13. 美術(8.2%)	21. 製作進行(7.9%)
6. 撮影(15.5%)	14. 大道具(9.4%)	22. 舞台・スタジオ機構(11.2%)
7. 照明(33.1%)	15. 小道具(4.9%)	23. ホール・劇場管理(22.5%)
8. 録音・整音(調音)(16.4%)	16. 衣裳(1.2%)	24. その他(8.2%)
		無回答(0.3%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=329】

問A-3 (a) 次のうち、あなたが現在たずさわっている職務すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=329】

1. 監督(25.2%)	6. 施設や設備の操作・管理(26.7%)
2. デザイナー・プランナー(28.0%)	7. 運営や進行の管理(17.6%)
3. 技師、担当部門の責任者(48.9%)	8. 学校等で教える(24.0%)
4. 助手(14.0%)	9. 経営・運営(20.7%)
5. オペレーター(35.9%)	10. その他(2.7%)
	無回答(2.4%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=329】

[PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用]

- (c) 【問 A-3(a)で「8. 学校等で教える」に○印をつけた方に伺います。
(昨年、教える仕事をしなかった方は、問A-4に進んでください)

あなたが勤めて(雇われて)いるのはどんな学校、教室、機関ですか。
次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=79】

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 大学・大学院(46.8%) | 5. 海外の大学・養成機関など (3.8%) |
| 2. 短大(5.1%) | 6. 公立施設などで開催する入門講座、ワークショップ
(22.8%) |
| 3. 専門学校(44.3%) | 7. カルチャーセンター(0.0%) |
| 4. 養成機関(協会等が主催の専門的
講座を含む)(19.0%) | 8. その他(10.1%)
無回答(1.3%) |

★ここからはすべての方に伺います

- 問A-4 あなたが舞台、映画、放送に関わる仕事で報酬を得るようになってからの年数をお答えください。(端数は6ヵ月単位で切上げ、切下げ。ただし、1年未満の場合は「1」と記入してください。)
【n=329】

経験年数

31.6 年

- 問A-5 (a) あなたは、どのようにして現在の活動分野の技術・職能を身につけましたか。次のうち、
あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=329】

- | |
|---|
| 1. 専門学校・教室・養成所などで教育を受けた(33.4%) |
| 2. 専門の大学院、大学、短大で教育を受けた(12.5%) |
| 3. 学校や職場、地域などのサークル活動で技能を身につけた(17.6%) |
| 4. 舞台技術会社や劇団、撮影所、製作プロダクションなどに入って技能を身につけた(56.2%) |
| 5. フリー契約やアルバイトなど現場の経験を経ながら技能を身につけた(42.6%) |
| 6. 自主制作で技能を身につけた(10.3%) |
| 7. その他(6.7%) |
| 無回答(2.4%) |

- (b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=329】

[PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用]

B. ご自身の仕事について伺います

- 問B-1 (a) あなたが昨年(2013(平成 25)年 1 月から 12 月末まで)1年間にたずさわった仕事について、あてはまるものすべてに〇印をつけてください。(〇印はいくつでも)【n=329】
- (b) あわせて、昨年1年間にたずさわった本数をお答えください。
- (c) また、それぞれの活動で昨年(2013(平成 25)年)1年間にあなたが費やした日数をお答えください。その際、1日の活動時間が数十分から数時間程度の仕事でも、1日としてカウントしてください。(日数の合計は 365 日を超えて構いません)

	(a)たずさわった仕事	(b)本数	(c)日数
1. 劇場用映画	26.4%	4.9本【n=87】	112.6日【n=87】
2. PR・教育・記録映画	10.0%	8.9本【n=33】	34.8日【n=33】
3. アニメ	1.5%	35.2本【n=5】	165.5日【n=5】
4. ビデオ・DVD	13.1%	10.8本【n=43】	33.4日【n=43】
5. テレビ	30.1%	27.3本【n=99】	108.6日【n=99】
6. ラジオ	6.1%	11.6本【n=20】	29.2日【n=20】
7. CM	17.0%	8.6本【n=56】	34.9日【n=56】
8. 演劇・ミュージカル	32.2%	8.5本【n=106】	109.8日【n=106】
9. オペラ・バレエ	21.9%	7.2本【n=72】	48.2日【n=72】
10. コンサート	32.5%	20.0本【n=107】	38.3日【n=107】
11. 舞踊	21.3%	5.5本【n=70】	16.7日【n=70】
12. 伝統芸能	16.1%	3.3本【n=53】	19.3日【n=53】
13. 演芸	10.0%	3.4本【n=33】	5.3日【n=33】
14. ショー・イベント	29.2%	15.8本【n=96】	35.1日【n=96】
15. その他	21.6%	30.0本【n=71】	89.7日【n=71】
無回答	3.6%		

- 問B-2 あなたの仕事の機会は2～3年前に比べて増えていますか、減っていますか。仕事の内容別にあてはまる番号にそれぞれ〇印をつけてください。(〇印は1つずつ)

	増え大幅に	増えた	変わらない	減った	減大幅に	この仕事はない	無回答
(a)劇場用映画【n=87】	3.4%	6.9%	36.8%	19.5%	31.0%	1.1%	1.1%
(b)PR・教育・記録映画【n=33】	0.0%	18.2%	27.3%	6.1%	39.4%	3.0%	6.1%
(c)アニメ【n=5】	0.0%	40.0%	20.0%	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%
(d)ビデオ・DVD【n=43】	0.0%	20.9%	32.6%	18.6%	20.9%	2.3%	4.7%
(e)テレビ【n=99】	6.1%	23.2%	34.3%	16.2%	17.2%	0.0%	3.0%
(f)ラジオ【n=20】	5.0%	5.0%	40.0%	25.0%	15.0%	5.0%	5.0%
(g)CM【n=56】	0.0%	23.2%	26.8%	14.3%	35.7%	0.0%	0.0%
(h)演劇・ミュージカル【n=106】	1.9%	17.9%	36.8%	27.4%	11.3%	0.0%	4.7%
(i)オペラ・バレエ【n=72】	0.0%	8.3%	59.7%	19.4%	6.9%	0.0%	5.6%
(j)コンサート【n=107】	0.9%	14.0%	41.1%	29.9%	8.4%	0.9%	4.7%
(k)舞踊【n=70】	0.0%	8.6%	50.0%	24.3%	12.9%	0.0%	4.3%
(l)伝統芸能【n=53】	0.0%	3.8%	67.9%	11.3%	17.0%	0.0%	0.0%
(m)演芸【n=33】	3.0%	3.0%	54.5%	21.2%	9.1%	3.0%	6.1%
(n)ショー・イベント【n=96】	2.1%	15.6%	32.3%	26.0%	17.7%	0.0%	6.3%
(o)その他【n=71】	4.2%	19.7%	32.4%	14.1%	4.2%	2.8%	22.5%

【PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用】

問B-3 (a) あなた個人の昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)分の税込みの総収入はいくらでしたか。あてはまるものの番号に○印をつけてください。
(舞台・映画・放送メディアスタッフ以外の仕事による収入を含む) (○印は1つだけ)

【n=329】

1. 100万円未満(4.0%)	13. 1,200～1,300万円未満(0.9%)
2. 100～200万円未満(5.5%)	14. 1,300～1,400万円未満(0.3%)
3. 200～300万円未満(10.9%)	15. 1,400～1,500万円未満(0.6%)
4. 300～400万円未満(13.7%)	16. 1,500～1,600万円未満(0.6%)
5. 400～500万円未満(15.8%)	17. 1,600～1,700万円未満(0.0%)
6. 500～600万円未満(15.2%)	18. 1,700～1,800万円未満(0.0%)
7. 600～700万円未満(6.4%)	19. 1,800～1,900万円未満(0.3%)
8. 700～800万円未満(8.5%)	20. 1,900～2,000万円未満(0.9%)
9. 800～900万円未満(6.1%)	21. 2,000～2,500万円未満(0.6%)
10. 900～1,000万円未満(4.0%)	22. 2,500～3,000万円未満(0.0%)
11. 1,000～1,100万円未満(1.8%)	23. 3,000万円以上(0.3%)
12. 1,100～1,200万円未満(1.5%)	無回答(2.1%)

(b) あなたが昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)、実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費は、総収入に対してどのくらいの割合でしたか。確定申告で、おおよそどのくらいの割合を必要経費に計上したか、あてはまるものの番号に○印をつけてください。

(○印は1つだけ)【n=329】

1. 給与所得だけで確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない (36.8%)	
2. 20%未満(10.3%)	7. 60%～70%未満(5.5%)
3. 20%～30%未満(12.2%)	8. 70%～80%未満(3.3%)
4. 30%～40%未満(13.1%)	9. 80%～90%未満(1.5%)
5. 40%～50%未満(6.4%)	10. 90%以上(0.0%)
6. 50%～60%未満(4.9%)	無回答(6.1%)

[PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用]

問B-4 あなた個人の昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)の総収入を活動別に分けると、どのような割合になりますか。おおよその割合を欄内に記入してください。【n=329】
(該当しない活動の場合は「0」(ゼロ)と記入し、すべての項目の合計が100になるようにお答えください。小数点以下、四捨五入)

(a) 舞台、映画、放送に関わるスタッフとして	59.3%
(b) 演出・台本書き・企画・プロデュース・制作	6.5%
(c) 教える(教授・指導)仕事	5.2%
(d) 舞台、映画、放送に関するその他の仕事	13.7%
(e) 年金、不動産、その他の事業	6.3%
(f) 上記以外の収入	9.2%
合 計	100%

問B-5 (a) あなたの雇用形態はどれですか。次のうち、あてはまるものに○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=329】

1. 正社員・正職員(26.7%)	4. 会社を経営(19.8%)
2. 契約社員(6.4%)	5. その他(2.1%)
3. フリーランス(42.9%)	無回答(2.1%)

(1、4、5を選択した方は次のページへ)

(b) 【(a)で「2. 契約社員」「3. フリーランス」に○印をつけた方にうかがいます。】
あなたの契約形態で最も多いものはどのケースですか。(○印は1つだけ)【n=162】

1. 作品契約(53.7%)	5. 週単位(0.0%)
2. 本数契約(8.6%)	6. 1日単位(13.6%)
3. 年契約(12.3%)	7. その他(3.7%)
4. 月単位(4.9%)	無回答(3.1%)

(c) 【(a)で「2. 契約社員」「3. フリーランス」に○印をつけた方にうかがいます。】
昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)、あなたに仕事をする意思があっても仕事が入らず、スケジュールが空いた日数は合計すると、おおよそ何日間ですか。【n=162】

108.2 日間

[PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用]

問B-7 舞台・映画・放送メディアスタッフとして通常たずさわっている仕事以外の仕事について
うかがいます。次のうち、あなたが昨年(2013(平成 25)年 1 月から 12 月末まで)1年間にし
た仕事すべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=329】

1. 貸しアパート、貸し店舗などの不動産事業経営(5.2%)
 2. サービス業、物販業、飲食店経営など、その他の事業経営(1.8%)
 3. 企業・団体などの従業員、職員(3.0%)
 4. アルバイト(7.6%)
 5. 雑誌、出版物などの原稿を書く(5.5%)
 6. 講演をする(5.5%)
 7. その他(4.9%)
 8. 通常業務以外の仕事はしていない(56.5%)
- 無回答(17.0%)

【PART① 舞台・映画・放送・メディアスタッフ用】

問B-8 (a) あなたは、公共交通機関で帰宅が難しい時間まで現場にいなければならない深夜作業がどのくらいありますか。
(○印は1つだけ)【n=329】

	よくある	ときどきある	たまにある	ほとんどない	無回答
事前(前日まで)に予定されていた深夜作業	16.4%	20.1%	23.7%	26.7%	13.1%
当日急に発生した深夜作業	9.1%	14.6%	21.9%	34.3%	20.1%

(b) 【(a)で当日急に発生した深夜作業で1、2、3に○印をつけた方にうかがいます。】

あなたは、当日急に深夜作業が発生したとき、どのように帰宅していますか。直近の仕事についてあてはまるものに○印をつけてください。
(○印は1つだけ)【n=150】

1. タクシー等による送りが出た(44.7%)	4. 車で移動している(32.0%)
2. 宿泊場所が提供された(6.0%)	5. その他(6.7%)
3. 何の手当てもなかった(10.7%)	無回答(0.0%)

問B-9 あなたの仕事に関連して、あてはまる番号に1つずつ○印をつけてください。

(○印は1つずつ)【n=329】

	そう思う	まあそう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない	無回答
(a) 新しい機材や技術の導入によって戸惑うことがある	21.6%	37.1%	27.7%	9.1%	4.6%
(b) 新しい機材や技術の導入に対応するための研修の機会は十分にある	7.3%	19.8%	39.2%	26.3%	7.0%

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

C. 仕事をするうえでの環境や条件について伺います

●ここからは、実演家、スタッフ、共通の質問です

問C-1 あなたが仕事をするうえで、どのような点に問題があると感じていますか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=329】

1. 仕事のキャンセルがよくある(17.0%)
2. 仕事のスケジュールの調整がむずかしい(48.3%)
3. 自分で仕事を開拓していくだけの余力がない(21.6%)
4. その時その時で、違ったメンバーと仕事をするのでやりにくい(6.4%)
5. 仕事が単発で継続して仕事がない(29.2%)
6. 報酬その他についての交渉力が弱い(26.7%)
7. 報酬が支払われるまでに時間がかかる(18.8%)
8. 報酬の未払いがある(17.6%)
9. トラブルが起きても、泣き寝入りをする事が多い(14.0%)
10. 問題が起きた時の相談先がない(13.1%)
11. 時間的な余裕がない中での仕事を強いられる(44.7%)
12. 仕事上で要求されることが多岐にわたり対応に苦勞する(27.4%)
13. 同じ仕事でも報酬の額が下がってきている(45.9%)
14. その他(5.5%)
15. 問題があるとは思っていない(8.5%)
- 無回答(3.0%)

問C-2 あなたが仕事をするうえで必要な費用で、通常あなた個人の負担になっているものには、どのようなものがありますか(所属集団・流派・組織や依頼主、制作プロダクションが通常負担してくれないもの)。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=329】

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 衣裳などの購入、洗濯費、借用料(7.6%) | 10. 資格認定にともなう費用(12.8%) |
| 2. 整髪料、化粧品など(4.0%) | 11. 交通費(47.4%) |
| 3. 機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代(29.5%) | 12. 宿泊費(9.4%) |
| 4. 楽譜代・資料代(5.2%) | 13. 通信費(46.2%) |
| 5. チラシ、プログラムの印刷費(1.2%) | 14. 接待費・交際費(40.1%) |
| 6. 共演者に対する出演料、謝礼(1.2%) | 15. 身体ケア、ケガ・病氣予防にともなう支出(25.2%) |
| 7. ノルマのチケット売れ残りの自己負担(0.6%) | 16. その他(2.1%) |
| 8. 会場の使用料(1.2%) | 17. 個人負担は特にない(21.3%) |
| 9. 技能習得などに支払う授業料(17.0%) | 無回答(4.6%) |

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

問C-3 あなたは昨年(2013(平成25)年1月から12月末まで)1年間に医師の治療が必要な

(a)仕事上の傷害(ケガ)、(b)仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験がありますか。

(○印は1つずつ)【n=329】

	経験した	経験しなかった	無回答
(a)仕事上の傷害(ケガ)	9.1%	85.1%	5.8%
(b)仕事の原因と考えられる病気・症状など	14.3%	74.2%	11.6%

【問C-3(a)で仕事上の傷害(ケガ)を「経験した」に○印をつけた方に伺います】

問C-4 (a)それらはどこで起きましたか。次のうち、あてはまるものをすべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=30】

1. 舞台・ステージ(33.3%)	4. ロケ現場(30.0%)	7. その他(16.7%)
2. 楽屋(0.0%)	5. 稽古場(3.3%)	無回答(6.7%)
3. スタジオ・撮影所(3.3%)	6. 移動中(10.0%)	

(b) その傷害(ケガ)の治療費などの補償はどのようになりましたか。(○印は1つだけ)【n=30】

1. 自分で負担した(56.7%)	4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(23.3%)
2. 労災保険が適用された(13.3%)	5. その他(0.0%)
3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(6.7%)	無回答(0.0%)

(c) その時、治療費以外の補償はありましたか。(○印は1つだけ)【n=30】

1. 見舞い金程度(6.7%)	3. その仕事を含め休んだ全期間に得られるであろう収入に見合う補償(3.3%)
2. その仕事をやり終えた場合に得られる報酬に相当する分の補償(0.0%)	4. 何もない(76.7%)
	無回答(13.3%)

問C-5 【問C-3(b)で仕事の原因と考えられる病気・症状などを「経験した」に○印をつけた方に伺います】

(a) 治療費などの負担はどのようになりましたか。次のうち、あてはまるものをすべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=47】

1. 自分で負担した(93.6%)	4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(10.6%)
2. 労災保険が適用された(2.1%)	5. その他(0.0%)
3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(4.3%)	無回答(0.0%)

(b) その時、治療費以外の補償はありましたか。次のうち、あてはまるものをすべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=47】

1. 見舞い金程度(6.4%)	3. その仕事を含め休んだ全期間に得られるであろう収入に見合う補償(6.4%)
2. その仕事をやり終えた場合に得られる報酬に相当する分の補償(0.0%)	4. 何もない(80.9%)
無回答(6.4%)	

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

D. 仕事や生活に対する意識について伺います

問D-1 (a) あなたはご自分の仕事について、どのように思っていますか。
あてはまる番号に1つずつ○印をつけてください。

(○印は1つずつ)【n=329】

	そう思う	まあそう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない	無回答
仕事の量は十分である	20.4%	27.1%	24.6%	23.4%	4.6%
入ってくる仕事は総じて、自分がやりたいと思っている‘本業’の仕事である	29.5%	37.7%	19.1%	8.8%	4.9%
自分の仕事は世の中から評価されている	17.0%	38.9%	31.6%	7.3%	5.2%
自分が持つ能力を十分活用することができている	18.8%	48.0%	22.2%	7.0%	4.0%
自分の仕事にプライドを持っている	59.3%	33.1%	4.0%	0.6%	3.0%
いまの仕事をできるかぎり続けたい	59.0%	28.0%	8.2%	2.1%	2.7%
ライブ、舞台公演など‘なま’の芸能の将来に明るい見通しを持っている	8.8%	30.4%	35.9%	14.3%	10.6%

(b) あなたが働く目的は何ですか。あなたの考え方に近いものを次の中から1つ選んで番号に○印をつけてください。(○印は1つだけ)【n=329】

1. お金を得るために働く(31.9%)
2. 社会の一員として、務めを果たすために働く(10.6%)
3. 自分の能力や才能を発揮するために働く(36.5%)
4. 生きがいを見つけるために働く(15.5%)
5. わからない(3.3%)
- 無回答(2.1%)

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

問D-2 あなたは、あなたの技術・技能を向上させるためのサポートとして何が必要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うもの3つまで〇印をつけてください。(〇印は3つまで)【n=329】

1. プロのための研修が充実すること(41.3%)
2. さまざまな分野の舞台、映像制作に仕事として携わる機会があること(42.6%)
3. 芸能や映画などを安い費用で鑑賞できる機会が提供されること(34.7%)
4. 芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること(24.3%)
5. 稽古、練習のための場所が確保・提供されること(8.8%)
6. 研修、レッスン、稽古など「学び」に関する情報が提供されること(6.4%)
7. 技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること(37.7%)
8. 分野を超えて舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること(37.1%)
9. その他(5.8%)
- 無回答(3.6%)

問D-3 あなたが安心して活動に取り組めるようになるために、何が必要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うもの3つまで〇印をつけてください。(〇印は3つまで)【n=329】

1. 発表や公演、出演の機会が多くあること(10.6%)
2. 仕事に関する情報提供など、就業に関する支援があること(14.0%)
3. 報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること(63.5%)
4. 効果的な研修、レッスンの提供など、技術・技能向上に関する支援があること(10.9%)
5. 使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること(9.1%)
6. 失業した時の補償が充実すること(16.7%)
7. 仕事でけがや病気をした時の補償が充実すること(21.6%)
8. 老後の生活のために年金制度が充実すること(29.8%)
9. 公共劇場や音楽堂などが整備され、地域の文化拠点として機能すること(12.5%)
10. 学校における芸能や映画、放送などの教育機会が十分組み込まれること(7.3%)
11. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること(24.6%)
12. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること(30.1%)
13. 業界団体などによる芸能や映画、放送などの活動を支援する活動が充実・強化されること(17.3%)
14. その他(3.0%)
- 無回答(3.6%)

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

E. あなたご自身のことについて伺います

問E-1 あなたの性別と年齢を記入してください。【n=329】

1. 男(83.6%)
2. 女(14.0%)
無回答(2.4%)

平均55.1 歳

問E-2 あなたの最終学歴をお答えください。

(○印は1つだけ)【n=329】

1. 義務教育修了(2.7%) 4. 高専卒業(1.2%) 7. その他(0.3%)
2. 高校卒業(22.5%) 5. 短大卒業(4.3%) 無回答(2.4%)
3. 専門学校卒業(29.5%) 6. 大学・大学院卒業(37.1%)

問E-3 (a) 現在、配偶者はいらっしゃいますか。【n=329】

1. 配偶者あり(70.5%) 2. 配偶者なし(未婚)(17.0%) 3. 配偶者なし(離・死別)(9.7%)
無回答(2.7%)

(b) お子さんはいらっしゃいますか。【n=329】

1. 子どもあり(60.5%) 2. 子どもなし(36.2%) 無回答(3.3%)

問E-4 現在一緒に住まいのご家族は何人ですか(あなたご自身を含みます)。【n=329】

1. 1人(19.8%) 3. 3人(23.7%) 5. 5人(6.1%)
2. 2人(30.1%) 4. 4人(15.5%) 6. 6人以上(2.1%)
無回答(2.7%)

問E-5 あなたのご家族やご親戚に舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの方がいらっしゃいますか。あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=329】

1. 父(3.0%) 4. 子ども(10.6%) 7. その他の家族・親戚(7.3%)
2. 母(0.6%) 5. 祖父母(0.9%) 8. 誰もいない(62.9%)
3. 配偶者(14.6%) 6. 兄弟姉妹(4.0%) 無回答(4.6%)

問E-6 現在、お住まいの都道府県をお答えください。

都 道
府 県

あと少しです！

[PART② 芸能実演家／スタッフ共通]

問E-7 あなたは事故など万一の場合や老後の暮らしに対して、何らかの備えをしていますか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=329】

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------|
| 1. 国民年金に加入している(45.3%) | 6. 株式や不動産などに投資をしている(6.1%) |
| 2. 厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している(45.6%) | 7. 芸能関係以外の事業を行っている(3.3%) |
| 3. その他民間の年金に加入している(15.2%) | 8. 備えをする経済的余裕がない(19.5%) |
| 4. 生命保険や損害保険などに加入している(64.4%) | 9. まったく考えていない(0.6%) |
| 5. 貯蓄をしている(26.7%) | 無回答(3.0%) |

* 芸団協や所属団体などに行なってほしい舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの仕事環境改善に必要なこと、その他のご意見、ご要望がありましたら、何でもご自由にお書きください。

設問は以上です。ご協力大変ありがとうございました。

同封の返信用封筒でご返送ください。(切手は不要です)

調査票発送協力団体一覧（分野別区分）

■邦楽

大阪三曲協会
一般社団法人 関西常磐津協会
一般社団法人 義太夫協会
清元協会
一般財団法人 古曲会
新内協会
特定非営利活動法人 筑前琵琶連合会
公益社団法人 当道音楽会
常磐津協会
一般社団法人 長唄協会
名古屋邦楽協会
公益社団法人 日本小唄連盟
公益社団法人 日本三曲協会
日本琵琶楽協会
一般社団法人 沖縄県芸能関連協議会

■伝統演劇

公益社団法人 日本俳優協会（第一部）
一般社団法人 人形浄瑠璃文楽座むつみ会
公益社団法人 能楽協会
一般社団法人 沖縄県芸能関連協議会（組踊）

■邦舞

公益社団法人 日本舞踊協会
一般社団法人 沖縄県芸能関連協議会

■洋楽

公益社団法人 日本演奏連盟
公益社団法人 日本オーケストラ連盟
日本音楽家ユニオン
一般社団法人 日本歌手協会
一般社団法人 日本作編曲家協会
一般社団法人 日本シンセサイザー・プログラマー協会
特定非営利活動法人 日本青少年音楽芸能協会
パブリック・イン・サード会
特定非営利活動法人 レコーディング・ミュージシャンズ・
アソシエーション・オブ・ジャパン

■現代演劇・メディア

一般社団法人 全国専門人形劇団協議会
公益社団法人 日本劇団協議会
日本児童・青少年演劇劇団協同組合
日本俳優連合
一般社団法人 映像実演権利者合同機構（PRE）
名古屋放送芸能家協議会
一般社団法人 日本喜劇人協会
一般社団法人 日本芸能マネージメント事業者協会
一般社団法人 日本映画俳優協会

日本新劇俳優協会
日本人形劇人協会
公益社団法人 日本俳優協会
一般社団法人 日本モデルエージェンシー協会

■洋舞

一般社団法人 全日本児童舞踊協会
東京バレエ協議会（発送当時）
一般社団法人 日本ジャズダンス芸術協会
公益社団法人 日本バレエ協会
一般社団法人 日本フラメンコ協会
公益社団法人 新国立劇場運営財団（バレエ団）

■演芸

一般社団法人 日本演芸家連合
公益社団法人 上方落語協会
関西演芸協会
一般社団法人 関西芸能親和会
講談協会
太神楽曲芸協会
東京演芸協会
公益社団法人 日本奇術協会
日本司会芸能協会
一般社団法人 日本浪曲協会
ボーイズバラエティ協会
一般社団法人 漫才協会
一般社団法人 落語協会
公益社団法人 落語芸術協会
公益社団法人 浪曲親友協会

■その他（演出・制作等）

一般社団法人 日本演出者協会
日本新劇製作者協会
公益社団法人 日本オーケストラ連盟
東京バレエ協議会（発送当時）

■スタッフ（ライブ系）

公益社団法人 日本照明家協会
一般社団法人 日本舞台音響家協会
日本舞台監督協会
日本ミキサー協会

■スタッフ（映像系）

日本映画監督協会
日本映画撮影監督協会
日本映画・テレビ照明協会
日本映画・テレビ録音協会
日本映画・テレビ美術監督協会
日本映画・テレビ編集協会
日本映画・テレビスクリプター協会

本調査にあたっては、芸団協正会員団体、映像関係団体、一般社団法人映像実演権利者合同機構（PRE）、一般社団法人日本演芸家連合の事務局の皆様に変なご協力をいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。

第9回 芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査

■ プロジェクト委員会 (実演家部門)

桂 歌春	(公益社団法人落語芸術協会)
澤 恵理子	(公益社団法人日本演奏連盟)
高木 俊徳	(公益社団法人日本バレエ協会)
高島 基明	(日本音楽家ユニオン)
◎高瀬 将嗣	(協同組合日本俳優連合)
花柳 源九郎	(公益社団法人日本舞踊協会)
林家 染二	(公益社団法人上方落語協会)
○吉住 小三郎	(一般社団法人長唄協会)

◎委員長 ○副委員長

■ プロジェクト委員会 (スタッフ部門)

小川 洋一	(日本映画撮影監督協会)
○酒匂 正弘	(日本映画テレビ照明協会)
◎西山 英樹	(公益社団法人日本照明家協会)
船引 悦雄	(日本舞台監督協会)
渡邊 邦男	(一般社団法人日本舞台音響家協会)

◎委員長 ○副委員長

■ 調査協力

恩田 耕太郎 株式会社インテグリサーチ

● 担当常務理事

福島 明夫

● 事務局

小林 俊範	(芸団協・実演芸術振興部)
川島 香	(同上)
長谷川 直子	(同上)
米屋 尚子	(芸団協・実演芸術政策推進室)

本報告書は、平成 26 年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の一環として実施された「日本の芸能・クリエイターの状況に関する調査研究事業」（「芸能実演家・スタッフ・アニメーター等の活動と生活実態調査」）の実演家およびスタッフ部門の調査結果をまとめたものです。



平成 26 年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

第 9 回 芸能実演家・スタッフの活動と生活実態
—調査報告書 2015 年版—

2015 年 3 月 31 日 発行

編集 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕
実態調査プロジェクト委員会

発行 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
〒163-1466 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー11F
Tel:03-5353-6600
E-mail research@geidankyo.or.jp

調査協力 株式会社インテージリサーチ

印刷所：株式会社ビンス・アソシエイツ

*本書の全部、または一部の内容の無断転載・複写および電子媒体への入力、固くお断りします。